

日本随筆大成巻十二

收載書目

耽奇漫録

瀧澤馬琴等

日本随筆大成 巻十二

宮内省御用掛 文學博士 關根正直先生

東京帝國大學史料編纂官 文學博士 和田英松先生

宮内省圖書寮編修官 田邊勝哉先生

監修

日本隨筆大成 第十二卷

凡例

本集には、耽奇漫錄五卷を收む。

本書は、文政七八年の交、瀧澤馬琴、屋代輪池、山崎北峰を始め、松蘿館、海棠庵、南無佛庵、文寶亭、寫山樓、琴嶺舍等の好事家會合し、耽奇會と名づけ、每月各自所藏の珍品奇物を持寄り展觀批評せる、その圖本と考說とを漫錄し、各員に廻覽せるものにして、第一卷は、文政七年八月より八年二月に至る小集展覽、第二卷は、同八年四五月小集展覽、第三卷は、同年七月小集展覽、第四卷は、同年八九月小集展覽、等五卷は、同年十一月小集展覽なり。天保三年に識せる馬琴の序に、「耽奇漫錄は、文政甲申の春、松蘿館主人西原好和、その女婿海棠庵關思亮、南無佛庵中村景蓮等と相謀りて、社友五六名各自所藏の古書畫、古器材を相携て來會し、且各々その圖本を作り、考を附錄して、命けて耽奇漫錄といふ。(中略)この會は、甲申の春より乙酉の冬十一月まで、凡二十會にして訖りぬ。その一會每に圖本を合して二十卷にして藏弆せるものは、亡友海棠庵以下多くあらずと云。こゝには纔に十會計の圖あり。今合して五卷とす。」とあるにて、本書の由來明かなり。

所收本は宮內省圖書寮の聽許を得て、同寮所藏本（馬琴と親交ありし麻布古川町に住める幕府旗下の士石川左金吾（疊翠軒琴籟）の馬琴の原本を謄寫せし書なり）を底本とし、併せて帝國圖書館所藏本を參考せり。この書、世に喧傳せらるゝこと久しくして、未だ版行なかりしを、今回數月の努力を以て、東洋印刷株式會社の熟練なる技術に因り、全部オフセット印刷に附し、之を讀者諸賢の机上に供することを得たるは、弊館の誇とするところにして、本書を以て版行の嚆矢となす。

甲申秋八月至乙酉春二月小集展覽 第一

著作堂架藏

共五本

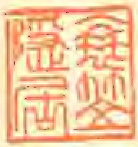
耽奇漫録ハ文政甲申乃春松蘿館主人西原好和
その女婿海棠庵関思亮南無佛庵中村景蓮等と相謀て
社友五六名各々所蔵の古書画古器材をも携
へて来會し且各々その図本を作り考を附録して
命けて耽奇漫録といふ初巻ありことを知らずしに
おなじ年の秋松蘿館来訪して右條の趣を告て
出席を請る不案なりて八月の集會より席末に
列りけることを得たり志の足ぬ筆硯にいとまなき折から
社友の図本を写しゝかども不遑あらざれ其明年之四月
の比より社友と商量して図本交易の事をしも相約せし

この度十四とせよりさきに数たびも催し来て文宝堂主人の好める事に
なすらへて十九の会を甲申の春より乙酉の冬十一月まて
凡二十会にして諸子の一会毎に図本を合して
二十巻にして蔵弃せしを亡友海棠庵以下多く
あるはとは云十四にしるし録に十会評の図ありあるを今合
書て五巻にとぢ以上の全部を借謄して是を続
補せんやとおもひて稍久しく製せしも世得て悉
たゝ微にしるしも細画なるも多かりけれと修して輒て写し
ことゆへもあらぬをそは書家に折も暑かゝる筆ふ如意の備にして
年を歴てもち望もうせぬこれ惜むに足らぬまゝ

みつから製本す志好子日十方於ゝ愛て刊をしるし須小らん

天保三年壬辰冬閏十一月之吉

神田廟東　著作堂老逸





鎮西八郎為朝征箭圖

柳原前大納言□□卿之弟岩倉□所蔵

此家に數多所持の処壹本残シ置多く南禅寺へ納ると云

矢ノ總長サ筈ヨリ沓巻迄四尺　但シ根ハ除之

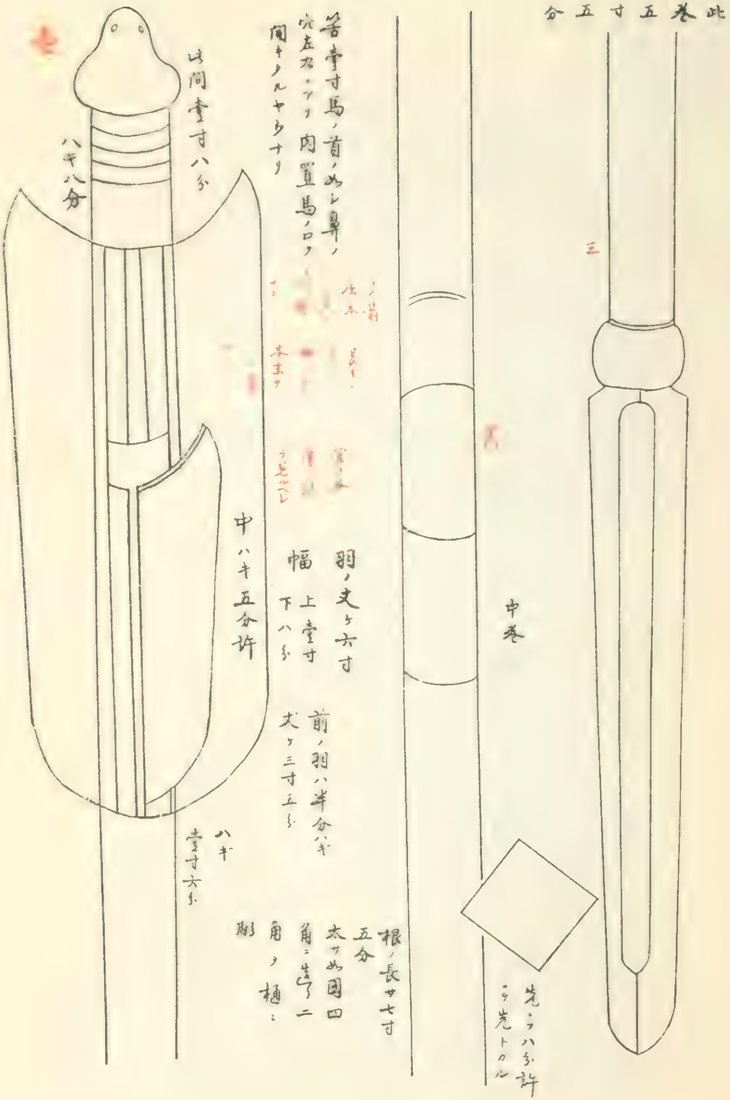
根ノ長サ七寸五分副本ニテ壹寸餘四方同前二方ノ角ニ樋ヲカク

中心錆付テ不抜長サ不知羽ノ下中巻ノ須迄アルヘシ

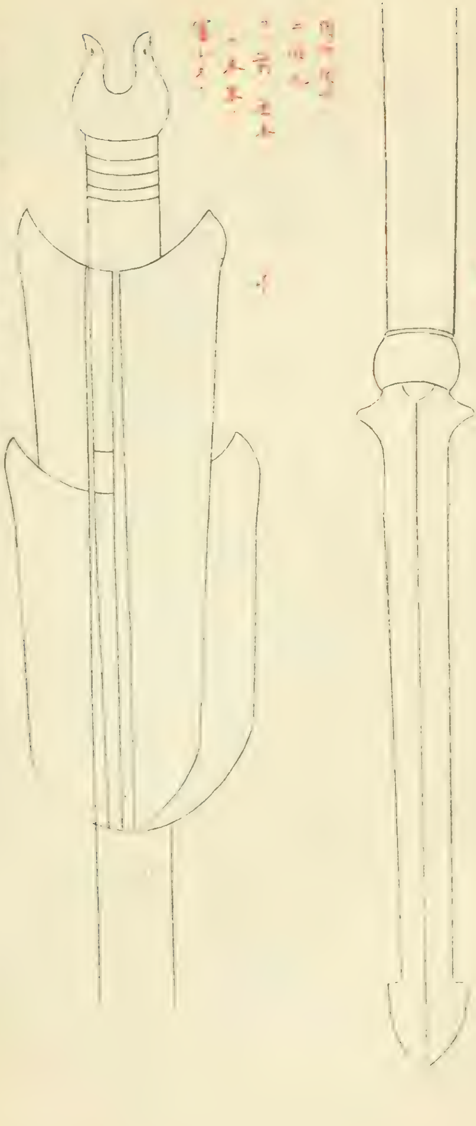
箆漆塗節顯ニアラス節ノ所ヲ濃塗タルナリ　羽口共四

節也

羽大鳥黒母衣四ツ羽ナリ内外ノ羽半分ツヽノ丈ケナリ



此巻五寸五分
三
中巻
先ニテ八分許
根ノ長サ七寸五分
羽ノ丈ケ六寸
幅 上壹寸 下八分
前ノ羽ハ半分ハキ 丈ケ三寸五分
中ハキ五分許
此間壹寸八分
ハキ八分
ハキ 壹寸六分



解ニ為鉞ノ鐓ト[illegible]他越絶[illegible]
又甲斐名勝志ニ見ヘタリ[illegible]古図[illegible]
ノ部ニ載ス[illegible]
[illegible]編輯[illegible]

奥書

岩倉殿所持之矢也此外ニ此矢ヲ永享之比圖ニ作ノ

ソレニ賛アリ圖ノ應チカ乾祐主之需ニ藤珍勝写之

トアリ賛ハ村菴靈彦ノ文ナリ年号ハ永享十一年

已未春トアリ是外弘安之比南禅寺代々ノ文書アリ

近江小長谷正道傳來へ京二條柳営成之時

暫時一覧此矢而書写也無写賛量重之

間至于今唯憾此両事云

寛政五年初秋乞求小長谷氏圖書写

榊原長俊義

文化十一甲戌歳十一月稔六日書写之

烁田亮太郎

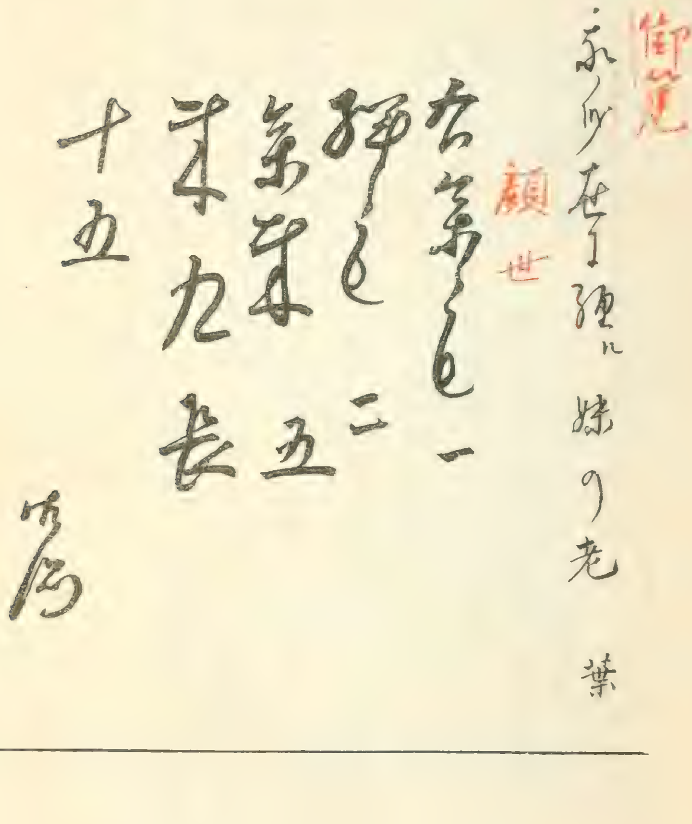
善知鳥の卵

これハ文化中松前老君の解ニ備ふ
もれぬべきものとて追日奉書の畧如左

唐太の東ニ大黒嶋と云嶋あり
右嶋ハ蝦夷人舟ニ乗て行かよひし事まれなり
然ニ去文化十三年ニ舟ニ而蝦夷共漁ニ
まかりし処是迄人の見ざりし国見当り候故
上陸いたし右嶋ニ至り玉子五ツ有之候卵を取
内三ツハ持帰り蝦夷御役所ニ差上候 二ツハ
いまだ松前ニ居候宗春ニ請御役所ニ差上候
然ニ右御役所ニ而肉を取薬用ニ志摩守
より差上候事ニ而候 此玉子の事を尋候処
右之卵の形ハ此卵のごとく
御座候由承り候 隠居ニ而御座候
由ニ候

解云しかりの事ハ拙著烹雑の記ニ載たり尚遺漏あるを備ふるの説
もあれバ特ニ茲ニしるす 信濃ニ而善知鳥の神あり 信濃ニ烏帽子岳あり
うたうハ出所の名ニよれるべきか 他所ニ別ニあるべし
又按烹雑記ニあるハ此うたうハ善知鳥ニあらず 嶋鷲(?)といふものにて野伏地ニ
在りとうたうといへるハ予が勢州ニて見たる衆禽写生ニ見ゆ 今ニ見つべし



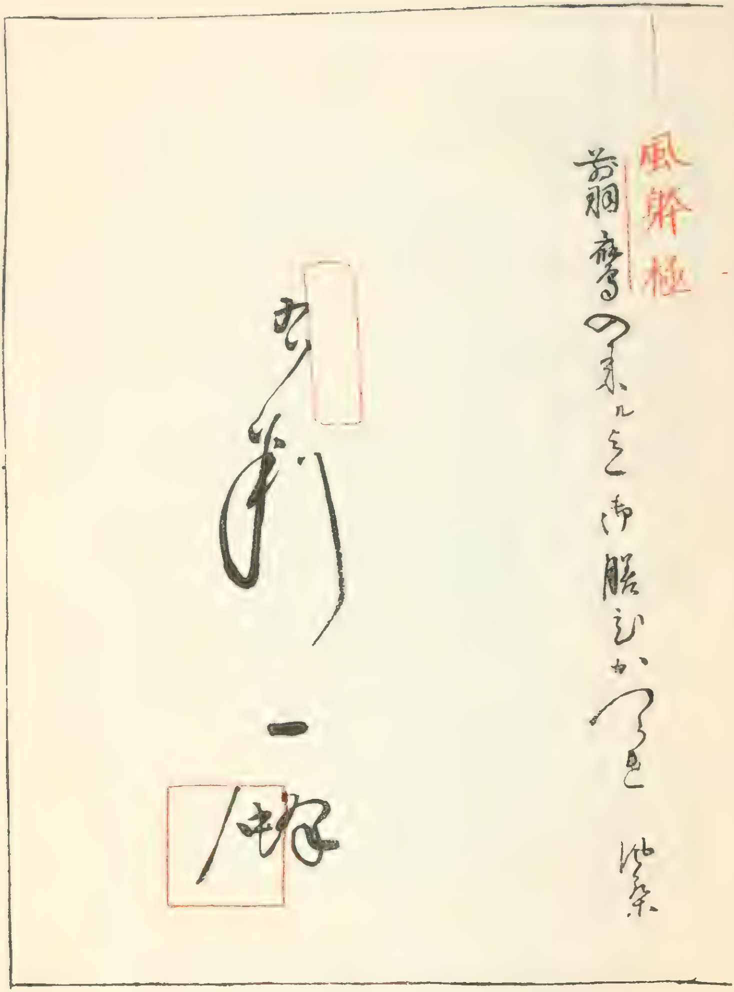


沾徳すなはち水間氏合歓堂と号す。はじめ一晶門人なり。沾葉ともいへり。後に露沾公内藤左京亮義英侯也に従ひまゐらせて沾徳と改めたり。江戸中橋に住して元禄享保の間名たゝる俳諧師なりしが、其人みまかりぬ。享保十一年五月晦日没す。平河山法恩寺に葬る。戒名本理院了徳日到。享年六十有餘と繽紛にのせたり。右の懐紙は享保十年七月の点取なれば、これ筆を易ふ前年の許点なり。沾洲も名ある点者なれども点譲も刻せし懐紙も今に集なり。当時の質朴を偲ぶに一助となれり。沾洲沾山もみな沾徳の弟子之。沾山一絶。沾徳の事は花乃年俳諧家譜に見えたり。

○一蜂評百韻懐紙

一蜂の事は繽紛、俳諧家譜等に見えたり。ここに二懐紙は己兄雑文居士の遺愛なり。ここに東運中なる岩翁も其角が友人之聖風なれば、なほ世に撰集もあり。翁名にきこえたる素丸は五色墨の一人、又も名にたかく師とせしの点者なれば、古人雑文居士と等級せしものにあらん。

以朱書
金泥



各聲 十四章

昌貢 十二 至一 亞一 秀一 逸一 金一 跟一 銀三 彩一 長一

風葉 十三 [illegible]一 逸一 金一 鶏一 銀一 彩一 朱一

琴風 十一 鶏四 銀一 朱二 長一

斗七 十二 逸一 銀一 彩三 恭三 長三

素丸 仝 鶏二 彩三 朱 長一

乱架 仝 [illegible]一 銀一 朱 長二

岩菊 仝 銀二 彩一 朱 長四

享保乙戌二月廿九日 昌貞会

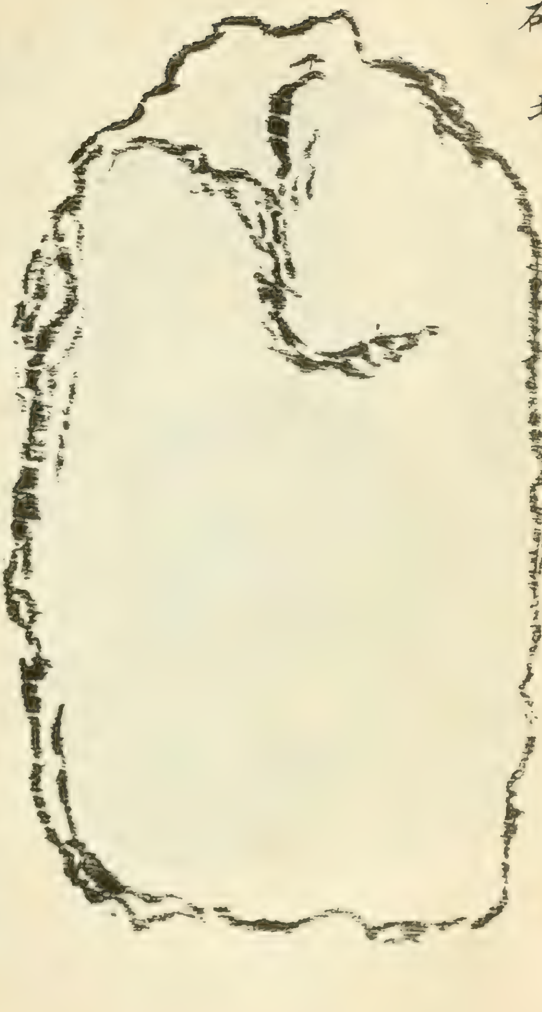
陸奥の名取川埋木化石硯

硯池の外ハ四傍刀鑿を用ひず隱々として木理あり、爪を見ざれハ木のごとく、爪を敲けハ石なり



上の方五指のごとく並べたる佛手ニ似たり

硯背



埋れ木のなりけるたまを　名取川　つひに硯の海と
なりにける哉

文宝堂

近ころわかきおのこ見まほしも好事なれは如知るにはれし実方の
かたみになりしまた名高き絶の名たゝる筆跡を箱の袖なとおもしろき
蘭さま又名高き川の埋木を蒔なとふるきもの多かり
そのうちにもその化石研あかしこきもの稀なり奇品のなかに
文化のはしめ久保田藩中萩原某翁初見の古きに
携来て予にめくみしもの也

右五種　　　　著作堂蔵

楠公書并辨疑　　　　著作堂

楠判官申ス
詔令
凡天下國ノ家ヲ治ルニ九經
アリト云ハ古ノ教也先上下

因吏民ノ欲ヲ知リ奉行ノ
職ヲ撰テ其器ニ當ルヲ其
職ニ定之若在其職少モ非儀
アラハ大キニ可罰シ其故ハ
奉行以人ハ政道ノ守シ其
守乱ハ未必不治シ

上ニ有人ノ可慎ハ至礼也
志アル侍ハ継目之分ノ禄乞ヒ
禮儀悉ハ不可有仕之至禮
ナレハ一ノ宿君命召也
為レ依テ国ヲ領スルモノ可心得ハ
先己カ分国ノ治人豊饒

ナラムコトヲ可レ考徒ニ國ノ土地ヲ喰テ報國ノ至忠モノハ不足ニ人倫一也余可准之之郎等ヲ召仕テ忠アレトモ不レ賞常ニ勿勞ヲ使事忠勝レテ可レ賞之

又切ニホコルコト已分十七ハ宜
而至ヨリ雲覆又古今多之可
レ考平清盛源頼朝也ハ
足利尊氏等也貪ニミテ
不レ論ルハアリ當テノ事不レ修ル之
君有徳威トイヘトモ邪曲ノ

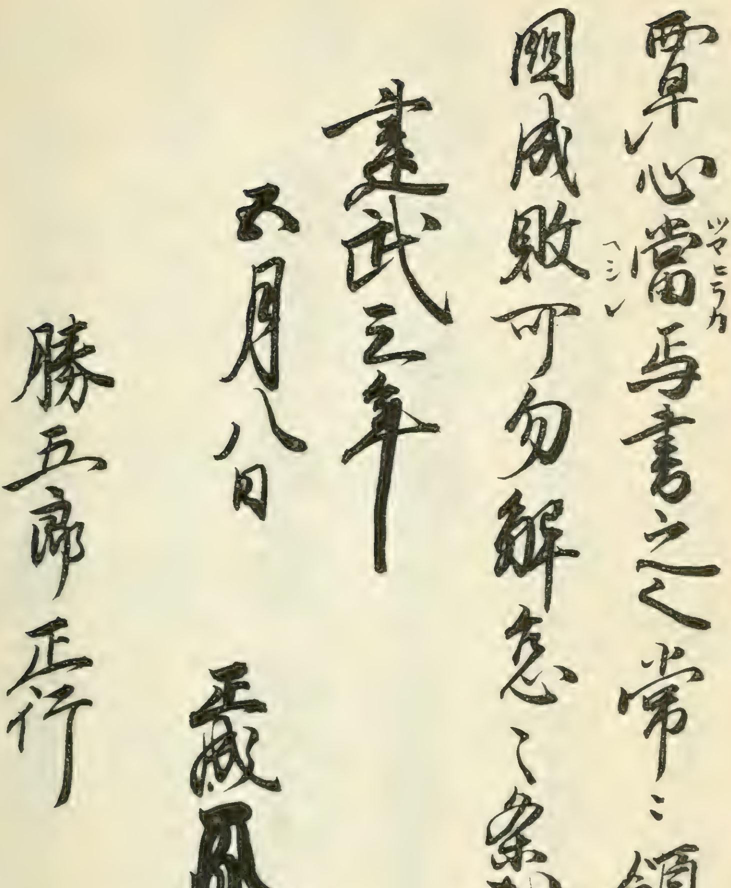
民権柄ヲ執ル時ハ明月
ノ如ク敬セラレ
又月ノ夜雪ノ朝酒ハ無量
不及乱ニ如存成候人モ危
赤眼イカリ狂乱ノ悪事ノ
行モイヒモラスヽ

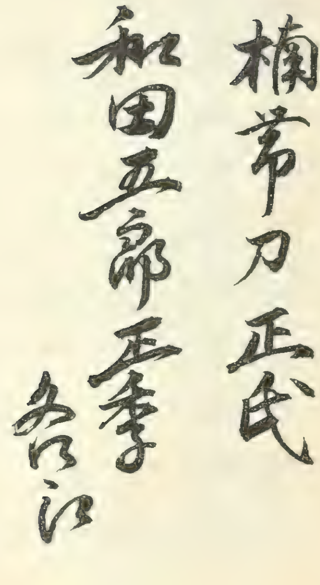
雖女ヲ不可好以論ノ嫌（カダチ）ナリ
矣固也朝頗城頗固ノ基
雖多之
不レ可好精愛貪ヲ抜根本
以論ノ源之
邪賞邪敗トニ忠有ヲ不

ハ賞罰有ヲ不ハ罰得大罪ヲ閣テ
小罪ヲ罰得入ル者人同忠ヲ誤
テ勝劣ヲ立ハ一人ニ賞之一人
ヲ不賞乱ノ根之如是ノ闘
至高將上代ニ希之末代ハ多
之所領地攝河両国ヲハ凡今ノ

人々ノワシリヨハ究覧コ請ス又字ニ
流之自今以後理非决断公上
宮太子ノ鏡ノ鈔ノ心理ヲ深ク
可ヲナリ天平ノ日録正（マサ）善（ヨシ）ノ
武用武家ノ東（アツマ）鑑（カヽミ）ニハ非歳
敗多之太四文九四ノ日記貝

永式目等貞観政要等可
嗜之
前々所見之勝軍並世記并
異論訴人奏撰河泉碑書
千葉集尾提書相傳之奏等
是油断可相嗜料重而所


覃心當写書之常ニ領
國成敗可勿解怠之条
建武三年
五月八日　正成
勝五郎正行


楠帶刀正氏
和田五郎正季

北越鹽澤里人鈴木牧之。往歲影寫是書。
遥寄於予曰。原本表裝以綿繃納之以重
箱。並有古色。初在甲斐郡内近邨貧民屋
梁上。其家贅壻袖助者。越後魚沼郡六日
町醫生。高松升菴舊僕也。天明中。袖助携
是書來。訪問舊里人。將歸去之日。路費殆
竭矣。因典之于雲洞村雲洞菴主。而得廟
千家。未造質焉。袖助死於甲斐。袖助有二女。長在越
後。明年具訃。間於六日町。自是數歲。留在菴中矣。近神

地民目瀨生。購得以藏弆焉。或曰。此是出自
由井正雪之手者。慶安二年。彼賊於駿府
伏誅之日。賊徒竊懷之以奔甲陽。俄而棄
於客舍。村落之民。素不知字。徒安置梁上。
而歷數世。便是其書所以在彼民屋也。解
按。或說雖出於臆度。然似有其理。是以耳
食者。亦不自思。傳以為楠公真蹟。吾未信
之。何者。書中國字。類與今同。予曾所見將
門記。其他古書中國字。與今之書體有異

同。且也。若臨文施訓點。今之署之。猶所不爲。建武墨蹟。豈可如此耶。加之。書中第一條。有奉行職云云論議。大約武家職掌。稱呼不固。鎌倉將軍時。曰別當。頭人。評定衆。京師將軍時。曰記事。官領。迨於豐太閤時。奉行爲職名。由此觀之。是書所稱。因循後世職名。不得無疑也。其傳來若或說。則慶安賊首所僞作。未可知也。姑識愚衷以俟後之鑒定耳。

文政七年甲申八月念九　瀧澤解撰

右五種　著作堂藏

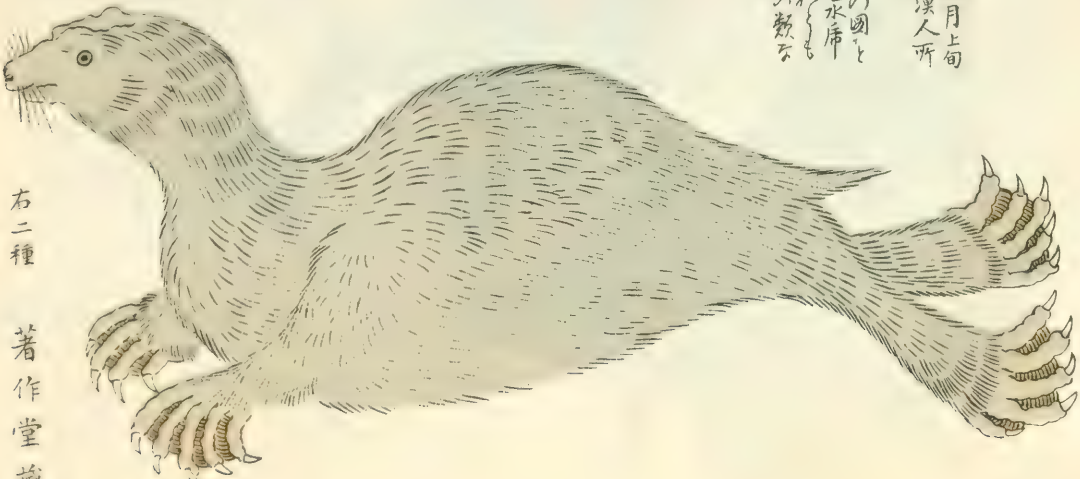
雲慶作達磨木像





運慶雲慶同音なるをもて疑似の辨なくは人まよふ
へし雲慶を是ものつくる一箇の雲慶にて運慶と同
しからず曇まこの木像を得つるとき琴嶺の友人の
ある識者る佛師にくはしく古像の年代を鑒定するものあ
りとぞいへしかバその人に就てこれを見せけるに雲慶は何
の時代の人なるをしらねどもこの木像ハ今より
二百年以上のもの也像中に破裂多少そこつくろひたるも
二三十年ばかりの事なりと見ゆといへり雲慶の事いまだ一箇も見ること
ゆゑ疑ひぬへし

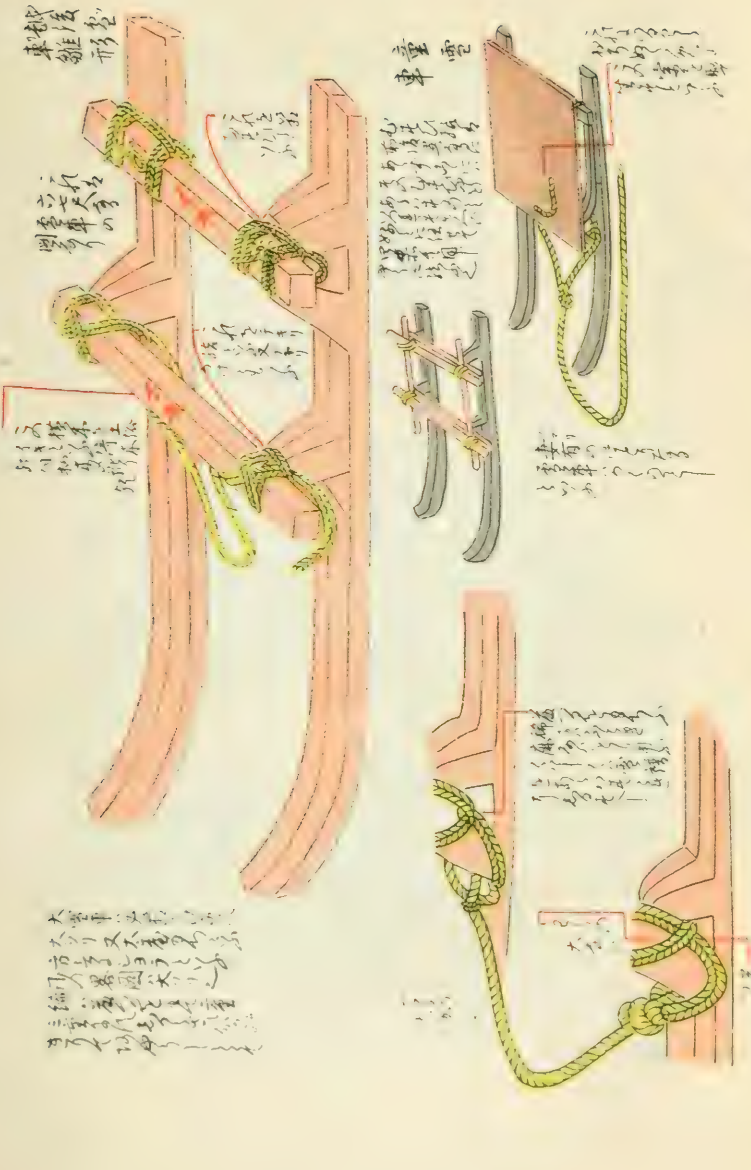
文政二年己卯閏四月上旬
越後柏崎浜ニて漁人所
獲ル海獣之図
同所塩沢の牧之この図を
贈りて土人これを水虎
やいふと云りもかくしも
水虎に似ても海獣の類な
る事―
毛色ツヤアリ
四足五指各
水カキアリ

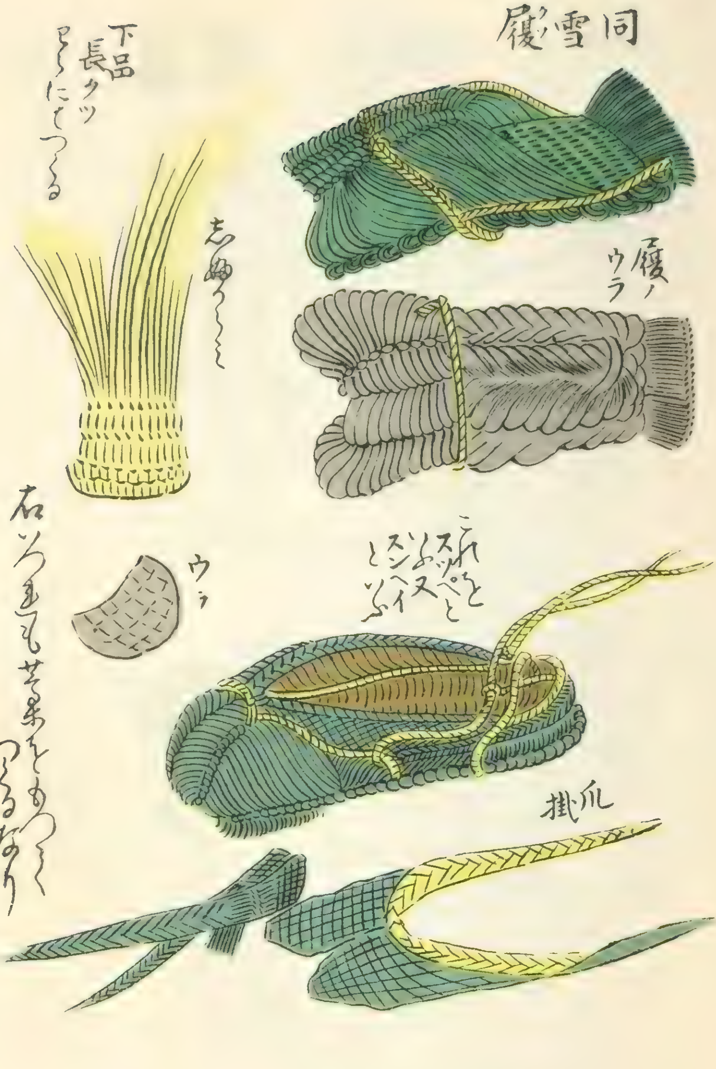


右二種　著作堂蔵



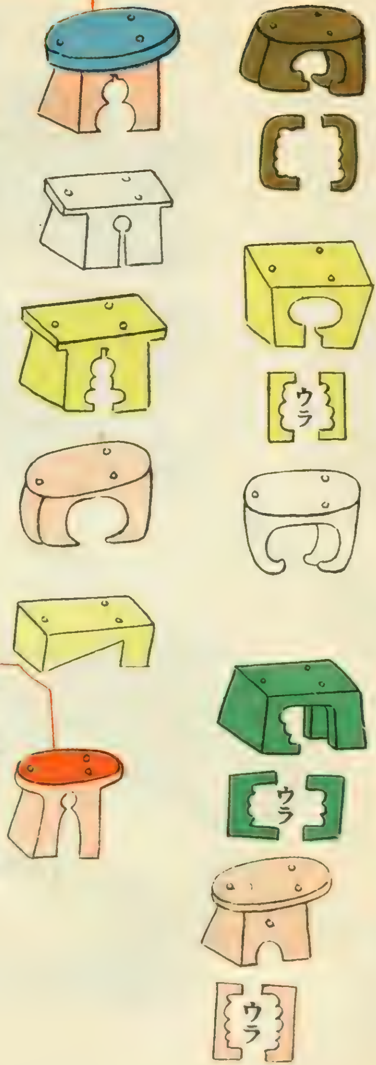
右歌舞伎古画肖像摹本一帖を閲するに皆俳優にて其人をさとらし
出しつゝ定紋を衣に靭て見るべし按するにこは寛文延宝のころのもの
なるべし さてこゝに図する玉川の主殿は二代目にやあらん役者大全に市
村竹之丞とおなじころ元禄中の主殿は紋かくの如しこは寛文
十年の印本坂下随筆にも見えたり こゝに図するもおなじ主殿なれど巴なる
もて五三の桐なれば同人にはあらずそが子などにやあらんと思へり又亀井
才三郎は元禄中に出て立役の名高かりきこれが子の紋なれば延宝
中のものなれば元禄なるべき紋と改むべきなるべし この他玉川かゝ山門
庄左衛門は始めてこの名あり いる物おもふよしもあれは元
禄の初めなるべし 松本好井 松本左衛門は坂下随筆になき名なれど猶ほかの
見えて紋かくの如しこゝに図するものもその紋なれど此の図に
粉なれは其紋が男子なることの他の色子は坂下随筆の姿評林によれる
也さりとも一人をあてに出る評林は元禄中の印本にて水木辰之助が
七変化の図あり後にも市川の名を以て芸にせしものなりとて此巻
中の役者は延宝中の役者とおなしく あたらしねは寛文の後延宝中の
ものとは見るべけれど考ふれば我ゆゑあれど未だ知れず
れたるは八つ〳〵のもの 紙君の鑑定を称
ふのみ
好問堂主人記




同雪履
履ノウラ
下品
長クツ
わらにてつくる
ウラ
これをスッペとよふ又スンヘイとよぶ
爪掛
右いつれも菁藁をもつてつくるなり

同雪駄

三本歯なるは桐にてつくるその他ホウの木川胡桃川柳なとにても作る
塗下駄もありぬり様は上中下に三品あるよし今にておなし

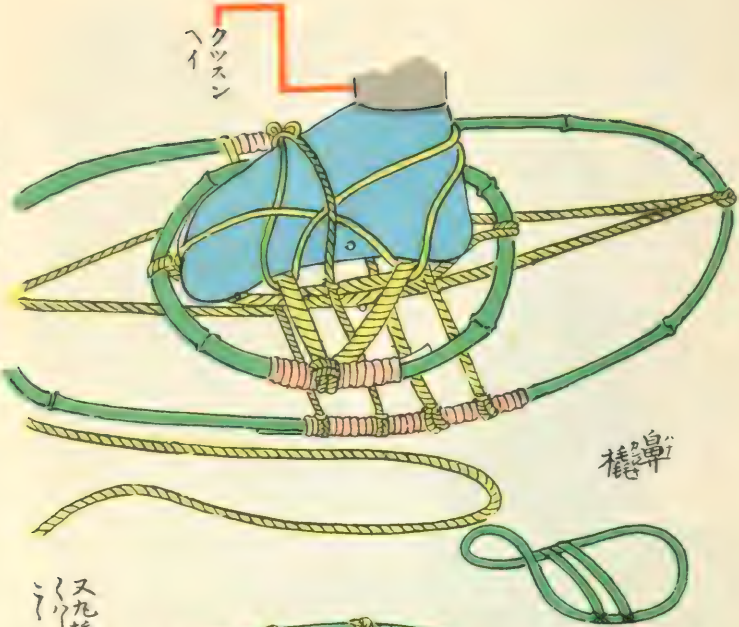


きんか下駄

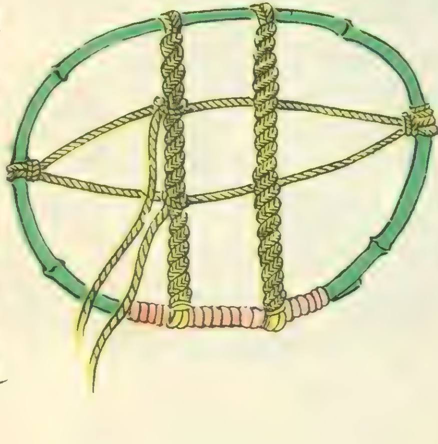
女下駄るいなまるし下駄のうらは
すべて丸鑿にて窪をほるといふ
図をとつてしるべし

きんか下駄

近頃はかくのことくいふ
ことも流行せし場所
新吉原などにて作り候處
所とちてしるべからぬ
ものなれ



鼻橇（ハナカンジキ）



橇スカリ雛形

竹橇

又丸橇その外もろもろよりて大同小異之
くハしくハ圖譜を考へんと思ふをもちて今
こゝに贅せん


雪帽子
これをスイカン帽子といふ
岩菅
深履

簑衣ゝ図

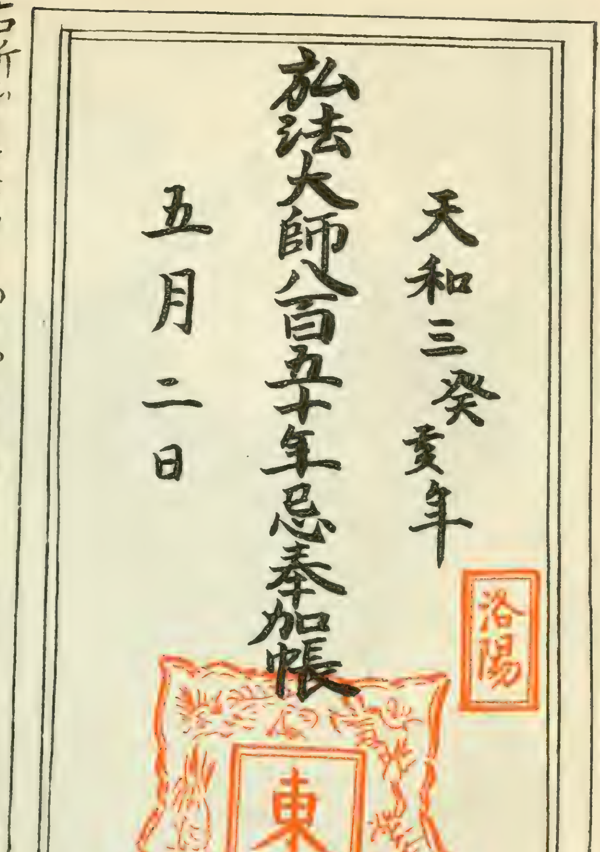
雪簑
胴簑
又菅抱
みのといふ

上糸八十六まハり
或ハ八十まハり
下糸八十二まハり之

右北越雪具雛形



著作堂蔵



天和三癸亥年

弘法大師八百五十年忌奉加帳

五月二日

洛陽

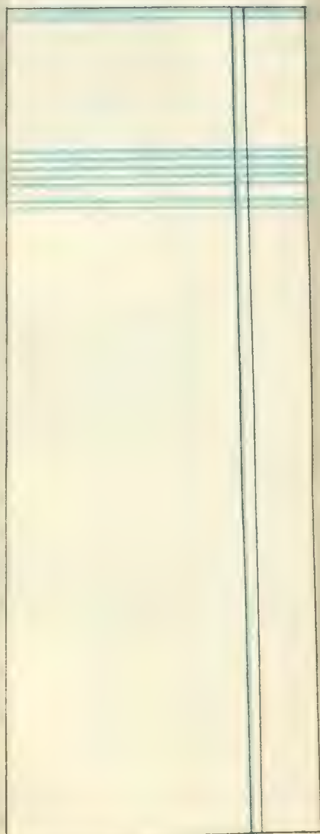
東寺

右折本まてうつしぬ。ま如此東寺その頃よりうら表へ古写経をと張りたり。おもふに東寺の残缺の経巻なるへし。惜むれとも今ハ何あるへきものとしらすして

琉球手巾

横をとめる所ニ折下して隠しと云所ニ折る之

織留ハあと先ニ有りとめる之



長サ弐尺五寸弱但もしの志ま有之横幅壱尺壱寸

白麻ヲ以織之花の志ま織出し有りしめと中と

六角○ぬけ此その外ハ◎如此ニ志ま有之

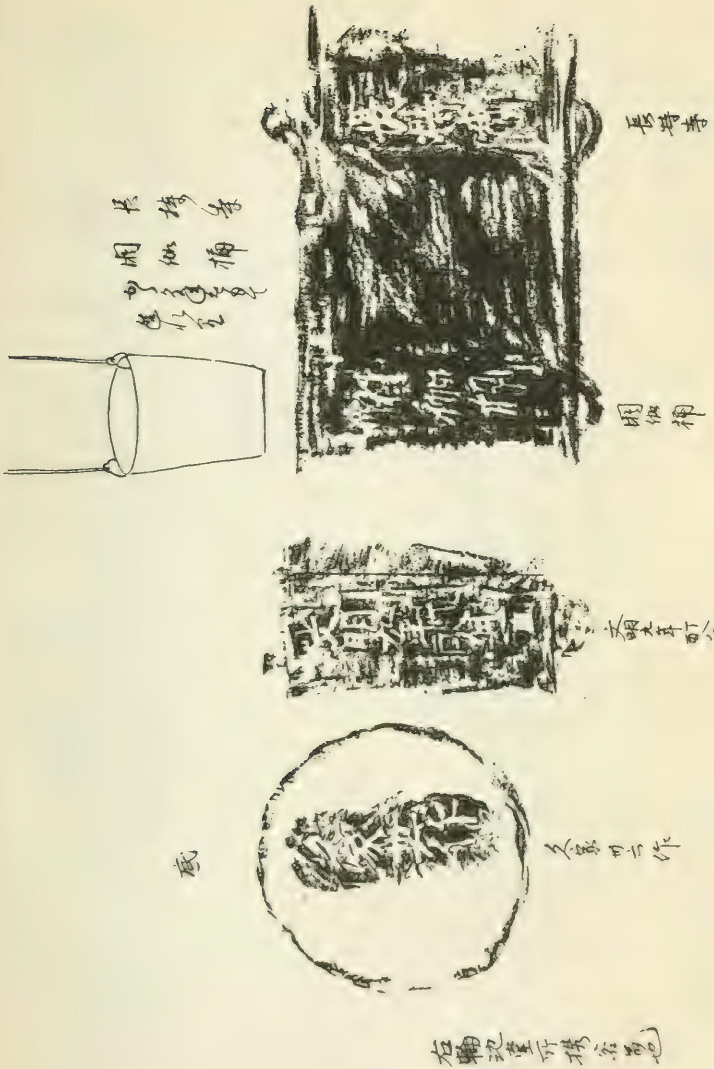
フサ長サ三寸五分

織トメ長サ八分

雲具雛形共ニ

右三種

著作堂



日野宰相殿書簡寫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

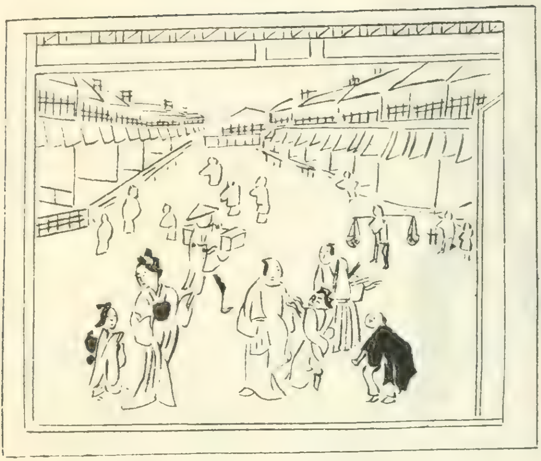
[illegible]

新渡香囊



鳥居清忠画新吉原仲之町図絵

縮全図

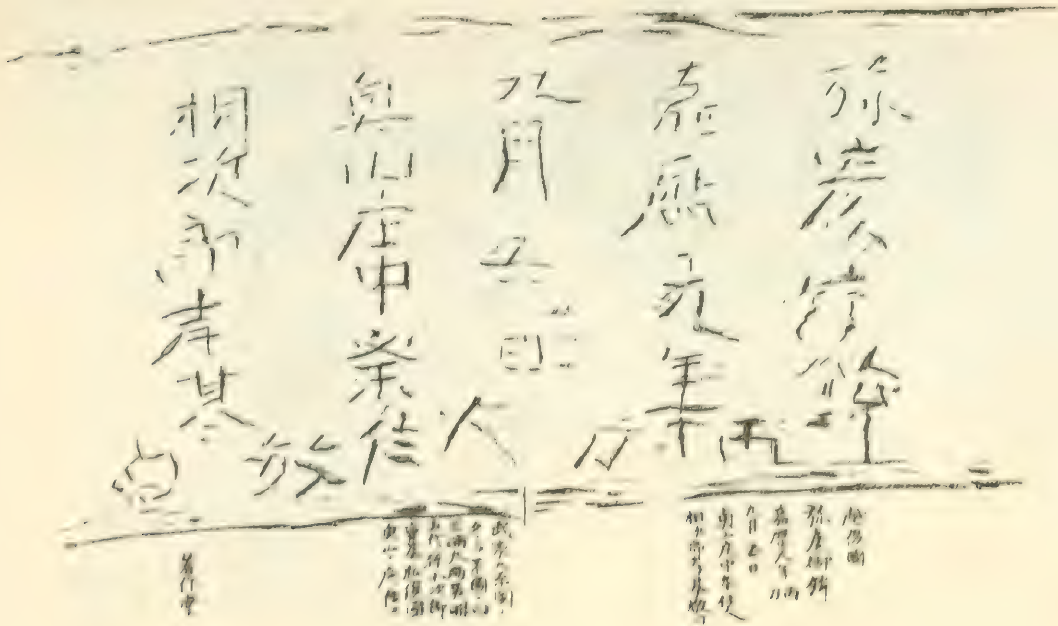


繪師鳥居清忠筆

彫工関根新太郎

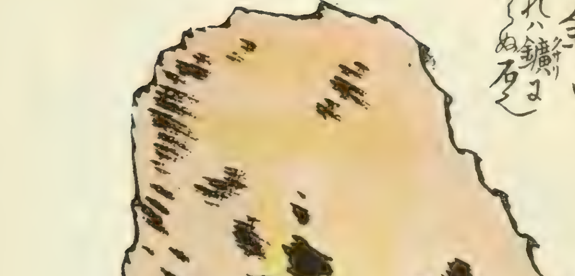


右三種
蘐園


嘉慶元年
九月五日

美作別銅山

箔石これハ鑛(クサリ)よ
すゝぬ石也



石中
きらゝの如し
只外面
のミにあらす

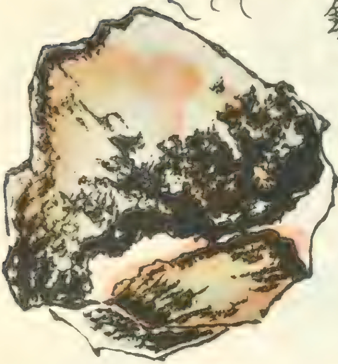
佐渡の含鑛(サクサリ)

これをくだきて金をとる



同鉛鑛

これをくだきてなまりをとる



美作銅山鏡石



石中ハ如此こきねずみ色也

其の鮮明恰鏡のごとし
乃ち細みなくくらうる
まゝ見ことも含鑛(サクサリ)まゝ
うつる此石也

著作堂

菱形拓

新田大光院蔵

竪径一尺三寸許横一尺四寸許縁廣二寸許



題葵形松

千峰頂上蹲
萬〻而扇松
國家千秋作
立一雲大光峰

新田萬壽寺偏參沙門貝陽謹題

葵葉形松一口、此是

贈鎮守府將軍西公靈廟前之所生也、廟頭之松、古有三株、曾被烈風損其一株、於是令工斫之、外剛而內虛、從其虛口觀之、如葵葉然、異而留一口、予及奉

台命主于院、就而視之、肅然改容、曰奇哉物也、夫一枚當一葉、則三枚三葉不從不横而宛然

國家之標幟也、亦且徵之換彼二株、外国之形勢全同此物、觀而可見、恭以以

神、祖盛德洽天下、而能合

太祖鴻業之志

太祖之靈、令顯彰此瑞兆、以為千秋不改之標幟者、豈其不然乎、然則為風所折者何邪、謂是豈殘於大德乎、抑亦曰茲令百歲下、知所以祖德之宏遠標幟々天授、而尊崇日新神應鳳化、真不可側、請須戴仰、於是乎、為

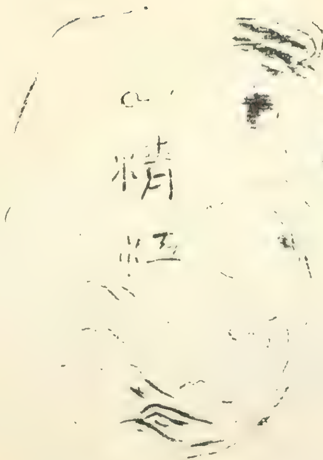
國家長久祝禱、珍藏云爾

維時安永丁酉年正月十四日　義重山四十世遍譽在定

天然硯 對馬海濱所獲號靈龜硯



蓋以黃銅造



右天然研ハ初對馬國住吉の迫戸より出て浦人太守義眞朝臣に奉らしを府中の文士西川赤長といへるもの請得しより轉々して弘賢かもとへ入りくるし研中ハ記文もみえさりけり

自然石

亀隠銘

天和甲子二月　日

菊年山主惟参子題

自然硯石記

歲在甲子仲春念七日

朝鮮國昌原後人東谷黃震中元甫記

貞享甲子仲秋上澣
洛陽晩進合田厚元仲循識

法眼黒川道祐

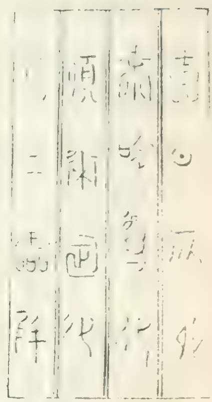
貞享甲子仲冬

白雲村人靜菴

貞享乙丑三月朔旦

三宅氏旬節書

原本ハ石摺之文字分明ならず



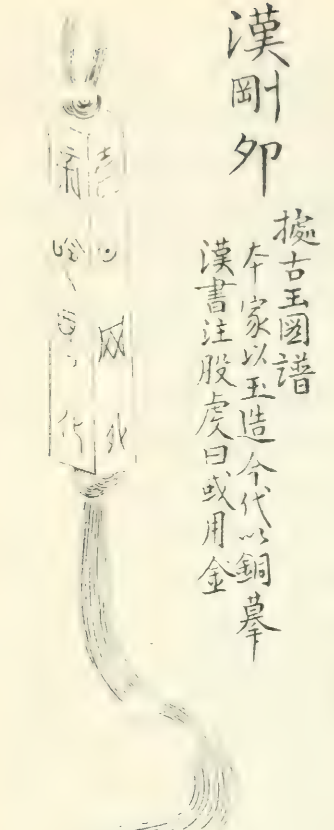
この寸尺の通りなれ

漢剛卯

攈古玉図譜

本家以玉造今代以銅摹

漢書注服虔曰或用金



淳熙勅編古玉圖譜云漢玉剛卯長二寸四分每方潤三分三厘每面瑑四字大篆曰吉日剛卯帝命遵化順爾國化既央靈除共十六字臣謹按後漢書云王莽篡以劉字有卯金刀之文忌之每於正月遇丁卯之日以玉及金作剛卯佩之或四方六角八角圓者長二寸四分中穿以孔以五綵絲為繩貫之而葺其底云丶

弘賢曰所引後漢書文今本不見可疑

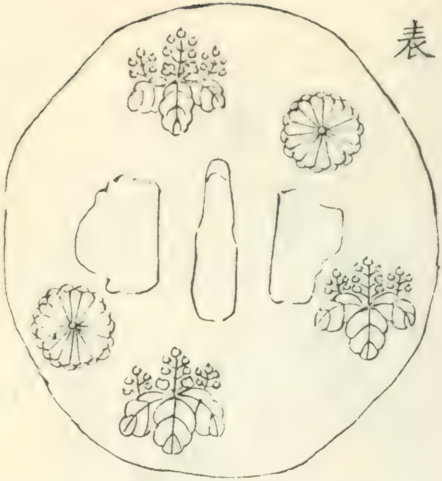
漢書王莽傳云劉之為字卯金刀也正月剛卯金刀之利皆不得行注服虔曰剛卯以正月卯日作佩之長三寸廣一寸四方或用玉或用金或用桃著革帶佩之今有玉在者銘其一面曰正月剛卯金刀莽所鑄之錢也晉灼曰剛卯長一寸廣五分四方當中央從穿作孔以采絲葺其底如冠纓頭縱剡其上面作兩行書文曰正月剛卯既央靈殳四方赤青白黃四色是當帝令祝融以教夔龍庶疫剛癉莫我敢當其一銘曰疾日嚴卯帝令夔化順爾固伏化茲靈殳既正既直既觚既方庶疫剛癉莫我敢當師古曰今往々有土中得剛卯者案大小及文服說是也莽以劉字上有卯下有金旁又有刀故禁剛卯及金刀也

右三種

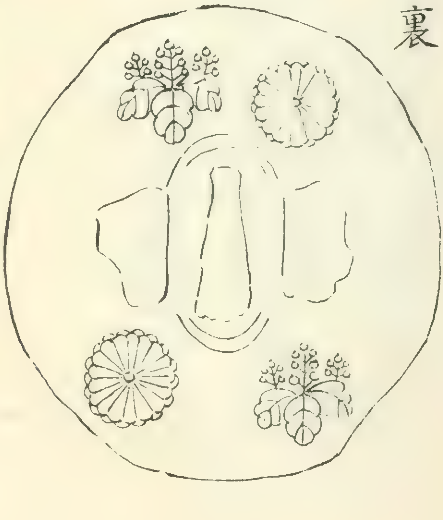
輪池堂藏并考証

豐太閤時代刀鍔

表



裏



右以赤銅造標幟菊桐以金

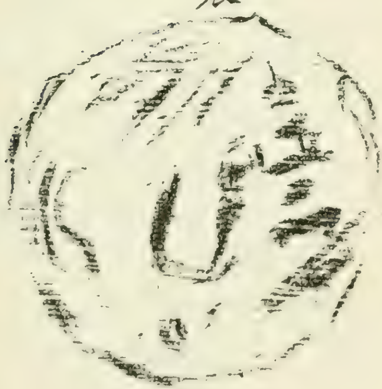
右の鍔五七ノ桐十六菊ハ摺本ヲ寫

山城国山崎古戦場所掘出刀鍔 以鉄造之五輪及人手両面相同是則摹合掌者

表



裏



右二種

海堂庵所蔵

享和年間柳川侯浅草下屋敷中太郎稲荷流行の時当ヶ侯霞
両家氏他処より奉納の徒人のそこにありし鑑札の印それこの
印唐刻にて乾隆乙酉春日穆大展瑑とありはじめふ図この印
をとおせしより数万に及びしも亦奇なりといふ

白字摺本の写文字細シ

乾隆乙酉春日穆
大展瑑



松蘿館所蔵

馬蹄石

九奇品ありの之



好問堂所蔵

鳴戸硯

自然石硯



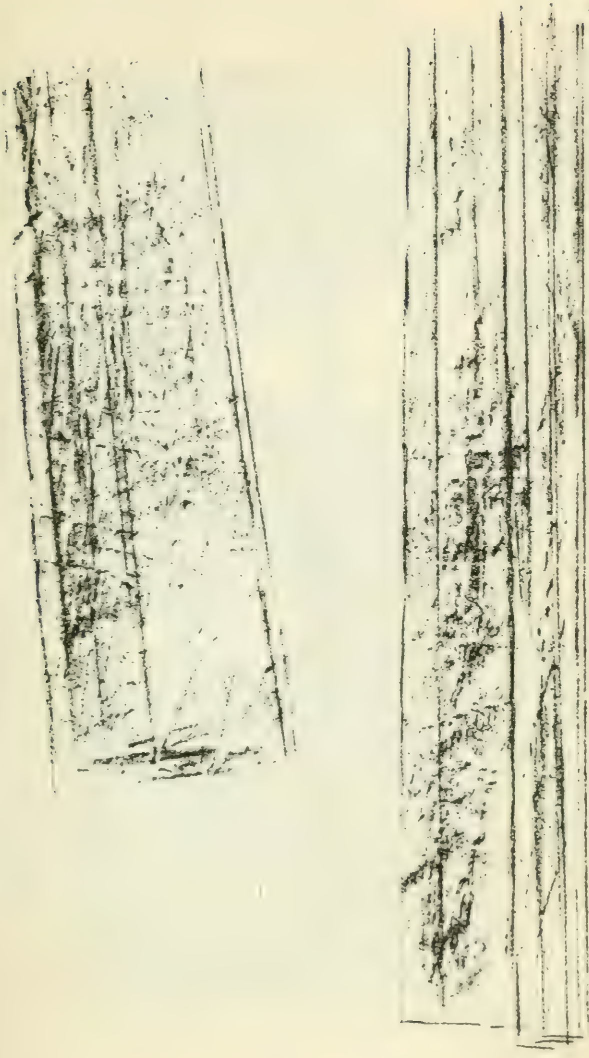
海内一大奇品
名為鳴門研云

佛庵蔵



コノ銘別ニ下ニ録ス

硯傍



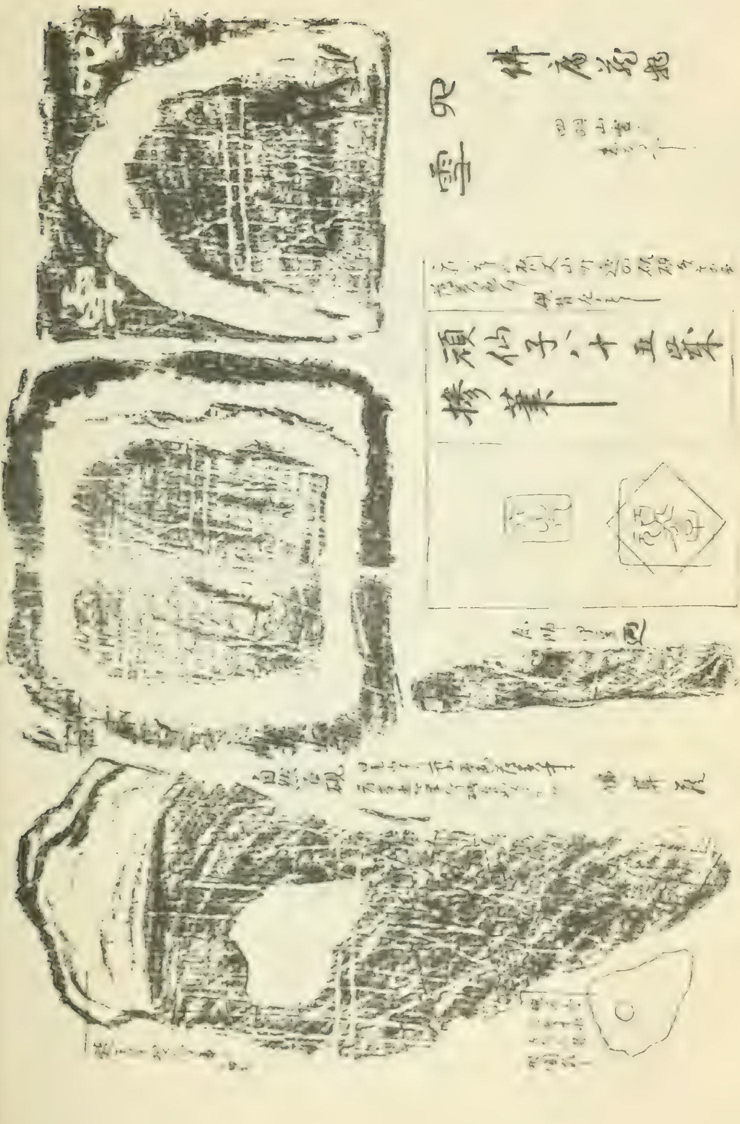
自然石鳴门硯銘　紫野彥輔所賂

天造地設待仲景蓮紫彥作銘

皇寛紀年冉々征途来着何人

任爾千回萬出五雲

南無彌廣蔵



右甲申の秋八月の小集より翌年の春に至れり今までの帖を携出て社友に展覧志ぬる漫録之他人の漫書一家作よいとまなくしてみるへとふしつゝさいの次の月の会より漫録簡如左

乙酉ノ孟春

著作堂主人識

耽奇漫錄第十一集含文政乙酉三月四
月分但若銀色所摺出漫錄見上四月
分亦收於是申已

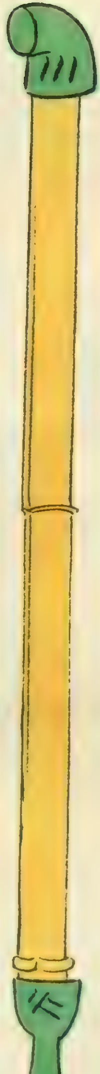
浄瑠璃御前物語 繪入古写本

この物語ハ豊臣太閤の時をのゝお通といふ女房の作にて
の御曹子をうけて三河国矢矧の宿長者の娘浄瑠璃姫のことを
十二段の草子に作りなしたるをのちにこれに節なとつけて
唄ひものとなりしより世に浄瑠璃といふことはしまりたれ
これを起源と人々いへれと猶享禄天文のころ既に浄瑠璃ありと
いふことありしものゝ名目あれハこれを此物語よりその名の始れる
あらはれたるとも見えしくはしくきこえすハ別に考あるへけれ
れハこゝにもしるしぬ
この草子ハ板本にて世に行れてありし草子のまゝ
うつせる写本にていつれの世の詳なるを知らす但多くは漆師の
板本にみえたる事もあれハ左にうつし出せる也


笛のふん

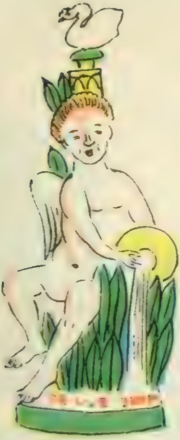


磁烟管

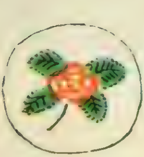


右烟管ハ蜀山翁の贈られし之肥前長崎の近くにて
用るものといへり

紅毛磁器藥入



底



匣

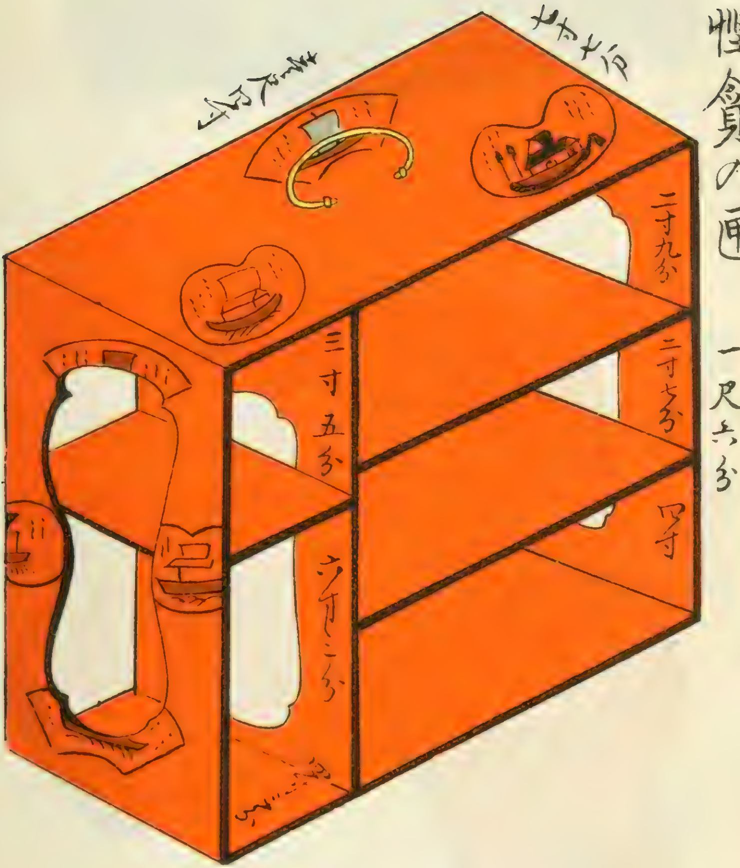


右三種

好問堂藏



大名慳貪の匣



慳貪蕎麦切の器ハ絵に大名
りんどんといつて其も大名と呼し
とハ諸侯がたの船をうつし
ゑがけるをもて之 此後世より
際くてあつらへしの絵ゆへと
呼ふ絵でも称する名ハ残りし之
今あるに載せる其船をゑがき
けるハ大名とよべる絵の意味
されバ今におゐて又称ひ
あるまじき事也 扨又五寸錦
雑綴ハ可遍評花ある跡の
今めかしきに移るを載ける其
事跡ハ此の山桜珠葉の汁 子
を採せる名文宝堂の此器
を併せ是を記ハ曽てけんどんの
器は是ハ全記をよりに是非
再を其まで錦雑綴ハ為の
原を抜のこらひまや我が方一
題目よりなすなり

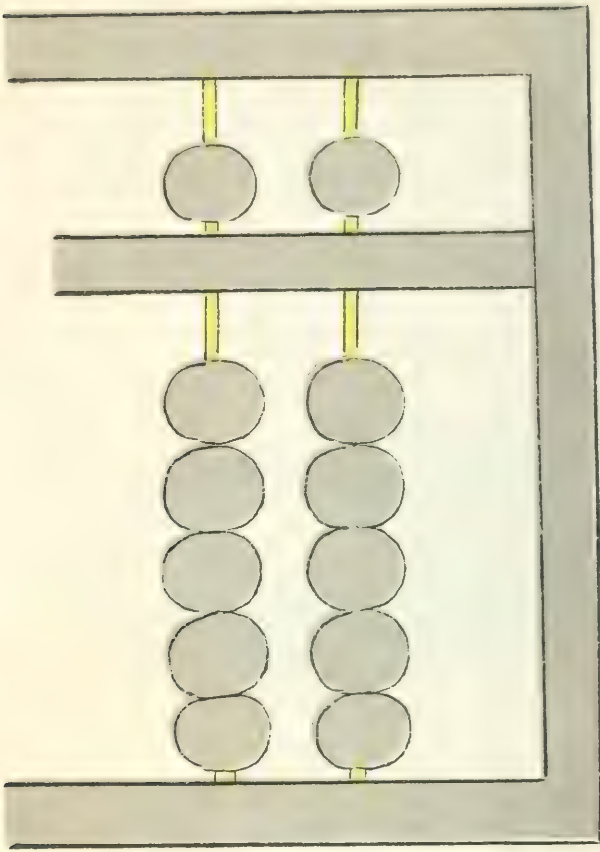
北峯 記

解云慳貪當作ル蒦飩ニ
其考辨具于下附録ニ



大名けんどんは蕎麦切のみなりて何れも温飩なりしにやと思ふよしあり己友所謂とらしむる大名けんどんのうつは物を秘蔵
して市井にまれなるは物ハ今の世俗家にて温飩する器何ぞ酔と浚渡蒸籠を用ゐて何も仕まぬ事なり
べしまた文けんどんハ慳貪なるゆゑ文見頓なりしを聞庭雨先醒の異説をかゝへ世にあるをまぎらはしきに
相手ハ南竹あれなひさしの慳貪なりとて買ひし人ハさらにあなたの者は寄へ手て文新版なりても信じ
けんどんの名を負せて南竹けんどんの法に随ひしより鉢ものに蕎麦うどんなどを入れて
持へ持出せしをけんどんといひし又見頓と書せしハ其記者のうかつなるを見出せし文字にハあらぬなるべし
書き出せしとを定めかぬるも坊間の売買の事其ゆゑとよく穿鑿して明らかにすべくもあるにあらねば也
きりとけんどんハもとより貪も慳貪なるを慳ふハ慳貪とも文見頓とも書きたるにはあらぬ雅俗の用心から
を物にしけれバ唐話ハ兼ねてからの名をかして大名に名付けたる菓子画部のあたりに出たりしは従前
あらしかれどもハ蕎麦屋の障子にけんどんと書てもあるしとみえたるけんどんハ菓子入れてある処ハ新出也
つ家で見世売のことあるをまねといひしになりハ其でもも出まるよ奴僕飩をいふもし乳餅折尾を
知られもなきうどんを切りて菓子ハ蕎麦なりと本業に似るよりて出来の巻のさうらとて唐飩といひしなりも蕎
麦うどんのぬつらけといふもおに海苔をかけたるを花まきといふなり巻の字も巻どんの巻なるべし
且むかしハそばを切るうどんを好むもの多かりしかさなかりしければ店屋ずく新打と云ふなるよしハ
光温飩好きを好む人にハ好など問ひし今ハうどんと好むもの稀なれハさなきも多くあるなりけ
百人一首といふものにあし引の山鳥のうどんけもよしあしきとひらくそうどんとよめるにれしらハ温飩屋
にて蕎麦をかまひる抑しといふ一老人の語あるかくれバ大名けんどんも温飩とあるせし也とおもふあり
抑此あたりつぶハ三重の醍醐を常なりといふ不堪にて何んべくもあらざるめれども思ひて云ふならくなるなむも
耽奇の人ふたて虫干したる紙とあるよしけて二百第の名目にあらむて猶さるハ猶ろしとの蕎麦さとうだめん
思ハ諸君のもらひくさにせし物なり家ハあらざるらし人なくもけんどんハ今に慳貪の
孔そ処ろハもる出る事なり
大名けんどんと唱へしも光太の菓子の持より其名を残してら一定なるしもあらぬ思ひ従ひ知らずありといへども
いハ甲寺山屋けうどんあれハもらひつよく後見予の評論するかるべきとて二のうけて出さかし　蕎作堂

算盤　二百年以前より家に傳来するものにてあるよし
今のものとはその製作やゝ異形なり



大岸からすみの残缺　娼女の娘みあれだもちて切て墓をせむ
作者此名をとりてしるしあり

吉原大全に云享保のころ京町二丁目若菜屋におれきしといふ
娼女酒宴風流をこのみてつね出入るきゃくに揚げ菓子を集めさらすり
しけるをいつとなく大岸とよびそめしへ女郎とう紀名されけるとなり
よびある晦日のあしきに白無垢を着し白きふくさの上にからすみを並べて
揮きらしを縫はせちやうちんへ大岸とかゝせてすれんにつりさげしとて
道中せし是よりからすみとてまねしせんけやうせしとぞ

暁の返吐は隣もしらぬなり　此娼女の句なり

此女は大岸のからすみ新吉原中の町近江屋権兵衛和歌にてありけるを
日本橋桶町和泉屋萬福と云人もらひて久しく秘蔵し枝折おきし
おきけるをある人玉欲子にもらひうけて松屋白崇子に宝として予に
贈りぬころは文化七ッの年庚午初秋九日の夜なり

右三種　文宝亭蔵

綾藺笠装束其外如圖

表組一本太サ一如此

色黄而有艶

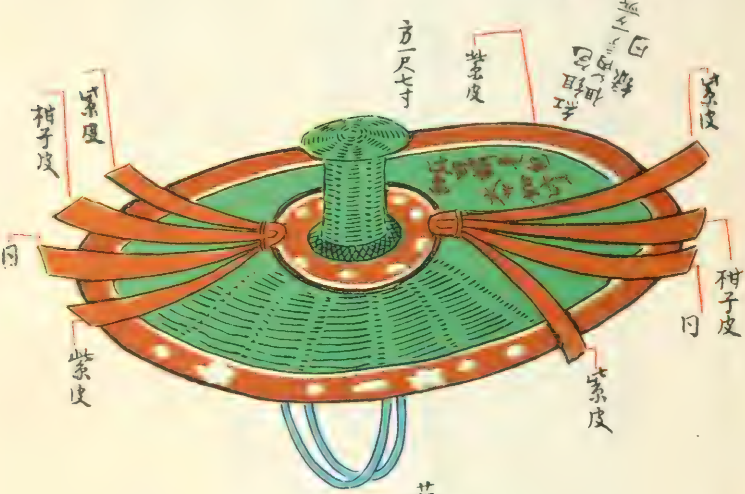
但組始ル裏

一筋黒ク朱ヲ以画

色少薄シ紐付紫皮紐紺

裏紺布

梅尤金紙



藺組如此

但本□寸刻ヨリ

細目二組アルナリ

綾藺笠寫形袋上書付

表

南都東大寺所藏綾藺笠圖

聖武天皇御物也享保十二年丁未入台覽同戊申春三月有故寫此

寛政元年己酉九月十日以悉知景純之藏本寫之

文政六年癸未七月以半田生傳摹本寫之沼田美備

文政七年甲申二月二日

綾藺笠の諸本寫山櫻の寫にも享和十二年丁未とあり是誤あるべし享保とあらはれを支干あるも今改之美成云

出羽秋田産コサノ類也

毎年正月十四日ノ夜シメカサリヲ焼時左右ニテ吹物秋田ニテハ貝ト云

長サ二尺三寸柳ヲ以造ル内ヲクリテ蕩クセシ物ナリ



美成云土人貝といふよしなれどこれもヲツノといふものなるべし閑田次筆にも出羽紀行なるものゝ古道といふ書を引て正月十四日のよひなるの竈のときに木をもて角をつくりてさゞつのとなづけ吹なるしあつもそよしへてそへうりこれよりて思へハヲツノハ小角にて大角小角の小角なるべし大角小角の図ハ朝鮮陣法にみえたり

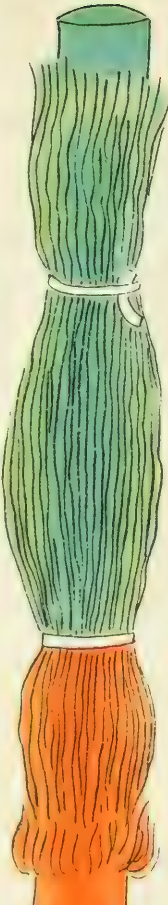
ほらの吹



解云コサ當作胡笳ニ松前ニてもコサ笛と唱れども胡盧の類にて吹物にあらずぞ山海名産図会にコサ笛の図を載せたれどその物ハ也すそその唱ハ非也○右の評ハ尤よしさられど閑田ハ京師の人也又古道を著せし人も出羽の人ならざれバしられざるべし貝とハ法螺貝の代りなるべく故名つけたるなるべし此外なるのおもひのまゝ

右同國の産イナケ棒是も正月十五日サイノ神祭ニ持越後紫田祝木の類也

長サ二尺一寸一分弱
雁来紅の液汁を以染るといふ



解云イナケ棒ハ稲毛棒也これ稲穀豊登祈祝の義にて名つけゝるなるへし製作けつりかけにおなしかるへし

右三種

寫山樓所藏

能ノ古人形

三番叟

狸々



右二種

寫山樓客品

一品輪王寺宮公啓法親王真筆維摩像縮圖



徽堂



いぬるきはしまし寄修せられこの絵を写されしとて佛店より出
されたる公啓法親王の書き添へ給ひしそれのきみの画きえよく
志のあまりしとて本もかゝるものをもとめひしより次の絵する
ものせると人ふいはまし見て縮図してなま出しつ
法親王のこの画をあそばしまししとて白安坊の御神主のもの
置きとめおきなきしよしある坊官のものがたりとぞ



住吉人形

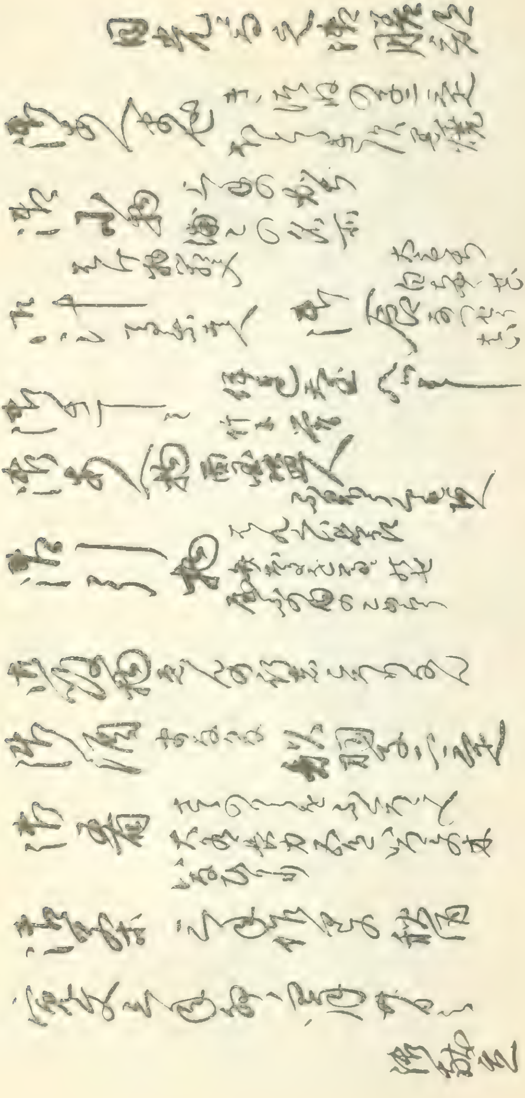
寛文三年の謎献立

このこんだて抄ハ何といふこともしらずやしん考へさせ給へりとそれ
とも寛文の古書なれバ難しからめども
著作堂主人のころ世上に謎の流行せしことハ風俗文選にも
其業家のまき物につくし事といふを見え京江戸にも流行のさま
しつへくより桜ふる年の宮(?)光仰に謎給ありて俳家の
あまたの好みて読にも謎のかりもの歌をもつてこれをなせり
しものなれバ此ころの事ハ殊更開談にも見えたれと開談ニ
寛文八年に謎の書を載せて出せバ考るにもよしなしこれと合綴
のこと思ひて考てハ出るべくもありて志つまりとも当時の形
勢をとらへ考べき是ハこれをとくにかゝる流行しこのこんだて
ほとんどその思慮をあるハ甚本意ならずやその紙をもつては
それとあなるもあるべきさてさりにいひなし古今にもあるべき
ありしるし置きぬ者あまたあるまじくあるべくなん

著作堂主人記







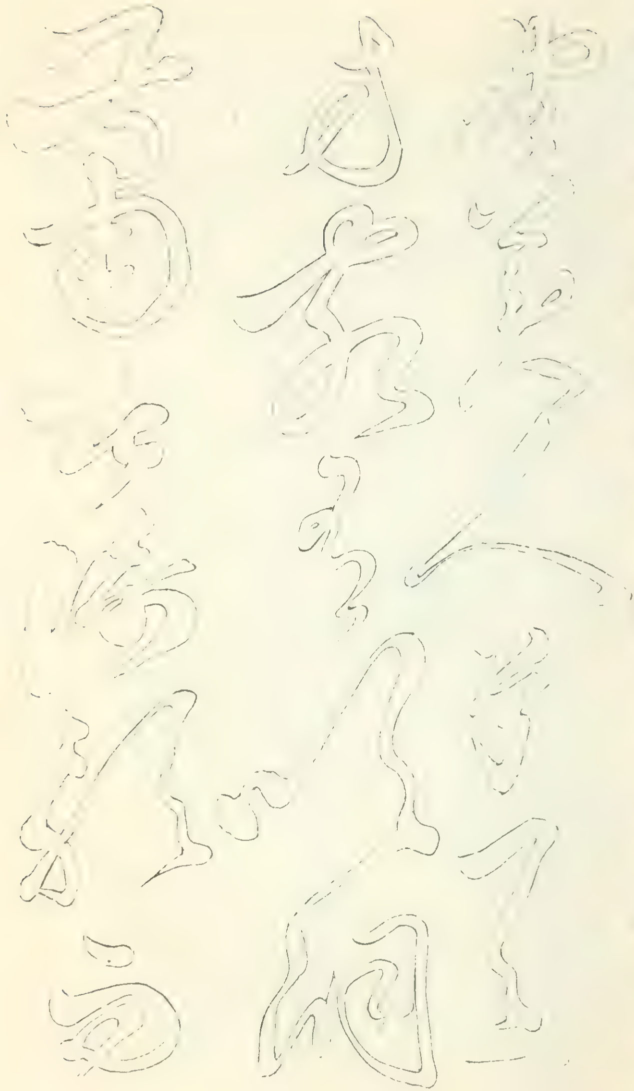
右の一幅ハ近衞應山公の真蹟なるべくおもへりさるに此御
里ハ田舎なれバ見る人も只月花をともにながむる斗にて世にしる人も
なかりしをこれを得てこれを摸写にとゞめおきて
後来の鑑定をまつのみ

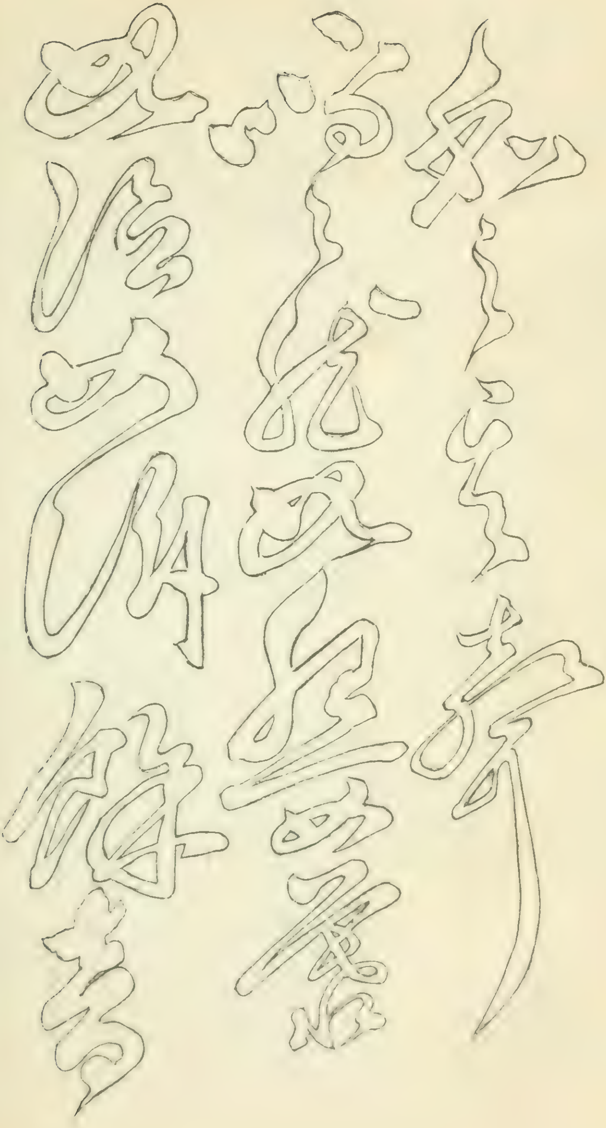
右五種　松蘿館所蔵

帰郷の期に迫り他右歌并の器物もとく彼のたびゆく人に
つけて送りつかはしぬれバせめてハひの御命ずる夜右をとゞめ
探りて右の五種をうつしとどむるものならし
ぼうし

文政八年三月十二日　松蘿館主人

赤穗義士富森助右衛門書　真跡大洲藩　兵藤氏藏以上三種　海棠菴







赤穗諸士之義勇聞乎天下也尚矣富森氏亦其一人也今覽其筆札意度瀟洒姿態嫵媚抑非同夫武弁之徒不識一子者則其人品也之完美從可想見大洲藩兵頭正容摹勒上石謀永其傳予嘉其志之有慕焉乃題以詹々之言戊午杪冬念一日

述齋識

右抹墨跡を石摺り写之

信濃石

緑天菴閣

蘇氏印畧

佛菴



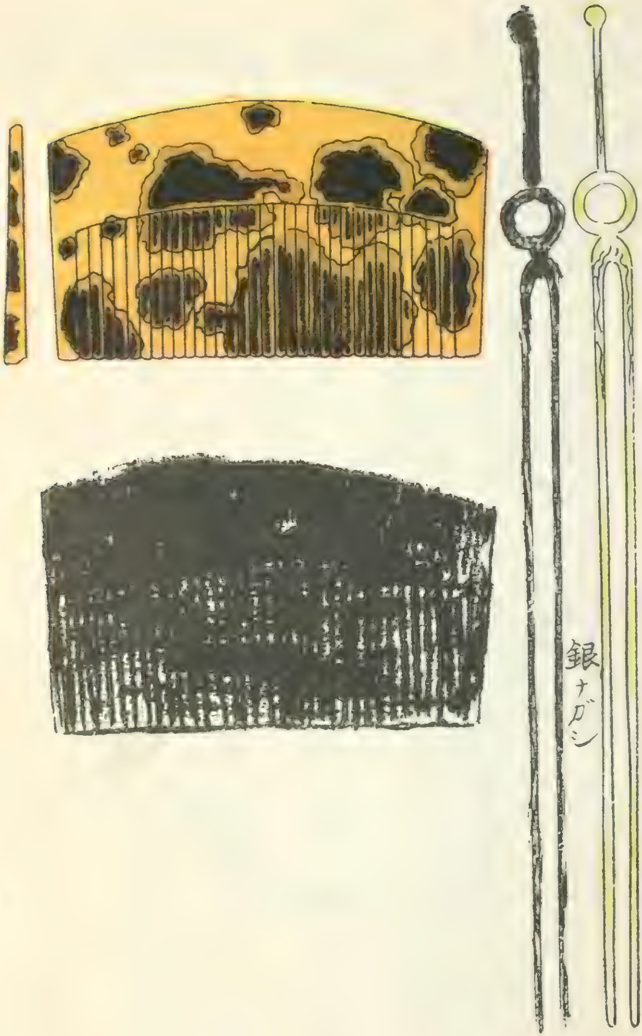
勤齋刻

觀西菴閣

曉采居印略

これらきのみなのものまで古製まゝあるゆゑ閣の字の出処を
見出して刻せしかいとおかしとてそ人々のうつしとらせけるに
きゝはものせしあり時は文政八のとし三月十六日輪池堂
の耽奇のまとゐせし席上にそのよしをしるす
なり

美成しるす



享保正徳の頃流行の櫛かんざし
櫛は黒めのこと薄く歯のもと厚し　製今と異なること見るべし

員外松公風獨樂二種





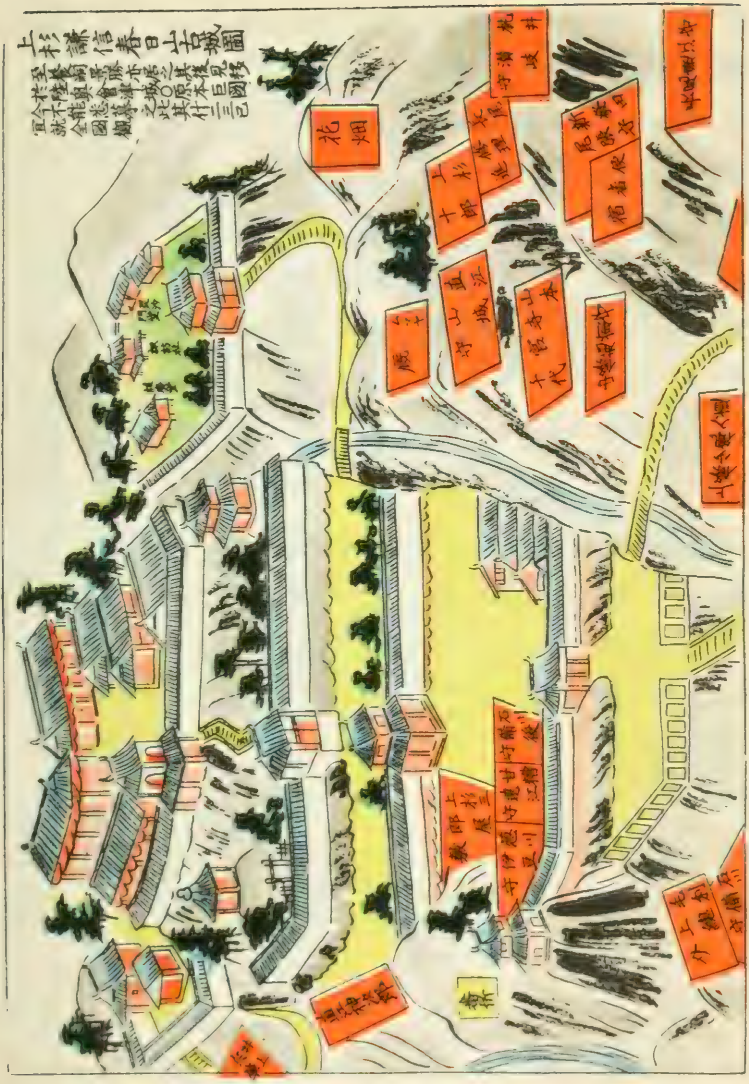
松蘿館云

去年十月の比より口琵琶といふもののはやりて流行せしか今茲
乙酉の仲春に至りて　公より風俗にかゝはるとて停止
せさせ玉ひぬ　志かるに又この三月比よりこのおもちや流行せり外に
て作りしものも出来り又名取あらひは撒縁甲にてもつくりしか時
これ古よりある風の松風と云ふものにて花のかたちなとにも作り圖の
ぬく縮緬綿ことそ出来るもの あり その形素風にさも似
たるをもて名つけたるなり　これは此の頃細工流行のうちなりしかれ
る後の考にも為るへき者の事なれは茲に載せをく○松風ふる名を扨て席
上の吟　きのふまて緒に素の松風かくよふしいろよりの笛よりもたくへそあらん
英風書とめり

越後春日山古城圖 原本北越某氏藏予所藏此其摹本

圖說云後人所考文明十戊戌年ヨリ至永正六己巳年此際三十二年上杉民部大輔武義居之永正六己巳年ヨリ至天文七戊戌年長尾信濃守爲景上杉家老顯定伊豫守居之此間三十年天文七戊戌年ヨリ至天正六戊寅年此間四十一年上杉彈正大弼輝虎入道謙信居之天文廿一年冒上杉氏自是之後關東管領天正八庚辰年ヨリ至慶長三戊戌年此際十九年上杉中納言景勝居之

慶長三戊戌年至於慶長十五年庚戌此際十三年堀久太郎秀治居之采地三十五万石此時天下一統メ被禁山城因遷城於同國福嶋福嶋則在今町高處今乃爲郊原爲所存蓋舊址已慶長以來及忠輝卿領越後又移福嶋城於同國高田自是之後世人所知也因不贅云


上杉謙信春日山古城圖
花畑

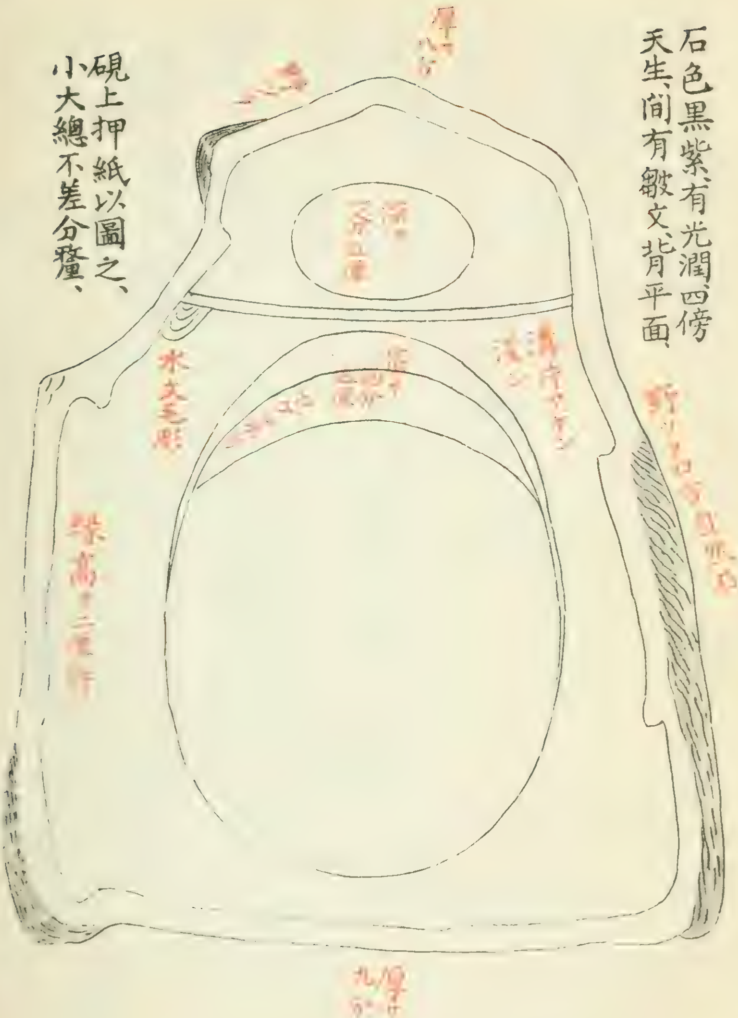
若狹州遠敷郡野代村岩屋山妙樂寺所藏什物

弘灋大師大般若經書写之硯

當寺者、延暦十六年、空海建立之本堂、今現在、此所書写大般若經六百巻、○又同州同郡遠敷□□下宮神庫有硯、并大師自作云、

右寺說此図文化中得于若州医官杉田玄白氏

石色黑紫、有光潤、四傍天生、間有皺文、背平面、



硯上押紙以圖之、小大總不差分釐、

こハさせるものにあらねとも上に出せし空海の
唐山壓書硯をよみその圖のしるしとをもてちなみに
この壓書を添たり



壓書

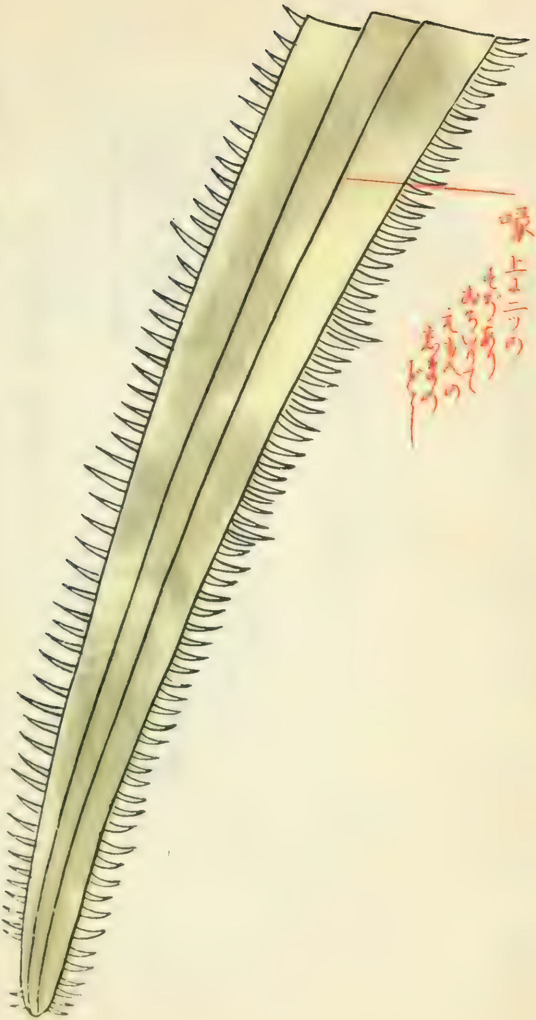


如此
杜春
才子

文政三年越後新潟漁者所獲

鋸鮫の喙 土人この喙をのこきりといふ

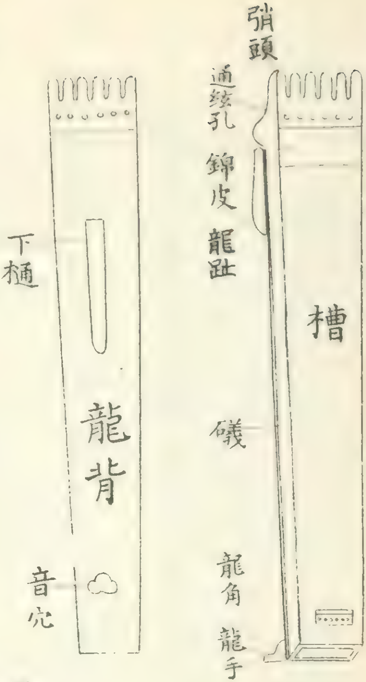
この鮫巨大なるものハむかし獲たりし小形なるものとくらふるも罕に獲ると
いふ彼地の好事のものこの喙を珍重もせず棄てこの全身を
かんかへとらしみとせるのみ



右三種及古硏圖

著作堂架藏

和琴名所之圖



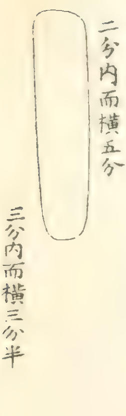
柱之圖



柱以楓枝作之不去皮高二寸二分下横二寸木口徑三分上平齊而而乘絃之處剔溝自上三分之間削四方刀痕黒之

琴軋者撥也以水牛角作之厚五厘許長二寸五分上下圓作之小方當于絃也

琴軋之圖



和琴ハ去年既ニ出せれハ畧ス今ハその名所を記してさきの闕を
補ふ尹ノ宮藏せる物惣長六尺三寸四分廣サ本にて五寸二分末にて
七寸七分磯の厚サ一寸二分龍角ハ本より二寸五分足の高サ一寸四分
猪目一寸六分猪目より錦皮のあるまて二寸六分末の足長サ五寸
五分下樋長サ八寸六分本廣サ七分末廣サ八分錦皮廣サ二寸五分

遼磨寺中興記
永尊七年龍集乙
卯九月十又六日

南禪東庵比丘惟
蜀得嚴謹忠守双
桂時七十六齡也
謹作小偈以塞石

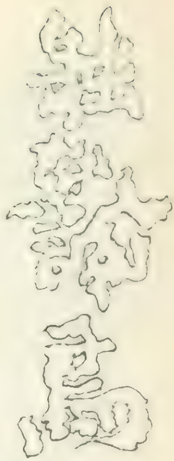
懷之饒地去
祖跡由來無動擺
得中與記命工嚴
斯文歷劫留斯居

假使天衣拂不消

文安五年戊辰六

月二十一日

住持比丘南禽祖



右達磨寺中塔の記ハ八角の石幢なり寛政四年冬郭し
くこれをとつて打搨せまく思ひしかともみるところハ文字形く
踏出し給ふ二年古様とも記してけちとうへき抑
達磨寺ハ大和の葛下郡片岡山にある寺也
ちう山号をも片岡山といふ聖徳太子の飢人の死せしをとあ
墓ありつゝせうのふとハ日本紀及ひ太子伝にみえてあま
ねくきこゆる事なれハ略しつ中興の事ハ記文にくはし
とくせしなるようつせ

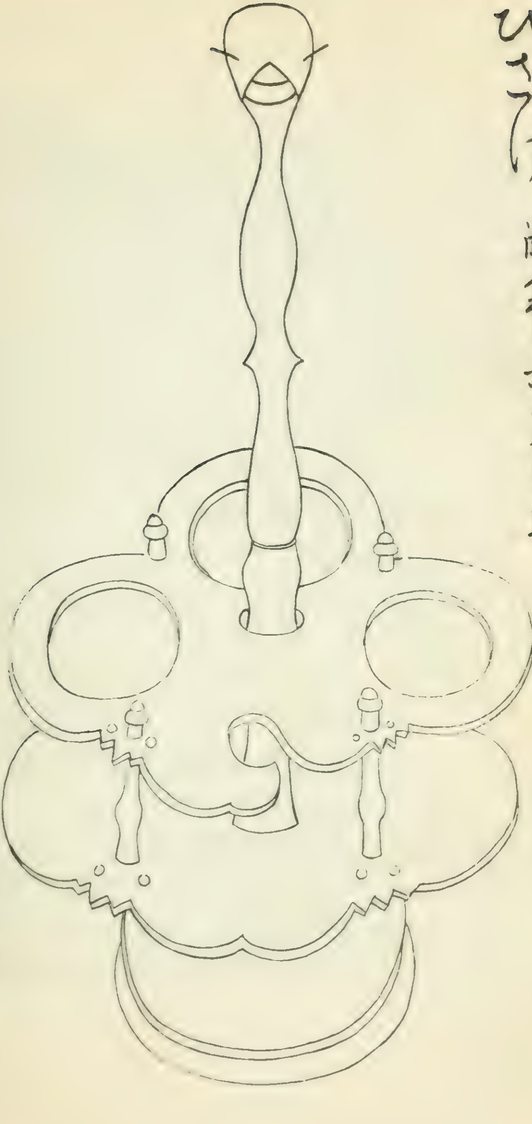
達慶寺中興記

達磨寺在和之片岡山稱曰墳寺初　山名金吾公巨
州居士承　黒川月菴和尚之訓許一詣其處脩敬然
宮叓空怨不如願久之偶　庚苑相公狂駕南京西大
扈從以往計去此不遼白以次志　村公允之到則攸
壑一間　祖師　上宮太予二像偶坐有一禪衲居守
焉涼烟白草寥閒可念便捨百繙屬居僧設藩垣禁權
牧前架一宇以為來者焚脩之地　相公聞之下今旁
近緇白以嚴防衛既而　勝定相公継體素嚮心宗
公亦從吏之施置莊產擇有道者以居之將營構嵩而
府務般繁日未暇給和乃　春曰社封邑而眞福柄其
治東大左右之故法相華嚴兩流根據韻頑以為復使
禪刹敎眞則精米為之嘆奪不利於已百方支岳不樂
成立　今相始政間伺僕悠不運之徒破傷室盧毀損
　尊像占莊田以為巳有衲似皆雲鳥逝叓閒　相公
赫然曷聖蔑公有如此者栽將大行黙罰初侶乱徒立
被悪庚殞生者数輩加以　有命之嚴適逃四散不可
蹤跡便召諸衲安住如故莊產威復于舊親戒工重飾
像設最極莊麗又云寺制宜准大方賛規主者非其人
則不可　公復攀　南峯禪師以應其選　京城大小
刹籍名者隨職司崇畢出貸永以相厥之　南峰先就

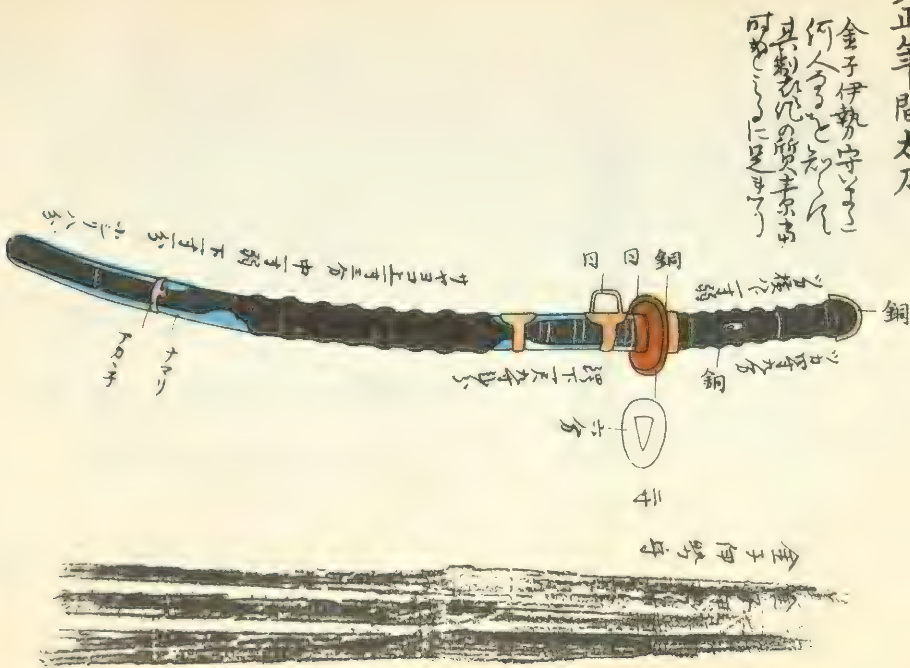
墳處創高顯一基、工者奏伎、壯者献力、不督而集、四阿
暈甍　新像妥奉其位、以　上宮配享、而毘耶之室、大
雄之殿、庫司僧堂、次第就緒、才五六春秋而已、輪負絢
閒道者、拭目鳴手、錄推古癸酉至永享紀元、既得八百
餘成一拆之土鞠成擢嵩惟　金吾分後容建自歷三
朝弗情達　令相承父兄之有開感元老之忠納一日
起鼓百處積燈再使　祖亦跡與上世與數基於将絶
亦思命次無窮夫聞之如何而　有奉連達盛際宣勞
其間與有榮欋不亦幸也哉介事非　緣參會内外相
須以賓厥成者未之有忠可胃晴山生盛之舉矣　南
峯需鄙文記之夫内紀祖跡　每藏鈕箕刑之合諸釋
書可加一辟予若茲寺抂南復作作而益紀其類未荀
無紀載後世復何所儀字雖營及矣不花而相　南峯
諱能惠峯　口東高第侍客建仁司藤東猶起自播陽
西來隱處以補斯書以附記未云
永享七年龍集乙卯九月十又六日南禪東庵比
丘惟肯得嚴謹志于双桂、時七十卜點也、
祖　謹作小偶以塞石隨之跡也云
跡由來無動採得中與記命正北竹文歷劫留斯
石、假使天衣拂不肖、
文安五年戊辰六月二十一日
住持比丘前萬祖能誌焉

右三品

輪池

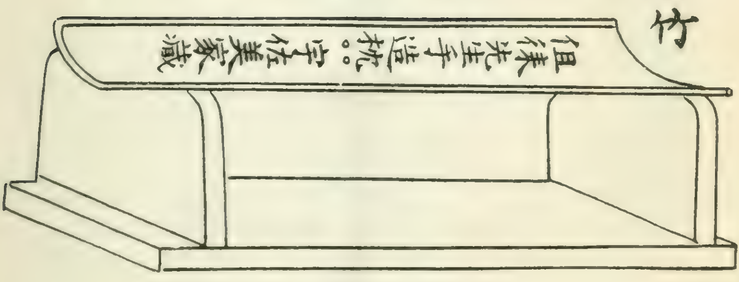

ひさげ
蘭人用る物の摸造

天正年間太刀

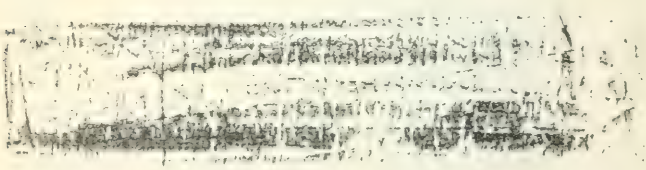


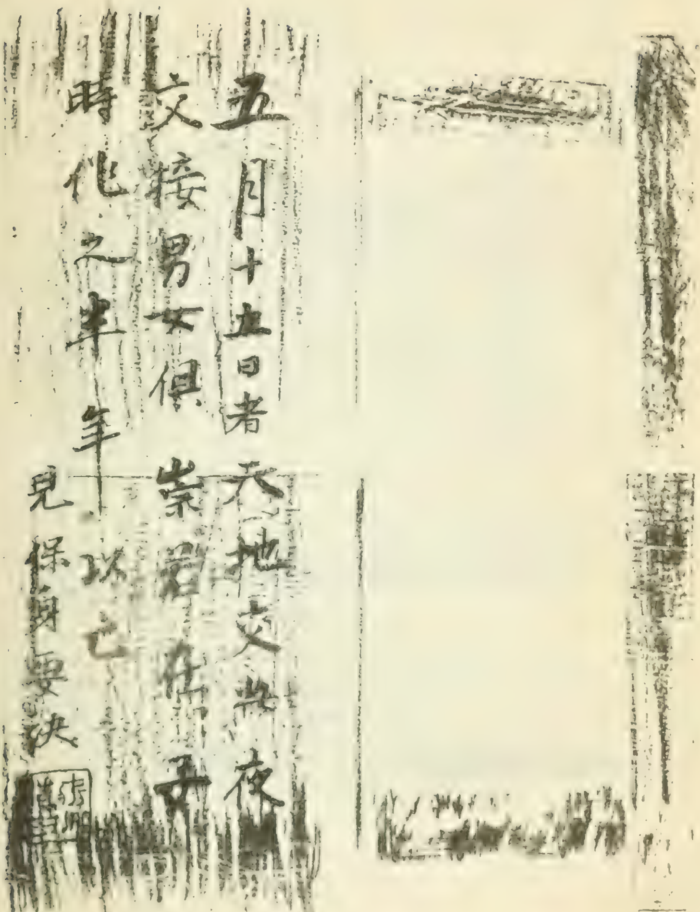
徂徠翁手造枕

コノ枕ハ宇佐美惠助（徂徠門人 灊水ト号ス）
徠翁ヨリ貰得シトテ藏セシヲ
又余ガ乞得シ也








五月十五日者天地交接存
文接男女俱崇君存子
時代之年年成之
見保命要訣

いふ〔へ〕五月ちとせ女のあ[illegible]
さらよの源信明集に敦慶親王のむすめのきみ[illegible]
神代よりいまといふなるさくみえ[illegible] 人をみるらむか
一のへ｜
ほみ[illegible]のさかきのみたて逢ひて[illegible]
わくらくらく姑の[illegible]人はいのちる
源氏物語紫雲卷に[illegible]のみやむの[illegible]の君かいさ
あかくこれはる
ほらりみ[illegible]いまとむ[illegible]歌をめすさみぞる
なのまのころ逢へる｜の[illegible]
とあまもさくみての神のころてよなの年には天のあふなきこゝに
らしむすれ[illegible]志くふらる[illegible]代になる[illegible]盛明
親王の集に九條右大臣の四のきみみるまに[illegible]る
和泉式部にたかのも月はりあつきのみそはさ
まさえ成まれるこの[illegible]これて信明集の歌にお[illegible]
今五月雨ありて[illegible]ぬらしのあれぬ[illegible]
又拾遺雜集卷二に
今まきし[illegible]る女乃五月に[illegible]ものは[illegible]
[illegible]のかの[illegible]

しきさをまふなりけんまでいみじうらみて
清まさる事何としといふ字のつまれ字は能宣の詩句歌なと
とやある詞書をとれる沖何閑數の翁このことしくさを拾
遺抄の注をみんあらめさりしてそ顯昭法師拾遺
鈔乃注よ云

夏至冬至歳旦ニハ禁房内云如此云ルナリ各前三後二ツ禁
シタルナリ　歳旦ハ正月元日歟立春歟可尋　醫師

がまあるゆえん何ら年なきにそ此說ハこの五月あるといふを
はいきの異にぞありけるは清たゝのあまる本據ありそ年頃いふ
かしをさ難波清りたるよいはずこその多くあれとおなじ
き事なんも侍らずさしたる事なれとおもへらくさしたる此
て侍るまいふ年三長齋の月なれば三長月あるなし
のいかといゝきのいふみ那ることありしけし菅家文草卷一
ま五月長齋畢書懷といふ詞ありまた年ごとにおもふ
正月ハ物忌のあまりてもありけるかあるまゝ書法
をさとさけは正月九月もいふけれされまる
禄ハ三長月のこもありたにわかあるそての醫家
にいへる家ありての類なるもありしとおもひ侍りぬ抽
新氏乃枕の鈔よ引し保身要決の説と件の古き書也

をとゝゝに便りあるまゝ申上候さて御入まいらせ候へとも拙
写してみたれとも佛に候まゝ身のさうし婦人方
すきても好けるへく御座候　保身要決と古書とおなし
ちやうの文録原に伝せりける現在ある目なすとの五行
家翁露霜家つとの評ははしめに見えたるも学んしまするに存
おなしみえ候ハしも清筆散逸いたし候本に傍ニ枝を
はしへの物になりても候故よりまいれぬうちとれて
まへりまなの紙目の中ニ編　巻ニ要決廿二巻とみえ
保身要決とたのみするうちの古書ニ候ひぬこのはしこゝ
おまけにたのみ奉りまゐらせ候へ　左にせかせるへく
くたき拝

百家

佛菴先生
侍史御中

右二種

南無佛庵藏

乙酉夏四月五月小集展覽第二

共五本

著化堂藏

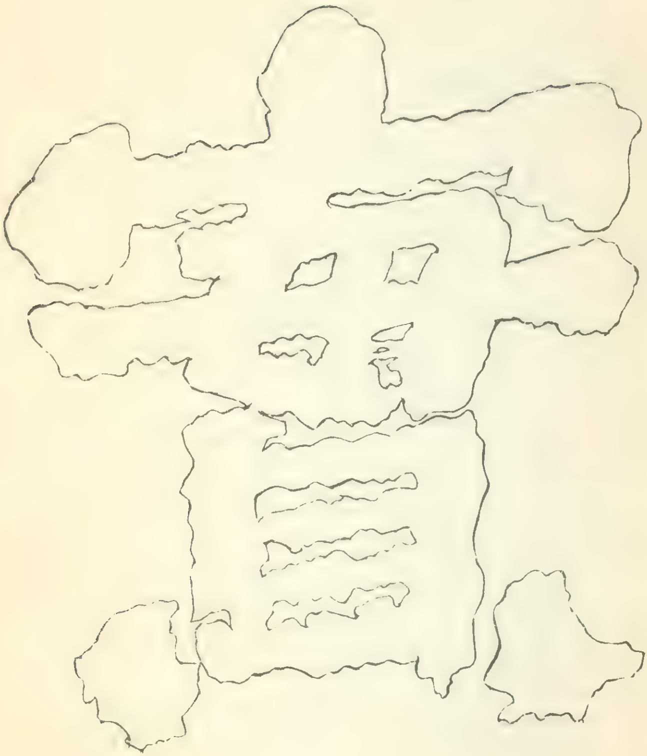
宮本武蔵碑題額

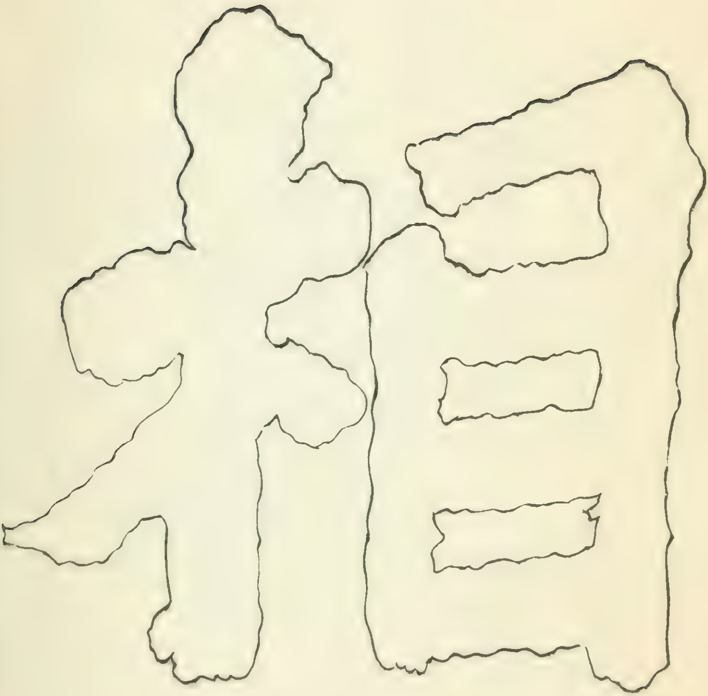
宮武蔵自書

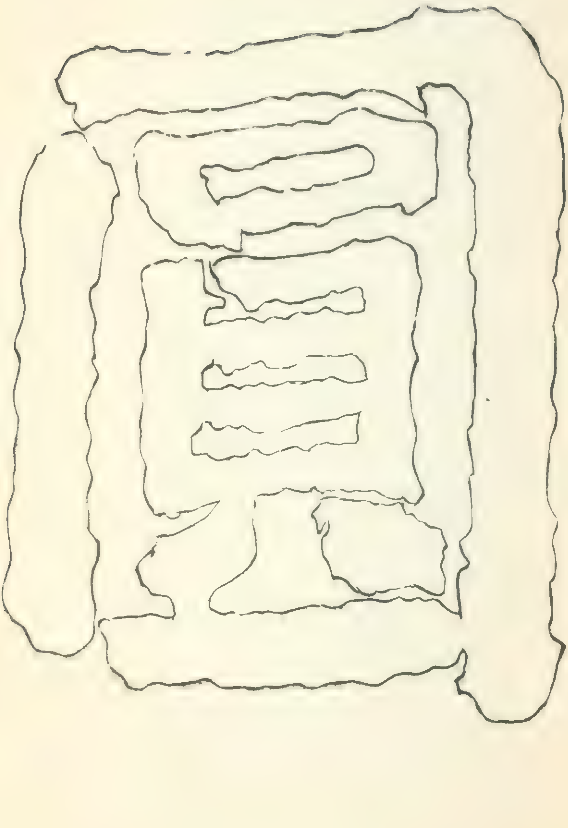


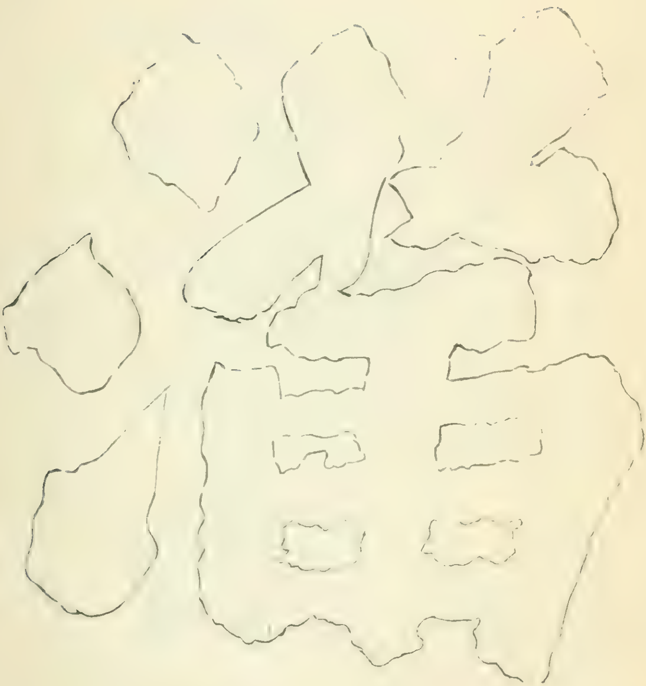
碑高一丈二尺七八寸廣四尺五寸許今現存豐前國小倉山上

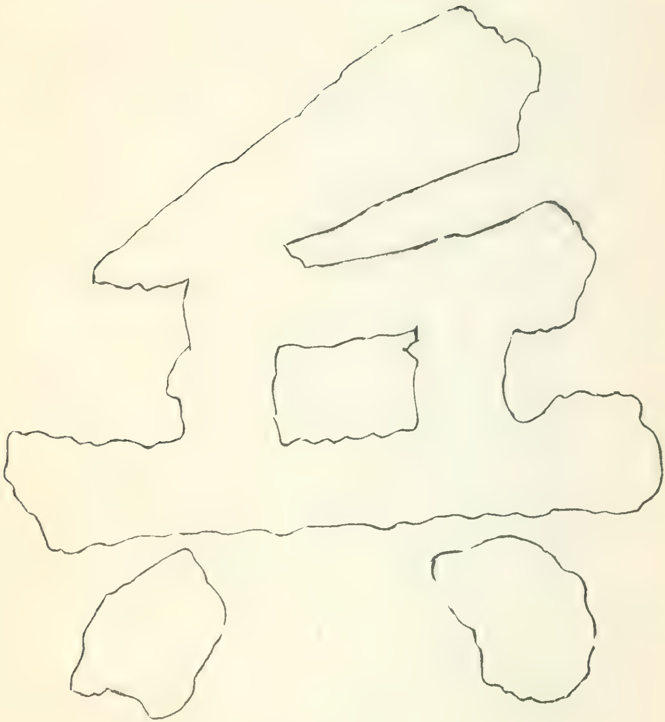


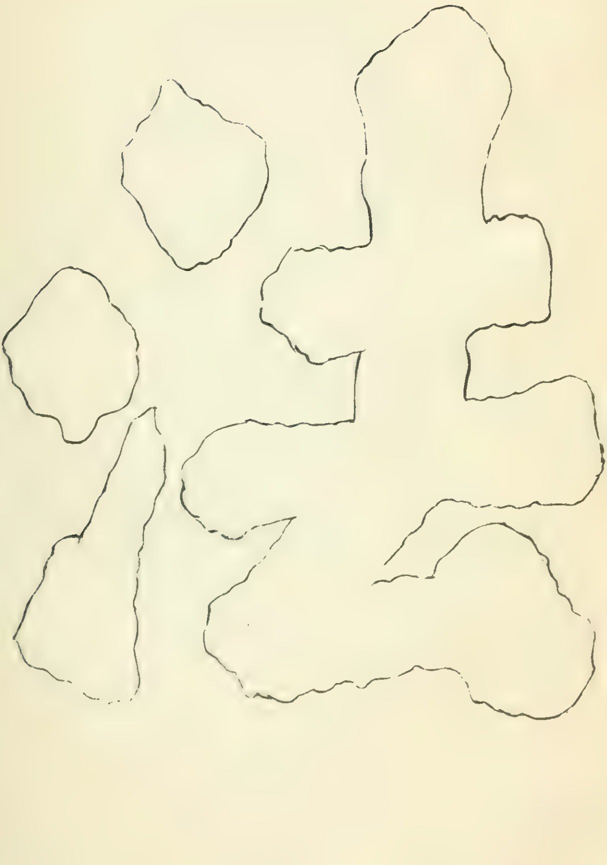


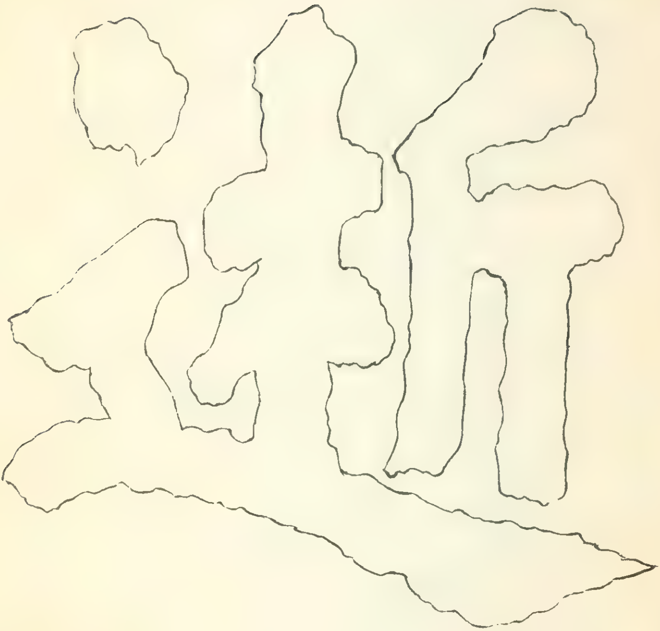




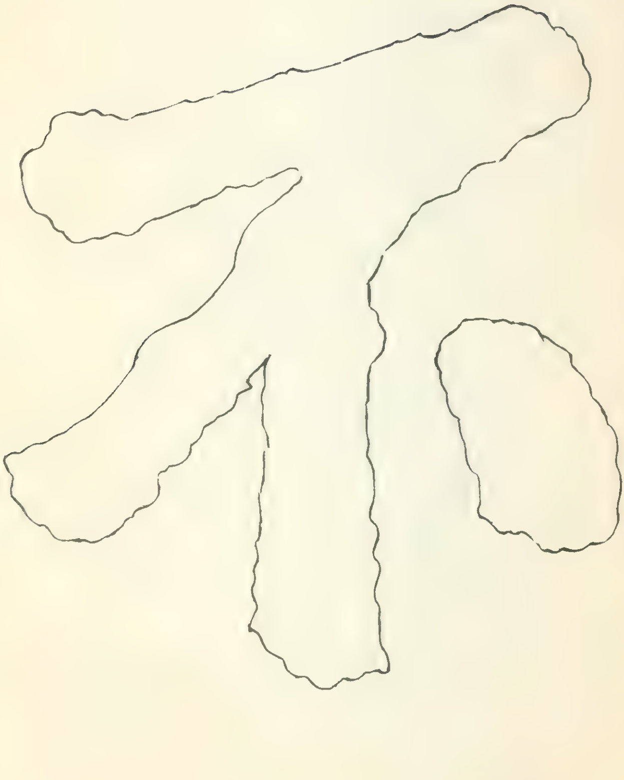


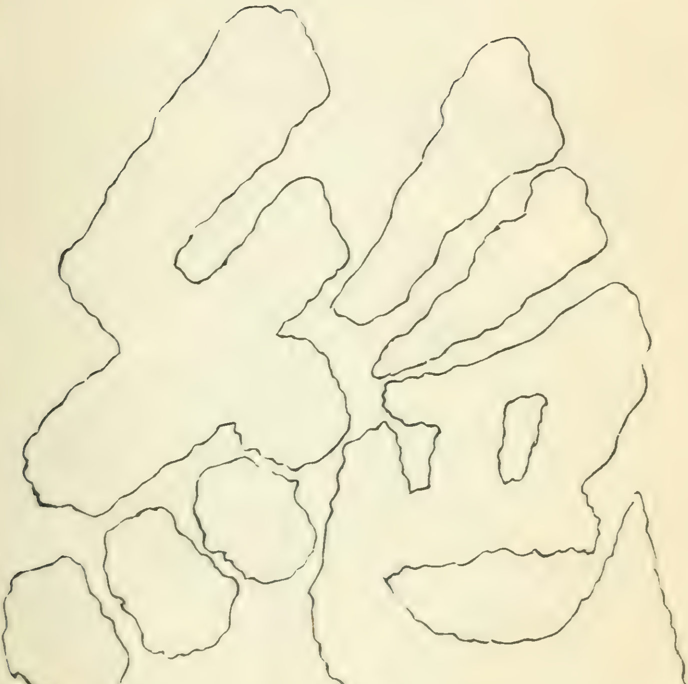








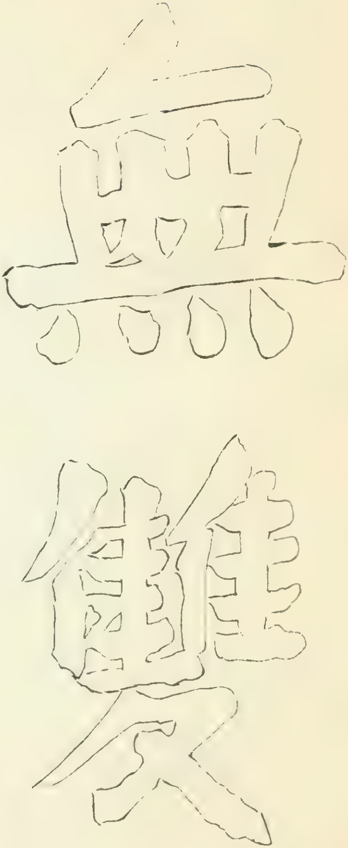




同上首題

兵法

大下



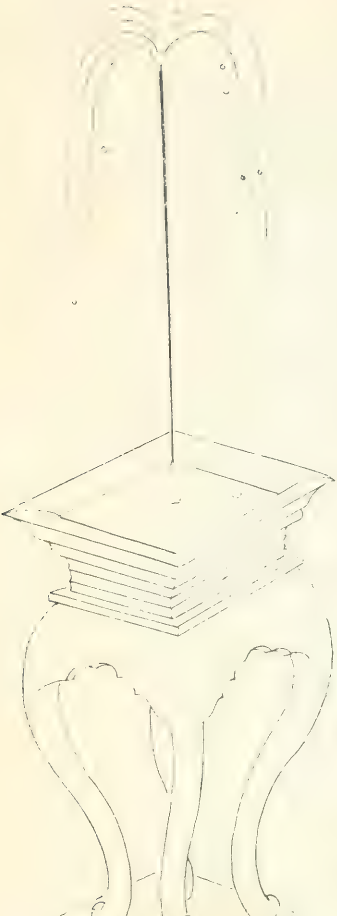
碑文ハ武藝小傳巻六にのせたるをもてこれを思ふに石碑に就て
對読すれハ二三の誤脱あるかことし没年及孝子まての二行
首なとうつもハ誤なり　まゝりし　此まゝへきのみ

沸泉卓 定侯大工棟梁伴蔵造以贈於予

高一尺七寸 廣八寸四方

足下廣六寸二分四方

沸泉高一尺許



此器いまた名あらさりしを盃あらしと出てたゝせ[illegible]給ひ
も穏当ならさるよりて沸泉卓と名つけ玉ひし古人画讃
備集官栗原信充詩あり

輪池先生、出示卓、示曰、是淀工人所製、未名之、将以何字命此、信充應以沸泉之字、先生乃命曰沸泉卓、曰賦一絶、

栗原信充

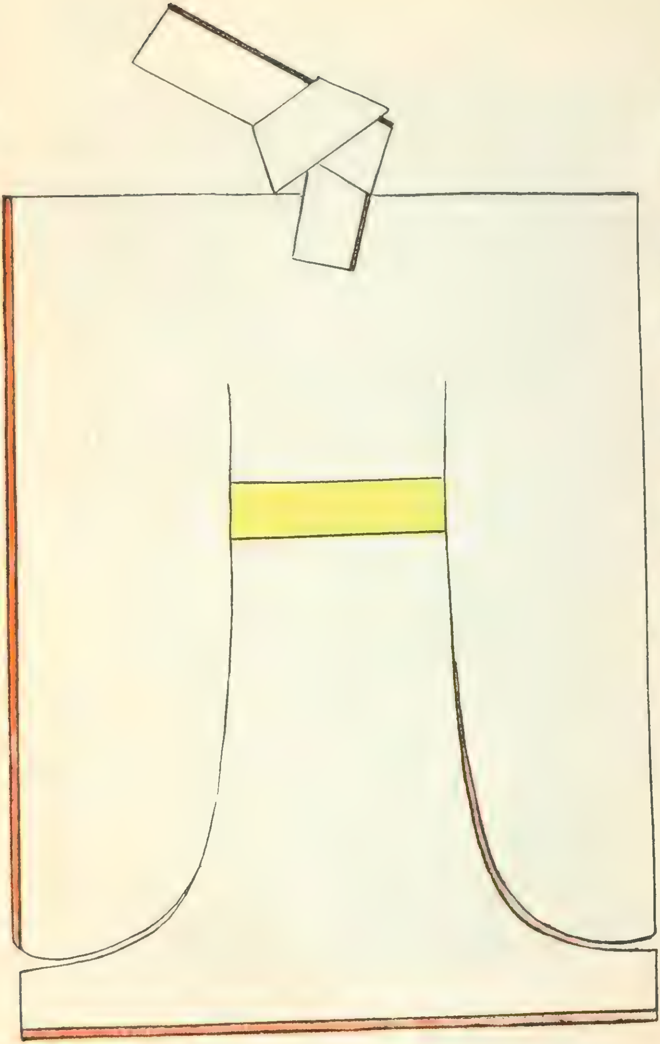
卓上看来小沸泉、瀼域工手意新傳、開然對是無餘事、将洗玉杯酬酒仙、

乙酉三月十三日輪池堂席上沸泉水卓を
詠しよめる

瀧沢笠翁

い川[illegible]まで[illegible]思ひて淀川[illegible]
くゝる杯の[illegible]浪[illegible]

土御門家所製裳名越裙雛形以紙截之中信赤紙



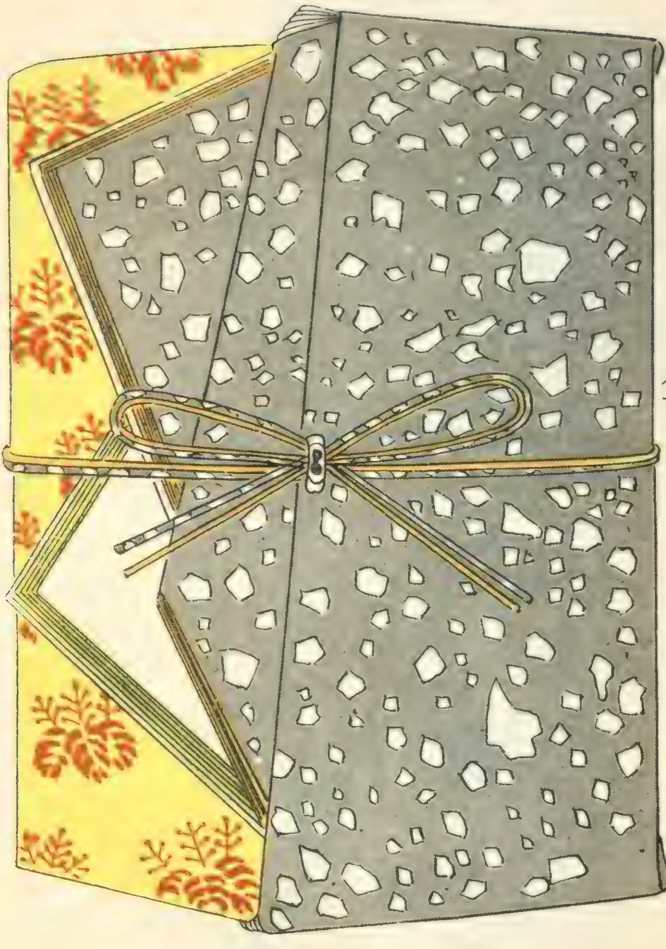
秋田蕗葉搨本一幀

竪三尺四寸餘横三尺九寸許

右容品

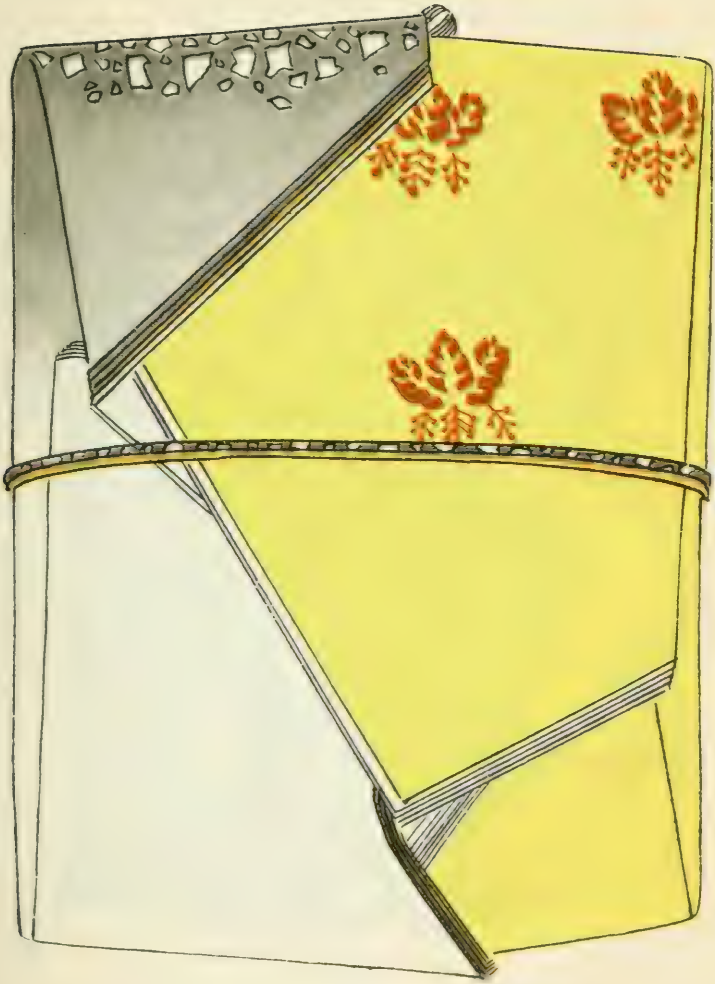
輪也

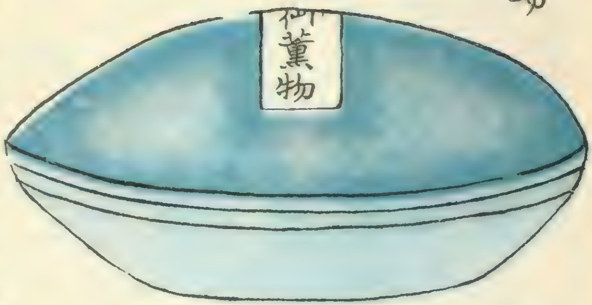
御薫物　兎糞



同し金銀の紙をもちゐしなり

背

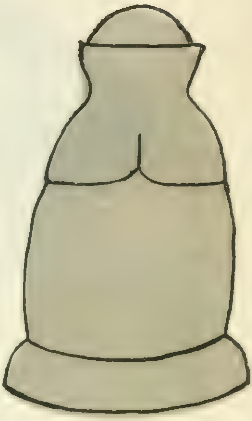






これ禁裏より関東の大奥へまゐらせられし御薫物の有りし名をとりて兎糞といふよし 右に図する物なり

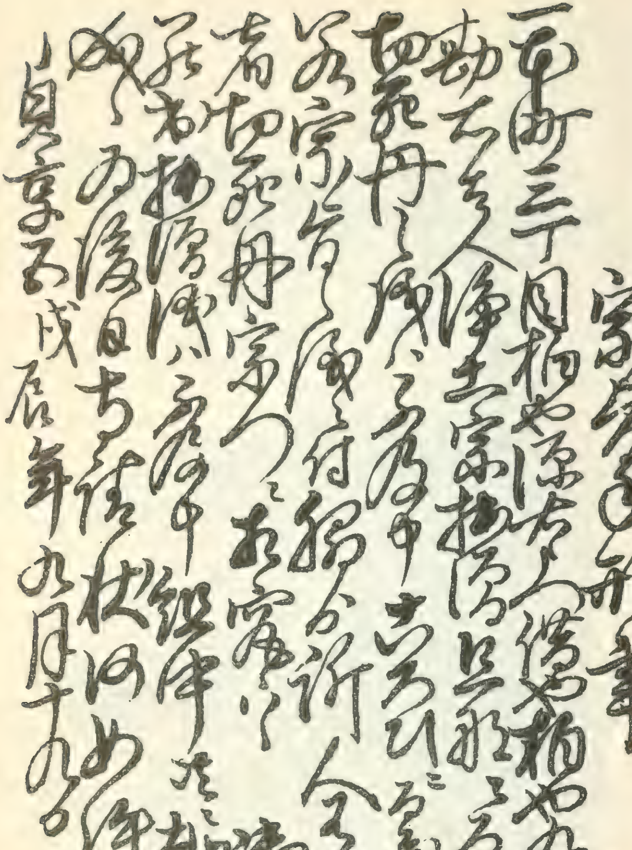
握佛



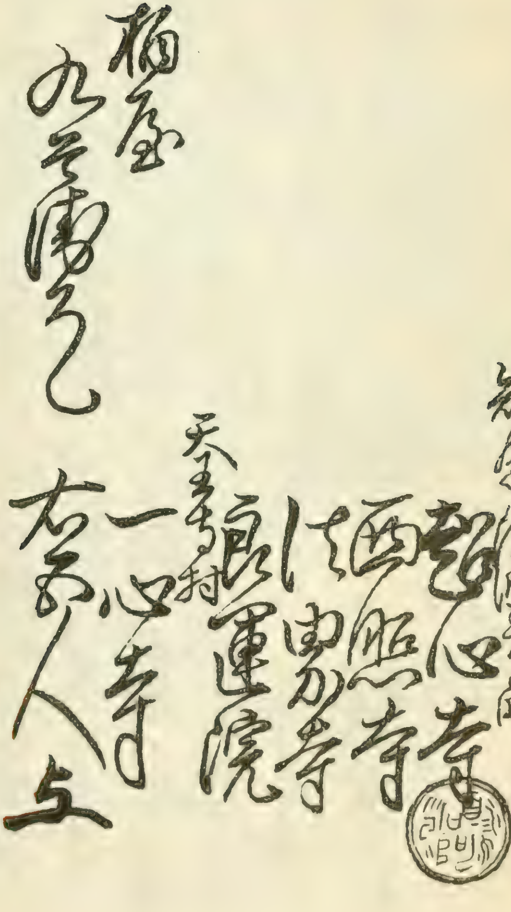
握佛ハ紀州和歌山より壱里半ほとの東六十谷（ムソタ）村南叡山大同寺の地中
より堀出せし事あり　この寺ハ大同年中慈覚大師の建立ゆへ大同
寺と名付　叡山ニ對し南叡山とよひけるし　寺なる大地なりし
ニ天正の頃　松永久秀ニ焼うちせられける由　今ハ名のみの小寺也
りこの仏ハ則　慈覚大師の自作り　土中ニあまたうつめおかれし
ものと云傳ふ　雨後なとにハ　土の上ニ現出候よしいふ

貞享の寺請状

貞享五年改元ありて元禄となる



貞享五戊辰年九月十九日



右三種　海棠菴藏本

琴嶺臨寫

巧婦鳥ノ圖



巣寫眞



巧婦鳥之巢　南部五ノ戸産　方言タカミ鳥　和名抄タノミ鳥

鷦鷯巢於葦苕繫之以髮取茅秀為巢以麻紩之如刺韈故謂之韈雀按是康熙百鳥圖之蘆葦鳥也

栗本瑞見法眼

右　南無佛菴客品

琴嶺臨寫

元禄正徳の比もてはやしける

浮世人形



衣の服ハ綸綾羅綸子帯ハ唐の子小纏縐なり

文宝画の記

賣茶翁茶具之圖

両品共
浪花蒹葭堂蔵

茶碗一品今
浪花花月庵蔵

子母鍾

士新所贈



右一巻廿三品　今その一を寫す

賣茶翁像一幅

寫山先生画

皇都典故扇一柄

扇面宇治橋の碑銘をうつすをもて茶の因ミなとて
出す

雪具五種

蓑衣(ミノ)帽子(ボウシ)　深頭履(フカグツ)　蒲脚絆(カマハゞキ)

右越後村松産

脚絆

右陸奥福島産

鐵標（カナカンジキ）



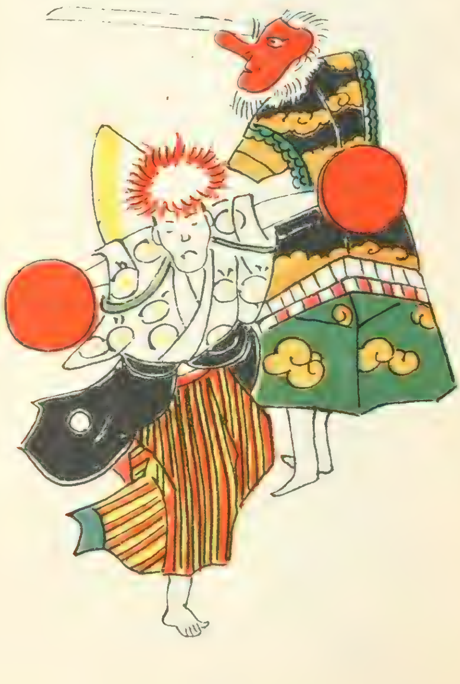
右陸奥三春産

先ニ曲亭子蔵弆北雪具
數品を録せりしかるを予
申にあはさるをとりてこゝに
う蔵せるものゝ五種たれは其
外也一くその遺を補ふ

神事舞團扇一柄 甲申夏浪花にて流行

神事於登利
大喜仁阿多留

せんべんをまくや
きしわの
神まりうなの



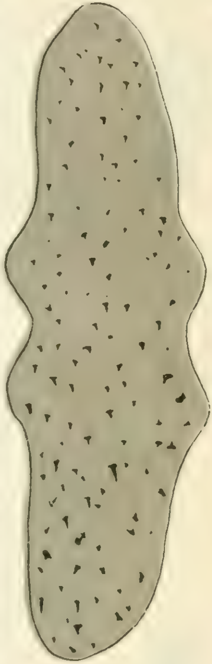
神事舞一巻今茲乙酉春両國にて興行

琴嶺寫

耽奇標目

寫山樓

石都々伊　野州自獨鈷山所出



古事紀神武天皇巻美都〻〻那志久米能古賀石都々伊久彌
都々伊毛許宇手天志屋間年

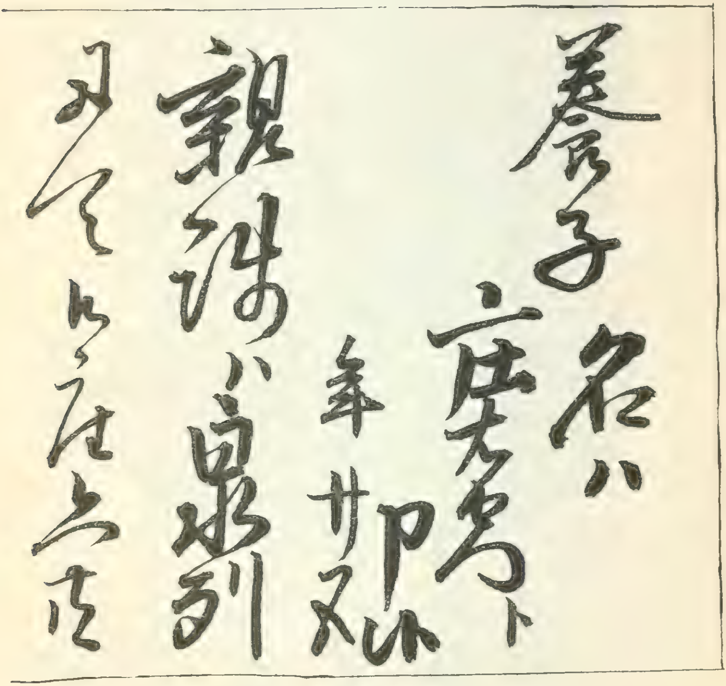
清朝帽子
清俗紀聞暖帽



頂 清真鍮紅線表花色繻子
裏緑銀鼠皮

天正二十年考太閤朝鮮征伐之節蒲生氏日記行

鯛屋貞柳書翰



古事え貞柳自筆の書なりとて鯛屋に縁ある家より
大坂博労町扇屋与兵衛といへる者に伝りけるをお
のれ年来これ与兵衛と文通して懇意なれはなり
し与兵衛出府しける時に得て家に蔵む此筆
雅文流又狂歌にて人のめてしをおもしろかるへ実に俗文に
て興多し浪速にて貞柳乃自筆めつらしからねとけ
ふのやまとおふ出るはなん

掛面張抜形

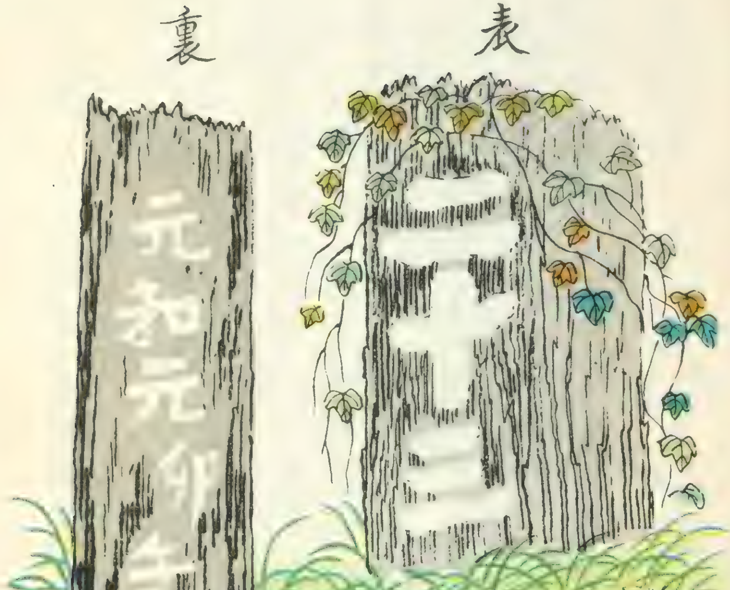


長七寸八分

横六寸三分

此面の張ぬきの形ハ胡徳樂瓶子取といへるにおもて似たるも
出目門人とあるハ面打のぬし出目上満の門人なるへし上満
乃弟子に右門太夫といへる巧人の者あるよしなれハいまた及ひた
るしかは在銘とハいへる者いまた見す俗にも書録に在銘と
あるハおそらくは左銘にて裏彫の摩滅したるにやあらん
まかせつるなるへし

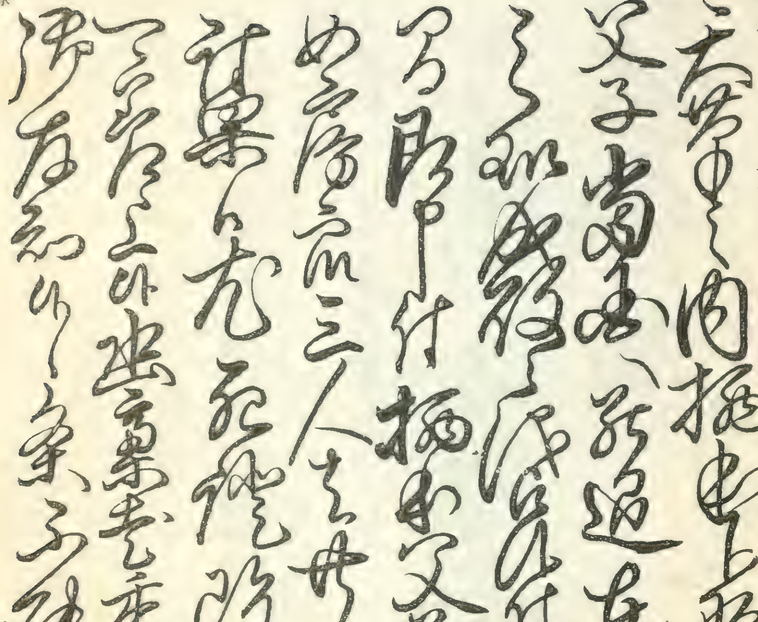
本所北番場酒井侯下邸の園中にある往古乃界碑八寸四方もありて文字ハ彫たるものなり

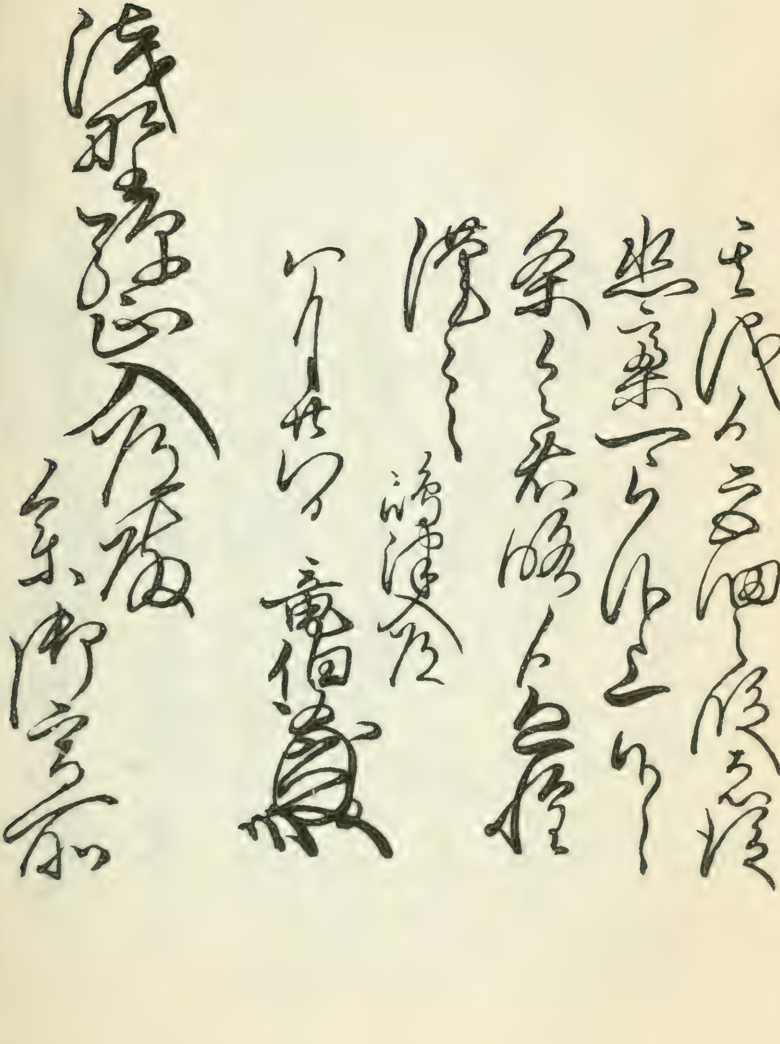


本所北番場酒井侯下邸ハ、みなみ入江の東御街道といへるきの
かの園中にかゝりてみし時、叢の間よりしもありける木碑有
覆のたぐひに相連れ苔むして着るからに生ありけり、面には
其土に埋めりさしもたちより上に出たる文字ハあきらかなる所の
其の耽奇会にハ此碑を座にすゑて例の蝋墨を出して摺んと
志ゝるまにて侯の庭にたてられしあなとらるまじいかにと
せんすべなく息をむすびてありしを、はかりなくも十二月四日とく起出て蝋
墨を取りもちいて、かの屋敷の廠のいはせる
ところその守りの人に、案内して園中に入ことを許されけれ
ばかの文字ハ摺るべく、園の内よりかゝへ此碑面を
拓揚もて出すべし。碑面の二十三の文字のうちに夜といふ文
字の形あるかハ、申の人の國の街の庚申塚
のあるなりし、二十三程をもまつりしある者

右三種　文寶

鴻津龍伯公書讀搨写





王春廷三宮暮表㨦本之寫

北國王春廷三

右王春廷ハ平ノ八本月影ト北国母ヨリ世ヲ去テ承應二年九
月八日ニ没シ法号ヲ受祥院見山ト云ヘ書ヲ北堂ニ持セリ
寛文二年十月廿九日ニ没シテ安祥院日称ト云
ヲ翁ノ近宮モ年八月十七日ニ没シテ月照院ト号スト云
代々此法名年月ヲ併四ケ長慶寺塔ニ有ヲ常論院ノ過去
帳ニ詳ナリ
神武帝ヨリ六十一代朱雀天皇之御宇相馬小二郎将門内裏ニ参大夫
乙蒙ニ云ヘ天慶三年庚子二月十四日御主人被打亡ハ付奥州ニ隠ル時又俵
藤太軍兵大勢ヲ打来ル為ニ不叶大六乙山神宮ニ移リ左右二社御神
御威徳ニ而兼テ隙取場ヨリ道相模ヲ足柄上郡此不致居住岩村ト申
所ニ住ス時分ニ浪人也其分家平人ト成家作仕式ニ屋敷ヲ百石東ニ片
右百石ハ南ニ廿八石右家作之云西ニ七石宅家東向門近八石ニ而抱又右家
ニ残シ置ル宝物御主人親王分ニ移リシ日御紋旗壱本金作太刀并九寸
五分壱腰為成作ナリ弓箭鞍長刀鞍鐙轡以下奈盆食籠笛馬都合十

二京之我奥州ニ隠レ此附掛大取作二社ヲ清神ト崇奉リ於信州上頼
敷山ニ写奉リ御恩ヲ二社ヲ御神体一大六天ト丑寅ノ方ニ向キ奉納
請此社ノ間東ヘ八間四尺小南ニ拾間之此ヲ云立二尺三ノ御祭宮
ニ南向之我家ノ前ニ建ル事此間ハ笠置山大六天ト奉申也　是ハ此字
ノ方ニ山神宮奉勧請此社間西東ニ五間之小南ニ此ハ此定尺此ニ
立計尺ニ三尺御供所ニ而東向之我家より社ニ百八十八間清水
川瀧ヨリ六ヶ山神森ハ我持山之家ノ南通リ我此林之外ニ林ヲ知ニ
竹藪是ハ是迄我家ニ定テ置也　此時我親ヨリ譲ル京図書並ニ書写ス也
右又上奥ニ而ハ大取宮居ニ二社ニ勧請之尺三尺ニ清水相ハ古今奉願
此時在之ヲ御遷ニ而仕作右者神入テモ六年六代一条ニ而此時寛弘
二年乙巳十月十七日ニ而武蔵國豊島郡領急日谷ニ而右ハ在此
前越後守右二社之御神体八尺宮殿作ニ是ハ是迄我家之依而
得奉還之処越後守者頼ハ瀬戸十郎右兵衛
方ニ定ル所ニ神社ト成ル我ハ先年ニ社之此神社ニ間西東ニ
ニ百十二間ニ而ニ而立南向ニ而ハ一丈ニ八尺ニ依之家ニ而ハ小寺
百十八間ニ而此宮神主ト成ル瀬戸将監ハ時十郎右兵衛
京都ニ而並ニ写ス為後日ニ書記ス也

寛弘二年乙巳十二月廿五日

瀬戸十郎右兵衛

系圖之事

淸主人先祖者桓武天王六代之後胤陸奥之鎮守府前之將軍
従五位下平朝臣良将カ次男也人王六十一代朱雀天王之御宇承
平二年下総國相馬郡ニ内裏ヲ立平親王ト改ニ九年ニ至テ関東之
王ト称リ天慶三庚子年平貞盛大將軍山城國於王ヨリ宣旨ヲ取副
將軍藤原俵藤太秀郷両人者数万之軍兵引列坂東北口二
千五百間程ト見エ二ヶ所之軍ヲ堅メ責テセス月日ヲ送ル俵藤太桔梗ノ
前ヲ欺シ親王之御寝所ノ下ニ忍入藤太カ引弓御主人ノ米噛ニ中リツ
イニ八天慶三年二月十四日ニ御生害北ノ軍モ分散ノ軍兵押
寄タリ城中ニ而舎人者散リ散リニ逃ケ失タリ浮鴻内山田三平石
村蔵人永田主馬木内宇右衛門内藤文之助大野又左衛門組頭
三テ御家来東山ニ於テ花外内形之通門芝恙否モ弘同外記
太田半之丞永遅但馬田中斎宮瀧口宮内石川閑近高
野七郎十内於二人不知行方残五人ヲ召列ル浮鴻太夫平吉
久ヲ子民部二男刑部三男内膳四男主殿於合宇留間六人ニ之家
頼母人ヲ引列奥津真荊田部隠シ力俵藤太之軍兵大勢ニ
而打来我ホ主人之御行ニ而御ヨリ討之浮鴻太夫吉久ヲ討取レト御
意ヲ請某共着形宮平太永谷数右衛門須藤文五右衛門
飯山大蔵谷川八郎ニ二名無業ヲ名業数万之軍兵引列打

懸れしけ時不叶る大六天山神宮ニ大願掛神ノ威徳ソ難有ヤ命
弥助は場逃武蔵国榛沢郡ニ隠し入ル我苦ミ茂足斗ト
為後日書記者や

天慶三年庚子ノ五月七日　　浮嶋大夫平吉久（花押）

右不詳年月日時近来豆州賀茂郡ニ而大杉根お倒
れ候所ニ有一洞穴内ゟ一石室其内ニ而土器壹
并刀剣甲冑之類夥しく出る也二通ふし記銘有之
右之書写し出す

右三種　蓑園

右の古文書ハ二通共ニ古代の人の姓名をかりて文をかゝう
あさましきものとも見ゆ俗子の贋作したる也されど原本
そのハ是らぬものなから蓑園もさるへしとていはれぬまゝ生
されしとおもへハ後の話柄の為かきうつしに写す
とゞめつ

琴嶺謄寫

除月耽奇 輪池書

ヤニアカシ 松蠟燭



右ヤニアカシは松脂に糠を交て竹皮に包て火を點すも陸奥國白河より奥にて用ゐしか出羽秋田にてもまた松蠟燭といふとそ

遼太平鐘



大平六年丙寅九月河
清部曲北寺鍮鐘壹軀入
重百二十一斤棟梁僧談白

右遼乃太平鐘は渡杉後の殊勝地横寺高サ二尺五寸口
徑一尺四寸七分律平聲にあり済ことは肥子國杉浦郡蒲
村恵日寺に在しこそ然るに所謂河清部之契丹國志云遼
东遏遼不記州十餘縣而見記云乗しと題して金書河清
昌童五花振武とみへたり重二千一斤八分の十八貫六百目
ありしを百廿一に除は百五十三目七分一厘九毛寿横量樣
乱に宋の一斤今の百目千三目からとふもの甚お近し大平に
遼乃聖宗乃四十四年宋の仁宗乃天聖四年後一條院
の萬寿三年にあたりて十とし七百九十年に至れり此
緒のおふ奉施入勝樂寺追鐘一口右意趣者為天長地
久國土四海静謐殊僧應信檀那沙弥妙賢心中所願
皆令満足法界衆生平等利益焉已應安七年甲寅十一月
日願主沙弥妙賢白敬とくる識文あり此勝樂寺と同郡當
村に在しかと廢して後明應乃比その佛具ちと用して
禅刹をと蒲村に再建し恵日寺と呼へりといふ　文化十五
年正月　源弘賢誌

海棠 四月十八日順達

文寶 同廿五日隆道

寫山 五月二日夕

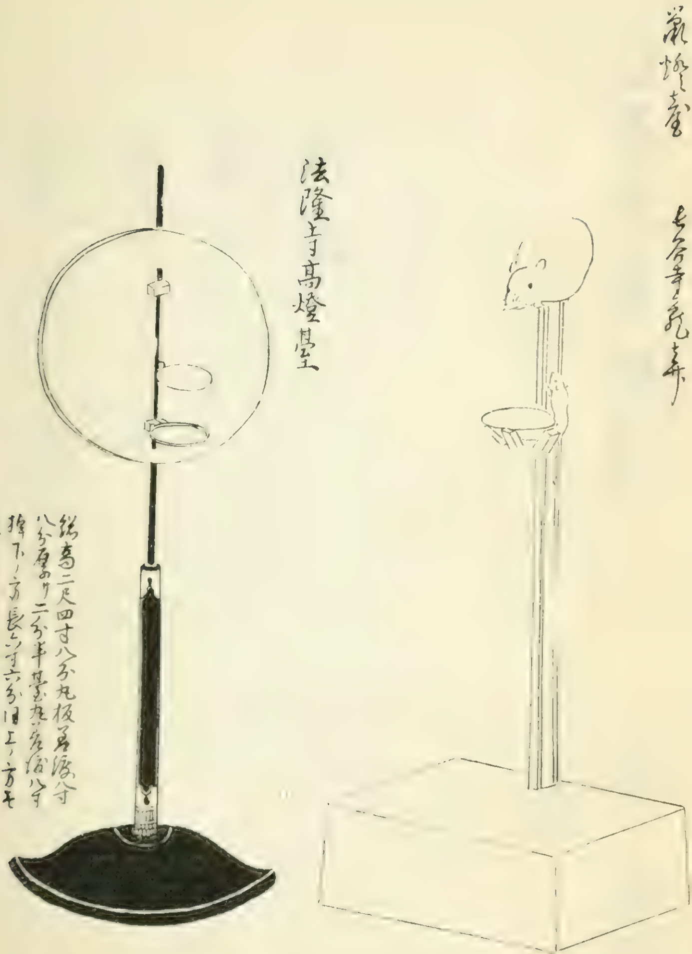
〇—北峯 五月八日巳牌

曲亭

乙酉夏耽奇の

著作堂隠

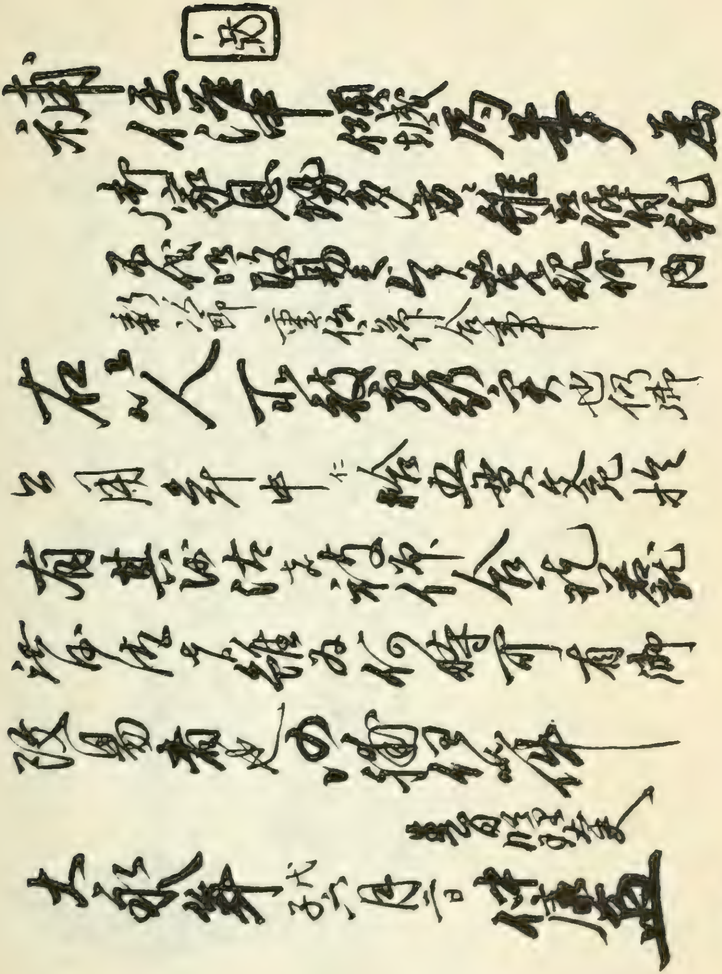
琴嶺舎


鼠燈臺
長谷寺ノ乾弄
法隆寺高燈臺
総高二尺四寸八分丸板差渡八寸
八分厚サ二分半基臺丸ハ差渡八寸
棹下ノ方長六寸六分同上ノ方モ
尺六寸

大永八年六月二日

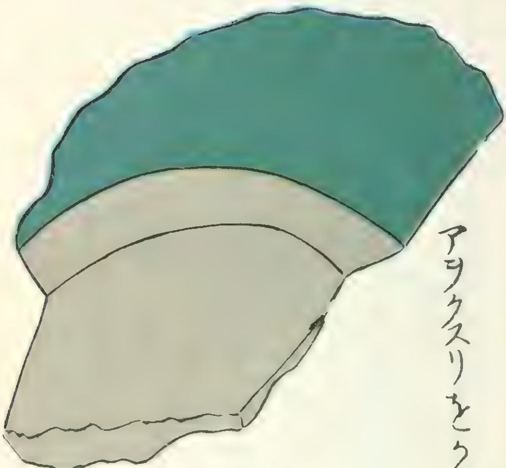
京都傾城局公事補任　一通

この原本は久我家にあり又同文言の文書勢田家にも
あつたしいふ勢田家のはうつしなるべしかの模本もこの原本と違へり　書中の竹内春日修理
大夫仲康は当時久我家の諸大夫なり今も彼旧家に
その子孫ありとぞ
右京都御中京摂に遊歴せし紀故ありて模し
たり京都にてもこれを志しぬもの多くあり写立
両誌ありこの文をも載せし旧立入大夫なる伝来を問
まゐつることあり尤秘蔵すべきものなるべし



古瓦三十餘品の内

古ノ太極殿ノ瓦



アヲクスリをうけくり

奥村政信遊女の画像

折本一巻

外題の帋うせて書名詳ならねど刊行の書肆の名今ハ存めめれものなし是今茲より百廿八年前の古風也

著作堂按するにこの書の開板ハ元禄十四年也それより十一年を経て書肆再刷せしと紀年号と支干を彫つそくりて外姪の祖父のしれるもちこその家に蔵弄せるもの是と同板にて奥に元禄十四歳辛巳云々とありかれハ高尾薄雲これみな元禄中の名妓なるものゝ

巻中に図せる所の遊女すべて二十人かきそへてくたしまりて薄雲ほどある高尾ハ第六にありこの中にも紫と小紫の両妓ハ古人山東庵が奇跡考に載たり山東がまでみて折本の残欠にてくさりつゝに二枚あまりしにやとおもふのみ名高きこゑりしことすゞ不応にしくり


高尾

和畫工奥村源八

政信圖



正徳元歳

辛卯八月吉辰

横山同朋町

竹岡長右衛門板

埴下徒然草一巻　寛文十一年二月の印本　江戸鱗形屋版

江戸歌舞伎役者の評記に肖像をゑがくハゑらくありしよりはじまりせ
しられたれこれよりは好ますハ中の見あたらずこの頃ぞ世に在
る若衆野郎の姿を仏などにしたてものあつめしものなれどみな今
の世にはつたはらずよしもなし　おもふに役者評判記の年に行れ
てよりかくさまのものハ世の人のもてあそびとなりしにこの書ハ
載る若衆廿八人みな男色をもつて人を惑せしより
し評をあまた残れるものこの頃三市のことこの中竹
に画きし者ハ肖像の巻頭の巻尾までありてこの両俳
優をのせ撰へ
しるして
なのであらし

埴下徒然草序

埴下つれづれ草　野子自序

この市村竹之丞ハ二代目なりしにや、これ当時上手の名あり
さる故ハ初也俳諧ハ宗因か談林の俳諧連哥の為江戸に来りし記
芝居所なる、歌舞伎狂言をつくりおやしし子ハまさりけり
竹之丞をはしハこれをつけしまかくハ致鶴もなり今にて橘
そつくらハ寛文ニ在のなりなるべし　これ今より百五十五年前の古風
なり


市鄽乱舞座
竹節々槎曲
逐名譽太夫

役者大全に市村
竹之丞と志ばらく於
座元なりし人ハ後に河
主積ニ成なり
この画ハ上手の名あり
当時のうちもあなる
故ニ評記を画中
まかせき役者と
ひらすり今その画像
をのミ模しつゝ評記
を略せりさうらしく
原本ニ就て見ね
ふべし

右三種
著作堂



蛸船 又曰蛸枕

大和本草ニタコフネハ貝大ニシテツリ花入ニナル海中ニテタコ其上ニノル此物漢名不詳江橈ナルベシト云説アリ非ナリ

本朝食鑑云。蛸枕狀類蛸蚵。一身五足。背紫黑。腹白。倶有細文。內有小甲。大者一寸餘。背青黑。有五路花紋。腹白有小口。沙石自入口非食。俗稱餅貝。如小團餅。亦一物也。

又曰蛸枕海俗所謂。蛸魚得此物。爲枕而眠。故名。是兒女戲謔也乎。

奥継按するに蛸船ハ東國の俗呼て葵貝とよふものゝ常東海の一漁翁の言をきくに蛸魚飯をこの貝に貯へておのれを帆としゝ海上を走りしさまをもて蛸船と名つく佐海越後の海に多し東海にハ稀之といふ老らハ兒女の戯稱にあらそ且その枕といふハ通稱にてあらそ唯食鑑にこれあるのミ

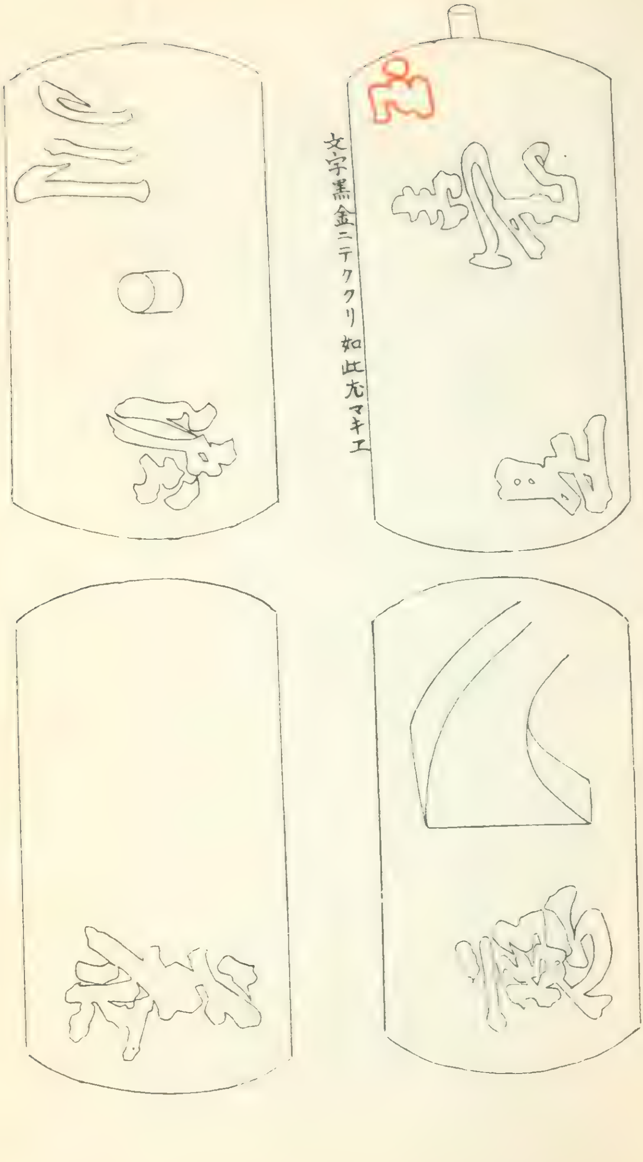
右本月三日越後寺泊なる一賈人より得たり

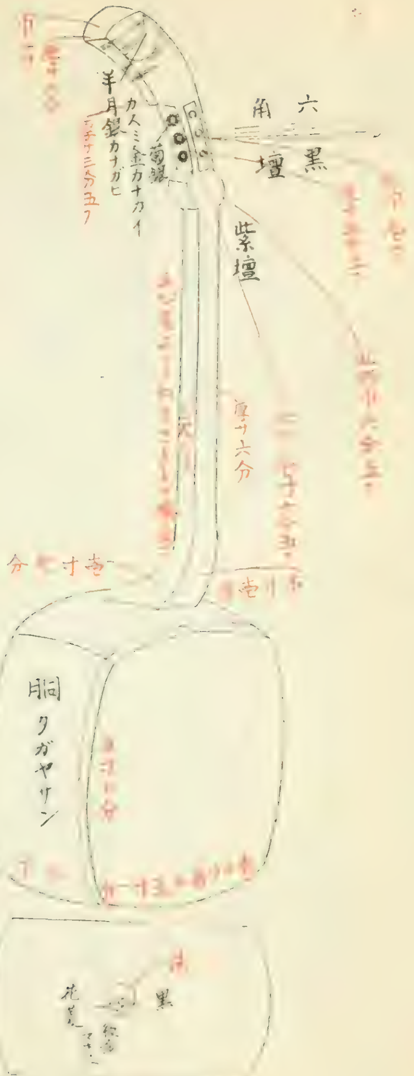
吾巖舍寫品併圖說



烏丸光廣卿銘鳴神三絃圖 京都祇園町 井筒岸本藏

これ井筒てふ青樓にそ昔より傳來し家寶山形ハ天
然石盤面 伽羅の枕鳴神の三絃この三種を家寶とせしとい
ふ三絃の傳來ハ一書にみえ享保年中に嫖客の綴せる文
なりしとおもはれ侍るこの圖まて故ありて天保のはし
め卯月頃ある人かりおきて圖しとてあ(ら)老君によせま
ゐらせしへそをと大雅生のうへよみておこ清書されぬ
せしを貼し侍


文字黒金ニテククリ如此尤マキエ


六角
黒壇
紫壇
羊月銀
菊銀
厚サ六分
胴
タガヤサン
黒

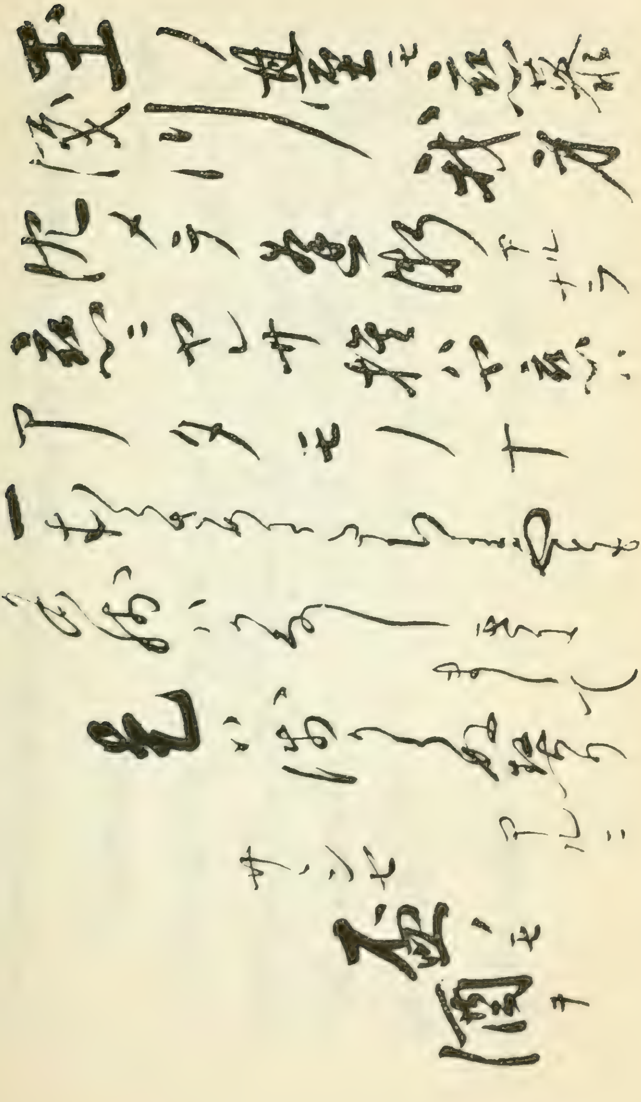
烏丸光廣卿真迹摹本　これも升岡岸本ヶ所蔵なり

玉の臺も云云

松浦検校調

此曲唱歌は峰神てふ六絃の古浄瑠璃にて秘蔵せし
より代々持傳へて宝とせしか傳りしくしく古への風を
なつかしひたる輩の家曲なるものしくしく玉の臺と號し
ついて一の追福のなしけるとこそ　岸本識

平安傳に於て　齋藤某摹寫

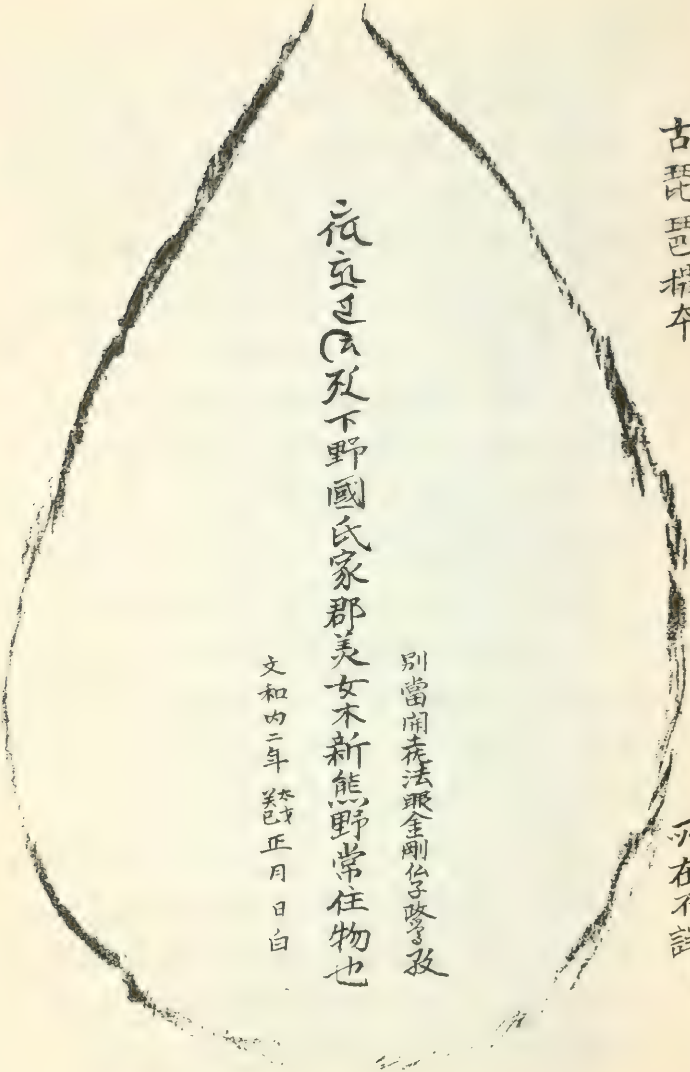


下野那須郡温泉神社所傳
那須家琵琶撥本



土人傳へて那須与一ノ琵琶といへり　按ニ那須記云那須太郎資隆初娵小山氏女生男子十一人所謂森田太郎光隆云云与一宗隆也されハ此琵琶ニ彫刻する所ハ与一宗隆ノ父の名なり　あるひハ源平盛衰記与一射扇の條ニ、折節西風吹来テ船ハ艫舳モ動ツヽ扇ハ梳ニモタマラ子ハクルリトクルリト廻リケリ何ノ所ヲ射ヘシ共覚ズ与一運ノ極ト悲クテ眼ヲフサギ心ヲ静メテ帰命頂礼八幡大菩薩云云那須大明神弓矢ノ冥加有ベクハ扇ヲ座席ニ定メテ給へと祈念せらるゝ事あり　此役ハ元暦二年二月なりけれハ則宗隆も父の仰きゝ尊ミし氏神なれハかく祈誓をこめて世ニいちしるき勲功をもなしさそ与一か名ハ高かりけれハ土人のさハいひつたへしなるへし

古琵琶搨本

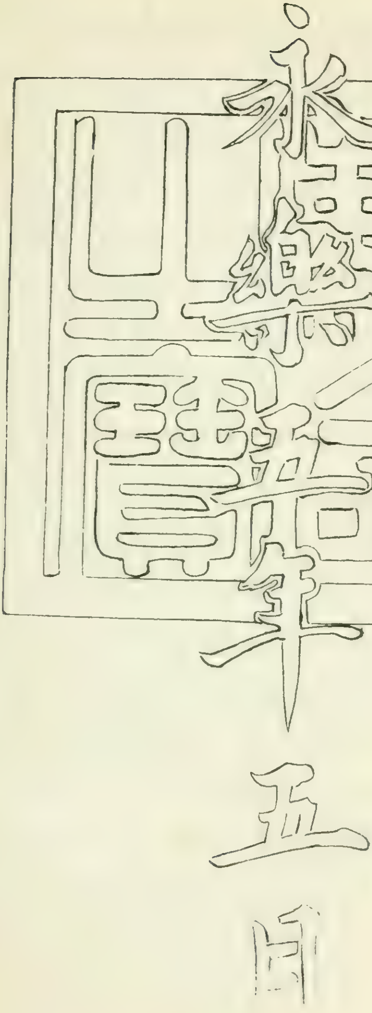


所在不詳

皇帝勅諭日本國王源道義朕誕撫萬方愛養黎庶一
視同仁無間彼此咸欲其無寇攘灾沴之虞無飢寒疾
疢之苦老者得養幼者得息暨鳥獸魚鱉飛麦蠕動跋
行喙息之類咸欲其生遂此上天之道仁政之大也故
四方萬國之来庭者諄々誨諭欲其上順天心保邮生
靈惟王資性温淳敦厚周慎惠和屬敏恭儉慈仁聰明
特達而賢聲素彰律己愛民而善道益著奉藩守職欽
承罔違昔者海寇攘竊肆虐邉隅彼此為梗民耀其殃
朕命王殄滅之以除蠡蠹王即發兵掩捕破其舟艦戮
其黨與擒其首賊遺人繫送来京而渠魁遠竄海島偷
息鯨波魚蝦出沒莫適其鄉舟揖猝不能及鋒鏑猝不
能加施之以德不能以懷動之以威不能使畏王乃晝
夜謀思至忘寢食四出追龍百計以擒之茲焉遣使上
表獻停于庭詞意懇悃衷情溢見朕覽讀再三深慰悅
嘉歎不己王之忠誠可以貫金石可以通神明允合大
心式慰朕望自今海隅肅清居民無警得以安其所樂
雞豚狗埶峯得其寧者皆王之功也眷茲偉續寤寐不

忘臨風顧懷良切于天夫治天下國家者能體天地生
之心去災捍患使天下國家大安萬民熙皞功莫大焉
則天心悅鑒使享有無窮之福子々孫々不替益盛此
為善之報理固然也王之脩身體樂善不倦昭令德於
東嶼播芳譽於中國垂光青史与天地悠久誠所謂賢
人君子有志大丈夫哉日本自有國以来如王之賢達
者蓋未之有也自古賢者無不好善而好善者無不蒙
福王之好善則必享有福祿永々無窮矣茲遣人以勅
諭王中以寵賚用致朕嘉奬之意王懋膺隆眷體朕至
懷故諭

永樂五年五月



越前國山家にて蠟燭に代へ用 方言未詳



陸奥白河のヤニアカし出羽ハ
象の多き蠟燭の如きハその製
少しく異なるのみ今こゝに出
せるもの自ら別種にていと
めづらし

右三品好問堂主人藏本

清費漢源畫鍾馗

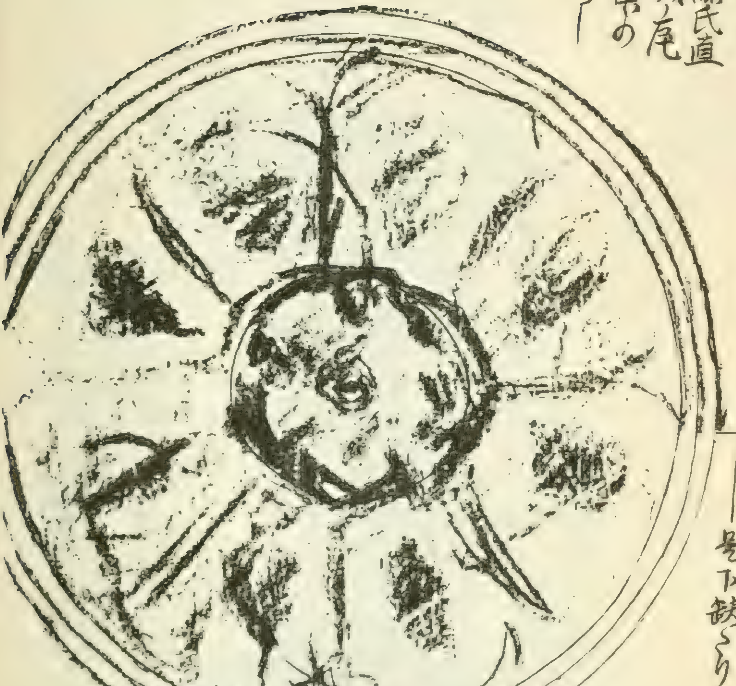


右漢源ヶ画鍾馗の像奇形異状面貌霓に似あらく何にあらむもこの
く圖せるこゝろを知られ諸彦の鑑別を祈るのみ

鍾馗に蝙蝠を畫きてあるハ蝠福通して視せる意あれど蛛を添たるハ

何の義にや疑はし

著作堂按するに艾虎画鍾馗ハ端午の節物也唐山にて五月これを門戸に貼することしハ荊楚歳時記その他も漢籍に多く見えたりされハ鍾馗の面貌を虎の如くに畫きしハこれ艾虎と鍾馗とを兼たる画者の用心なり又そのうへにハしたり両箇の小蜘蛛を添たるハこれ亦蝙蝠を画きしと同意の義あり故いかにとなれハ小蜘蛛を蟢子といへりこの事開元天宝遺事に見えたり蟢子又喜子に作る正字通申集蟢子の注に云小鼅鼄織紅長脚者俗呼為喜子といふ是なり便是画者の新製にて挂屋患而迎喜々といふ慶祝のこゝろなるべし


北條氏直
古城ノ瓦
摺本のうつし
是ゟ下缺より
是ゟ上缺より
此瓦ハ北条
家の居城
小上野入江
が子孫の家
に傳へしもの
なり



常州小田清冷院ノ尾

清冷院ハ小田天菴の菩提寺なり
天庵の事蹟ハ往々書ニも見えたり
今ハその寺廃せり
小田系図ニ云　氏治讃岐守天菴と
号ス慶長六年巳十一月十三日七十一歳
ニテ卒ス又天菴記ニ云天正二年二月二
十七日土浦ニテ生害ス云云天菴ヵ嶺下ノ
城三十五ありしとあり


石品三百種
シノフ石
奥州
會津伏見瀬川ノ産
同奥州信夫郡ノ産
石綿
これをもて火浣布をつくれ
奥州勿来關
櫻ノ化石
佐州産
ハリノ魚
鯨の牙
これより肉付
佐州産蛸舟

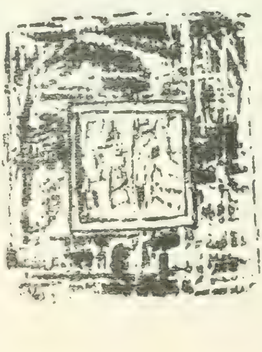
瓦石の類一まで珍奇なるをあつめ年来集めたるを
るものなかにてこれらのものゝ中の珍らしきもの
諸賢の清鑒をと請ふて之を画す
其三種

海棠庵蔵并

表



裏



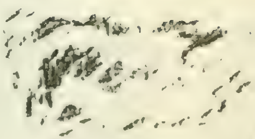
印字不明

この印書物ふるく書肆より集むる火を帯びしものゝ由

志の小石搨本
写真在上



遠州大井川所拾
龍紋石



搨本のみ写置ぬ



覧形中製
堺瓦師記

馬蹄石

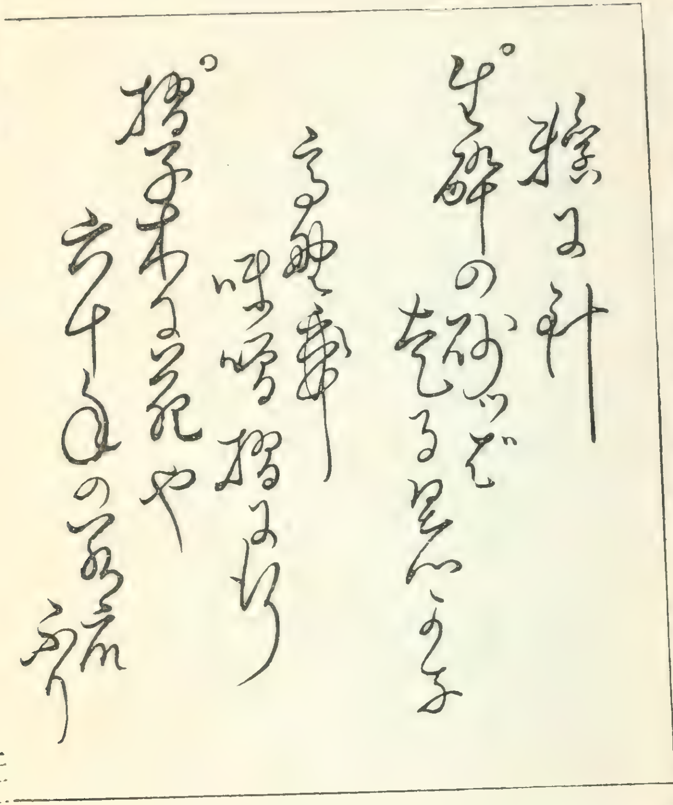


右五品海棠菴客写

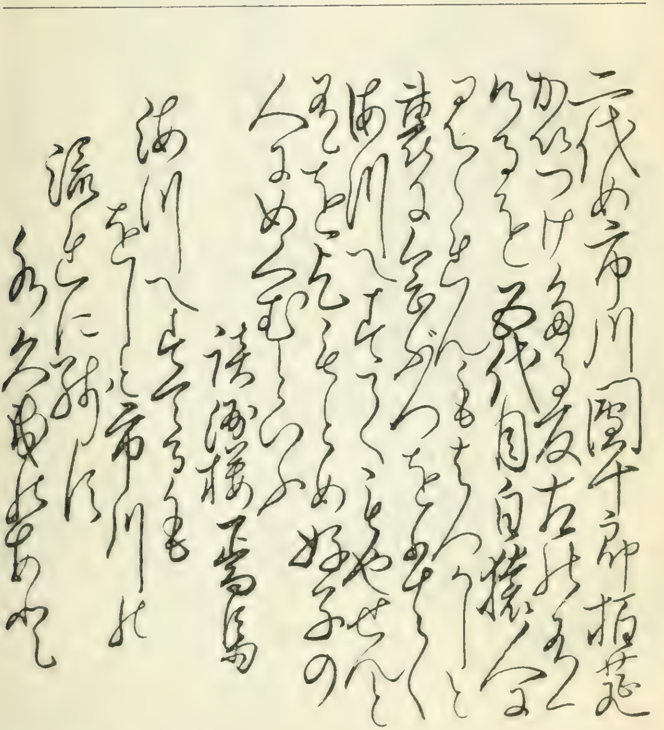
波枕



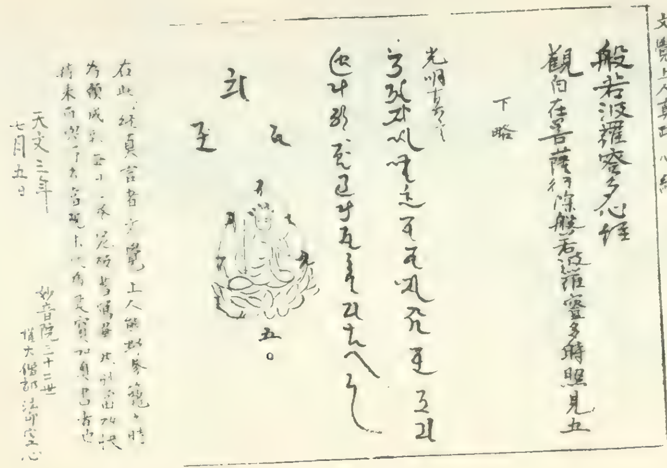
志摩并相州豆州の海中より出る也此石のうち和らかなるうたに
よめる親波中くやしく舟ふく海にて波の音と枕に
寝ると波のまにまにこそありのめるそれにてあれ是ハひかえひ
しきるまその根の波ふともまきてく自然とまき行くなるを
たるうずまく波の形に似たる様にてよ所江の島あたりには
多くみゆるといふなりぞ



二代目市川團十郎栢莚發句草稿七句談洲樓焉馬の添書を以證とす

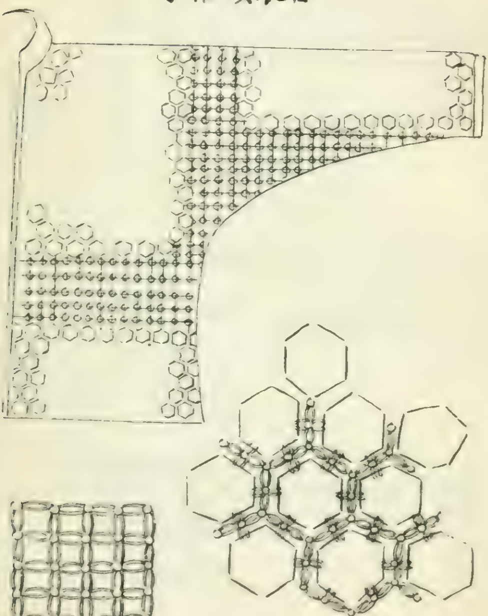

二代め市川團十郎栢莚

高雄山神護国祈寺ニ蔵セし
文覚上人真跡心経


般若波羅蜜多心経
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
下略
光明真言
右此一紙真言者文覚上人熊野参籠之時
為願成就[illegible]
持来[illegible]
天文三年
七月五日
妙音院二十二世
権大僧都法印空心

外孫耽寄 輪池

古製鎖帷子



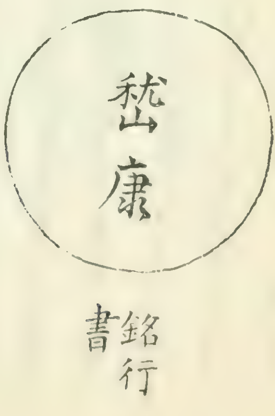
此須賀幡谷ハ紀伊殿乃清水屋某（雅楽名可通）乃家なりし侍人し物かたりきと
聘侍しく家のさまへ入しなりしもその鑑悦の時代雛未考く侍るを
かくれしといふ名目奥羽永慶軍紀にも聊か見えたり是ハ平治の物など
しんと相見ゆる太平記にもくさるもの よき躍といふなるもといふの
みえたり相見ゆるに付く侍るなと覚しハ猶ほしまた帝紀の麻をと
附きたるものなるえし 後の麻乳寛を付し よそく侍るかしこく
とはいかなん義経記前の龍もみえたる傍ちくさるものの大く
あるへくやれと志らし猶といふ侍るに伝疑ひなとおくるのミ

京師銀閣寺蔵東山殿七賢杯朱漆其形似合子内金書七人姓名

一



深二分五釐
径二寸五分内二寸四分強
底径一寸六分



銘行書

七



深一寸四分五釐
径四寸二分五釐内四寸一分五釐
底径二寸三分

百丈未殿

廣澤翁書讀端臨德齋守護神跡

廣澤先生真蹟百大夫殿
御守之由来

享保のはしめ疱瘡をやりしころ
いまのこは疱瘡ことにあしかりけれバ疱瘡守護神の守り札
等受ふよりもとめしは河治あるにより泉州西宮大神宮の末
社に百太夫殿と称し疱瘡守護神にてましますあるむね申上けれとも
子遠百大夫殿の神主めしよせてましは札は守りを差上よと仰
ありしに神主申けるハ其札は守りにハ未ありて當時天下此儀の者を
めされし余が指図をもつて百大夫殿と認め法眼春信
いんあらせましハは疱瘡ましてそ何のは氣もなし申上しに
よりすなはち能書は撰みたて細井廣澤にめされ右神主
指図にまかせ百大夫殿と二枚認めける中一枚さし上は残る一
枚ハ廣澤が帰りけるかの家に殘しおきその後は疱瘡は帯家
く流行しは満悦ありけるとぞ廣澤が男文三郎
七歳なりしなくて疱瘡にかゝりしかつかつなく平癒をしにより
廣澤申けるハ人のうちも師周南林ハ平僕大概ありしてそれの一幅
ハ南村に譲るべしとぞ別に認めしるよし

一百大夫殿の由来ハ西宮大神宮の末社にもあるハしく記し
あれハ今略之
故㐮淳先生より傳来の額を南林先生余にかして版
をおこしまへ記りしとふの

安永七年戊戌四月穀旦　栴亭山上有庭謹識

百大夫殿の守一幅を余々高祖父南林師圏理介平直著廣
淳先生より譲りうくるところにしてひさしく之を秘蔵して
おのつから疱瘡流行の度ことに之を乞ふ傳へして来て余か
まつりしへしるとたりまたかしよそのあるひとゆるされ親
族或ハ無何交のなひにもかしよそのあるにこれまで
て一度ねをうるもの一人としても難症なるものなくゆるされとふ
ことなし疱瘡前の小児をしても常にねかしむ此一年難症の患を
除く或人余になゝそ多くの痘児を救んかため今摹刻する
ハ仁の一助にもなるんなと御希のし

文化十一年甲戌九月

常州河内郡竜崎
師圏平直内識

右三種

於池

者三種

錦池

獅鈕銅印

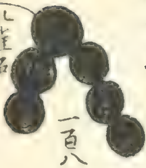


黒漆熊鈕



虎関所用印云

瑪瑙念珠



真黒蝋獅鈕



右三種

佛龕藏弆

美成五月十二日五ツ時出圍

海棠五月廿一日晩見

文宝五月廿五日八ツ時
六月十四日出

自皐月耽奇

琴山題

上杉謙信真跡手簡

この書越後魚沼郡長門町倉石生蔵寺にある手簡に添たる匕首一口あり長壹尺一寸五分无文字也と云但棒樋劔形焼刃小乱と鎺本焼落し有之



奥継按るにこの手簡表裏二枚なりしをとしめ乃一枚傳へけるは文面續かず惜むべし

[illegible]

[illegible]小田原[illegible]

[illegible]

[illegible]小田原[illegible]

[illegible]七月[illegible]

[illegible]小田原[illegible]

[illegible]

十月十四日　謙信

[illegible]



元禄年間奥村文角画本競櫻 折本 壹巻

此本刊行の歳月なしといへども元禄中のものとみゆるなり又石山源太と金平入道の二圖あるによりて考ふるに當時堺町和泉太夫が操座にて金平芝居と異名せられしハ人みな知れり只金平のみならずぞ石山源太の操狂言も流行して行れてありしとかの太夫の正本今なほ四五年に遺るをもて考ふるに蓋石山源太と稱するよしハ悪源太義平平治の軍破れて石山寺にのかれしより諸國を編歴しつゝ武勇をあらはせしよしを假設しこれを當時四世の児輩といへども猶武勇を歎ししめんためなどもて想像するに足れり

伊勢神廟御田扇本形一柄

御田扇ハ今も得らるゝものにあらねばけふのこと奇とするに足らねど其中稲若馬を御田扇の本形としては彼地の人も珍重せずといふとも稲穂宝船鶴亀松竹抔の画ある扇ハ得易けれども稲若馬の形あるハ得かたしといへり

但扇の骨ハ何れも稲之穂茎の撲にてつくり吉凶ともに一瑞として尊きものや産婦の虫気はきせうみゐる或は稲の虫の除きとする樹木にあふぐものつきまとふれとこの扇をもてあふげば効験ありとぞいひつ



出羽秋田大蕗押葉　　　　寄品

葉　周廻曲尺壹丈零五寸

　　徑竪三尺三寸　同横三尺壹寸五分

莖　高六尺餘根本周廻壹尺二寸　徑四寸　受葉處周廻九寸

　　徑二寸六分　小大不一大抵斫而如輪者一片充碗中猶有餘去

右蕗本巨大にてまゝに織入れたるを取置て相副て出すもの則別紙の如し

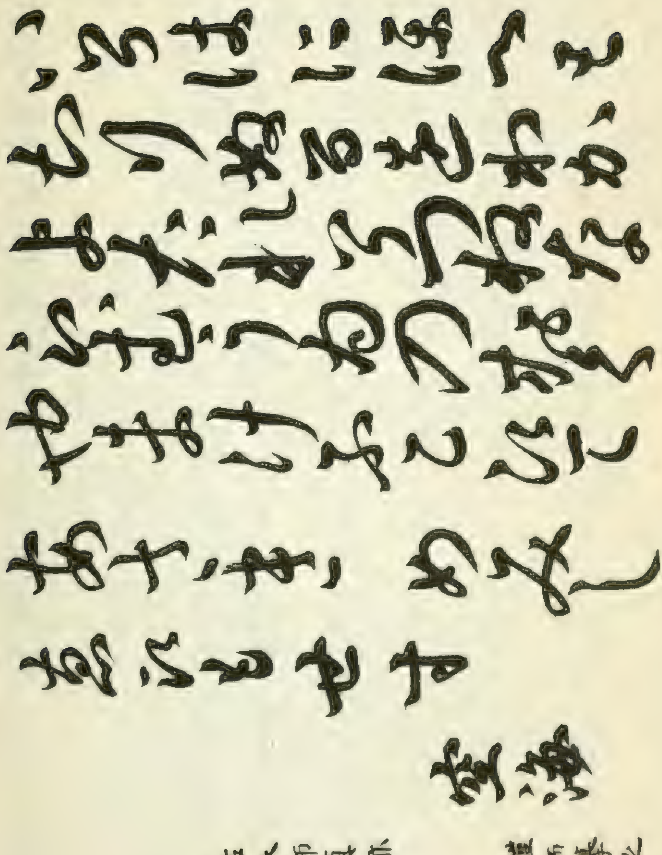
著作堂云前會に出せし大永八年京都傳城房公変補任備未

の法文中に原本ハ二條家にありといへとも世にしれし瞻記の失也久我

家にある所也春日仲康も久我家の諸大夫にてありし

諸君既に謄写しありて二條家を久我とせしもの有らは顧ひて改めよ

右四種　　　　蓑笠藏弆



右大師真跡　　謹而摹之
綾臺清出中之古本見

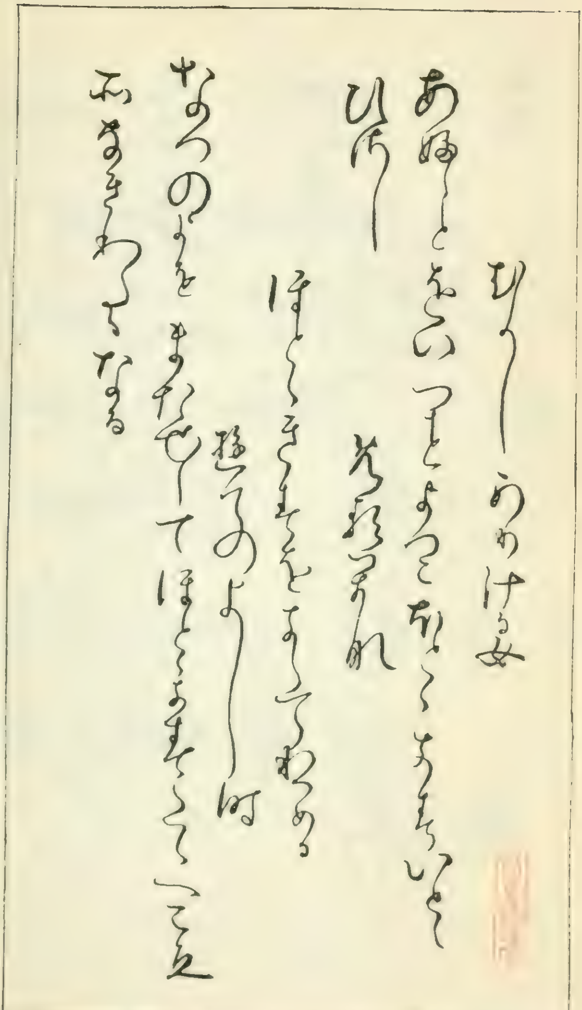
弘法大師色葉

世間種々寫し傳へたりこの本何人の摹
刻せしにや傳来もまた詳ならねと
むかしより人さしいひならはしたるを記しおきて
見しくおもひかへるなるへし

行成卿歌切

右の歌何の集にあるにや考へも及はさりしこ
此出近しそ購得られ去歳摹刻せし
同好の友人におくりしものなり

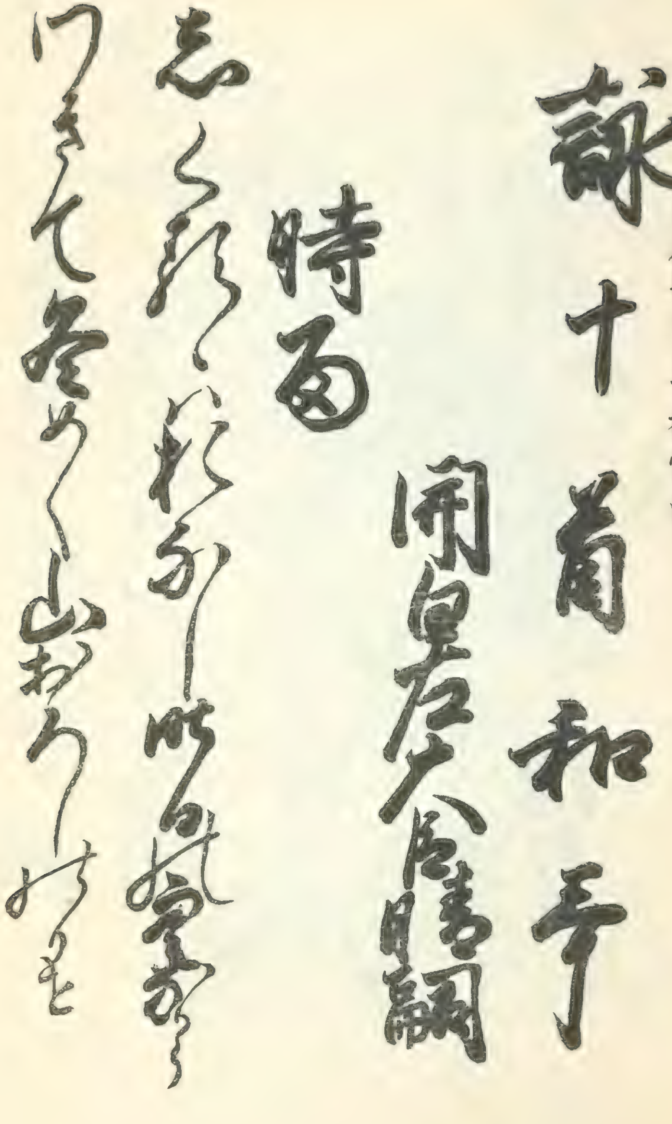
行成卿 あねまとを



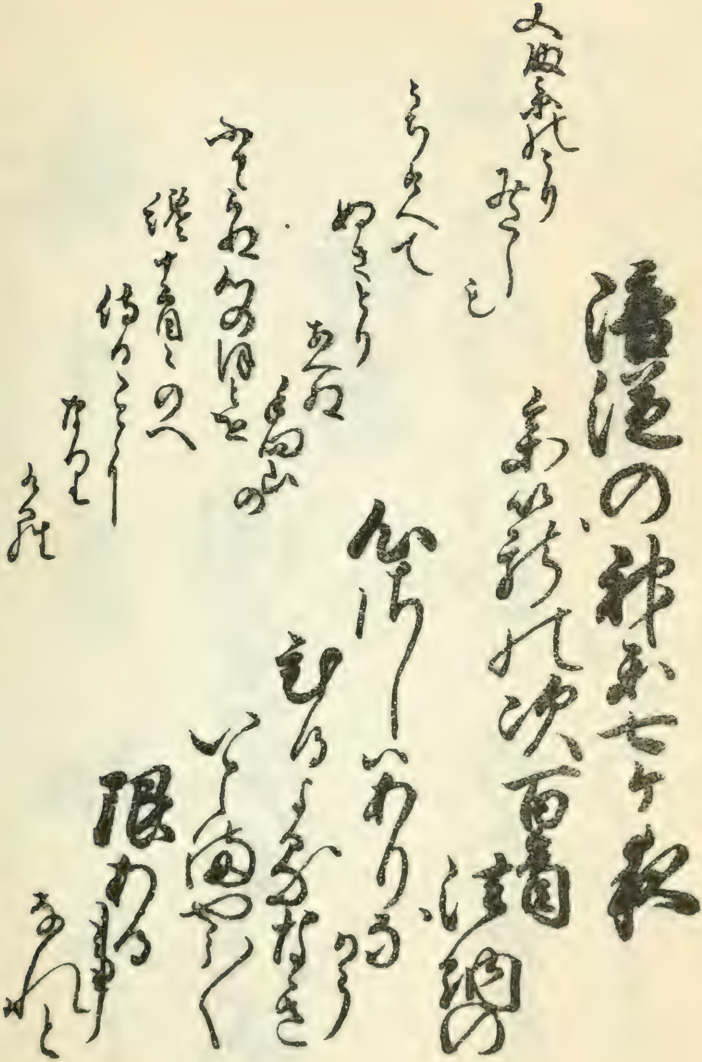
右三品著作堂容品　平安角鹿青月李菴藏

乙酉夏六月休會七月小集展覽　第三

共五本　著作堂藏



近衛親山公十首懐帋



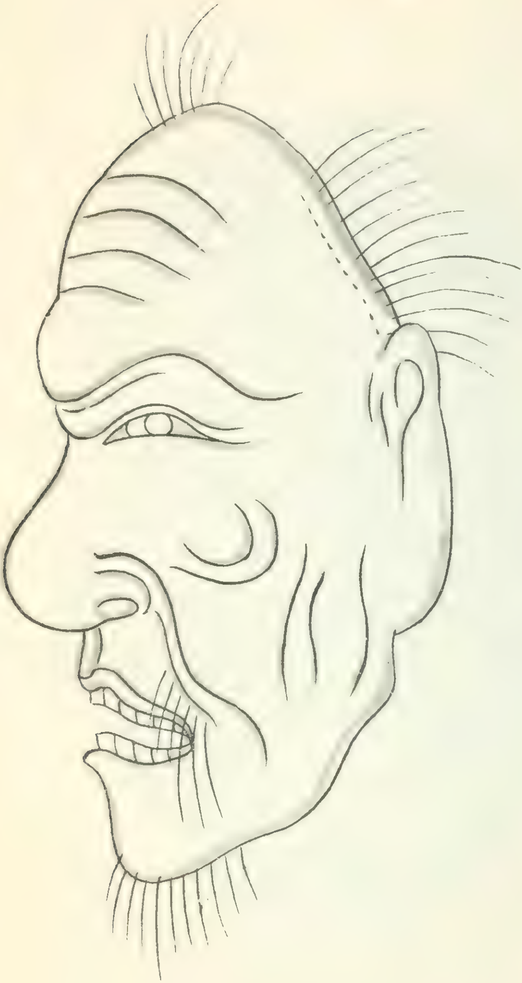
清人百鳥圖所載
水駱駝



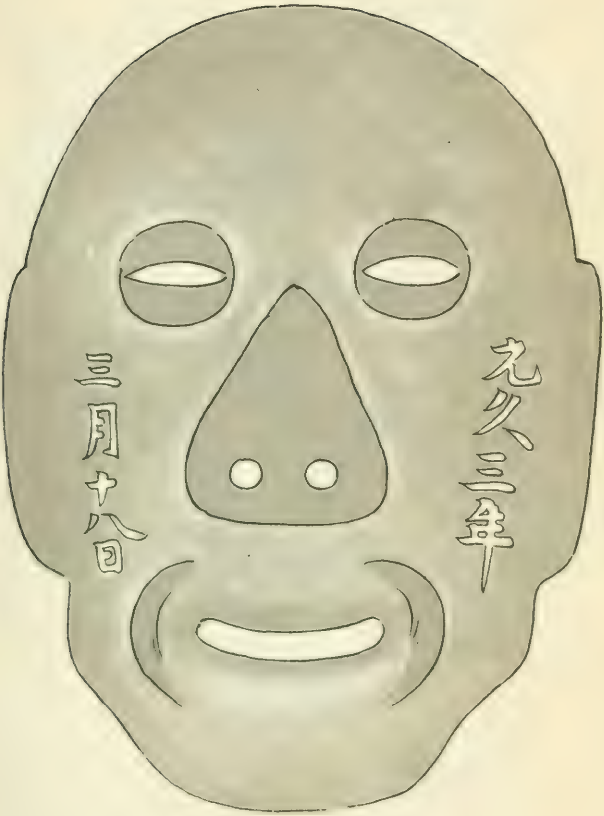
漢李氏鏡



右二種
輪池



浅草寺寶物古面翁大夫の面と云毎年六月十五日三社権現祭禮に用ゆる所なり


元久三年
三月十八日

浅草寺寳物の中古面をさめて六ありその一を翁大夫といふ右子蔵する所の面即是なり其二を三人大夫といふもの三ツありてゑひの面腹立の面泣の面なるべしこれ三社権現の面なりといへり其三を鈿女といふ則今の福女の面なり其他を猿田彦といふ

六月十五日午の刻ばかりに田村八大夫の配下五人此面をかけ馬上にて二王門を入り本堂の前なる舞臺の西の方より本堂の裏をまはりし此八大夫の配下二人を具して二王門を入て是も西の方より本堂をめぐりて三社権現へまゐり祝詞を讀めり拍板俗びんざゝらといふをもてるもの六人舞臺へのぼりて舞ふ舞畢りて階を下り御供所の内より傳法院へ入る次に八大夫其配下二人を供し舞臺の階より上りその一人幣と錫杖を持て舞曲を奏す次に劔の舞あり是ハ翁大夫小舞なり次に三人大夫の面をかけたるものの階を

上方にて云く幣と錫杖とを持て舞ふことなれバ赤釼の舞なり

右の古面の裏にあり付たる年月の搨本ハ去年文政甲申六月十四日

谷文二ぬしに誘ハれ桜江ぬしと共に田原町なる田村八大夫の家に

いたり舞曲の稽古をも見且あるじに乞て彼古面どもを親し

く熟視ることを得たりその時かの裏にある所年月をも

搨り来る所なり

京師小原女の手巾并禅褌

○京師高作山城小原八瀬邪多う知たゞし土俗に大原とくはや

手巾長二尺七寸許

地紺文字染抜

禅褌長五尺

紺と紅の木綿にて製

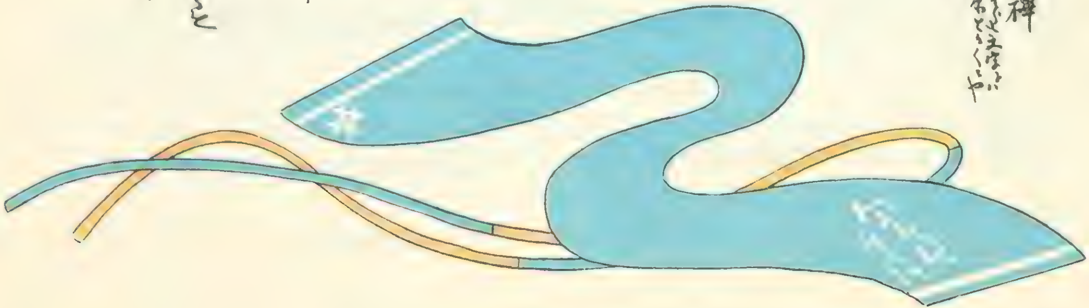
八瀬の里にて早苗とる

とはい二種とゆふだすき

用ひて後民家へ異本を

鞘きより出るとおもへるを

おの〳〵たゞそのまゝとぞ



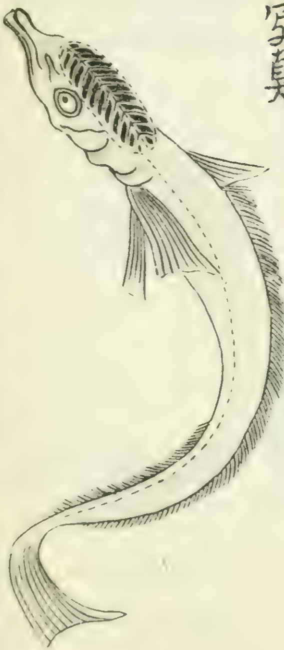
小判鮫魚　佐海の産なり

始めて卵を生ずるもの



小判鮫その巨大なるものはまゐりて八郎の平形なるをもて船を
とゞめ船底に吸つき渉海を妨ることありといふ
舟人ともおそるゝよしなり

小判鮫魚写真



右は載する所のその魚苗にして形状全からずも今ここにその
全形を図し出しつ

右三種　好問堂蔵弁

大治四年阿弥陀経通賛疏　距文政八年六百九十有七年

阿弥陀經通賛疏卷第一　大慈恩寺沙門窺基撰

詳夫理絶衆詮豈三乘之可攝智圓万德非十地以能觀布慈雲而廕四生灑法雨而津九有由是降神兜率誕跡迦維厭欲樂於王宮獲真常於覺樹良以

下略

同惣是第五師甫被機訖五段不同惣是序分已竟

阿弥陀經通賛疏卷第一

此書從永長二年丁丑之歳従大宋國始到來我朝

一校畢

大治四年歳次己酉八月六日書寫畢爲法界衆生乘末

利益也法勝寺之一切經之内

古竹



此古竹ハ甲斐八代郡上曽根村農家河野吉左衛門源政恭といふものゝ家作ニ用ひし不知幾年日蓮上人のやどり給ひし古屋ニて近時家作修造のとき得しを今年同州一の宮神司古屋掃部より贈られぬ

羽州由利郡矢島の水飲



経木にて造り上を帋にて張り漆せしなり紋は種々あり

右水飲は旅行するとの中毒笠にさゝみてゆきさき水をとゝみて飲む器なり矢島のしたにありし奥羽の近國にてはすてこれを用ゆるよし驛路乃道中記とある書にもみえて商ふ店もまゝ必ゝもなりけり

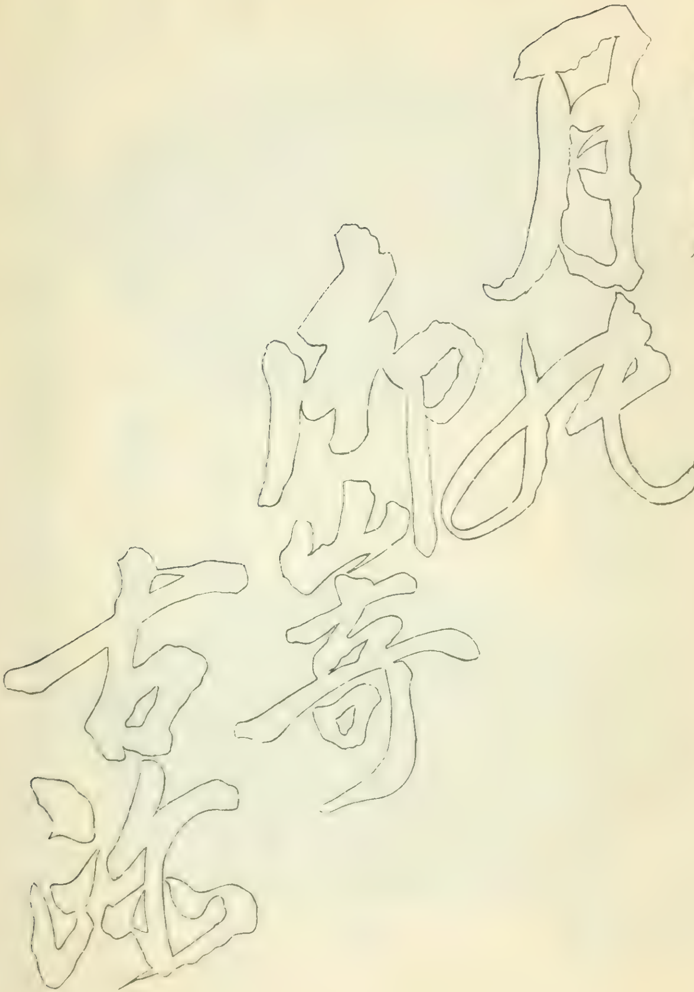
あるらし

右二種　海棠菴藏弆

相州鎌倉板佛



芝三田月のみさきの碑



元禄八年犬別帳

元禄八亥年

東叡山領

下谷坂本

壱町目

弐町目

三町目

犬毛付書上帳

一　截丈　肉毛丈黒虎男犬
毛丈茶ぶち男犬　主　孫左衛門　下

一　毛丈　白ぶち　主　[illegible]和平　下

一　毛丈　虎ぶち　女犬　[illegible]犬

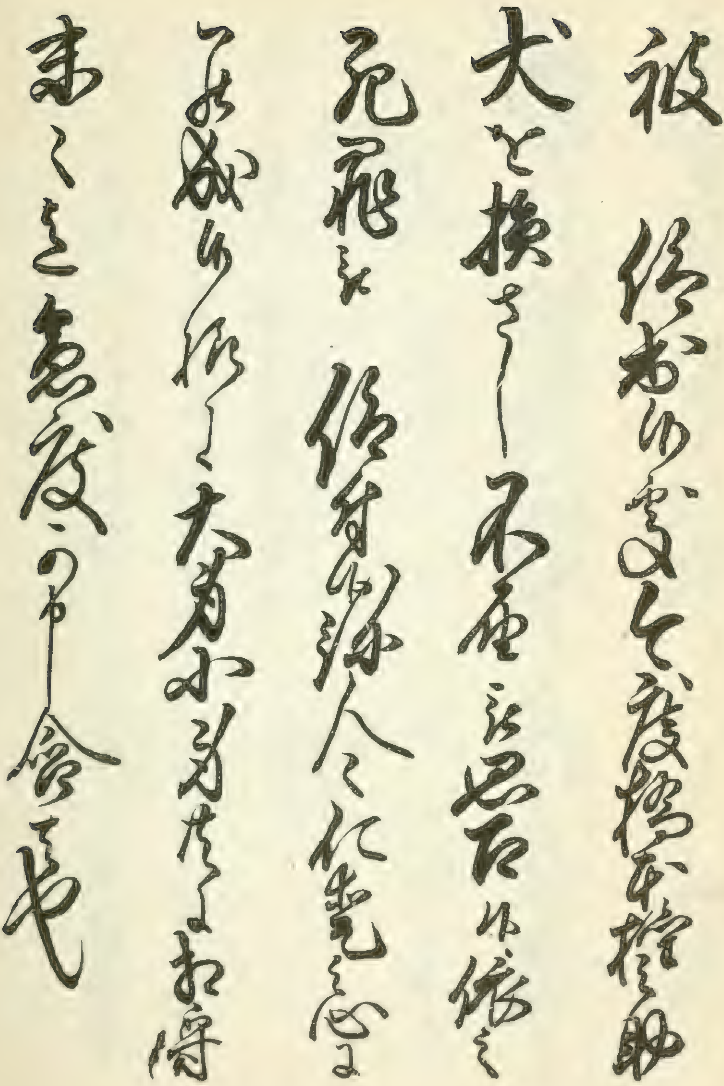
右三種　文宝堂蔵弆

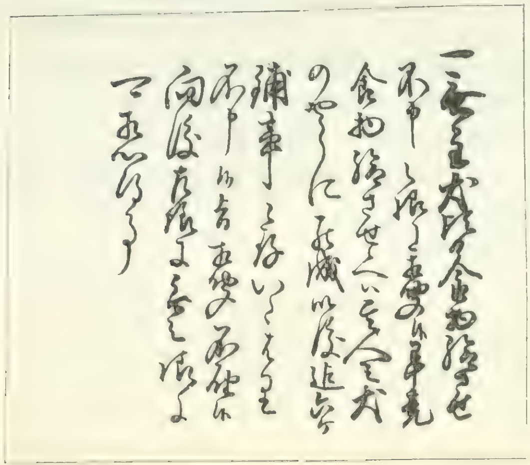
先月の耽奇會に文宝亭より出されし元禄八年弐別帳に付て今亦雑録中に記し打忘れたる一二條をあげて補遺となす

覚

諸人仁愛し心を和して常に

親切に可致者勿論其の御法度に


被
仰出候て[illegible]
犬と換させし不届に思召候に依て
死罪にも候得共 諸人に[illegible]心を以
了簡被成 仍而大勇不動を以[illegible]
末々まで忠義の為に命を[illegible]



午十月日

案ずるに午とあるは元禄十五年壬午なるべし
憲廟の御治世元禄三年庚午とこの壬午より外に午なし
庚午此頃はいまだこの事起らざる也

本材木町五丁目
伊勢屋□□中ノ（判）

一私店衣屋乃店宅庭下ニ而子犬鳴声仕候
今朝六ツ時頃罷出見申候処早速見候様
見申候得ハ何方ゟ参り候哉白虎斑女犬之子犬弐疋産
居有之候ニ付五人組名主共江も申出立合大騒老若男女
中ニ大切ニ育候様御番所江申上候得ハ御捨被
遊下候

伊勢屋店
庄右衛門 中ノ（判）

一今朝六ツ時頃私店宅床下ニ而子犬鳴声仕候ニ付家
主方江申出五人組立合板補ニ而引明見申候処白虎斑之犬
子弐疋産居有之候ニ付大切ニ育候様近所参
り見物人群集仕候ニ付何方ゟ参候哉相知不申候へ
居有之候不申候

犬改之覚
一白虎斑母犬　壱疋　中犬
子犬弐疋
内　白黒斑　女子犬壱疋
黒毛　女子犬壱疋

大殺母子弐人共ニ一ツ之
右之通店之者并家主女人組合之者共大路共得
御坊子弐ケ條之今夜見分出候ニ付母子弐人共ニ
達方ニ而入中ノ町内講町組合信而不正哉
手抜無之見分ノ者哉共候ハ以上

寛政元年　酉十月廿日

御番所

検使

家主　伊兵衛　判
五人組　清兵衛　判
同　市兵衛　判
名主　新　助判
御門　幸右衛門
坂井　勘兵衛

右の反故は文政八年乙酉の魁夏の頃衣更某貓架衣裳をほし
らんとせし折婦人の着し女の下帯を引解しにその帯の
なかより出しといふ紙は四ツ折に包みて処穿けしよ
てけしたるあとは紐をとき所々に紙をほどき
中に折しを揮くありといふ

乙酉七月　　海棠庵

志田定重巨刀

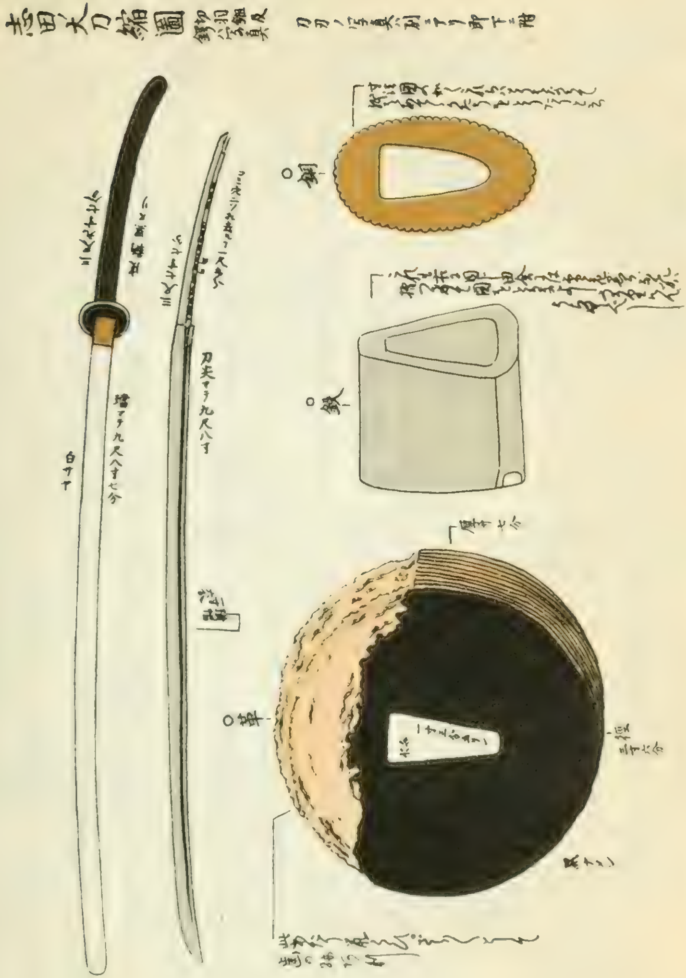
越後弥彦神社寶物以往歳
北越一友人摸而所贈者更寫之

鞘長サ三尺九寸七分 皮キセ黒漆
白鞘長サ九尺八寸七分
刃幅一寸六分長サ九尺八寸刃際ヨリ入鞘処三尺二寸七分
皮鍔徑三寸六分厚サ七分韗十三枚韗ヲ為之切羽鎺笄具ニ見ニ圖中ニ
刀刃揔長サ一丈三尺七分　鞆ヨリ至テ鞘長共ニ一丈三尺八寸四分

社説ニ云志田の大刀ハ當國古志郡夏戸の城主志田定重當社ニ奉献せり蓋定重ハ志田先生源義教(解按東鑑作義廣)の裔孫ニ應永年間定重戦場ニ赴くの日心願の旨あるをもてこの大刀を當社ニ奉献し遂ニ勝利をえ得しといふ慶長年中大久保石見守依
台命巡検のとき為朝の矢簇志田の大刀ホ一覧ありこの大刀ハ日本一大奇品なりと稱美せられ祈禱の一助ともなるべきなれハ以後懇望のものニハ拜見を許すべしと申渡されしとなし　社記ニあり
越後蒲原の杜月庵牧之往歳予が為ニ弥彦ニ登山して社家ニ逗留の日神主ニ請ふて一二の神宝を拝見し紙を刃の上ニ當て其寸尺をとらへのべもて摸して贈れるもの是なり　柳牧之の情願を

これらをもて拙著放言中或ハ雪譜中に収められんことを
楽みしにまたれしもその二書久しく稿をしも脱せざる刊行の日の
はかりかたけれバこたび其継に写さしめて耽奇漫録中に載おく
なりハ諸君の展覧に充ん為且異日の遺忘に備ん為なり○
鮮據をもてむかし軍陣中に巨大の刀をもて威を敵に示せしを
これあり定家の巨刀もその類の物なるべし豊太閤朝鮮征伐の
とき八木をもてこれを作りて旗をおしたてしとぞ其大刀のなりハ
白石先生の軍器考にみえたり　愚按もあれどそハ刊行の日にいふべし

牧之云志田先生義敎ハ頼朝卿の叔父常陸信太郡の人也信太又
信田志田に作る義敎の子孫越後に移住して定重に至れりそ
の後志田源四郎　義時といふものあり上杉謙信に仕へて川中
嶋の役に戦死しけるその子志田修理助ハ景勝卿に仕へ程
に景勝会津入府のとき主君に従ひて奥に赴きしかバその子孫
今ハ上杉家にありと聞ゆ又越後蒲原郡下田郷の内志田村に
志田新左衛門といふものあり世々郷士にてこれあり　この家にも志
田義時の庶流といふ弥彦の神宝の志田の大刀もてりしと
推して来歴の連綿たることを知るに足べしといへり

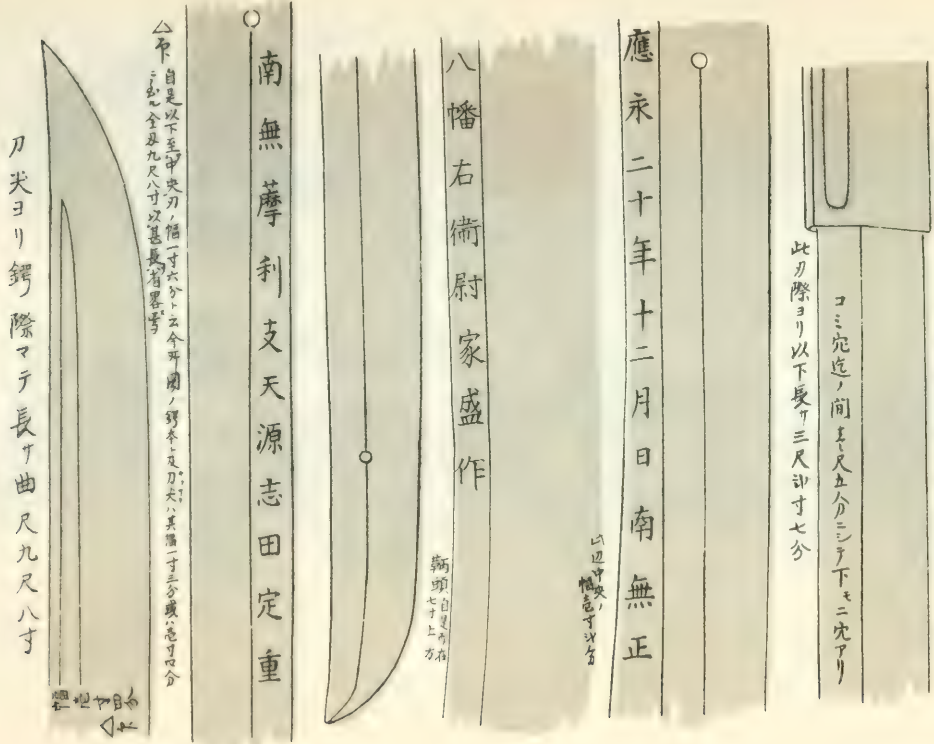

志田大刀縮圖
○銅
○鉄
○革

澤と革挾二枚をとかさね金をもしなかり小
口ちりえれハひとくしまは皮のふちあり
頭上あらしあとそともに黒麽そて
思ひなる紙をとふき獨く漉りふゐなく
墨洒ふしてそろつさつぎて糖麩の細く
萬のくひかれ処の皮ひとくあを於も
ざしとしたるおく

志田大刀圖之二

この刀刃までゝ壹丈三尺零七分ありいと長けれはさ
ちそれを刀のさまと畧して鞘のさま銘ある物を
書と摹しぬ
牧之云この大刀あまりに且甚長けれは容易ならぬさま
りしうかりさ重けれはとて鞾を脱し紙をあてゝ細
毫をもて摹し原の寸量を以てその似せを試きたり
わたこの跡ある所とことわりなき年必雪花墨もて搨本とせ
きぬれはあるを見る節の人形をもて拓かうていつれもいふし
つかれとも知らぬまゝに雪花の墨そふまゝの世にあれと
しも知られすぬをさるは常にて功をなすに似たりなれ
靴を隔て癬を搔か如しと家嚴のつゝやきぬるそけれ
まわりといふ事もやかゝるくらゐみつろほと人原へし

琴嶺摹寫併識



刀尖ヨリ鍔際マテ長サ曲尺九尺八寸
自ハ是以下至中央刃ノ幅一寸六分ト云今所ノ鍔本ト及刀尖ハ其幅一寸三分或ハ一寸四分
ニ尖レ全長九尺八寸以甚長者略ス
南無摩利支天源志田定重
八幡右衛門尉家盛作
柄頭自是下ニ在七寸上方
應永二十年十二月日南無正
此辺中央ノ幅壱寸弐分
此刀際ヨリ以下長サ三尺弐寸七分
コミ穴迄ノ間一尺五分ニシテ下モ二穴アリ



白隠書北神帰　縮字印ハ摸写ナリ

白隠の書ハ[illegible]

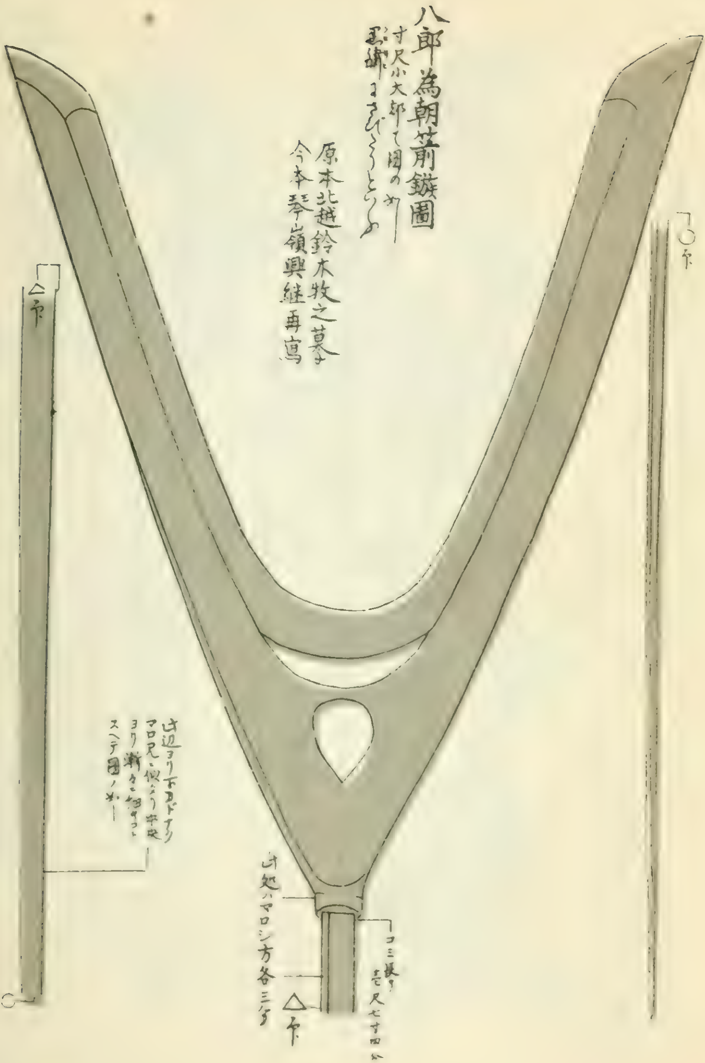
源為朝箭鏃 越後弥彦神社宝物 以往歳塩澤一友人摹ゐ所贈者寫之

長サ曲尺二尺六寸四分入竹中処壹尺六寸八分在其中ニ矢鏃又闊左右七寸四分廣サ各九分又一方短三分弱入竹中処方三分弱自中央而下ハ無稜漸々細小至一分弱措紙於鏃上以指推而取其形象是以小大不差毫釐云

社説に云源為公の矢鏃ハ新田左中将家本州を領しありし建武の初中将の長子越後守義顕朝臣の寄進しありしとそ慶長中大久保石見守巡検のとき是等の神宝を拝見ありし帰府して言上せられしに件の矢鏃ハ　公儀御宝蔵中にあるものと相同しく為朝所持の物に相違あるへからず向後いよいよ秘蔵すへしとかさねて仰下されしとそ

本社第一の宝物なりといふ

解云尚古十種に収めし所の矢鏃もこれと同物なりといふされど比較せされハ定かならねハいひかたし諸君の鑑定に任するのみ抑これらの武器ハ拙者放言中器用部の目録に入れしくはしくおきてひとものその書今に稿し果されハけふのまとめの冊子料に輿継に写さしたりこれハまた亦異考あるにあらねとそれハ放言第三編上木の日にいふべし


八郎為朝笠前鏃圖
寸尺小大郎て目の如し
ゑかきまさひろことくに
原本北越鈴木牧之摹
今本琴嶺興継再寫
此辺ヨリ下ヨドナリ
マロ尺ニ似タリ中央
ヨリ漸々ニ細サナシ
スヘテ図ノ如シ
此処ハマロシ方各三分
コミ長サ
壱尺七寸四分
△ 下
○ 下

筑前 越後 タキ土

筑前石炭タキツチ

興継按筑前𤇆土本綱所載石炭の類稲若水和名カラスイシといふもの是なり李東壁云石炭即烏金石上古以書字謂之石墨今俗呼為煤炭煤墨音相近也拾遺記言焦石如炭嶺表録言康州有焦石穴即此也又云石炭南北諸山産処亦多昔人不用故識之者少今則人以代薪炊爨煅錬鐵石為民利云云天の生民に錫与みに時あるを和漢に用ゆ亦何ぞ怪まん



越後煤炭タキツチ



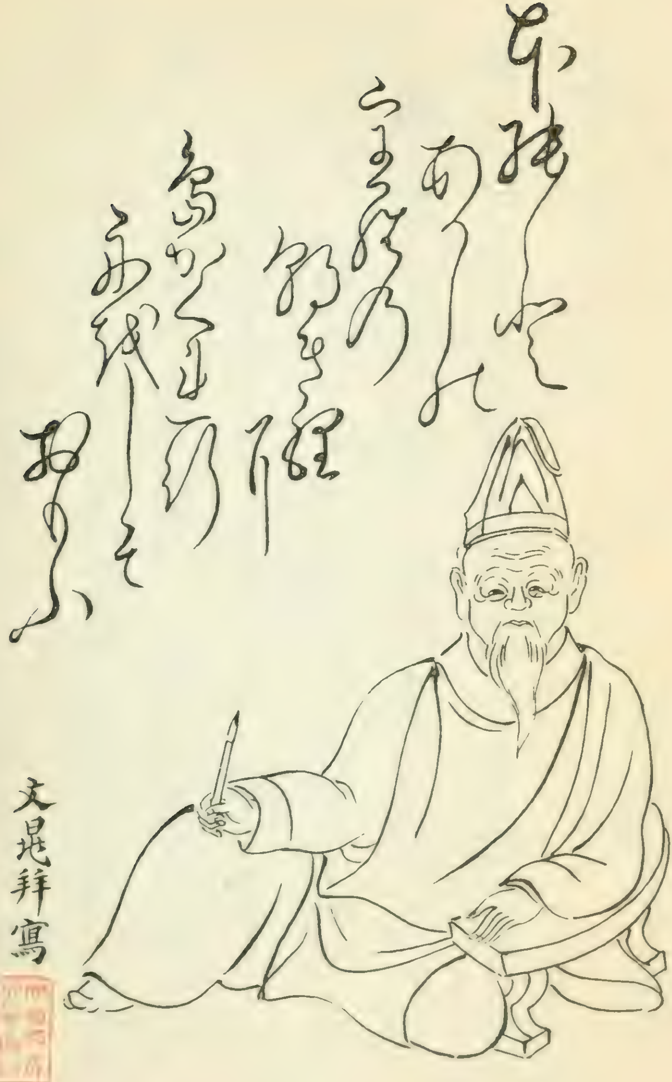
越後に産するものハその色煤黒のめくその質軽く壊れ易し本綱の石炭に似たりといへともこれも亦土の腴脂の凝まりたるに係るものその性臭水のよく燃て燈油に代らするひとしく寒民薪に代らるべし

筑前のタキツチハ文化のはしめ同州秋月藩の某に贈れるよりこゝの土民を忘れたりしもこれは香月山のふもとよりほり出すなるよし近来土民あまた掘りとりて薪に代ふることをすて寒郷蓬戸の資料となすこと限りなしといふ本草綱目にいへるところ石炭の類と與継いへり解按するに筑前續風土記志摩郡芥屋山の條に益軒先生云芥屋山昔はかやといひしをいまはけやかやと音相近し芥屋村と小金村との境に小流ありよあれといふこゝの処に物あり黒土の如く朽木の如し是をとほれハ燃出る桐傳へて曰昔この地に大楠ありしか朽て化する木なりといへれともかく朽木にもあらず又土にもあらずそ恰近州老曽村にある木もといふものに似たりといへり解云すなはち文字ハ葉藻又屑燃とも書く近江栗太郡の土産なるよし江源武鑑にみえたり苅萱（カヤ）と香月（カゲツ）と音訓通ずるぞかくまたはこのタキツチハ續風土記にいはゆるよあれの黒土なれある人ハその漢名を膏風といふをしへりこのタキツチいふもの書に出ぬるやさだめ考へそ當時益軒のこれを薪に代るものとハいはざりしハ土民いまた用ることを知らざりしにやあらん今その質を撿するに黒脂石の下品なるものに似たり漢名高膏風といへるは其出所猶考ふべしこのもの硫黄の氣ある脂腴脂の凝れる也焼くによく燃るなるべし越後のタキツチハその性脆くもふとれハ穴のごと缺るこれハ臭水をおさへしかへしと與継既にいへりされも焼けハ臭氣ありといふいかにもくしろみぞ

志田ノ大刀ノ図以下四品共ニ　琴嶺興継蔵

是より下ハ貼まぜにせられたるは当時月並の会に社友
の携へ来て展覧しぬるはあるは只を
りまた携へて甲乙ちかひぬるもまゝ
かゝるもあれはそれと示さしつことおもへは見ん
つ蝋子ものゝ揚ものつまりその列
ちをうつさるゝと旁めてまゝまとめのせし之
ぞり

著作堂識

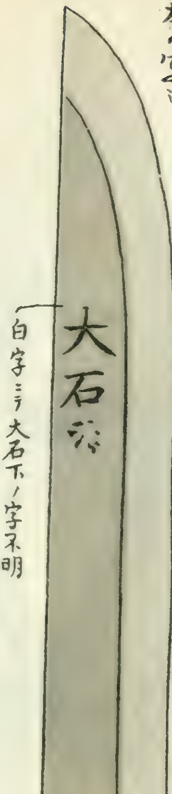

文晁拜寫
弘賢書



大石良雄佩刀

傳へ云良雄復讐の為に窮して江戸に赴く首途の日その親族京の人医生山口氏に贈りしとそかの家に傳へたりしを萬道に所持ちたりしと云 今ハ土佐侯家臣松井舎人所蔵之

摺本の写し



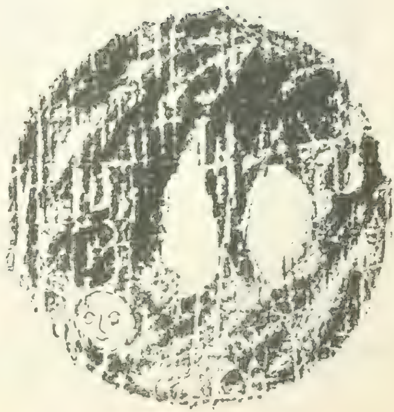
大石内蔵助良雄 山科 西野 山里住節帯之

著作堂解識



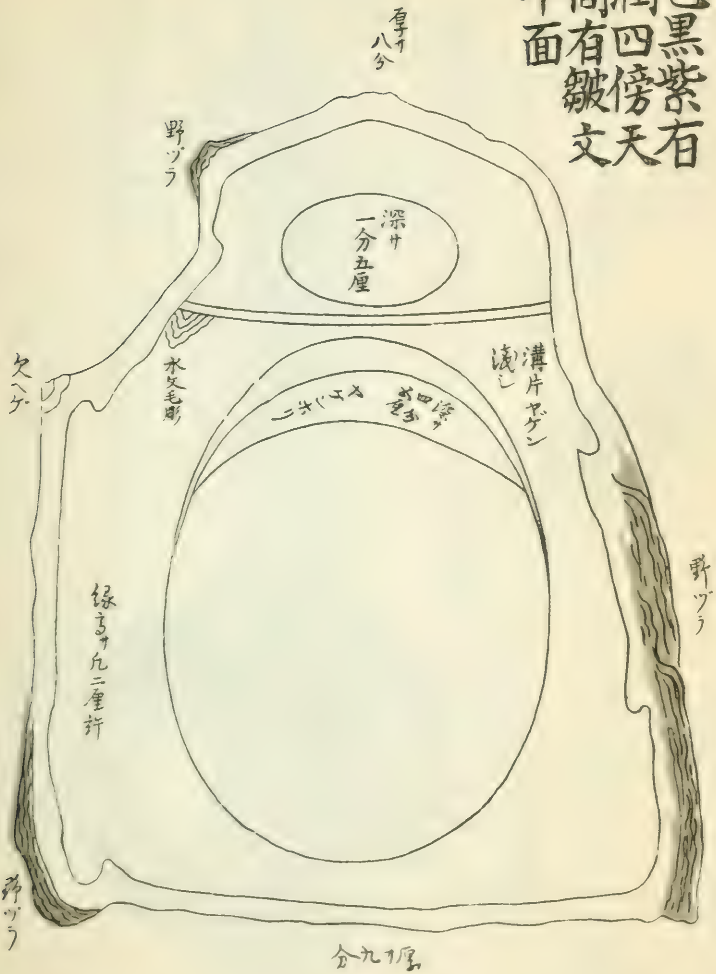


橫濱尾



乙柳軒味墨

石色黒紫有光潤四傍天生間有皺文背平面



當寺者延暦十六年空海建立之本堂今現在

此所書寫大般若六百巻有同國同郡遠敷

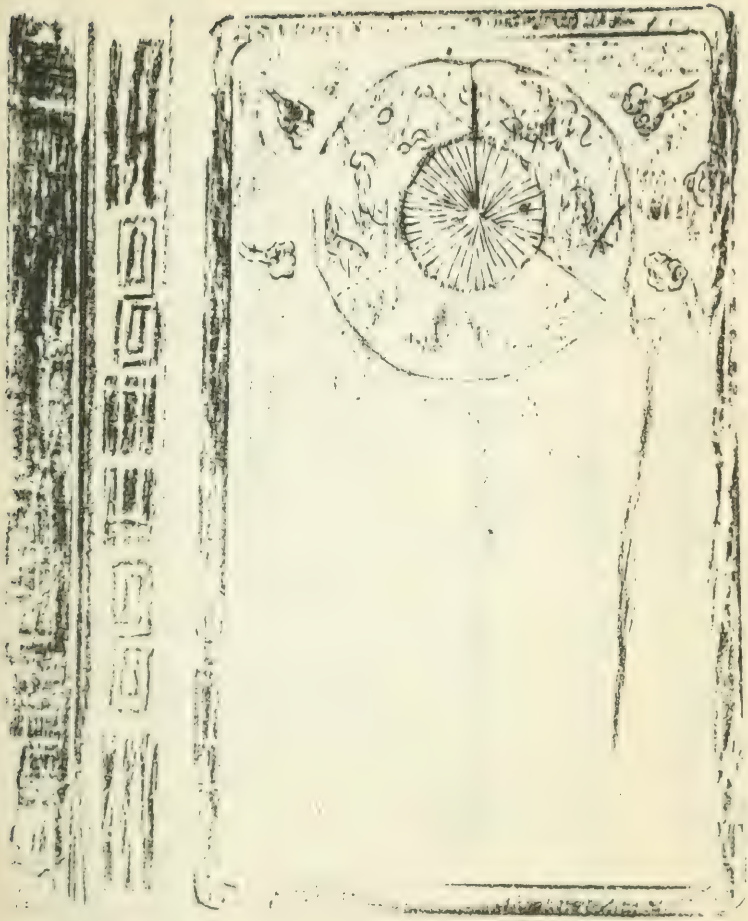
下宮神庫硯亦大師自作云

右

古硯ハ弘法大師大般若経書寫の硯と云

若狭別遠敷郡野邑岩屋山妙樂寺什物

若州醫官　杉田玄白摹



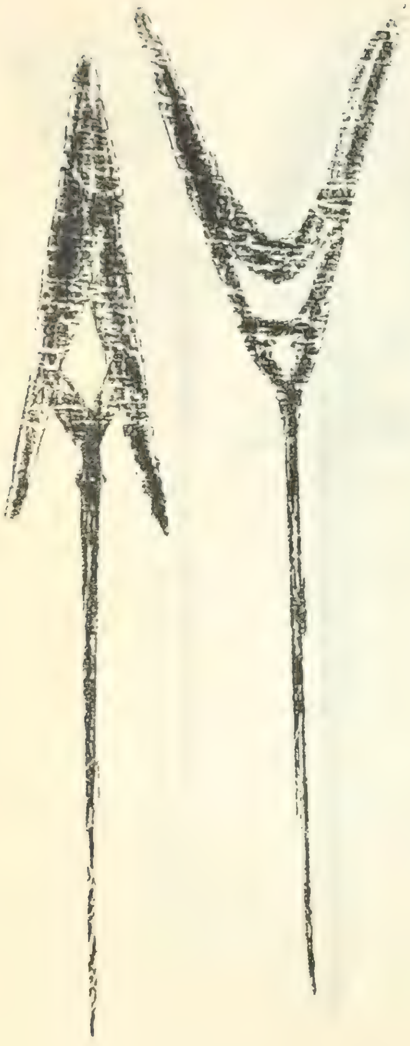
硯

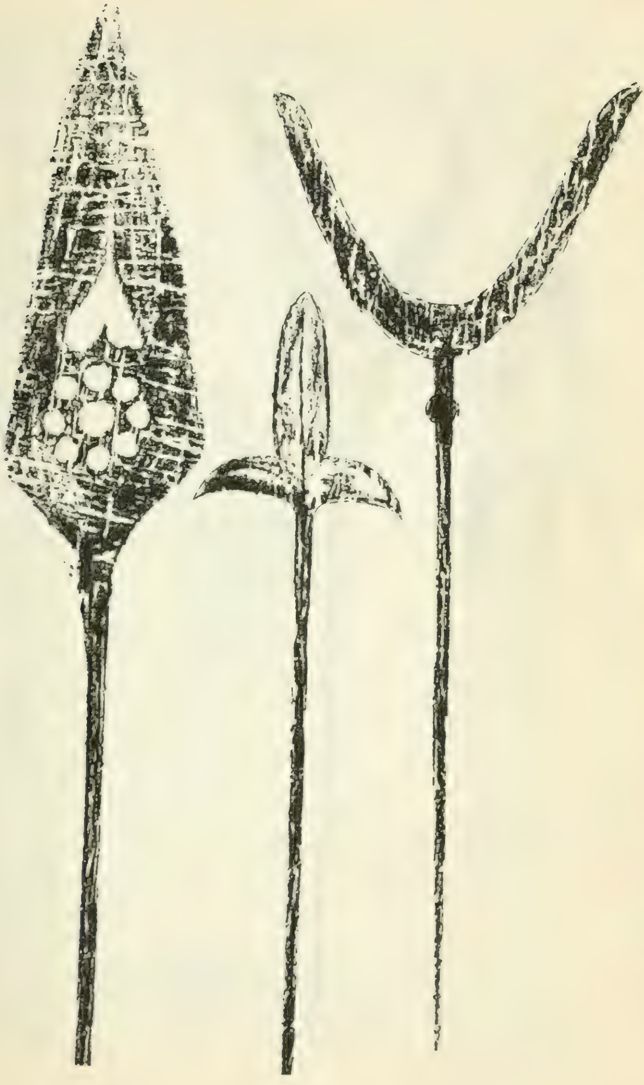


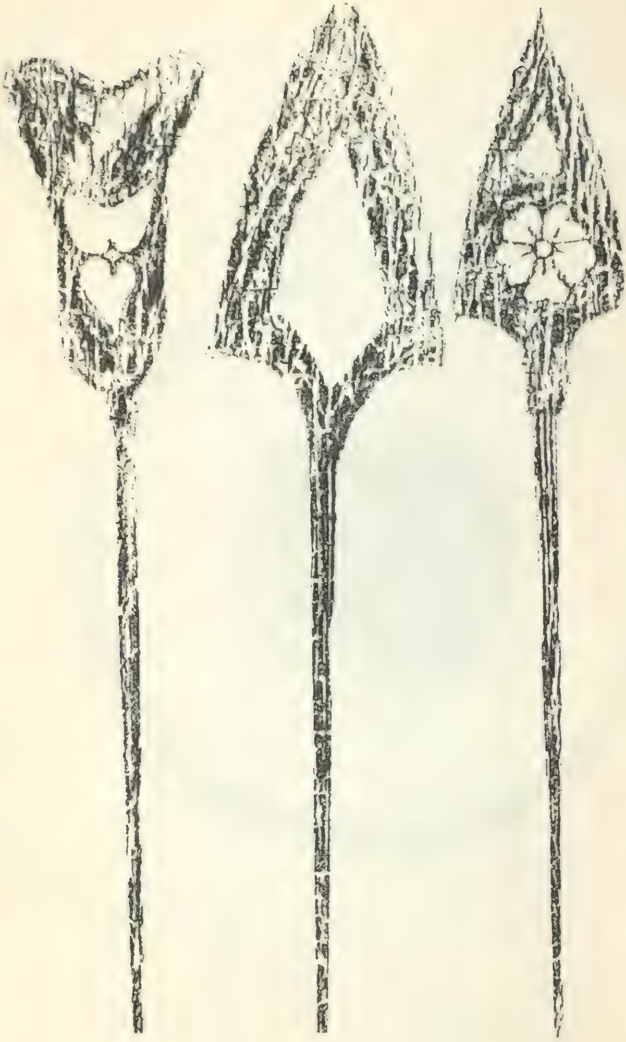
右研背



此鏃數幹并壹物のよしそれを家藏して摺搨したりさはこの古物
すへあつかるべし

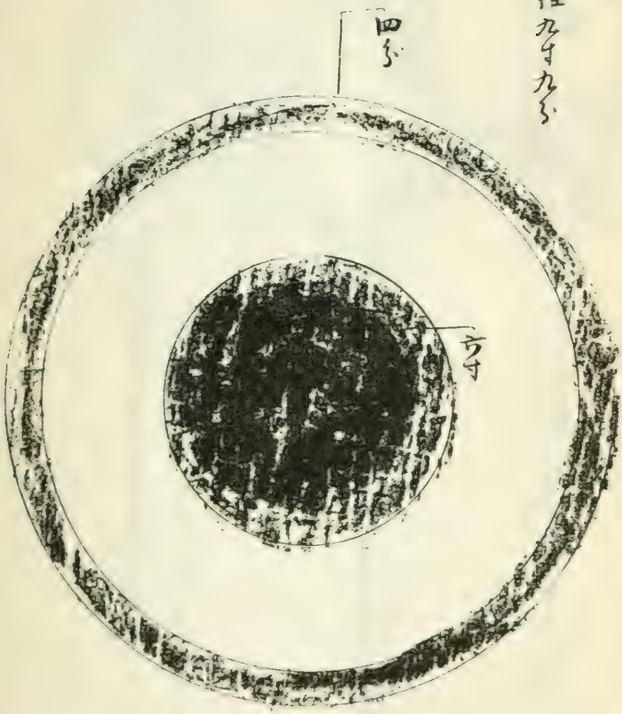






古鏡 摺本のうつし之

圓径九寸九分



輪池藏弆



赤間硯物茂卿遺蔵

圓径九寸五分



蘐園飛卉

右の図ハ摺本の写し

蝦夷ノ圓蓏屋（マロヤ）俗作丸小屋

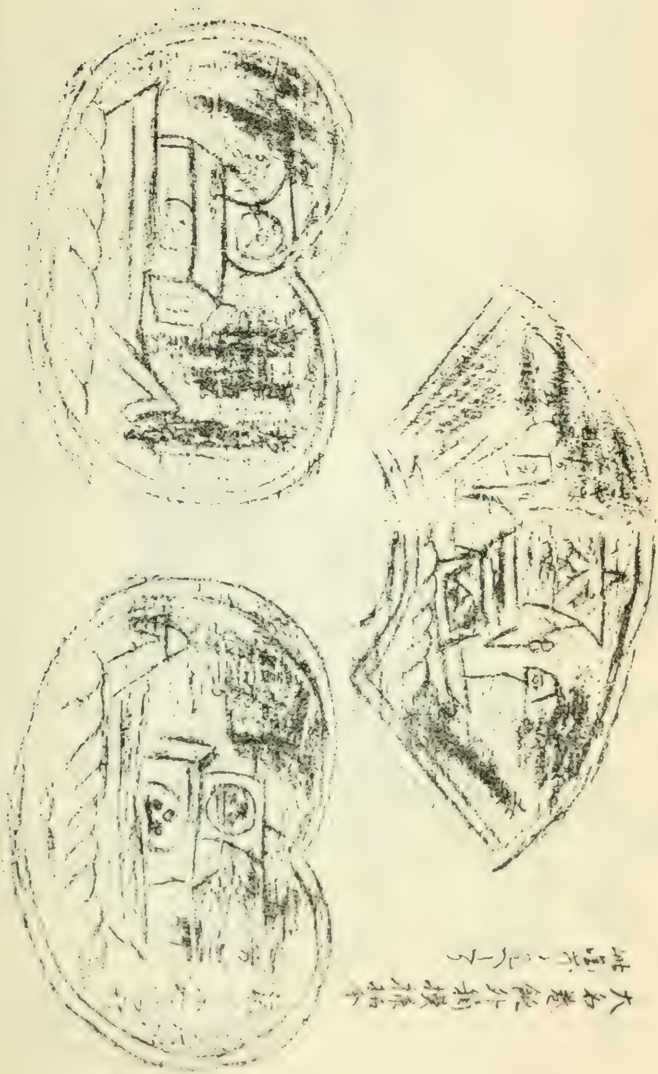
假柱六个野竹檜をとりて棒の如くにそ
長サ八九尺なるべし之を組建て上の方を結ぶ
茵ハ松か皮にてクツノヒゲといふ菰を編て作る
敷物ハ席薦の表の如し長サ二尺ばかり之にて鐵板を
用ふ茵をとぢる箒ハ野竹檜をもて作る
木箒に似たり

解按するに陸奥の塩竈今猶庵ハ亦稀なれど他
海濱にて塩やく家の為小屋ハ是に似たるあり
又何らその圖を洲濱圖に載せたる塩屋
きれ小屋にも見へくり但塩濱のことなるへし
むかしハ田舎にて田のまもりなとする小屋
多くは是なるべし古歌にある のまろやと
よめりそは蘆萱なとにて葺けるなるへし
諸國ぞ八丈島へも多かれハ世俗は
只蝦夷へつくまをいへるにやあらんとおもふ
べし

此小屋の内にて聞くに凡二尺四方
なるを蝦夷人十五六人を容るへし但大
小ハその意に任せて一定ならず野
夷人放漁の為諸島に止宿し或ハ山中
或ハ水邊に在るもこの小屋をもて雨露をしのぎ
常にもて他處に赴くときハこれをたゝみて小舟に載せてゆく
尤自在便捷なるものと云

文政八年乙酉夏五月下浣松前老侯蝦夷郷今の蝦夷圖ハ海に
依て蝦夷校刻石門和泉記畢紀備拝送之　瀧澤解





藥師寺古瓦



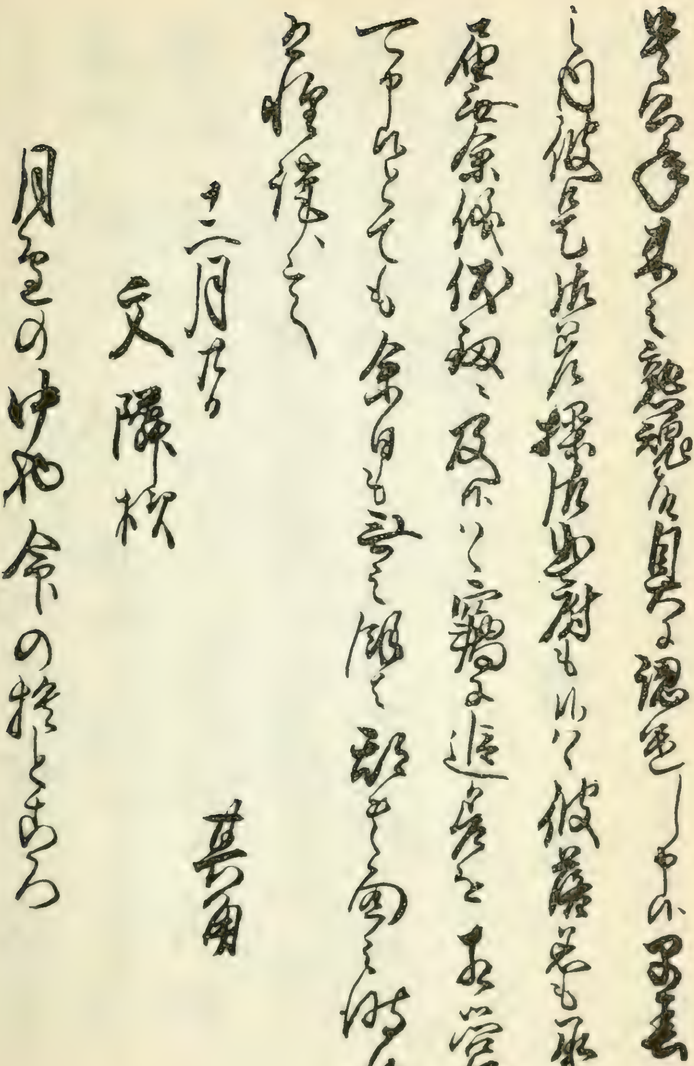
[illegible]兵角親征行状三梅津半右衛門 [illegible] 書

[illegible]

家中丑満し頃は城外も物音既止て静まり
文庵邸内も所々に門人集りて蒲団を
かつき寝もやらすに物音も何となくありし
門を叩者数人有て案内して講釈家の
浪人堀部弥兵衛大高源吾今銀伝隠家在良
上野介屋敷へ押寄せ亡君年来之意恨を果
さんため大石内蔵助始として四十七人門前に有之
只今吉良氏を討て一旦隣家之隣好武士の

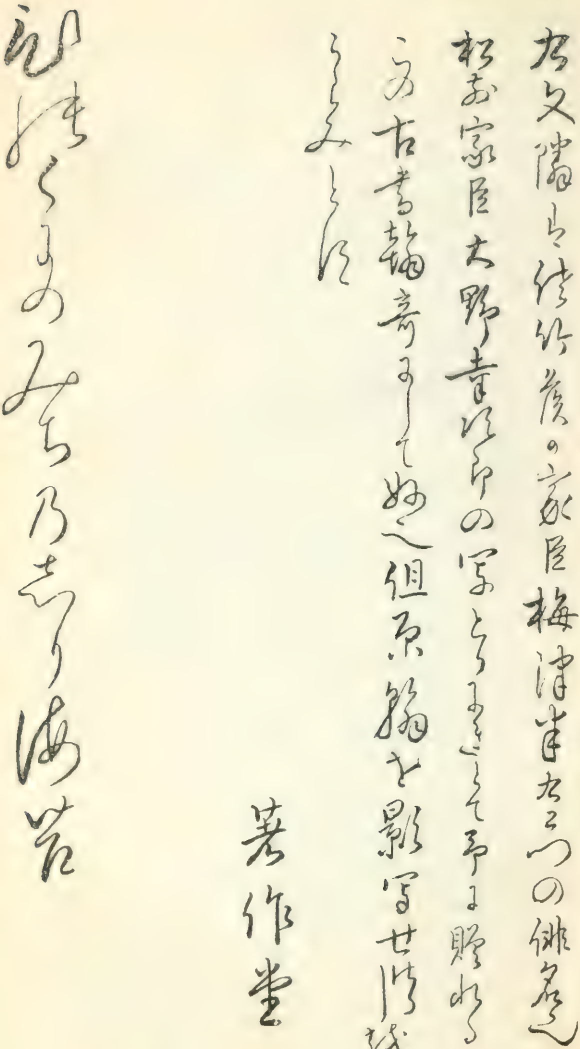
膳百一流加勢もありて末代之流不易とて其に
別く、門戸を晝夜流防き大之流用か
ありけりて和書接れとて其も果てゝ意出を
風情神妙なる趣も河のんくい繼也
消失てことに角去ひ家中に至生流の在残り也
とて門前に立出けれは、その名有良家へ見たひ
へし　従よ
残雪とおりへいかゝし金のと

とうちうみ一段よそて又門戸を閉て内議たり
嬢娥に桃灯を挑し婚姻を借りに其表さ
骨肉に深入女のさけふする靑き子共に凡颯くと
吹きそめて暁天に鶏なりて東情あそに遣し
たりとて大君を祝太宮神職假に謝義を
遯しつゝる天満宮の茶屋といひ毎きう
同の恩也君ち涛ち砕く厚氷
と申捨たる漂流者ら精神に眼前に忘忽く



十二月九日 其角

文隣様





杉海苔



蜈蚣海苔



松海苔

赤瀬 トサカ海苔

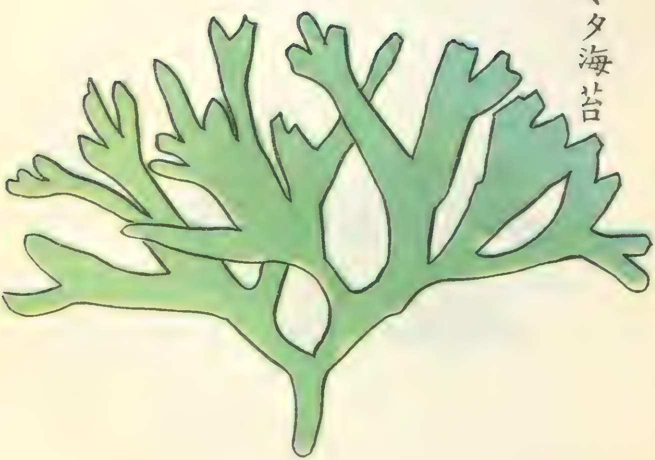


五分海苔 郡浦海ニ立

色々海苔佐賀ノ関



ヨガマタ海苔

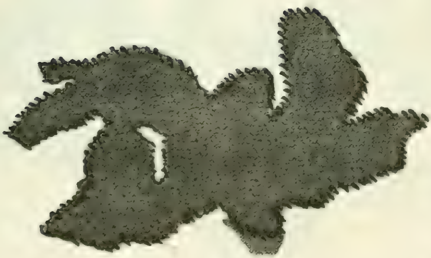


ヨガマタ海苔 色赤キ方ハ海ノ深キ所ニ立候由



清水海苔 上陳川、灰干

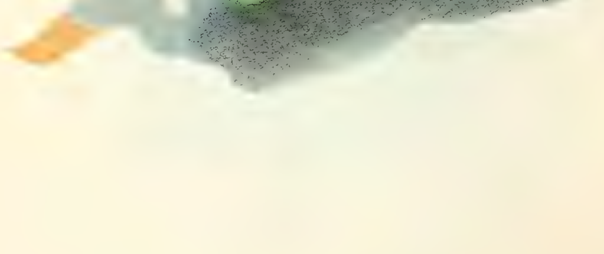
但シ茶ニ漬候ヘハ別シテ色宜御座候由



波ノ花 一名翠雲花



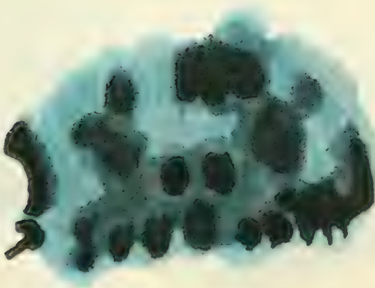
細津川海苔 灰干



芝海苔 椿原八幡宮裏手ノ山ニ立



寒海苔 二丁ノ沖ニ立 但シ一日一夜水ニ漬置乾立候方



寒海苔 両三日水ニ漬置ル方



青海苔 八代



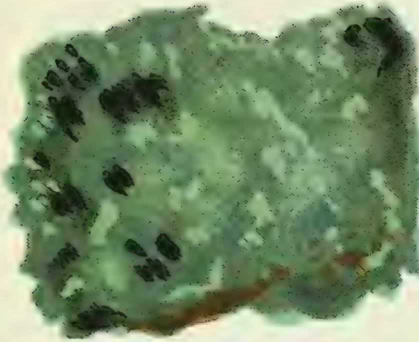
矢部海苔



八景ノ宮海苔 壹井川水上



水前寺海苔 灰干



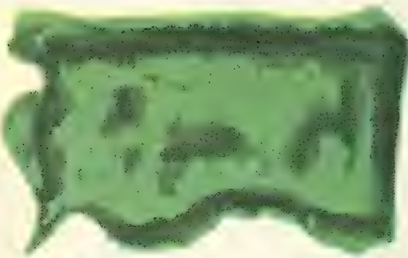
下タケ海苔



山鹿ノアマ海苔



甲佐海苔



菊池海苔



是海苔二十二種有等類二品肥後國産之本月朔輪池翁携来見贈各少許因借其所藏写真一巻以摹之時文政八年乙酉夏五月六日也

簑笠隱居

乙酉秋八月九月小集展覽　第四

共五本　著作堂藏

弘法大師携來唐人畫十二天像　十二幅

備前國萩原郡佛祖寺藏板

今その一幅を縮寫す

日天



縱三尺六寸　横一尺四寸五分

仁清の作人形
花いけ



附
湛々老人女人形の圖記
戸田濃州蔵仁清の人形摸

浪華の十萬堂の什物なる湛々翁か遺愛の人形
も仁清の作なるといふ又蒹葭堂か紀の和歌山に
て得し人形はかれ十萬堂の遺物と同作なり
いふし跡しきてのちなりとそ戸田濃州君にまゐらせしを
聞えたりし其家に去年由ありてまかりしも其人形を骨
董舗よりえしく戸田君の蔵めたる物と合しみつるに
少しく大小の差のひとつあるのみなるそ實に一對といふへし
いよゝ仁清の作なるやいなや諸君鑑別を乞
まくの――

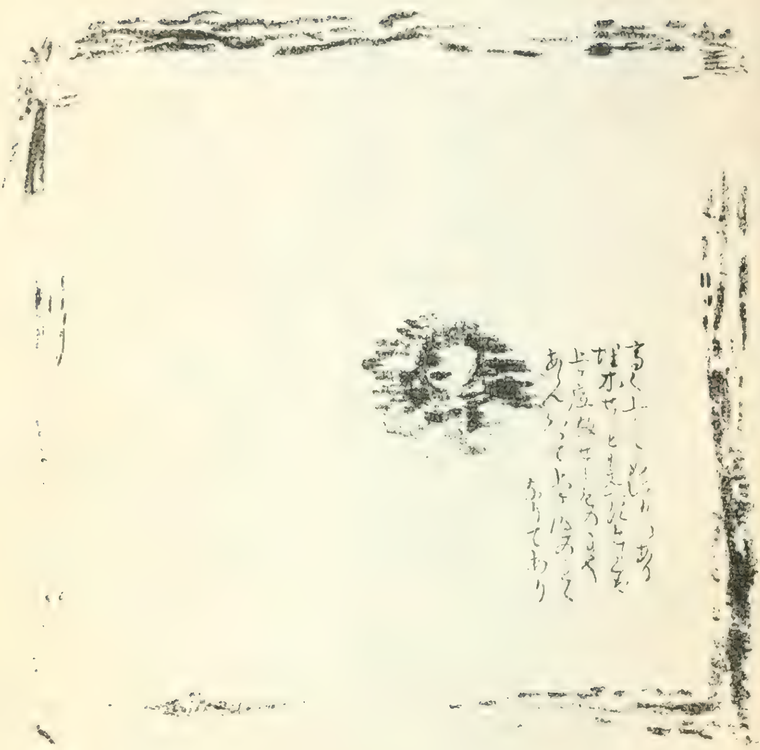
右方に貼候外に曾我某氏舊藏所の淺草
御藏前なる札さし、これをみて歎稱して曰如
此の絆を張紙のまゝなり二つあるも外には絶ある
ましく思ひき、豊臣家時代のものに疑なし
とて、いとそかしこき海内にはいと三つの不可なる
とし曾我氏の秘藏となりぬ、いまさきて
そのまゝ存しぬるやいなや

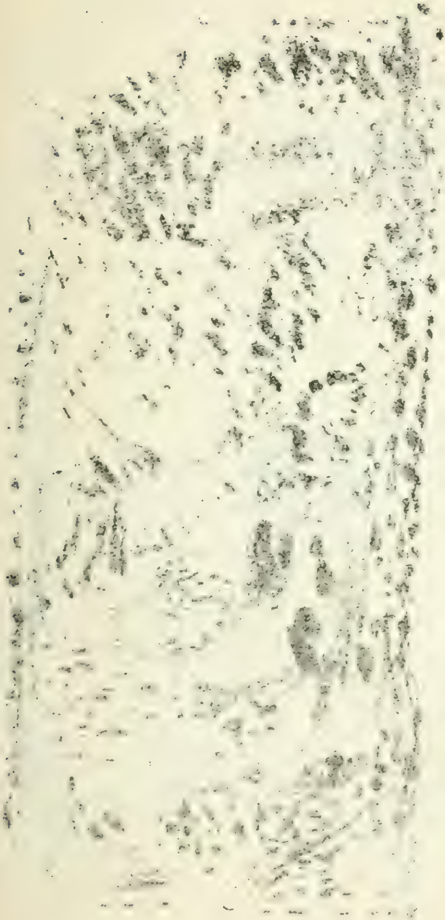
已上三品

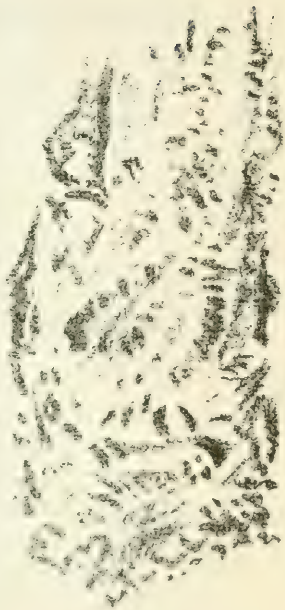
海棠菴

豊臣家時代之升

底







狩野直信唐木之印



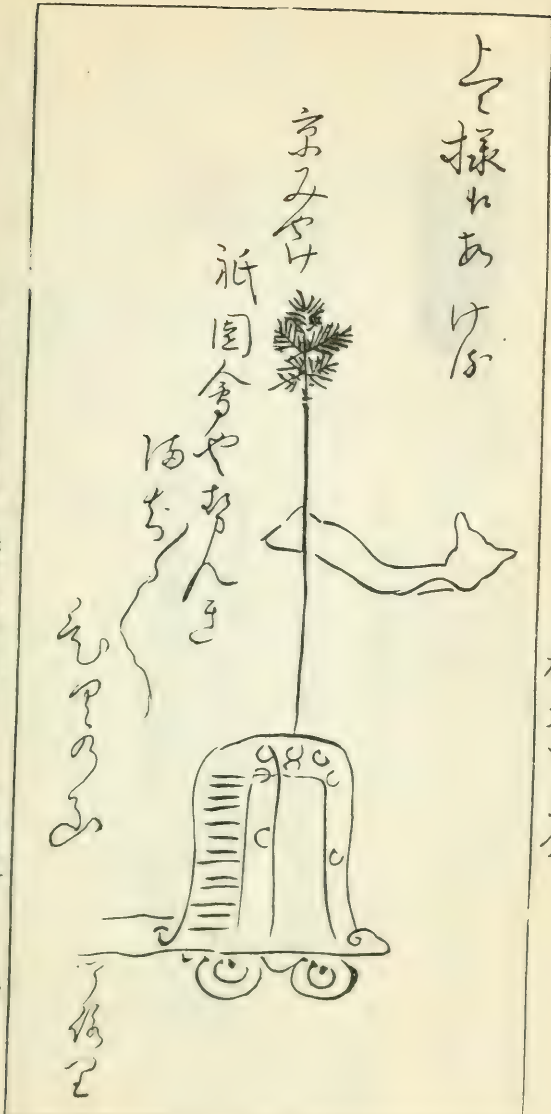


一寸四分強

狩野直信又松栄と号す法眼元信の三男民部卿法眼伯信之文禄六年十月廿一日八十歳にして没せし本朝画家系図に見えたり此印も狩野休円か由緒ありて友人に伝りしを先頃ゆゑありて予か家に蔵む

曽呂利新左衛門自画賛懸幅縮圖

竪二尺六寸五分　横六寸三分

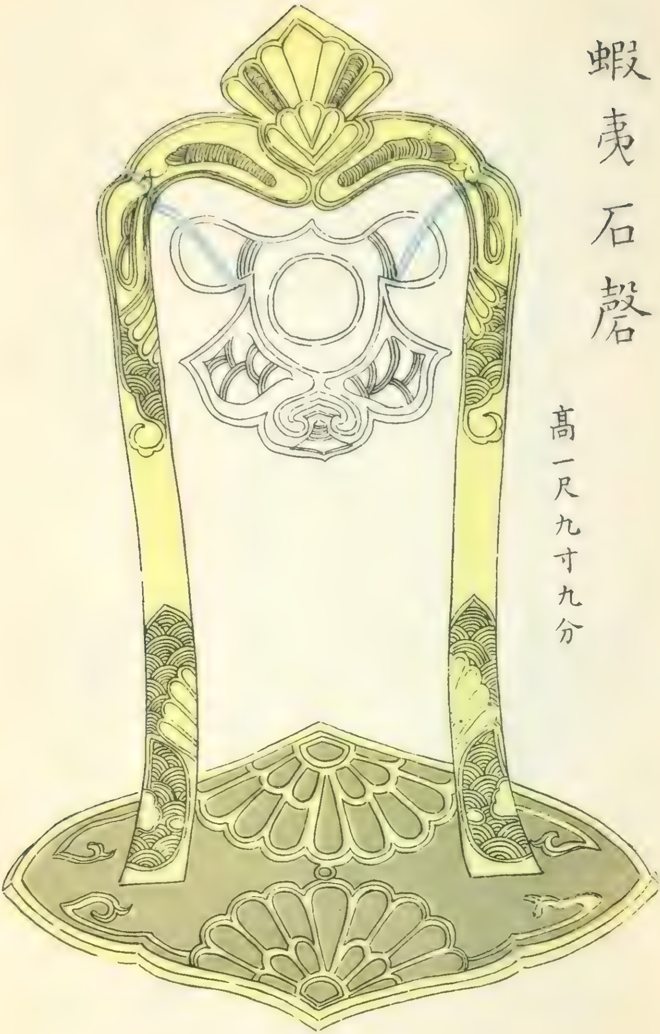


右三品内一品ハ誤テ巻末ニ出ス

文寶堂所蔵

蝦夷石磬

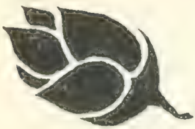
高一尺九寸九分



右石磬の摺本は所々張出しあれど右の圖と差ある事なし只其形の大なるのミなり依て畧して

豊後臼杵産花炭

この炭は欽明帝の御宇
より貢奉るよし也
俗のいひ傳るよしあり







相馬神祭圖新画巻　圖畧之　一巻

原揔右衛門元辰紺地金泥寫經　客品

依元禄巳卯正月廿六日之法會而獻納觀音懺儀一巻於華嶽寺噫一々金字寸々丹心雖無報德之續豈失感恩之誌故謹一字三禮書之以表鄙志之萬一也

原元辰拜稽首

右

嵩山樓所藏

苔梅

順徳天皇遺愛



古木今佐渡梅津村にあり

佐渡みやけに云和泉村より四里あまり隔り梅津村といふあり真法院堺
内に苔梅と号する名木あまたその由緒を新院院案するに皇胤紹運録に順徳
院承久三四廿讓位廿五廿三尊号
同年七廿移佐渡國仁治三九十二崩於佐渡四十六さて順徳院の當國へ御遷幸の旨趣ハ御兄土御門院
の譲をうけさせ給ひ御即位の後仙洞後鳥羽院を一院と申奉りやはり政をきこしめされ然るに土御門院
の新院となしませ給ひし何事も御縁なくまし〳〵けるゆゑにとかく中院と申奉らせ給ひぬ
この時順徳院を新院と申ける扨一院新院御心をあはせられ鎌倉執権北條義時を追討しかんと
と議せられけるに事露顕して東へ聞えけれは義時か嫡男泰時攻上りて両院を捕奉り承久三年五月廿五日
後鳥羽院をは隠岐國順徳院をは佐渡國へ遷幸なし奉りせしとぞ。あはれなる事いはん人もなくてありし
或しつは幸ある時梅の枝を御手折らせ給ひ御物の土へさし給ひし枝か
りそのまゝに御親ら御稱美ありしとその年を重ねてその根ひろこりて梅苗
然るに當ひ五百年の後も花咲くこと今に絶えず殊に老木なるその本の根
より四尺あまりの高サとある石垣をつきまはし囲ふ丈より上へ身木半
をとりて青苔のまとひつきて偖くみる時如く苔むして其身木を見れは
その苔をとられ其学せる枝を傘とかつきたるに似たりし花ハ薄紅梅
匂ひなし梅梢の花をいひたるなる通ハ東へ入り苔の中より蒼苔を
生しさすなり苔より花咲くか如し是を以名付て苔梅と云なるべし
上皇御所へ遷幸ならせ給ふハ都より此道の事にも梅津院と申寺へ
なかるゝ由しかれとも此苔梅ハかしこくも順徳院の御手つから植させ
給ひしものなるに崩御の後（今茲文政八年まて五百八十四年）歳星あまたを重ねても其あたりの花
されさるぞへけるとぞ今もそれ木枝をとかくもてそこしも折らず

推けれ縁無にして存らといひ入りきて、此須後園に慶しあるまゝ北面
もくまし給をめけられし彼地より吉つまに運ばしお、庭へ入れるのまれ
を讀もし得らてそかしうし神と此苔の古木として被所に至らぬ
ものおけなりるてむすべてかり紀りのうら志うも上皇の愛顧ま
しませしとら紀思へまむめてろ那く思ふべきものにやハあ
飛うしと

同に云後鳥羽院の陵隠岐國海部郡苅田山源福寺にあり陵
廟の門に二王あるさ側に華鯨を懸けりこの二王八帝の手つか
ら刻ませ給ふといひ傳ふ又むかし帝御遊の夕蛙鳴くて松風を
更しかにきこゆふ哀なるをきこしめしや

　蛙なく苅田の池の夕たゝみ聞かましものは松風の音と

詠しきせ給へり是よりさき蛙鳴ことなく今に至て志ら那り門を
出て三五歩ある處にてその鳴くこと常のごとしと云へり

　順徳院の法忌ありしとて八字に〇し後鳥羽院の四百年忌にあたる寛永
　十六年にあたるとて水無瀬中納言氏成卿勅使として隠岐の法華經を
　納め其廟前法語記一篇及和歌十首をありて御くし寺の宝としその
　記文詠歌を世にうつし伝へくめつらしかりしはこうよろしきなれ



[illegible]

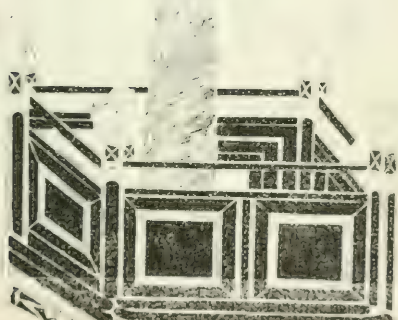
按 [illegible]

[illegible]

七十九[illegible]二千[illegible]二百二年

大[illegible]

[illegible]



薩人為予曰此係中山使購于曲阜今以贈之得將無獨知而公之于世但字畫模糊難予摹放因撤其紙背以繕完若壞字者仍舊感藉與山孟貫巧思鈎刷既竣殆復其初焉寬政庚申秋九月上浣閑脩齡謹識　與山貞一勒（此文墨本卷尾所記）

按ずるに五雜組余在嶧山見禹時孤桐於曲阜見孔子手植檜及子貢手植楷木云云楷木已朽腐斷折獨留根幹大餘檜非聖人手植者乃其遺種也經金兵火廟宇樹木盡為煨燼而檜復挺一枝於東廡間經今三四百年矣不生不滅孑然獨聳數十間輙一發生且其紋左旋而上無傍枝此為異耳按孔林十里中雲木參矣上無鳥巢無鴉聲下無荊棘蒺蔾刺人之草聖人生前不語怪乃身後著靈異如此豈亦以神道設教耶抑或有地靈呵護之也

これはよろしと紀すも杜檜木孔夫子の手つから植たまひしとあれど
志らずとあれどそれ理根ありしを再ひ生出て学徒等亦
幸ひ是柳田ふる聖人の手沢その遺種なし行也今に存せし事
実に盛衰も亦天地の気運に関る事のことも世人みてもよし
ひさしく絶てたゝありしかし吾邦にも菅公の常に梅をめで
ぬひ筑紫へ左遷の後こち吹かばとよませ給ひ梅一夜に
太宰府に飛来りしとぞそのかの梅をやつして飛梅と稱し
今その末も宰府に入滞して今も清所にあり曲阜の檜筑
紫の梅いづれ聖経の空しからざる人々の御手にて和漢の
趣を同くせしといふべし

安房漁家門戸ニ所掛
蟹殼



房総志料ニ云穂日吉濱の漁家門戸に奇状の蟹の殻をか
く土俗いふ悪鬼を避るのまじなひといふその殻甚大にし
て蹙皺毛刺本草所載の虎蟳是なるへからむ絡中華
閩中なとにもあることを委詳に沈存中筆談に見えたり
こゝくりにこれにつきて彼郷の人門戸にかゝることゝし
れ蟹殻をおかめしに吉田木下郎これを穫てまことに彼地
のさ田と猶つゝしふといひおこしけるハ門戸にかゝる蟹殻に
墨もて人の面のことく眉目鼻を画きて疫疾をさく
るまじなひもて疫の行ふこれそうけ奉てをやまやめぞ
四よりの又行ることハ出し念ことゝて書をかなる
虎蟳を虎獅子の一名とし福州志をとりて曰虎獅形虎
頭又名ニ揭哺子有ニ紅赤斑点蟹扁与ニ爪皆有ニ毛違按ニ
福州志ニ虎獅虎蟳各條ヲ出ス呂亢十二蟹図ヲ作り
テ虎蟳ヲ虎獅別名トス余ハ呂カ説ニ随テ一トス虎獅東

海中に多有り海人島蟹と呼ふと見えたり經本草及
筆談杯の文をも引出つへく覚しとなくてもえうなきなれはこゝに
もらしつ

鬼蟹 又鬼面蟹 世に平家蟹と云

故事因縁集に云元暦二年三月廿四日平家長門國赤間關の
合戦に討負入水亡ヒシ兵為解蟹是ヲ謂ニ平家蟹ト又水戸の
赤水題平家蟹詩あり夢中在帝所二十四年学ヶ化
豈意今爲小猶遺平氏名あるひは摂州にてハ武文蟹
といひ島村蟹ともいへりこれらみな俗説なれと辨を待た
といへとも人口に膾炙せる識もなくてはこゝに記れ
再云虎蟳と鬼蟹と大小異なりといへともその形状且殻の文
面に類せる同一種といふへし

右好問堂藏

山蟹 石蟹

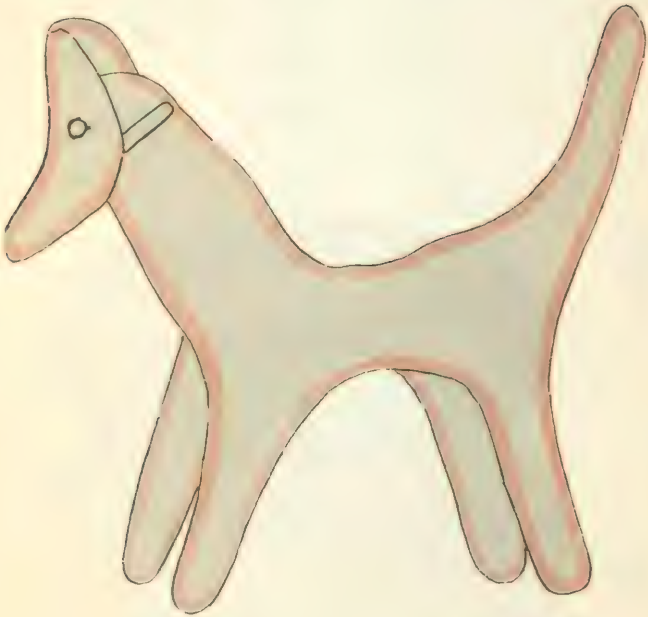
右三種虎蟳の圖ゟ出せり











文化三年六月大和国
葛下郡土庫村（土俗ドンコ）といふ所
数日日てりつゞく田畑の
中に野井戸を掘りて
ありし土中より出たる瓶
二和素焼の皿の如き古
のもくるまこれ有しを
附くれけたり

瓺彦不乱

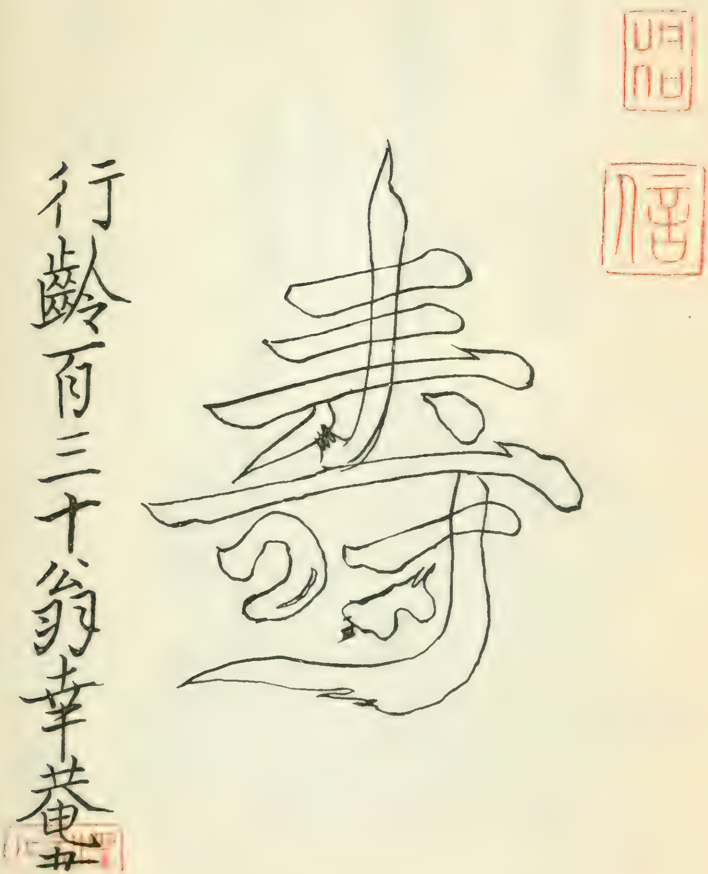


蘭秋耽奇　輪池

百三十翁章庵書

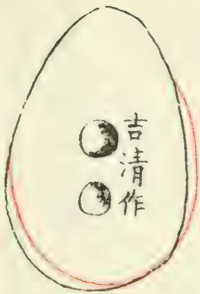
阿波國人所造桜付卵中鬪鷄

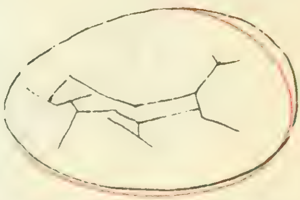
工藤祐経墳圖　并墳表　附白絲瀧圖


壽
行齡百三十翁幸菴

右壽字名高き渡邊幸庵乃書なりとかやかの諸君
の讃をも乞得しに氏ハ寶永七年十二月ハ公御感
有の隠なる庵室まて尚存生于時百二十
七歳まて上寿を得たる翁なりとそ人もいひつたへし也
正徳元年の出来

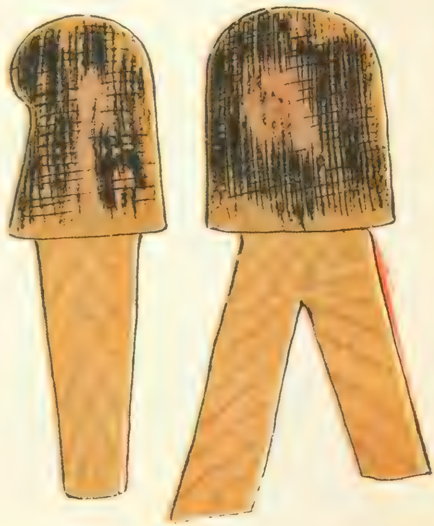
右柘榴をもて彫所なり手ずれ愛すへし





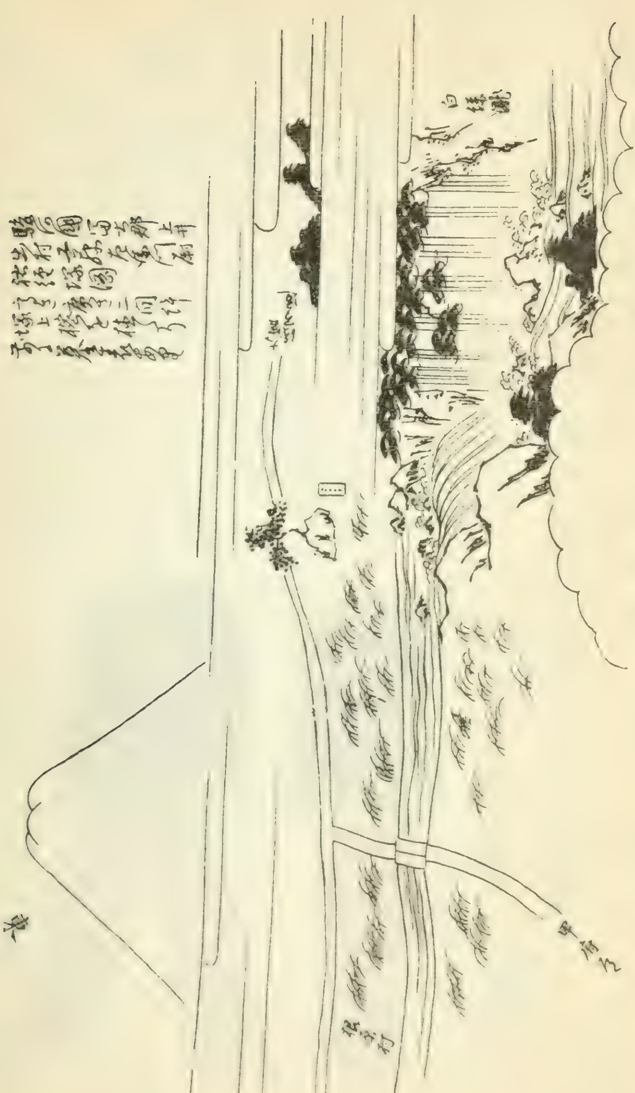


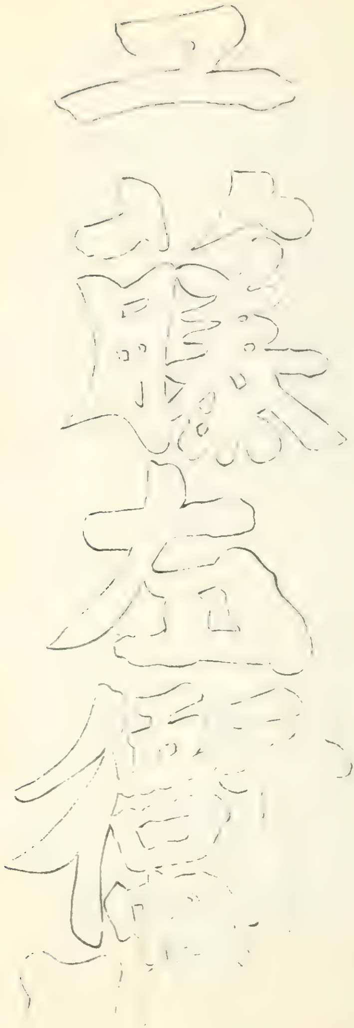
大和葛下郡葉村の
ふるき兵庫より
図のぬしへ贈りこして
むかし何か用ひし
ものなるを志らすといふ

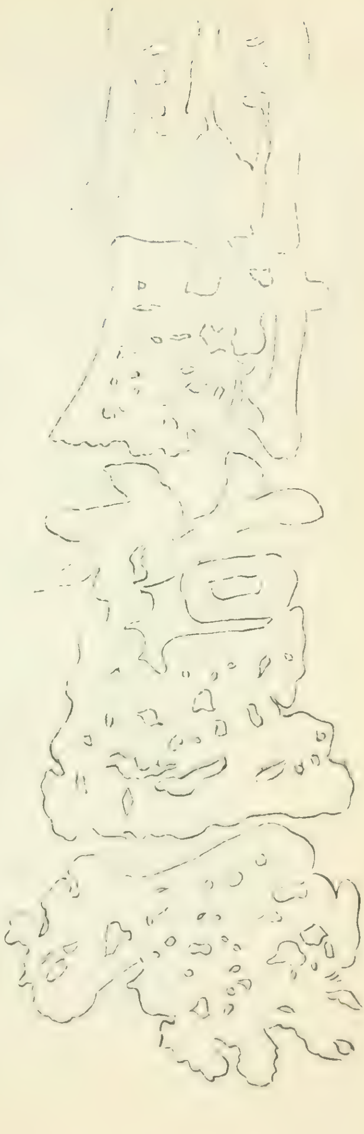


嘏彦蔵弄

此図ハ二三枚あれは素嬢の額にかけてありしを藤原氏
依て此家にも写置之







右工藤氏の塚と稱するもの墳墓にあらす又い
あやめ石を写し所持いたし候後序と候

柳原氏乃駿河國志ニ云

別ニ是ハ廣さ
四十丈ありと云ハ糸の岩の廣さなるへし

白糸瀧富士ノ麓上井出ニ在リ高さ十丈あまり廣さ四十丈ハかり也
乃溪ハ流れ落る所ニ間七八丈許ニ落る其あゆみ屋し瀧也
てゝ岩の上より小池より落て是を形川の支流をなしかくの如く
より細く流れ出るといふ糸をひくみたるか如く横ニ瀧
乃上つよハ蘇か川らそ流れ以絵ニ不書く是咲く内何ハいそ
頻なれ又山涛し此邊絲残し宇源新なと活書く
ハ紅ニ名抜入くて残る事也なしさここともみゆる瀧乃水源て
其流河ニ出て絲ニ富士河ニ落て淡海入り入瀬殊ニ高
古邊海をこえ此瀧にて和哥ニよまれたりしか不知
老ニ勝か

志て氣色合併にちりて左村へまで瀧の音のれハ氣色も
忠角をす

日暮より人出来にまゝて詠侍

登りてみるに色付なくしまれゆく瀧の水はまことの水をし
さうけ

窮一なる世ゆそをれ狩欲

たより悽く侘世ましく見る氣残縁ありて酒をと瀧みてまゝせん
水上ハ水二ツ高根よくうたれてけ先霊れ氣やけれ瀧
富士の山形見もあくしに難きも人猿ても水ふ白氣れたる
世所乃奇とも難来色力ふれハ反ゆゆるしし姫

美成　七月十七日午後巡回

東陽　八月朔巡輪

文宝

文二　九月十三日廻覧

相月耽奇録

琴嶺舎

郭公の羽　同是

杜鵑の羽　同是

著作堂云ホトヽキス郭公筒鳥はその形状ともによく相似たりこれ故に只その名を見るといへともそれ声を分さ[illegible]れハこれを辨するにまきれあつてとかくしされハにや十王経に謂ゆる杜鵑を以鴟鵂とせ萬葉集にハ謂て杜鵑を郭公に作りたり異様なるにホトヽキスハ杜鵑之郭公ハ鳲鳩之郭公又かんこ鳥といふ筒鳥ハ布穀なれハ又こ延と名くなるへしといふ十王経に所云鴟鵂ハ即これなりと畧裏に杜鵑郭公を歌に詠ふこと両三年その辨別を自得せらり敢亦人に譲らずも又是好事の一僻にしてそのるりとも只名に似たれとも多く禽獣草木の名を識るハ毒藥治病の宗要なれハ学者の辞せさきことなれとそのさくをよく昔より和漢の書に載せしものハ古人の辨説を考訂してなを杜鵑考一編を創稿し畧裏に批非放言中禽獣ノ部の下にその題目を出して至それ言甚長やの故にはナくにハ畧記せくもあらざれど唯辨別の概略のミ此下にあらはせしといふ

杜鵑寫真

鳥の大サ圖の如し　嘴のさきハ最も細く少し下のかたへ曲りたりその足の二指ハ前へ向ひ又二指ハ後にむかへり鄭公筒鳥も赤かくの如しこれ他鸚鵡猿猴の啄木鷽すの足もこれに同じ鄭公の羽及足ハ杜鵑によく似たるをもて写しおきたれ只展観にまうけたるになん



興継云曩よりわか家に杜鵑を畜れしと知人これ真を写しおきたりよりてそれをうつし置しにいづこにおさめ置たりけん失ひしか惜しきないでも相やむべきにあらざれば暗記を自らこれを写しなり異り原本と比校して違ひぬる処なくはうつし更んと思ふのみ

若作堂云ホトヽキスと郭公を鑒別せずなくなりけるかれハまづその目皮と口中とのところをつけてよくみるべし杜鵑ハ目のふちに座なくその口中黄之郭公ハ目のふちに細く黄色の座ありて口中薄紅なり且郭公は杜鵑より少し大なりその他ハいづれもかはることなし又杜鵑ハ四五月の間昼夜をそ毎にその声を啼くものなりその鳴く声筒を吹くが如しよりて筒と呈といふ一名ハ勧農鳥これ之をいへり

ホトトギスの羽



疱瘡の痲ニつきるにこの羽をもやし粉末ハ傷に忽ちなくなる妙なり又痘毒の眼に入らんとするに杜鵑霜を水にとき洗へば効あり又痘の餘毒ありとなりて久しく癒ざるその瘡墨く腐りたるに杜鵑霜をふりかくれハ愈て肉をあぐること速之いまだも経験の良方なりとていへるにこれハあらざるものかし

郭公とよく相似てその羽柿色なり又杜鵑ハ春の季に卵をウグヒスの巣にうみおとしてウグヒス即これを哺(カ)へして育るなり又郭公ハ卵を頬白の巣にうみおとして頬白これを哺して育てるなり又鳩鳥ハ卵を八哥(ツグミ)の巣にうみおとして雉子に哺して育るなり然れども卵ハ二つに限る也亦さうなり唐山の鴉鴟(クワツコウ)ハ鵲の巣に卵をうむ日やそのうちに詩経に所見なり是をもしめ卵をこうまんとするとき巣の中なる卵を撥おとし捨て巳が卵をうみおくにウグヒスなど自分これを知なく其らの卵なりと思ふて伏せるなりこれらの事も有がちなく経験あるなり猶且つには別にしるすべし

杜鵑寫真

鳥の大サ図の如し　嘴のさきハ最も
細く少し下のかたへ曲りたりその
足の二指ハ前へ向ひ又二指ハ後
にむかへり　郭公筒鳥も
かくの如し　これ他
鶺鴒猿子等啄木
[illegible]すの足もこれなり

聞し郭公の
羽及足ハ杜
鵑によく
似たるとまて
写しがたし
只展観にまうけたるに
なん



興継云最まへが家に杜鵑を畜れしと聞て[illegible]
真を写しおきたりよりてそれをうつさんに
いづこにおさめ置たりけん失ひしかど[illegible]
ずいでも相やむべきにあらざれば暗記をとらく
これを聞しなり異り原本と比校して違ひめる
処なしはうつし更んと思ふなし

若位堂云ホトヽキスと郭公を鑒別せずなくなりけるあれハまづその目皮と口中にこゝろをつけてよく見るべし杜鵑ハ目のふちに塵なくその口中黄之郭公ハ目のふちに細く黄色の塵ありて口中薄紅なり且郭公は杜鵑より少し大なりその他ハいづれもかはることなし又侍く鳥ハ四五月の間田舎にて朝毎にその声を啼く事之その鳴く声筒を吹くが如しよりて筒鳥といふ一名ハ鞘なれ鳥これ之をいへり郭公とよく相似てその羽柿色なり又杜鵑ハ春の季に卵をウグヒスの巣にうみおとせりウクヒス即これを孵して六月に至る又郭公ハ卵を頬白の巣にうみおりて頬白これを孵して育守して六月に至る又筒鳥ハ卵を八歌(ツグミ)の巣にうめりツグミこれを孵して育る也ともに卵ハ二つに限る燕も亦しかりなり唐山の鳲鳩(クワクコウ)ハ鵲の巣に卵をうむにやその旨を詩経に所見あるもしめ卵をうまんとするとき巣の中なる卵を擢おとし捨て巳が卵をうみおくにウグヒス頬白これをしらずしてその卵なりと思ひて伏せる也これらの事も予がしばしば経験したる也猶具には別にしるすべし

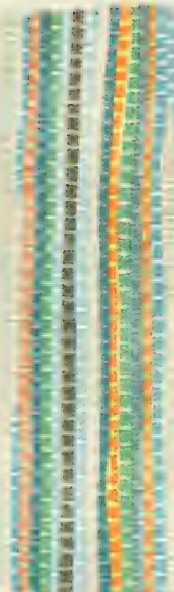
ホトトギスの羽



疱瘡の癖こつくるにこの羽をもて搔ば跡ハ消ゆこと忽ちなる妙なり又瘡毒の眼に入らんとするに杜鵑霜を水にとき洗てしるし洗へハ効あり又瘡の餘毒ありとありてくるしく愈ざるその瘡へ其ぐ臨ゆるに杜鵑霜をぬりくれハ愈て肉をあぐること速かなるも経験の良方にしてうたがふてにハあらざるべし

佐渡のさきおり

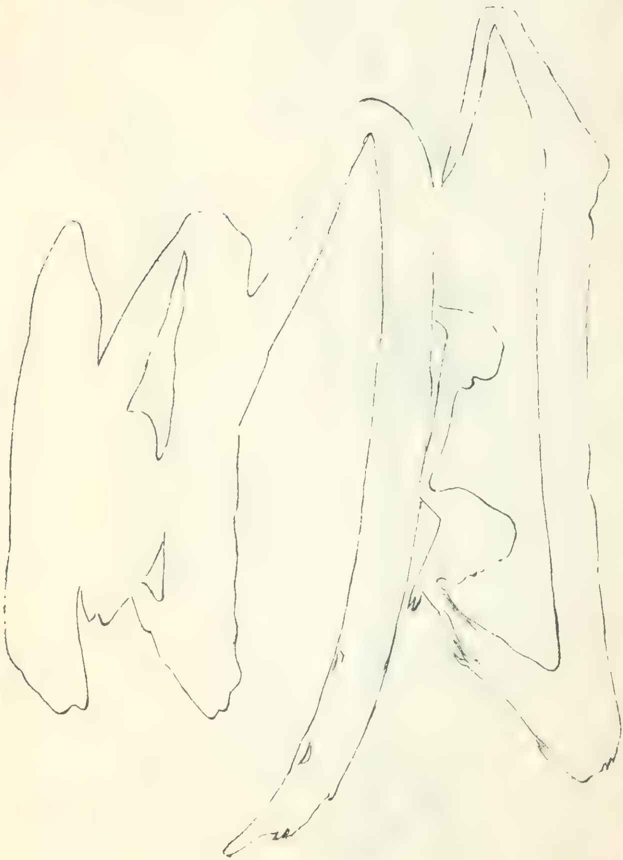
著作堂云佐渡の村婦ハ江戸なる婦女か古衣店より渡し遣す布の切れ衣の海松のごとくなりたるを買とりて細く引さき山苧を緯として経てぬきとして席薦のごとく織なしたると常服とし又どてらにもなすハ胴着の袖にもなる衣のつれをさきぬきといひ是を織るをさきおりといふサキハ裂衣にて引裂衣織るの義なり佐渡事略ニ賤丈賤女ハさき織といふものを着たるさき織といふハ江府なとの古き下賤のきぬ捨る木綿のつれのこまかなるを當国へ船にて得て送るこれを

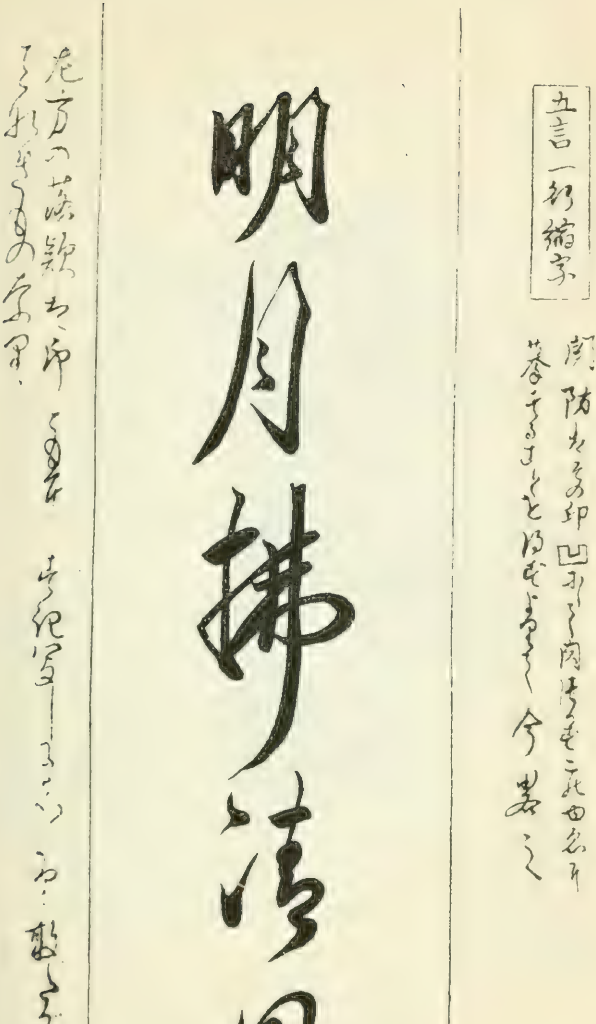


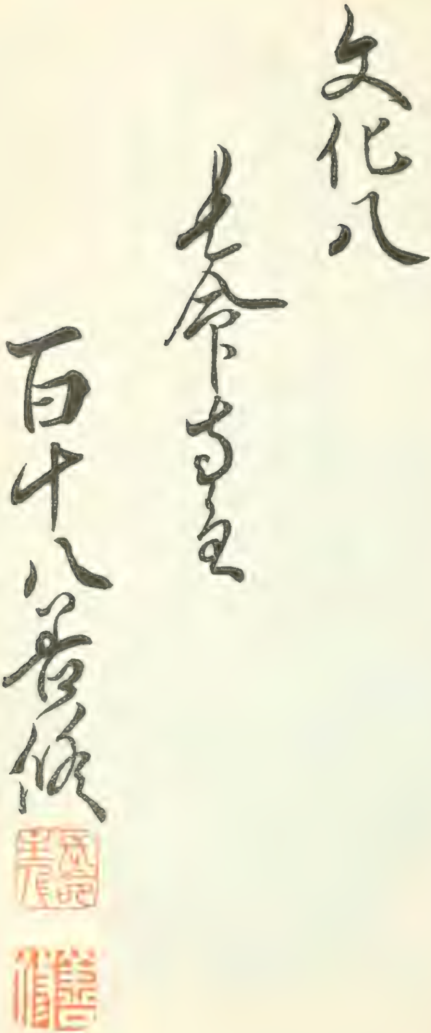
さき裂といふそれを山苧をもつてあみなし道服のやうにして着用すといへば即衣なりこれらなれハ其ふハ異なり言りあへりしかる京雛の記りのせられハ思えし

壽僧善修書

五言のうち一字を雙鉤て影写も縮字及落款を下に摹写す




五言一行縮寫
明月拂清風


文化八

僧善修ハ最後改名禅修盖以有所避也伊勢國渡會郡内城田郷長原
村長命寺の住持なりしがその傳ハ拙著放言中に載せ
たれバここにハ贅せず文化九年壬申冬十一月日寂ス
享年百十九歳同寺に葬るかしこにてありしこの書ハ
此善修と思ふ前年の筆にてそのおのれ妙なる行
状もさらなり法をまもれるも書法をしれる書ちを
見つむべしこの翁ハ琴嶺ぞ蓋世にかくれしけるまま
そのまま出せるにつけて三くさの数かずにしるしおく
著作堂主人識

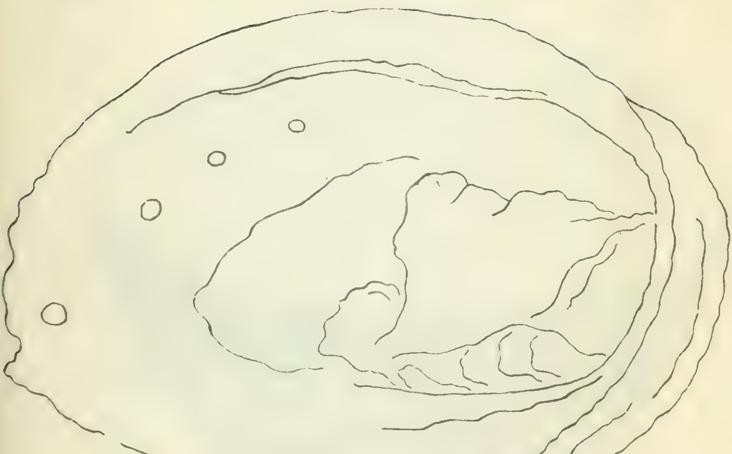
右三種

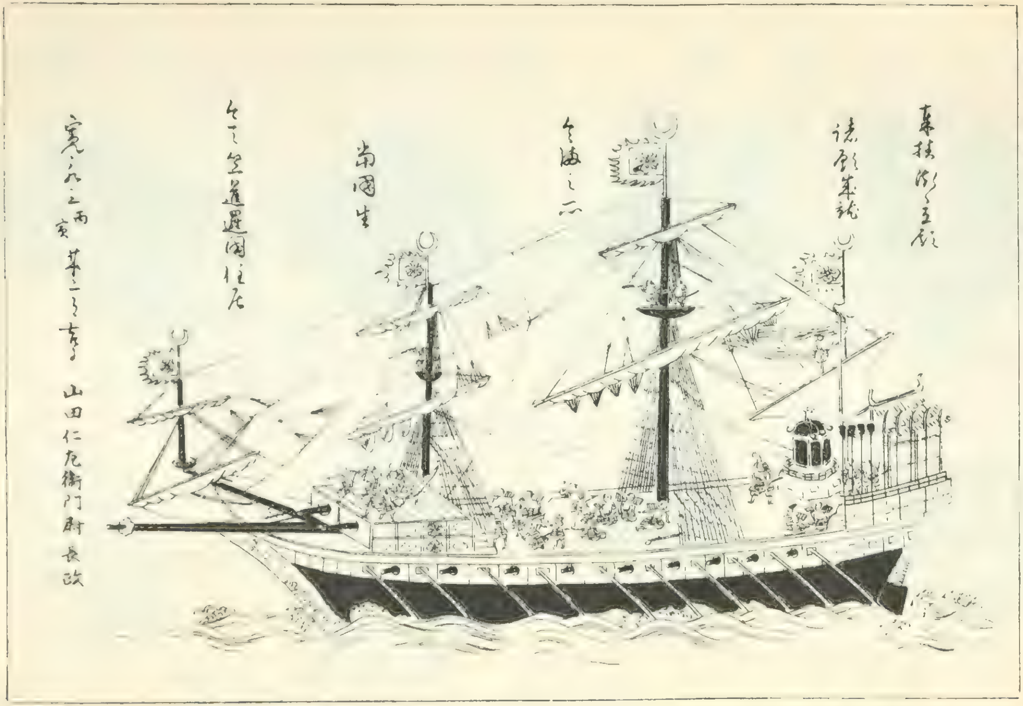
琴嶺舎蔵弆

奥州瓶岡山古陶器



天然橋蚫貝





駿河國淺間社江獻自暹羅國額之繪

山田仁左衛門駿州府中木藥屋小西源左衛門祖一類暹邏江藥種仕入渡海シ処乱世ニテ日本ヨリ加勢ト偽仁左衛門彼國之人江日本風ノ甲冑ヲ着セ勝利ノ後仁左衛門ハ彼ノ國王之聟トナリタリ故ニ駿州淺間ハ氏神ナルヲ以テ右戦船ヲ図額トナシ是ヲ社ニ納ム寳暦年間余父香山長俊駿府戍勤ノ時神主神宮兵部ナルモノニ請ヒテ全形ヲ摸スルコトヲ得タリサルニ明和ノ頃淺間社焼失ノ時此額モトモニ災ニ罹レリ惜ムベシトス其後天明三年駿府在戍ノ日此ノ摸本ヲ貸テ又新ニ額ヲ造レリト云

右三品

榊原翠雲記

台谷蔵弆

三保松原一文字石

篆



八分



真



行



草



挑法



露鋒



藏鋒



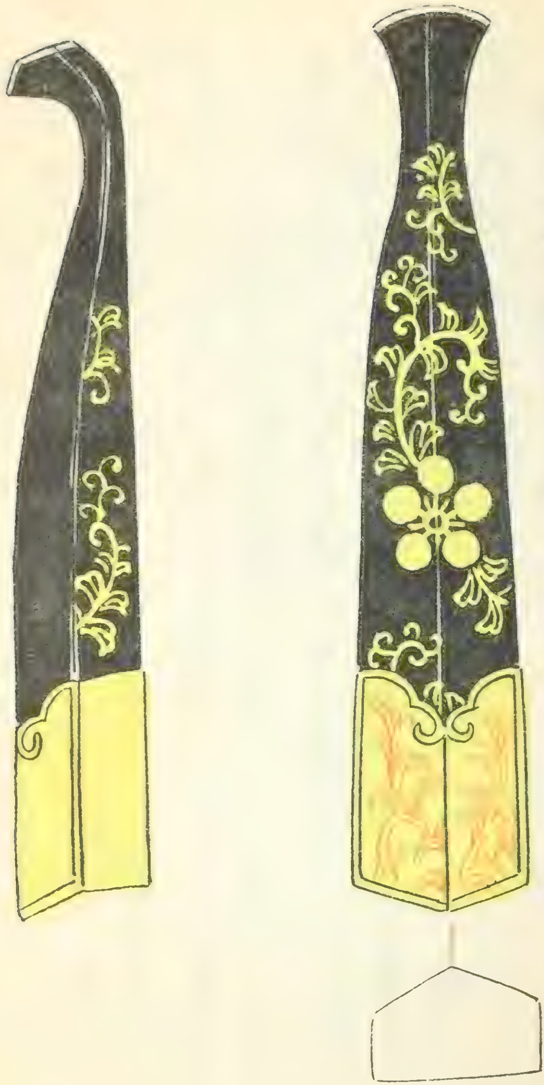
仲商耽奇　輪池

墨柄

常宮鐘銘

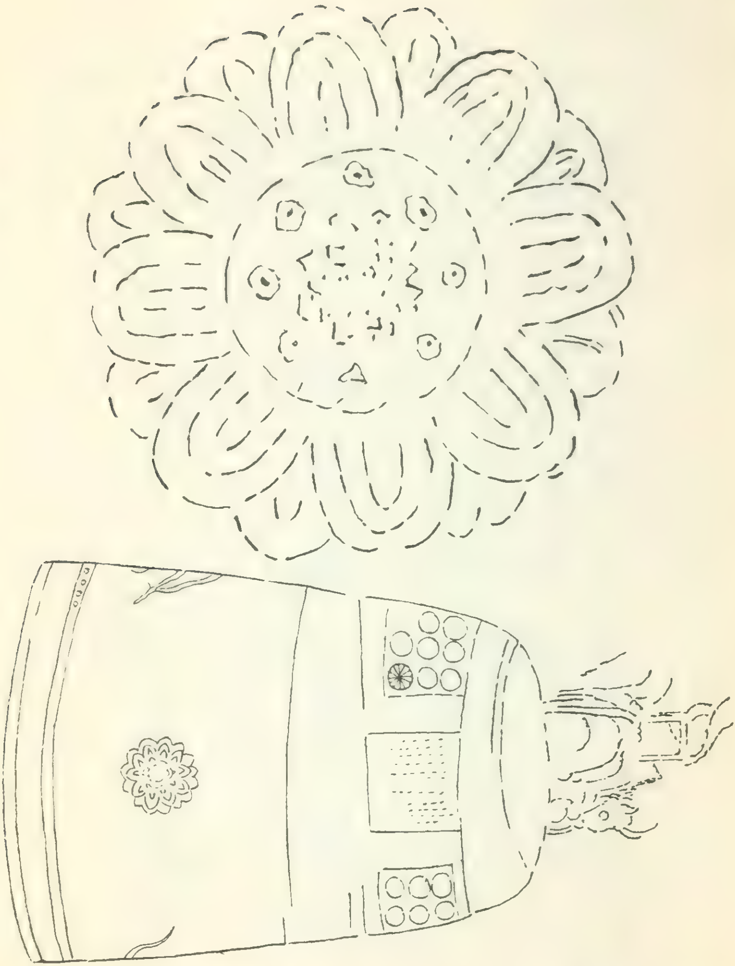
清人大小詩

墨柄



予かつて延喜圖書式に據て墨を製するに長さ
曲尺五寸廣さ八分あり式に厚さを記されされは意
を以て二分五厘許にして定めて後古鑄の墨
柄紙こしに廣さ厚さなどの墨と比付きと合せてその
まゝよりて古製の徴付へまゐりたるを成まて今以
墨柄は式の寸からよりも様し是様人の言になく嘗
なし　翁かさん曰に曰古人の墨柄を用ひしハ高宗の
急ならよりて墨を捌くつゝすふよりて短きを
得く深時の用ゐしなり

墨を柄と仰るハ延喜式にみえたり



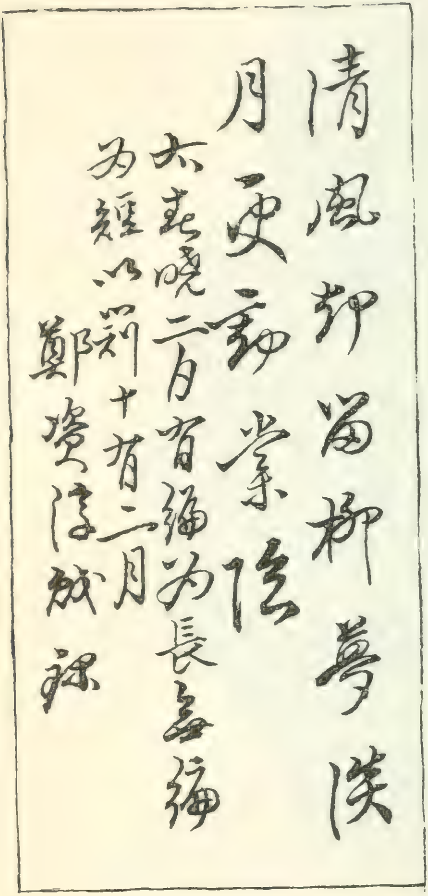
越前國常宮鐘圖

太和七年三月日菁州蓮池寺
鍾成内節傳合入金七百十三廷
古金四百九十八廷加入金百十廷
成典和上　惠門法師　緋糸甜法師
上坐　　　則忠法師　都乃法昧法師
鄉村主　　三長及手　朱雀畎杀
作報舍　　宝清軍師　龍碎軍師
史六　　　三忠舍知　行道舍知
成博士　　安海哀大舍　哀忽大舍
節州坑　　皇龍寺　覺明和土

藤貞幹好古日録云、太和新羅年號、唐貞觀廿一年丁未、太和元年也、東國通鑑云、新羅景德三十六年、（唐肅宗至德二年丁酉）十二月置九州、改郡縣名、菁州為康州、領州一郡十一縣二十七、

清鄭資淳道光五年乙酉長短月詩句

以紅紙書


清風抑留柳夢淺

月更動棠陰

大歲晚二月首編為長短編

為短以翌十有二月

鄭資淳拙稿

乙酉八月分

筑後州三毛郡埋木



余この古木を筑後柳河ノ立花侯封邑の藩士より得てその来歴を
問ふに筑後州三池郡日本紀御木に作る和名抄三毛に作る立花侯旧領當今公より御預地なりの土中を堀りて
丈餘ほりし年前やうやく得るを得りこれ木の長サ幾丈なるを知らずて
土俗傳て曰景行天皇巡狩のとき既に僵迹ありし楠の大木なりと云
に日本紀景行紀に云十八年秋七月辛卯朔甲午到筑紫後國御
木居於高田行宮。時有僵樹。長九百七十丈焉。百寮蹈其樹而往來。
時人歌曰阿佐志毛能。瀰概能佐烏麼志。摩弊菟耆弥。伊和哆羅
秀暮。弥開能佐烏麼志。爰天皇問之曰是何樹也有一老夫曰是樹
者歷木也。嘗未僵之先。當朝日暉。則隱杵島山。當夕日暉。覆阿蘇
山也。天皇曰。是樹者神木。故是國宜号御木國云々とあり景行帝
十八年より今文政八年に至て凡一千七百三十八年景行帝の時僵あり
一樹これハ神代の以前幾星霜をか歴しならん二千年外のものとすべき

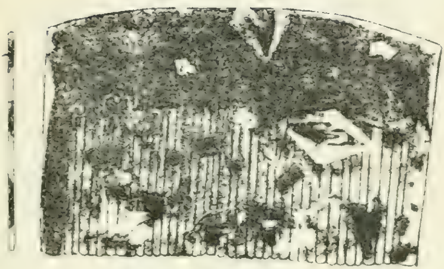
ことも証無きの〻治土俗ハ此木の名をしらざるをもて楠なりと以て和名
類聚鈔を案ずるに第百二十草木部に云擧樹注に本草に云擧樹ハ
和名久沼木日本紀私記云歴木とも見へたりクヌキクスキ相近きをもて土佐
ところ人誤りしなるべし　又西尓比西礼ハ楠といへれど二千年余
の木も何木なるよしぞ　然れバ幾くとせぞ二千年も歴ぬ處紀まの八
なきは情あるにけれ猶景行紀に載たる如く猶當朝日暉則隠杵
島山當夕日暉覆阿蘇山の条皇輿の図を閲するに杵島山ハ肥
前の杵島郡にありて三池を去こと二十里余の處西阿蘇山ハ肥後の
阿蘇郡にしてやはり三池の東二十餘里にあたる處也　覺申杵二千
年外のもの金石と化しも得易かるべく疑ふ事にあらず殊に神代
の鑑定ある人の蔵せしとある八埋木ハ何の歳中とも定めかたきを識
賢鑑別を賜へかし――



此木佛ハ相州鎌倉松ヶ岡東慶寺の𢌞下二階堂邨理智光寺（鎌倉志云五峰山と号す大塔宮土の籠の東南にあり開山ハ願行牌に當寺開山敎謚宗燈憲靜宗師とあり願行ハ牌字といへり）の本尊鞘阿弥陀（鎌倉志云作者不知腹中に名仏を蔵むるゆへに俗呼と鞘阿弥陀といふ）の印相乃上に久く侍る由在りし由知りし次何某寺の佛なるや疑くも阿難らやましハ弥陀いつこの佛背に構あるまし匠仏の為なさハこのうに附居すちるそのいわや仏と仏工の刻せしそのうちも見へ渡るしくも開基願行の作にやあらん歟

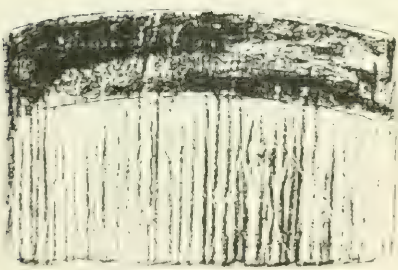
享保年間櫛

金



むて落し

摺本



右の櫛ハ余か家祖思恭の妻なる米田氏の遺物なり享保
年間のものなるか去年十月耽奇會にて一日行篋の
底より出しくるに如し
德廟の質素を用ゐ給ひし頃なれハかく薄きにやあらん今春
松蘿館にて出せる櫛と形も似たれと厚薄の違あるをもて今
日の一品に充るなり辞

右三種

海棠菴藏弄

清上官像

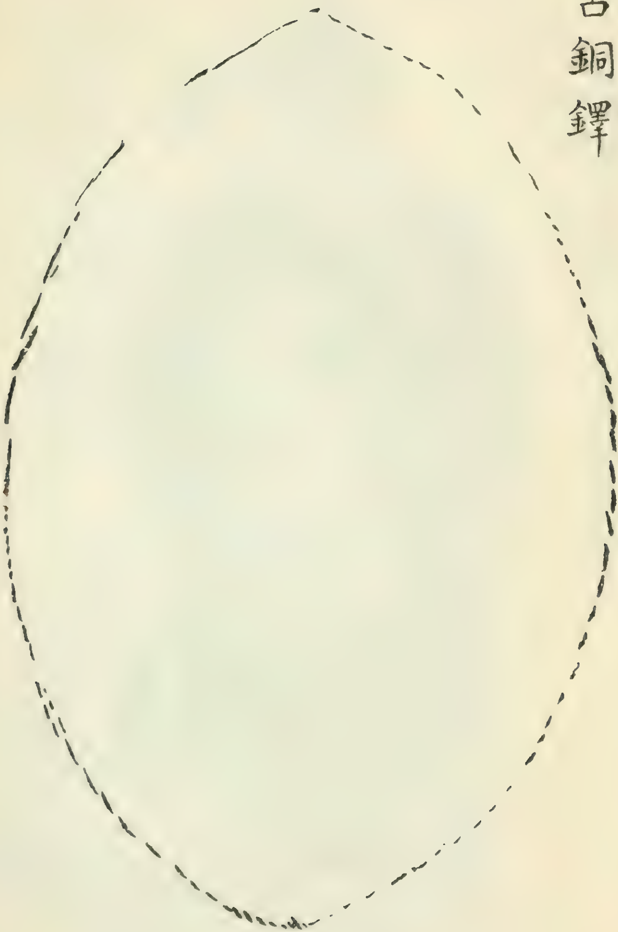


清上官婦人像

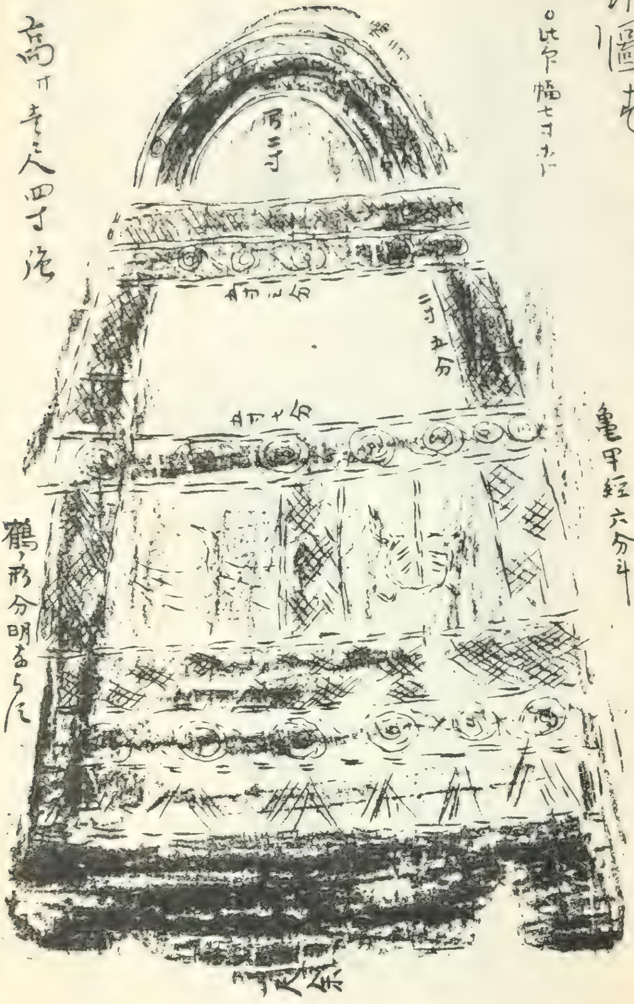


右二幅對畫箋紙全幅傳不詳

古銅鐸



古鐸の摺本形分明ならさるを爰にしるし依て大略を縮圖せり



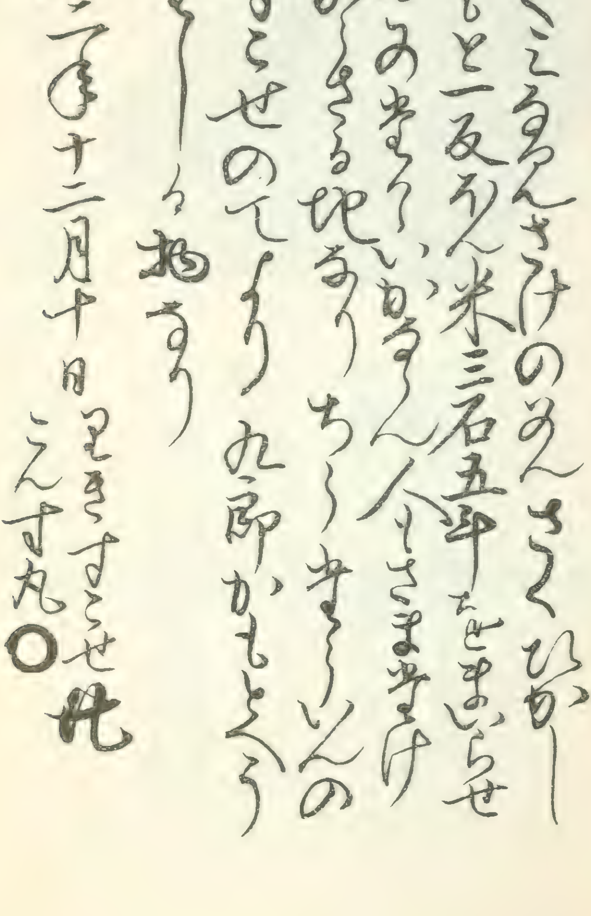
雷斧五枚　會津産

五枚共元本ハ摺形と寫モ形ヲ遺尚るべし

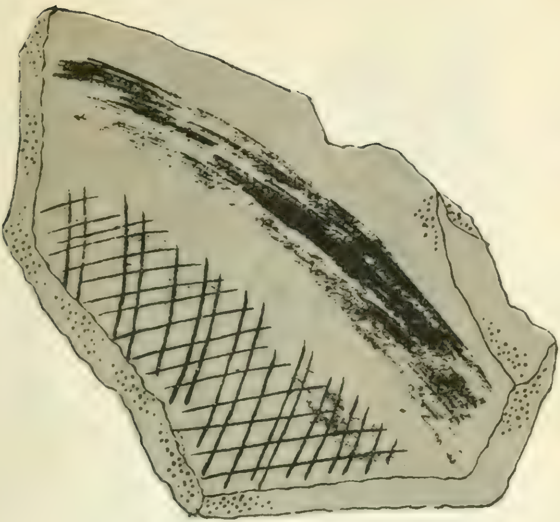


右三種　写山樓蔵本

建武二年古巻



中ちくこうろんさけのみんさくひかし
のありしもと一反ろん米三石五斗たゞをまいらせ
候ありこみやういかりん人りさま申け
あつかりまる地ありちし申しんの
まこすこせのてより九郎かもとへ
ことわ申し候抱あり
けんふ二年十二月十日まきすこせ（花押）
こんすけ丸○



磁盌片

鎌倉頼朝屋敷の舊址より穿出

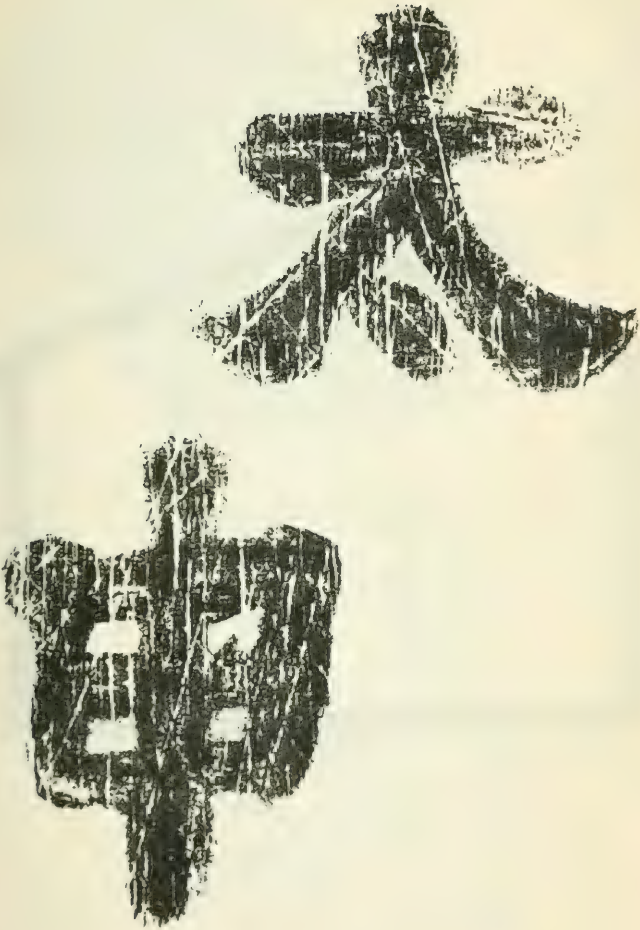
予このみて山葵擦数品を藏弆す已ニ先會甲申九月十三日ニ出せり其中朝鮮燒のもありその製これと同し然れとも今こゝの一片をもて其全形を察するに周廻二尺余もあるへし山葵擦ニハやゝ大也蓋し古擂盆なるへし猶博古の後考を俟つ

扁額



壹尺

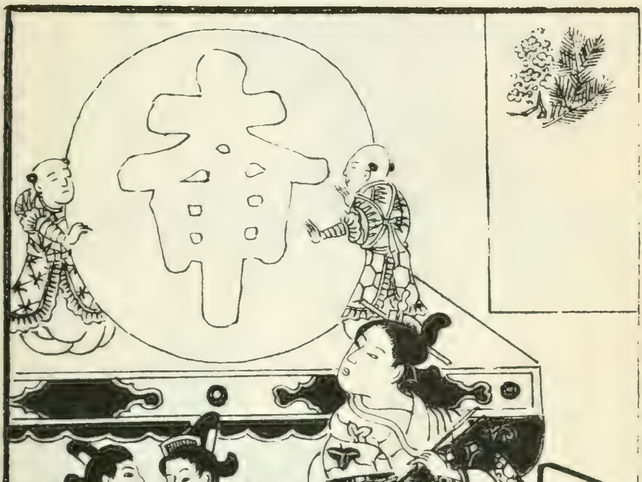
壹尺四寸



此額ハ高田穴八幡社前ニ掲けしを後西原梭江翁の藏となりし残本ニ贈られたりと云
太申ハ三十間堀ニ住める木商和泉屋甚助と云ものなり太申ハ
その表徳之家富豪ニして一時ニ名高き人ニて残るも
られ何事も此額數百枚を造り江戸中の神社佛刹ニ普く
納免已ニその名ハ今ニ知られて残りとめし之

太申櫻記一巻 井通熙文 三井親和篆 宝暦十年刻本

これも太申が淺草寺の境内ニ櫻樹數株を植てこれを太申櫻
と唱へそのころ高名の文人ニ文を乞書をも需め上梓して發行
せし之猶芝居へ転じて太申櫻と云浄瑠璃をも作らせ又道
中の雲助ニ金をあたへておほんのナア太申さゆハ櫻のおす
ぎといふ唄をうたハせしてとりなどもしたといへり

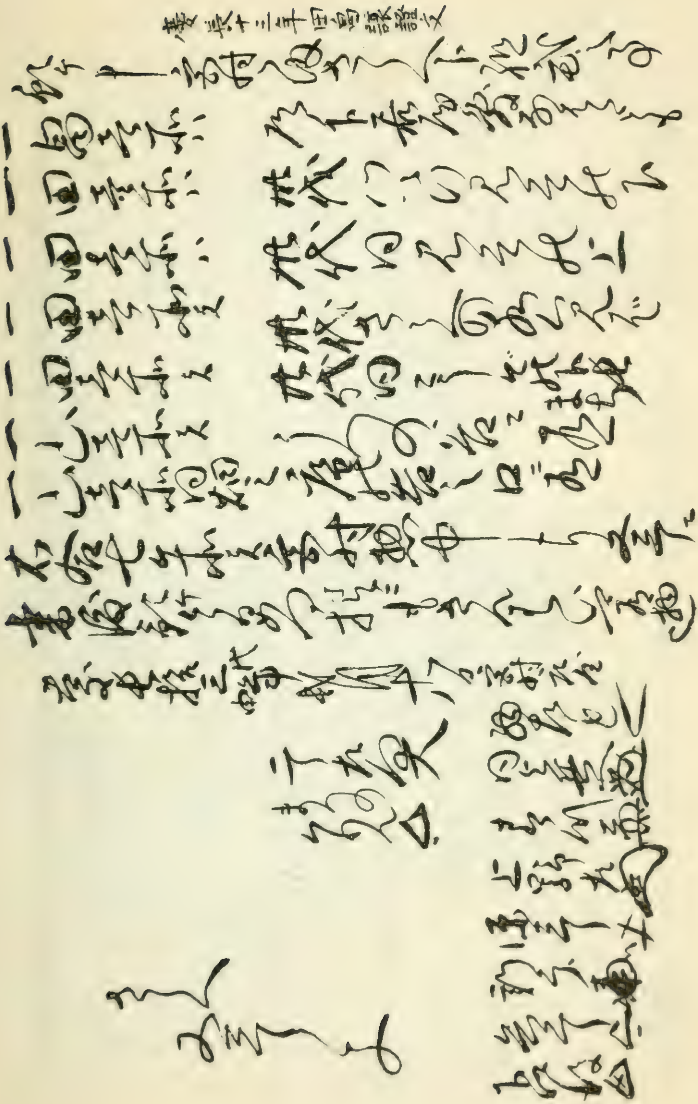


上 十四

花よそほひ二冊明和二年所刻画工富川房信そのころ吉原廓中にて名高き遊女をゑらみけり其中七月燈籠の絵の雪まろめに太夫の文字ありこれは太夫の頼によりて書せしものなるべしこれ又太夫の一遺事といふべし扁額をそへて穆紅翁の賛ありしをおもふに太夫の詞書のごとくかく分もたましき人の志ありて話柄とするはその名を弘まりたるは馬鹿ものとて人のわらひとなるはかなき事どもにて聲名の揚りけるは自ら其名を成さんと初よりの志なき事あらんやさりとて太夫が事くはしく所為を詳にして明暦の穆紅翁の為めに記し贈りし後は昔ものかたりとなりて此冊子のみぞのこれるといふべし記すのみ

安政乙卯八月はしめ　右三種

西岡堂蔵弄



賣茶翁所藏重風爐

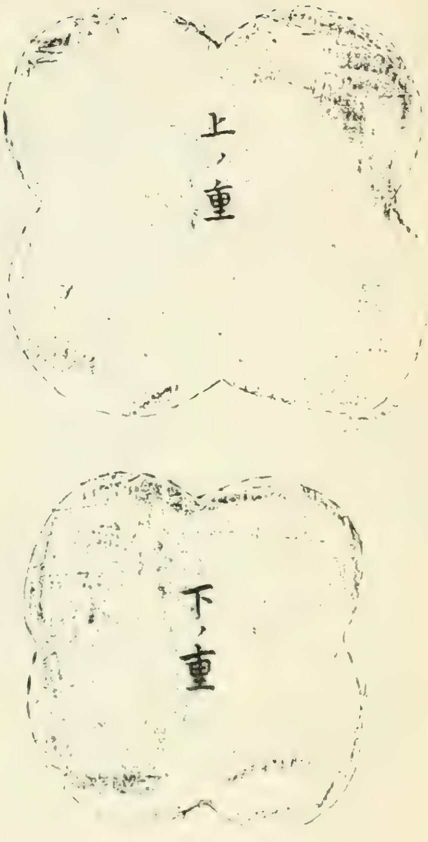
松籟遠外

茶器高懸

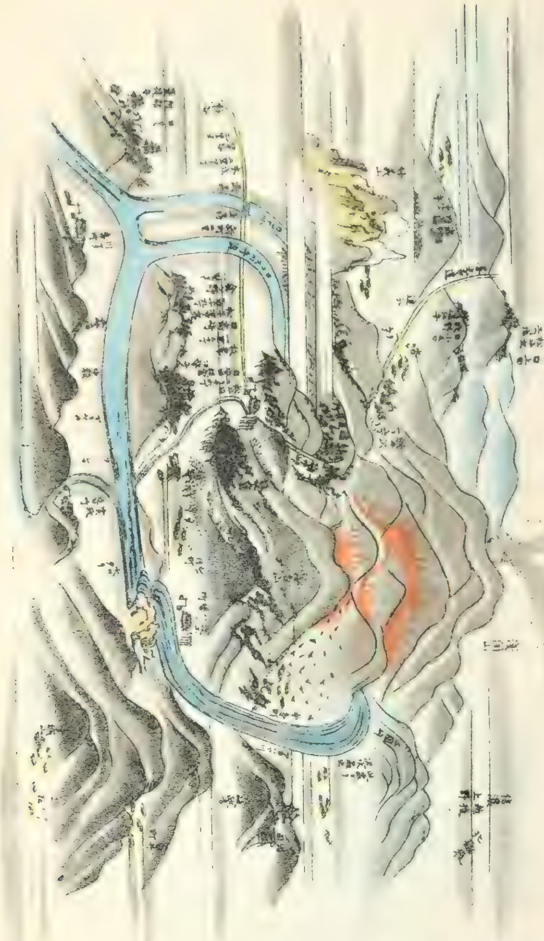
賣茶

翠陰樓濤





右赤銅にて製造し文字と雲形ハいつれも打出し也てあり
のし也此器賣茶翁所持といひ傳へられと後にハ好事のものおほ
うつしつくりのこせし先翁の好同も是れ出来けれハ一葉
茶器の一表の関とならハしとそ賣茶翁携ふ出へ好處し



天明三癸卯年信濃浅間燃出之図

美成　重陽前一日晡時迴

東陽　九月十七日巡達

文寶　同廿三日順廻遅延

桂月耽奇

琴嶺舎

竪小尺六寸余



横八寸八分

元本まは表具せす折返してあり其跡を照出して縮図せるも野有の印章の左
左のまゝし



野有自画賛

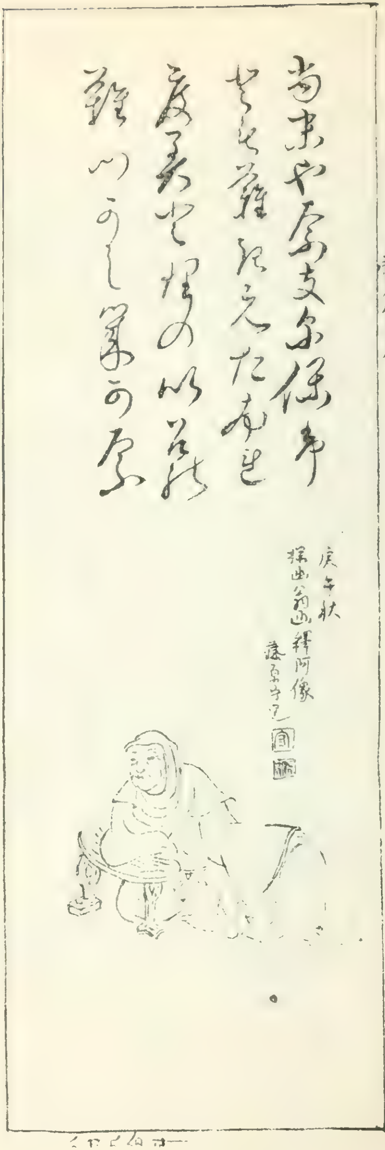
若凡考新記に云野有ハ（古今書画便覧作也有ニ非なり）尾張の士横井孫右衛門の俳号なり常俳諧をよくし且滑稽ハ俳文に妙なりその著述の鶉衣世に行るゝ此一幅ハ京和泉屋市尾張の名古屋に旅ねせしとき同藩の士安藤氏（林蔵蝦夷三四）其の折くれたなり当時安藤氏の云野有翁の自画賛は当地といへども極めて稀なり八

野有翁の志くしたしかきあるらしの子細ふうれ庵と鈴ふ年七十にの日ふくるかゆるの中何の身それ出てゆかれぬと気ひしかれやのそ出てゆしくとし本秘蔵の書あまてとて君はまゐせんとておくられき得本かくのこと

く也椀ハその上つ讃に疑ふまじきものなり（再按野有猶誤也有　野有也有蓋一人耳）

是より図ハ縮図す

壹尺八寸五分



探幽画釋阿像

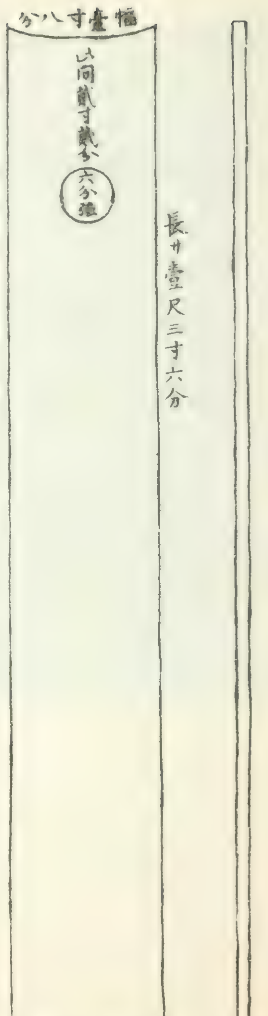
文化七年庚午の秋荒木適斎乃摹刻せしを實父…寸之適斎の所蔵也そはおほくて
聞もせさといふる何好事顔賂して…適斎蔵ものして見れハ京東ハちる此板も今何人の
手に傳はるを知らず探幽の画ハ多けれとも此画像のめつらしけれハ爰にのせて傳ふるなし

前の全圖

藤原守道



江村専斎助老摹造



摺本別にあれど縮図して遺びし所なし ただその
長短のまゝに模しのこしおくものなり

江村専斎老人遺物助老一名鳩杖の摹造

この鳩杖ハ寛文四年の春のころ
霊元上皇御くらゐにおハしましける時江村専斎翁 [illegible] をとらせ給ひ
たびしとぞ恩賜の一つなりけるとつたふ 又
近習なる人模造して厳村篁斎におくりし
家蔵におかくるゝなり

豊太閤御印　客品

この印ハ故ノ法眼桂川氏の所蔵之といふ印様ハいまくつえほそを印せし可樓を近て屏風の下張中より得たりしかは寫しとして載おきしなり



右三種　附客品一種

琴嶺舎蔵弆

右御印缺之古唐紙ニ作ナリ肉池純深ニて有文字も缺タリ
其大畧ヲ寫之

美成　重陽前一日晡時過

東陽　九月十七日晡過

文寶　同　廿三日晡過過歴

乙酉竹春耽奇

著作堂家品

平安角鹿書李庵

文政八乙酉年八月耽奇會

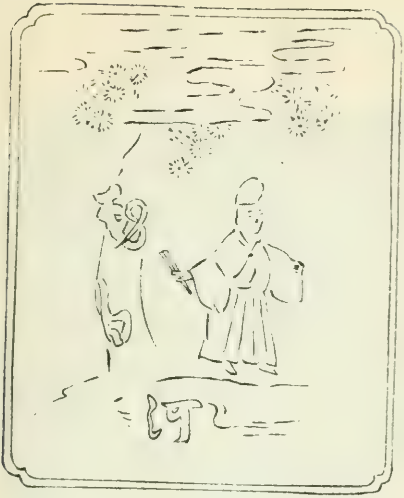
花白河ト云硯

竹村

茂枝

地志所出ヽ上点画

花白河三十二号丁字





花過し散桜

臺指桐之竹箱

花白河

慈照院殿政所物

小堀遠州侯書付

城州八幡瀧本坊所蔵

京角鹿桃窠傳寫

南朝後村上天皇與国四年壬午十二月製
石帯之金物



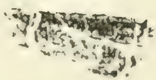


興国四年
十二月　十日
不明

十ノ字カ吉ノ字カ

下ニ穴アリテ
中空虚也

銀ニ似テ
銀ニアラズ



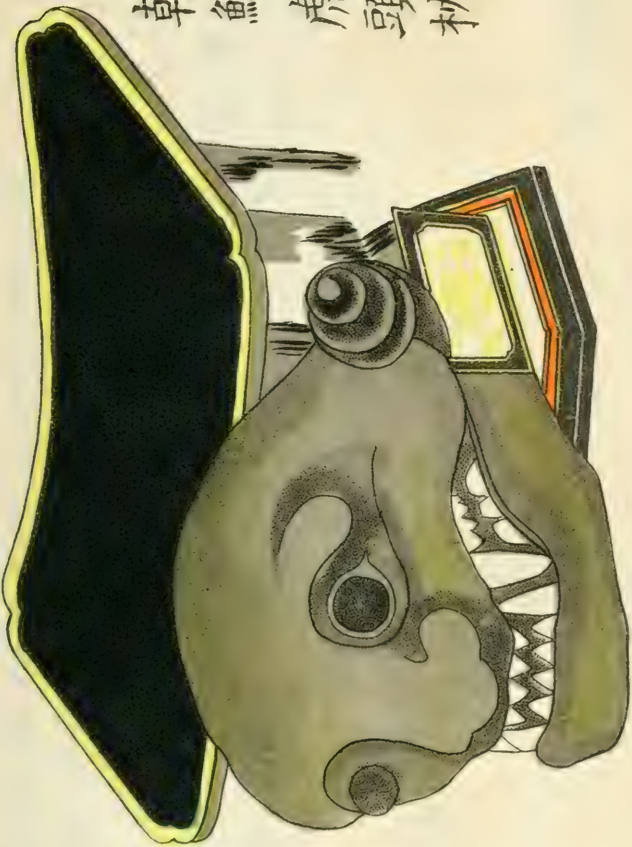
槐記ニ云今ノ世ノ石帯ハ便ナル為ハカリニメ古ノ石帯ニ非ス古ノ石帯ト云フモノハ石ノ帯ニ環ヲ付テ其端ヲ一方ニカケテ結ビニシ其餘リヲ後ノ腰ニハサミタルモノナリ其環ノ古唐物ヲ御前ニ御所持ナサレタリ
今此石帯槐記ノ御説ト符合スルニ似タリ

一舊家所蔵

平安　角鹿桃窠

文政八年酉八月耽奇會

右二品 朝鮮虎頭枕



平安 青李莽

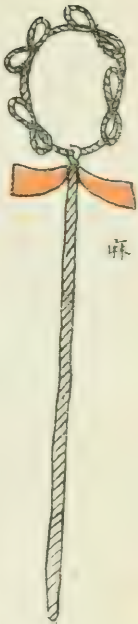
早乙女作陣笠



右三種

輪池堂藏弆

筑後國上妻郡釜屋宮水難除守護



神主大石伊豆守

此守護傳來の説ハあるべけれど未だその詳なるを
聞ざれバもらしつ 其形状ハ尋常にあらずい
かなるよしともしりがたし思ひえ侍ず 猶後考を俟

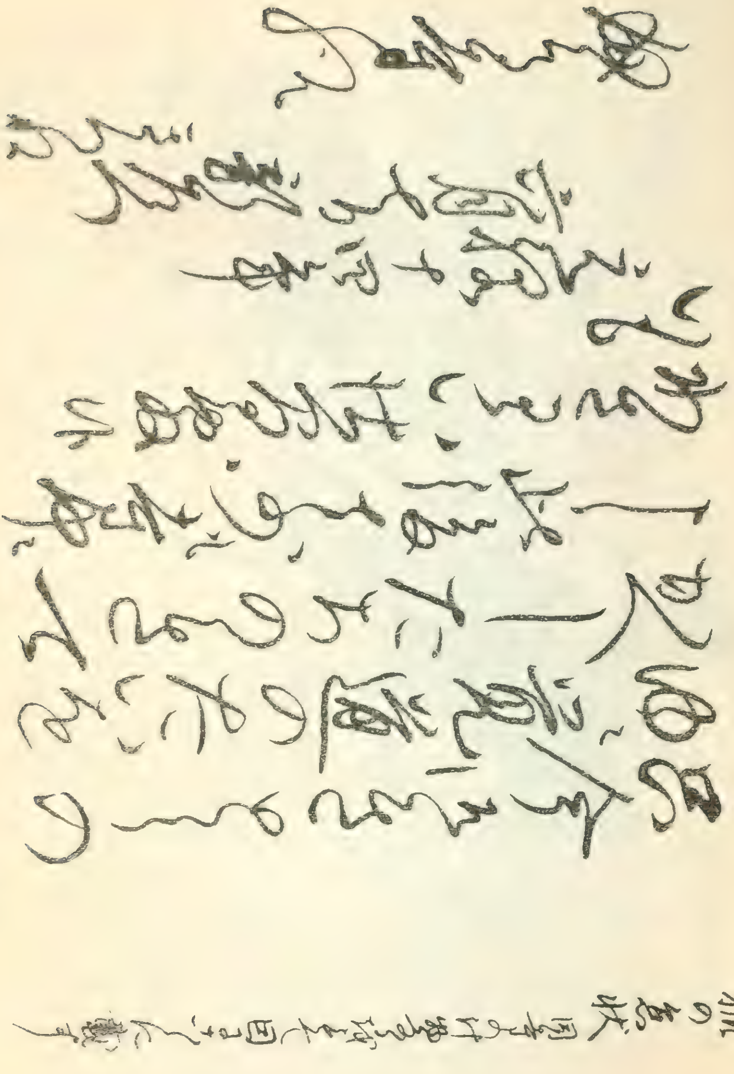
下野國宇都宮東盧山成高寺火防守護

大天狗銅印



右成高寺第四世を祥貞和尚と云(号天英文明明應年間ノ人歟永正八年入滅といへり)
此僧手かくことなれば指をさしけりしかば或何修行者來て
和尚に云やう貴僧の手跡を望むしかれど借りて見ま
ほしと望たり和尚云手を借さん事は易きことなれど
引抜行んをことはゆるし申さんといふに修行者いなといふ
きにあらんにたてうすこととさへいそして游ずいかにせんば

和尚さしばしそこうへなひぬそ来てより何となく手ちてまいり
てのむれあとなきものの図経の禅見しに異くなせしといひし
後一月あまり過て修経の来りてそ志ハらく手なと
借し謝物とて火防御印一枚を授て去り帰ぬ其印別
な是なり


狐の詫状



謡曲熊野絵入古本一冊

掛する事中古の物語なとの類ハ詞書ありて絵ハかく
つるなとハ画巻の遺風となへし この古写本なとしも然あるにも
まつりて其中熊野なとハ池田村宿長ハ娘しらハあれと謡
曲ニ作らまほしけし寓言なりしとおもふかねて思ひしかし
皇后宮大夫師時卿の日記ニ熊野なとてつたへられハ御しと
すへし

右之條好問堂蔵本

真珠二顆并貝中之貝

真珠



貝中之貝

錫器



琴嶺臨寫

この真珠并貝中の貝ハ己が家にてむかし客饗のときに鮑を調理せしとて料理人の取出したるを蔵めたりける大きなる珠ハ見ぐるしきものなれどもこれまた貝中の貝といふもの又稀なり家の寶とし我ハあらねど珍宝珍器もあれバなりものなるもちろん記してハ伝へらずむかしにあらし此二珠の出しハ寶永三戌十月二十日なるのよしといひ傳へたり

駿州冨士川にて
拾ひ得し陰陽石

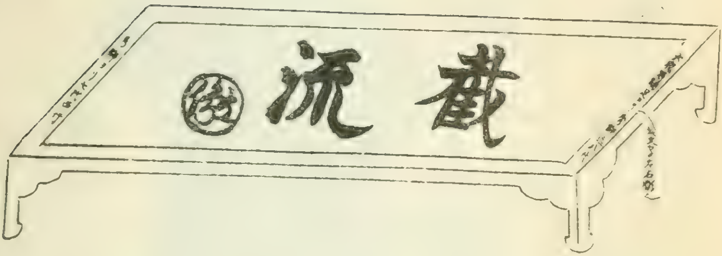
自是而下書画琴嶺謄写

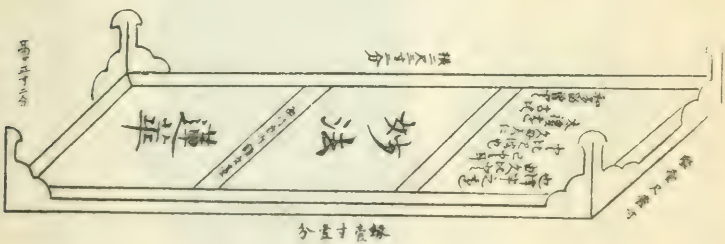


此陽石ハ寛政十午年あめのましき雛渡しるまゝ之ヶ月五月十四日より
冨士川にぱしるふそ拾ひ得しりそのしるハ日をへて降
つゞきてふじ川の水赤く泥をも流すなれば猶よりかつ
ねもふりもつよくしてところに湧と出されそれてある
居くるまに拾ひえくりそのくれしきいもんこと
なし

三州八橋の板を以て作るものといへり

西行自作額文臺





文臺外傳

此八橋の板は人皇七十三代堀河院の御所にありそれよりも
後鳥羽院の御宇に源三位頼政の女のもとに下賜せり西行園位
これを乞得て截流の歌詞と書額に作まて諸〔illegible〕西行は悟道の
歌人なりしかは延元元年何某に傳はり八橋を保ちし遁徒
秘蔵いたして歌人の文臺となし

右谷の名秘して第三〔illegible〕

寛永二十一甲午年十月廿四日　石〔illegible〕

右文臺の傳来書は新撰の住中川新三郎といふものの家に〔illegible〕
まで秘藏〔illegible〕何ものに〔illegible〕
かくいふ〔illegible〕截流〔illegible〕花に出る

右三種

文寶藏弃



南蠻芋頭水差



高サ六寸八分

萬曆己丑年
源泉寶硯

底



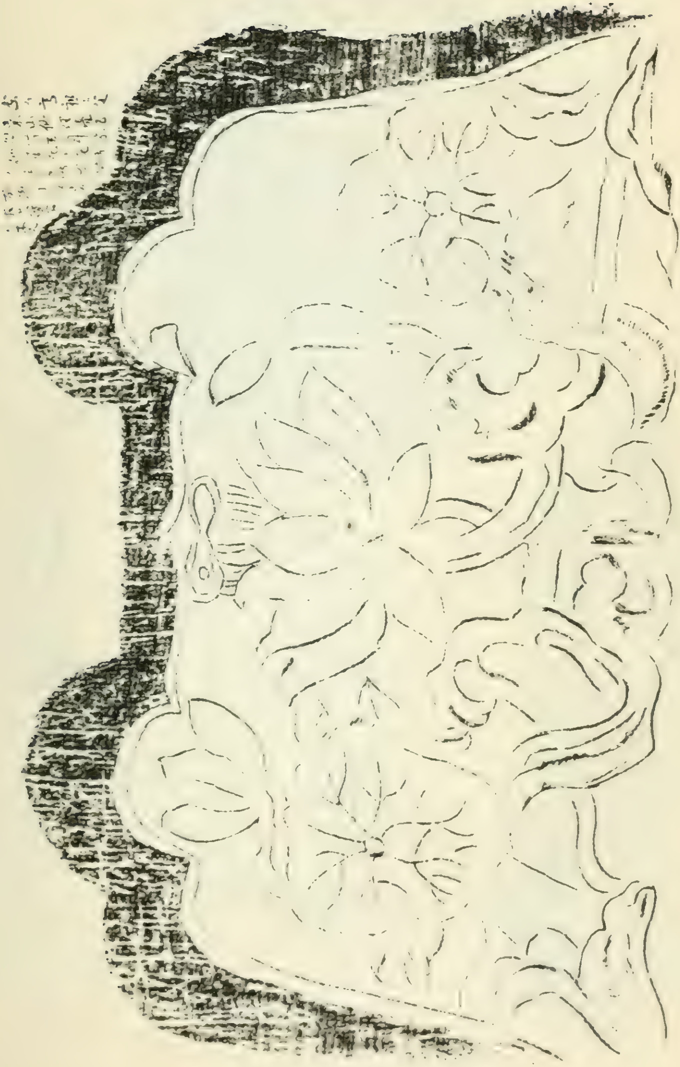


利休花押

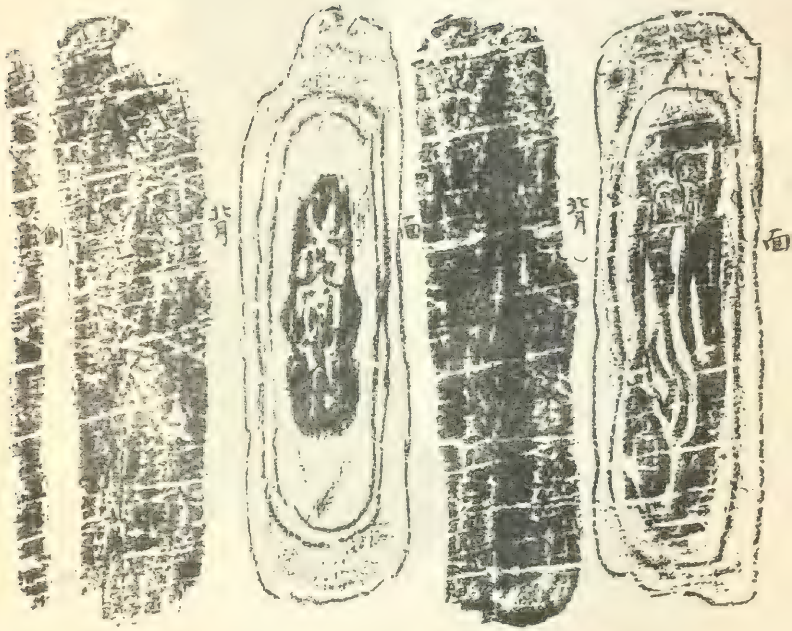
渡リ三寸九分

口渡り四寸八分





弘法大師入唐将来李家煙墨形南部二本坊所蔵





唐山枕
傳不詳
横一尺八寸

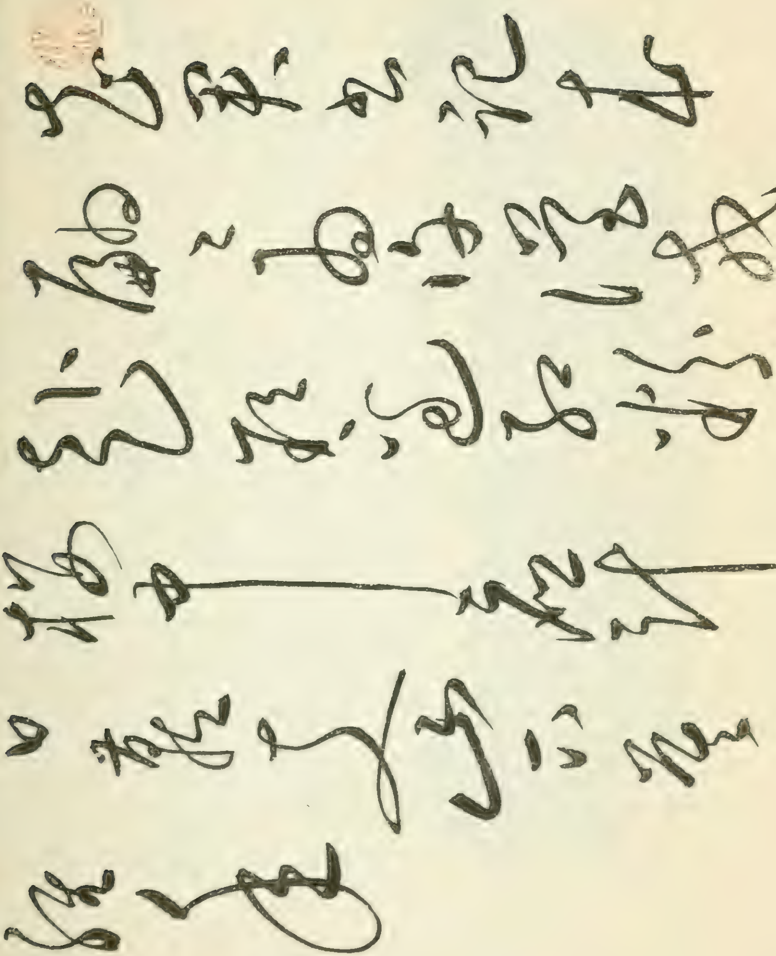
尾張熱田社所藏

笏柏子以檜造之

笏摺形之冩



古三種寫山樓藏本



徂徠手沢華墨

面



背

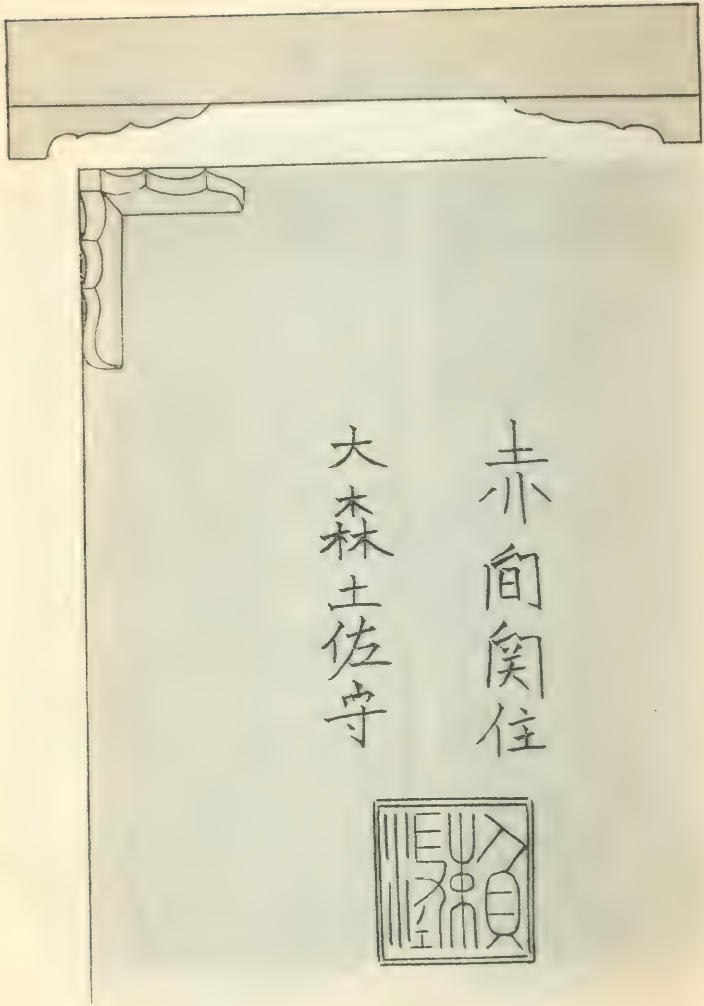


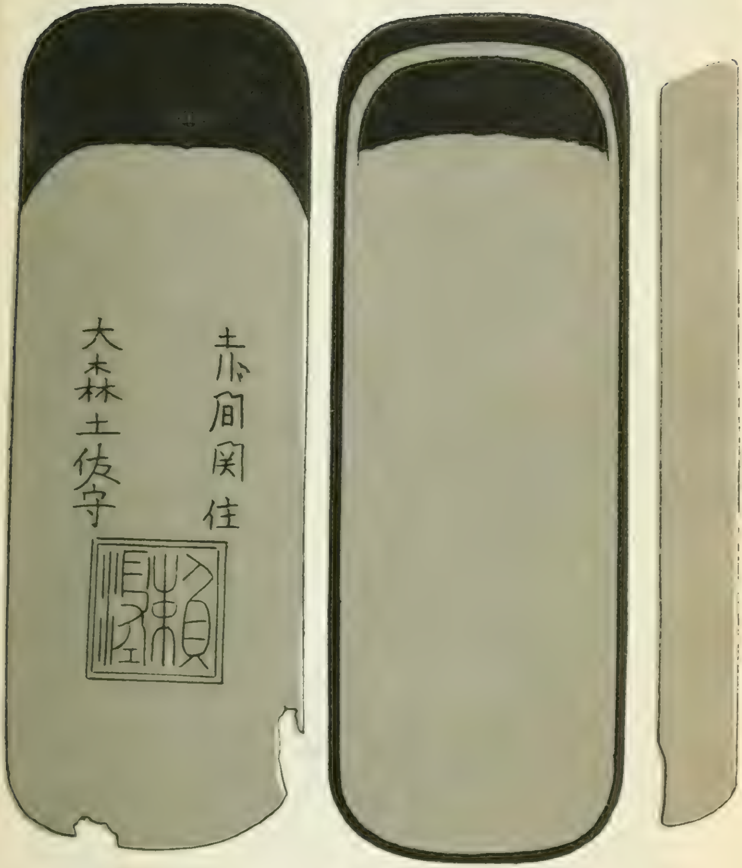
厚サ



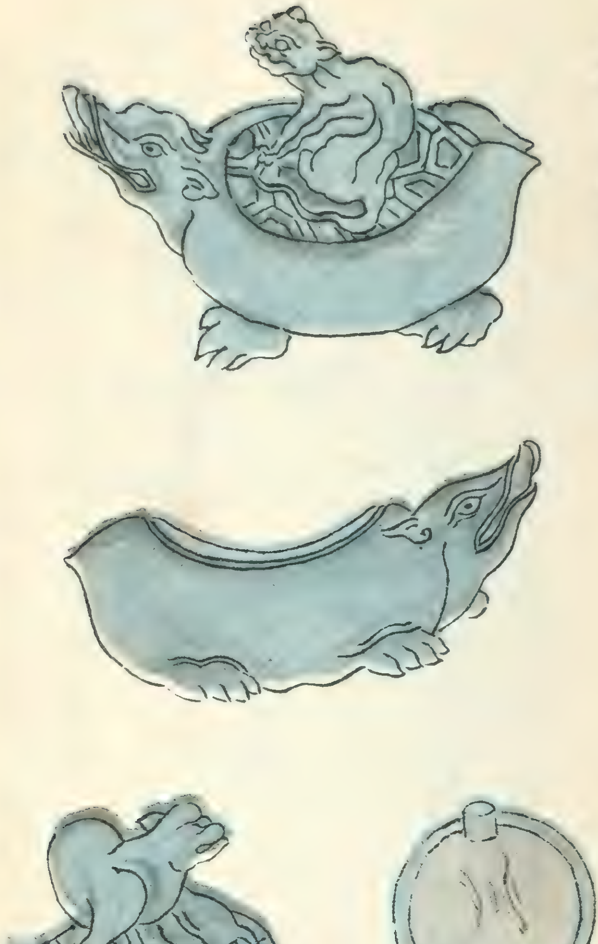
徂徠翁手沢周南縣次公所贈二種




赤間関住
大森土佐守


赤間関住
大森土佐守

漢龜硯滴 見西清古鑑



我藩先大夫柳沢権太夫所写嘗以竹画得名于京摂間其食客亦各以技鳴如大雅堂者数輩云



右六種

蘐園蔵弄

廣澤翁自画賛

縦二尺七寸　横一尺一寸餘　絹本



表褙の上に題して云廣澤画葡萄并偶詞與通敬羿　英十六

とあり家祖思恭に贈りしものなり

古松皮

この松膚皮は信陽奥山田山中の産なり　厚サ一分より二分に至るものありやゝくの形してけものゝ皮に似たり　土人のいふ千載を歴たる松の古木を伐出せしにかゝるあつ皮ありしとぞ



右
信陽奥山田山中古松皮
廣澤筆葡萄自画賛
共二種
海棠庵藏

北峰　九月廿日早朝回

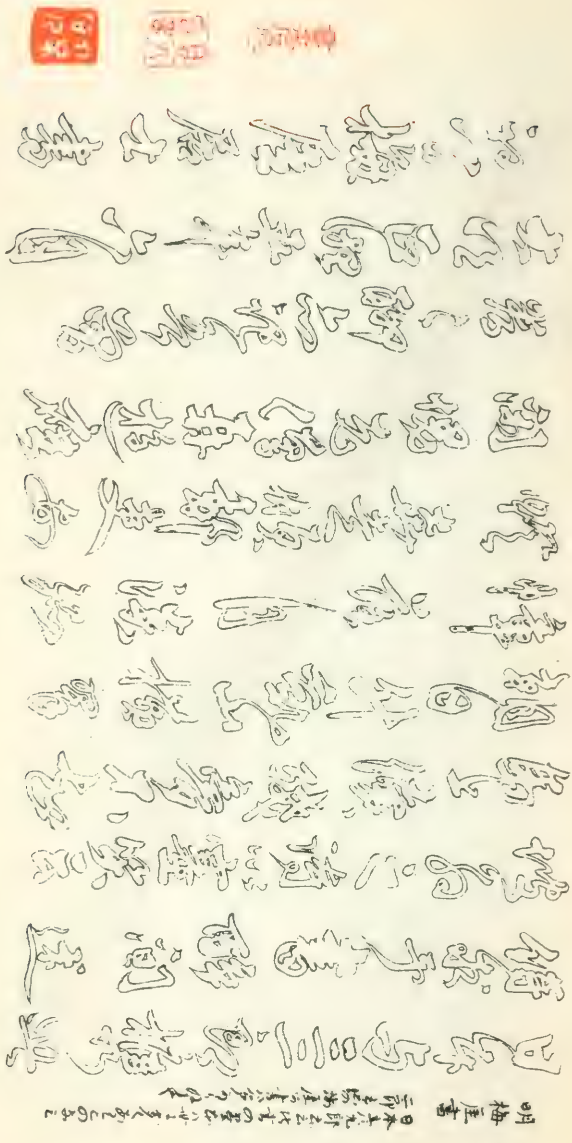
東陽　九月廿三日順回

文寶　同廿七日順回

寫山　十月廿五日返璧

長月耽奇

琴嶺





擬事於大縄

エゾの火縄

蝦夷地深山中にある処の蔓の葉まではたとへば山ぶどうに似たるものゝ其の枯たる蔓は春月雪とけて河へも流れ出さるゝなかに流へなかれ出るものを漉ぬよりてこれを用ゆ其河へなかれ出たるものをこしらへて火縄とす

それなるをエゾにてツキシヤニといふ松前にてハニキヤウといふ

皮は棕櫚の如くなかく毛ありといふ

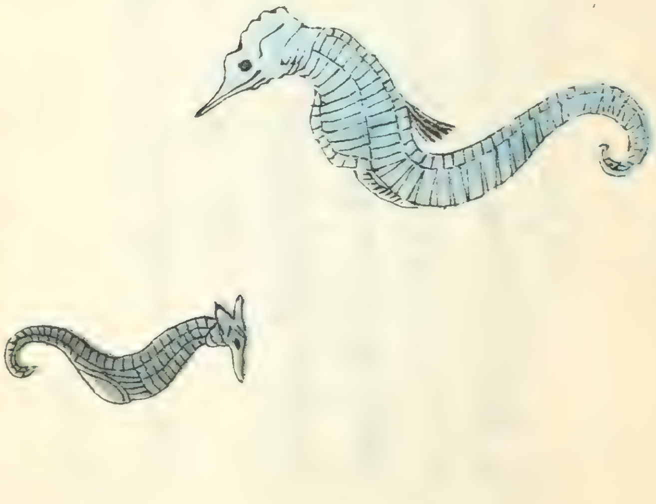
ある中にも清きなれなし　其中にも蝦夷人これをとりて飯をたくにもありつけ其のこりけるを用ゐるなりさて火縄は中の火縄はなれはまるそのなし　火は肉へ焼通りて表皮やけずそのまゝのこりたるこちを吹つく如く吹け

バ酒地火又ハ紀のうへ出ずるにこの蔓草のたぐひ不ハ辞
ま源あれバさや松子人のちはしこそ絶て往遥した
るも枯るる蔓の茂りしもまで見るよりゆし雖東ハこれを
もみて火をとるといふ猶くはしく是詩纔あり今し
晩く

右ハ松花老庚此左示せよとありしものなりしとてきたれハ翁
せしを今日縫目の為めをといふも太田久吉といふ人をもて
示しにあはしなり
時に文政八年乙酉八月十四日未牌　瀧澤解識
右後考の為今寸許　斫取のちて諸君子のめくまゐらせ
るになん

海馬　雌
　　　雄

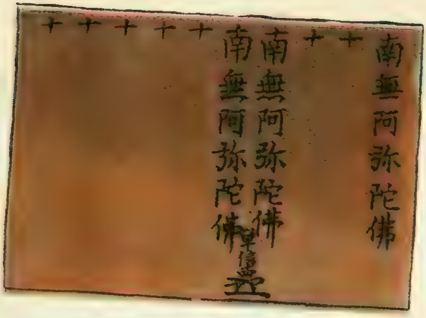
雌者色白雄者色青也
訓蒙図彙によりて乾枯の
ものハ青白なられ
描けるに佐渡にて龍宮の駒
と名つくるもの又この種類な
るへし龍宮駒の図説ハ奇
雑記にのへたるか如し



右三種

琴山嶺舎蔵弄

少納言信西入道甲之名号

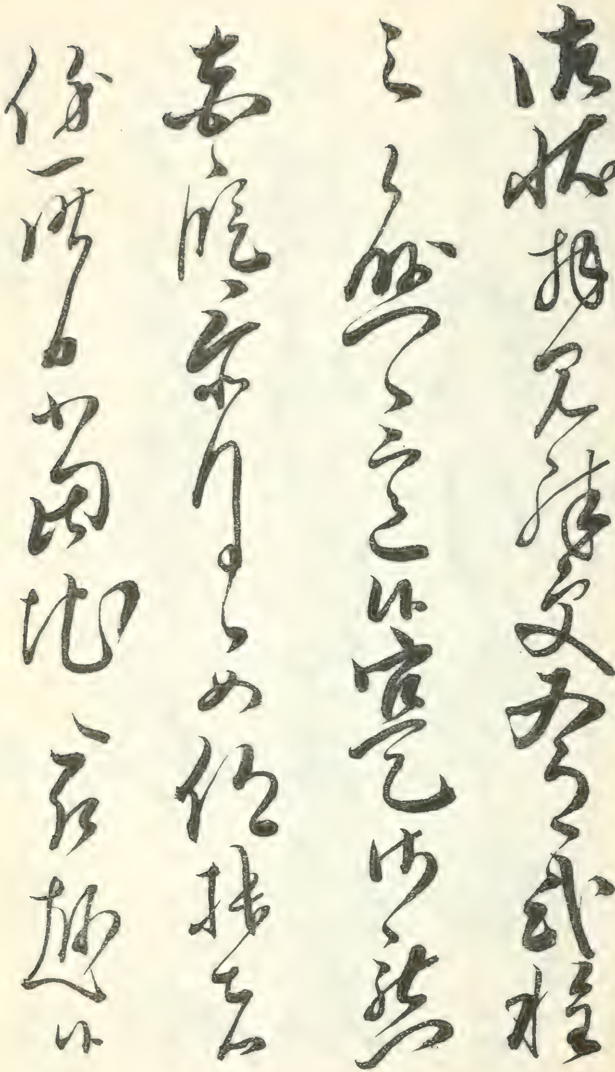


名号十ヶ篇ヲ十行ニ書 四行目五行目ノ
間ニ法名ト花押ヲ書レタリ
右の名号和州 大野山龍王堂ニ
納めありし少納言信西入道か
甲の内ニ入おさめ置けるところ
の名号なりとそ 是則入道殿
自筆なるよしいへり

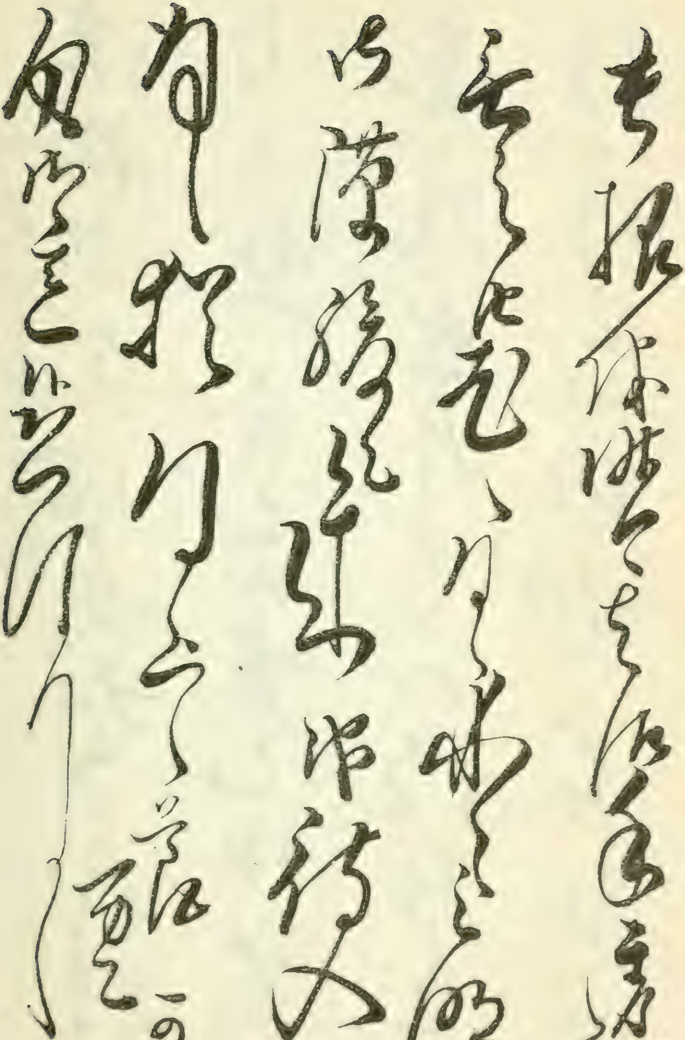
乙酉冬十月十一月小集展覽第五

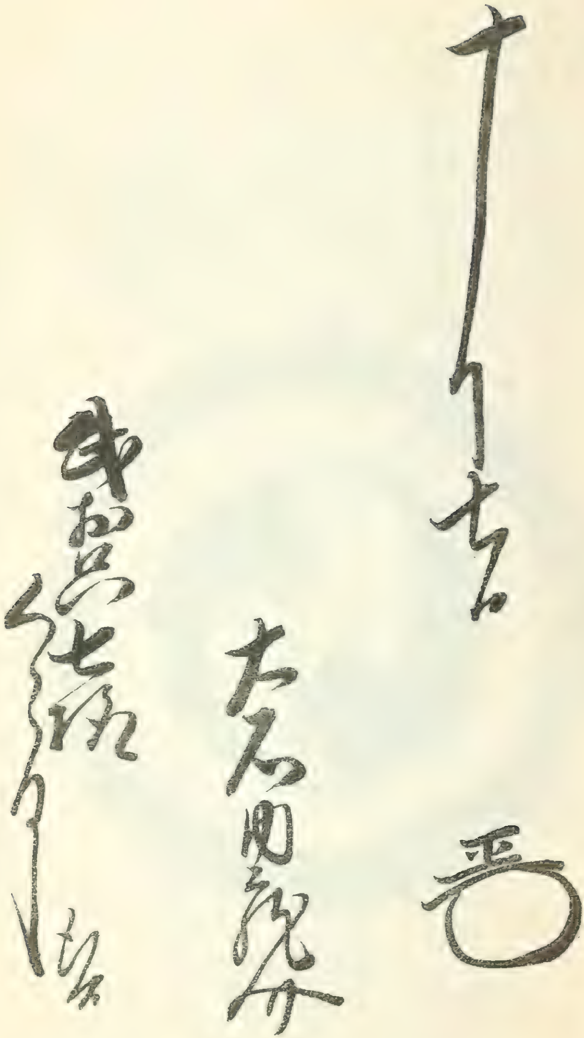
共五本

著作堂藏



大石良雄手簡眞蹟一幅





大石良雄自画鍾馗墨本一幅
天和中大石良雄所掲大髙山長安寺藥師堂

大石屋敷
门之瓦



元禄十六年鈔本赤穂義士復讐之筆記一冊

高家之流法絶之　浅野内匠頭　吉良上野介　喧嘩之事

一　毋の鏽ハ釼ヨリ出テ其鐵ノ身ヲクサラセ悪ハ心ヨリ出テ其家ヲウシナウサレハ濤國吉良浅野両家ニ亡ヒタルヤウヲキクニ此ハ人皇百拾四代東山院之御宇元禄十四辛巳年三月武蔵國江戸東叡山上野ニヲイテ御法事法會

巻尾年号

元禄十六年

赤城義臣伝十四巻　享保の年印本
片島武矩撰この武矩ハ儀士近松氏にゆかりあるものといへ
りよりて此実録をあらはしたりとそ
赤城義臣絵伝十巻　無年号
此書ハ前の義臣伝に図絵を加へて別に刻せり又これ
らの刻本世に出てのち同年上杉家より板を購ひ毀ちけり
と伝へいへり故に今世に存するもの鮮希之
院本碁盤太平記一巻
宝永三年六月朔日近松門左衛門作也赤穂義士のことを浄るり
に作りまうけたるものこれを始とす此後享保十八年忠臣
金短冊あり仮名手本忠臣講釈ありて猶この後にあるされと
その後の二種のミ世にあまりに行はれて此書のあるを知る人
の少なかりしハ因にこゝに出せり
忠臣略太平記六巻
正徳三年印本これ又その頃八文字屋本にて新作いつれ
とものにて記するにたらされとも赤穂の一條ハ印行ありしと
きくなれハ是も又こゝに附出せり
右三種　　好問堂蔵本

右三種　　　　　　　　　好問堂蔵弆

著作堂云右の義士絵伝を著せし片嶋武矩ハはじめ
大野郁右衛門と称して大和郡山の砲家大野佐右衛門
吉矩の従弟なり後に氏を片嶋と改めたり何の故なるを
知らず兵法を越後の香西成資に学ひ文学を貝原
篤信の門に受たりしかれとも只武術をもて称せらる
その著も亦武芸訓　武備和訓　武田三代記武家図伝
義臣伝なとありて世に行はる武矩没する年月未詳ならず
これハ清水赤城氏よく知りて伴蔵子か為にいへり
又忠臣蔵を剽窃摸擬せし浄るりハ安永中に
福内鬼外か伊呂波蔵忠臣実記又寛政中に烏亭焉
馬か仮名手本再清書なとありいつれもおもしろからぬものの
かゝるもなかなかあるべし
　　　　　　　　　著作堂追記

豊太閤馬印木瓢一箇

粉金上品而塵〻末処々剥其下黒し

大サ如圖ノ

但塗土下地ナシ木理出テ見ユ

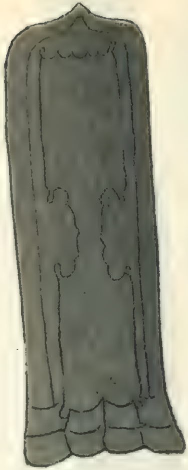


是ハ御書院番士田中惣左衛門所蔵にて先祖兵部少輔太閤より賜ハりし所の一箇なり家に今猶十数箇を蔵せりといへり

古刀一腰并金物

安部摂津守殿采邑摂州桜井谷民家ニ蔵セル所

相伝為渋谷金王丸之佩刀





此金物二箇

漆ノ剥残リ処々ニアリ

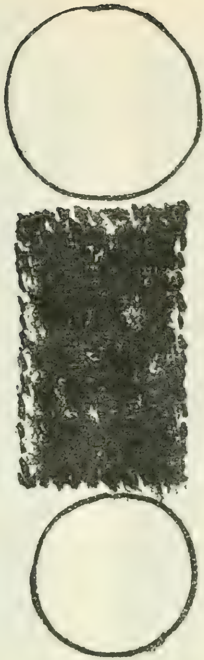

長四尺弱　厚四分



鋒ノ石突所云桶形ナルモノ也

三條小鍛冶宗近の銘ありつやく

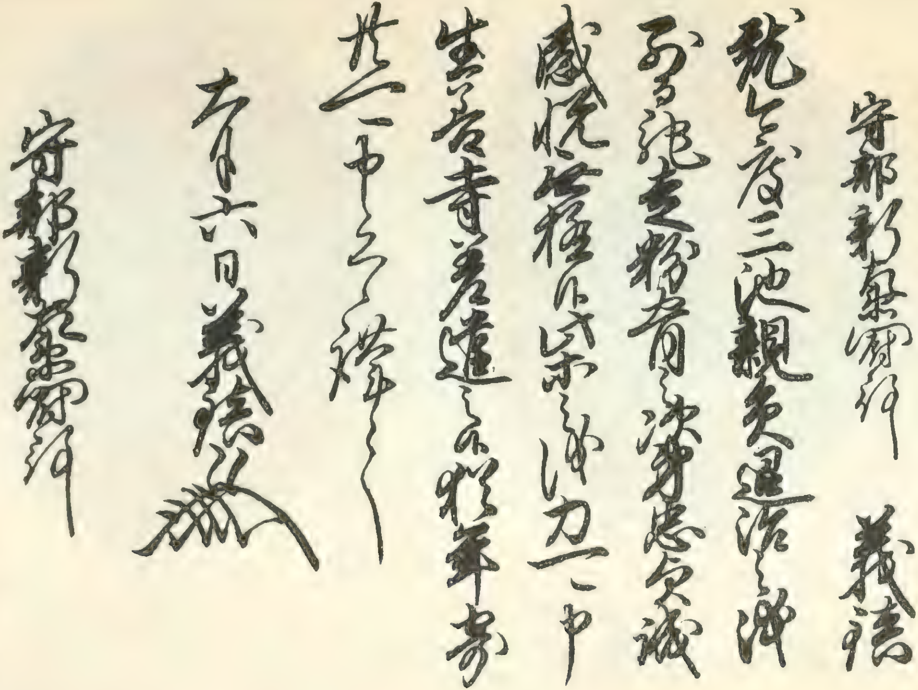
信しかたきものなれと貼して後考の為にす



鐵



大友宗麟感状一通

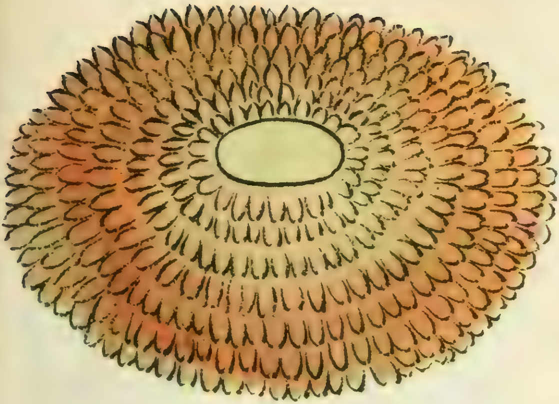


大友宗麟感状其首帋下之士守部某所賜守部氏之孫今日向延岡侯之医生也其家の所蔵也　右三種砲頭井上氏蔵弄　清水赤城摸之

筑後州柳河鳴(ナル)雷(カミ)大明神祭事所用菊傘鉾

徑一尺二寸

以帋造之







鳴雷社ハ柳河城下を距ること一里をこへりあり、この傘鉾ハ毎年九月廿一日祭礼の时その近村おほ六ヶ村より各一本つゝ出ものなりしか今ハ雷除となるといふ

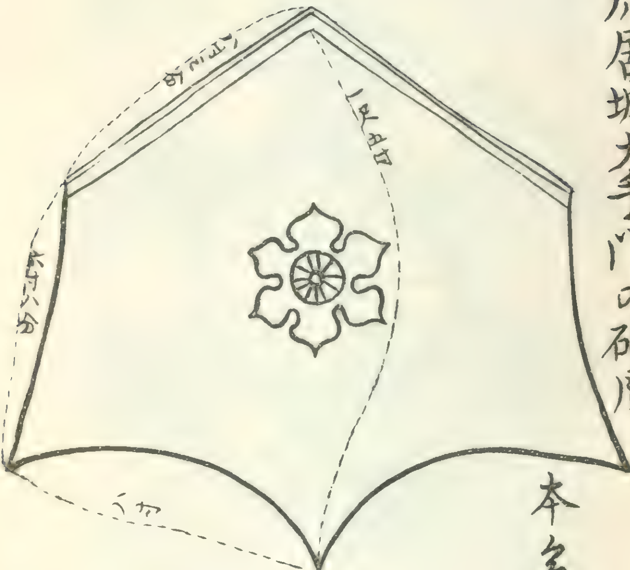
奥州津軽領

柏本村の柏

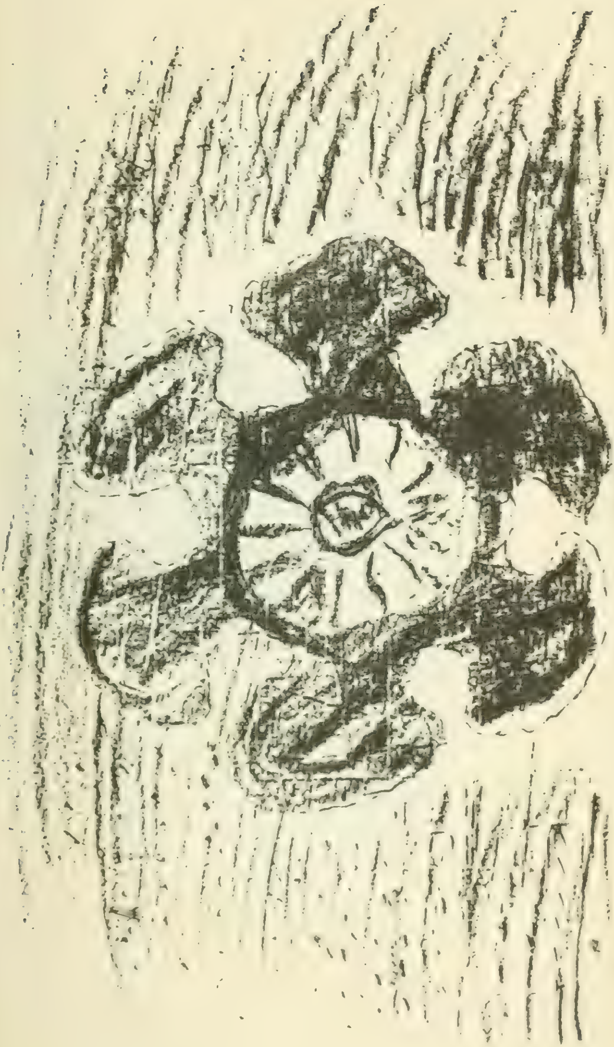
右一村の柏新古となく大小となくみな
この爪の木理あり皮も亦同し



甲州武田信虎居城大手门の破風



本多某家弆



本多氏（俗称長十郎）の云ニハ甲州躑躅ヶ崎武田家古館大手門の礎
風にて信虎時代のものにやあらんと口碑に傳ふ天正中勝頼
滅亡の大手門のみ残りありしに浅野氏改め今の御城築
し時古門をとりこぼち武田家菩提の為にとて甲府恩
光寺（法華宗）の門となせりその後古名あるまゝとて残し同
州上曽根村妙石庵といふにありしを請得て就に移し
解云武田家の城を移転の時府へ移り来る此搆風信虎時代の
ものならバ勝頼のとき其の古館を既に廃せられし也柄なるにこハ移転
新府へ移りし ときに新館の搆風にそありけん彼猶ほ家如し

容品余り社中の筆ら奇妙暦と名つけて新刻せしめしきのあ
婚り名れたるのやまのおとふ出しもしつるを諸君子須まてよし

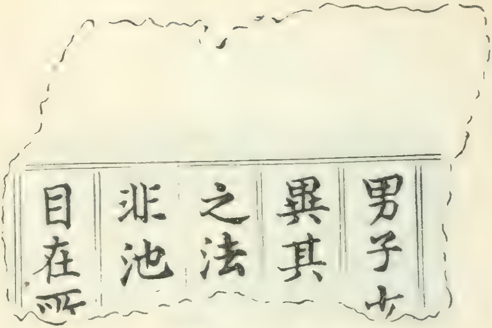


右句子

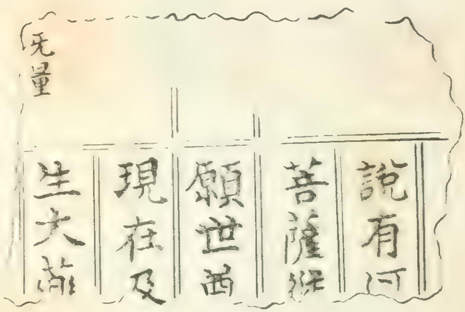
海棠菴

播州三木在田寺之經尾両面　以下三種文寳堂蔵

摺本し写筆法不詳



男子女　異其　之法　非池　目在所



无量下脱字アリ

說有河　菩薩縱　願世尊　現在及　生大衆

右尾ノ經文ハ僧行基之筆也トイヘリ

大坂新町扇屋夕霧小袖之裂袋ニ篭同印華布

此篭目はしさみ
小袖ハ夕霧か着まま
かくみよとく中居
の女まつりはせしに
その女同地芳近頃堀
のほとりに世帯をもち
居ける代 大酒三丁目
尾崎某といふ小神を
乞けて夕きり三面
忌近きの為たきこ
今は名て所しとそ



文宝堂いはく
尾崎氏ハ我かおれか
親の兄弟にて我か
祖父の時大坂より
おこしたるに今
とも今ニ我か主宝

○下ニ貼れる御腰裏の如き残ハ近くと敷しなるへハいとあかしとなれ
と風流なるみ新古尋里のるいにめてなれハ捨るへきにあらしや

右所圖白山科家舊臣高野九郎左衞門所贈加藤
軍曹正之也余懇望而寫之

文政八年八月　　遠藤胤典

以遠藤氏之寫本依家大人命寫之乎
明々堂知貫画寫
五美亭貞橋彩色

文政乙酉九月

適文寶堂主人需以麻生所藏之圖本寫之
五美亭貞橋

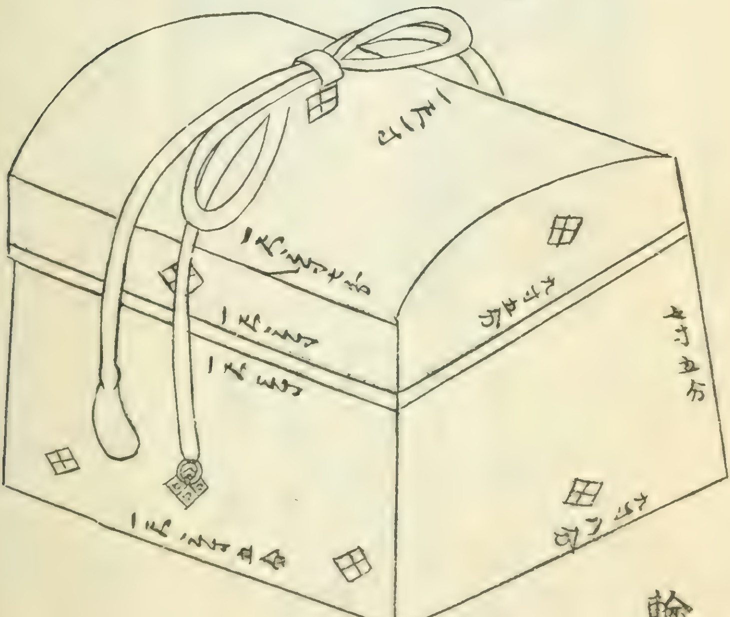
依文寶子之需更臨寫子本時乙酉冬十有初六也

右三種文寶堂藏本
琴嶺臨寫

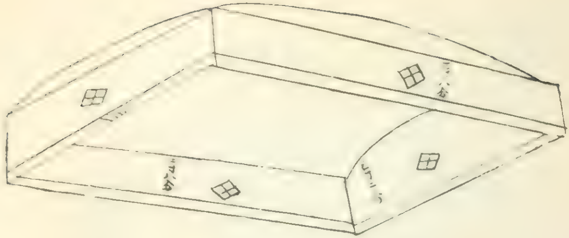
陽月耽奇
覧筥圖

紅白タレ

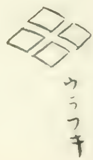
ヒモフトサ



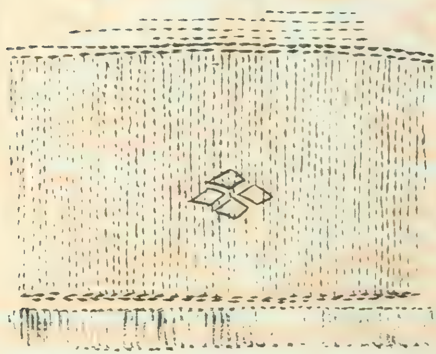
輪池







蓋側面



摸東京錦文



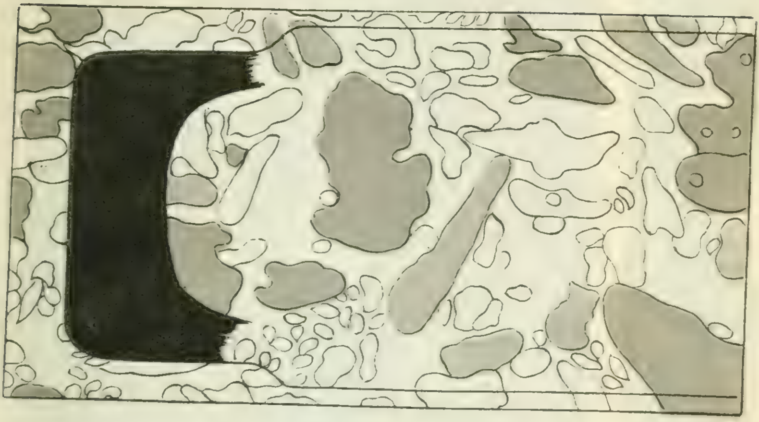
この東京錦の文様ハ横ニ雲ニ作所ニ符之アリなどあるをこ
人の作り出しける名ニあらず遠き代よりありし
源氏物語朝顔云からのきぬときのさしぬき
けしたるなとしのよ
河海抄ニ云唐京錦也唐にも東京西京あり西京
京の錦よりまされる錦明天皇御宇ハ唐東京
錦模用西朝

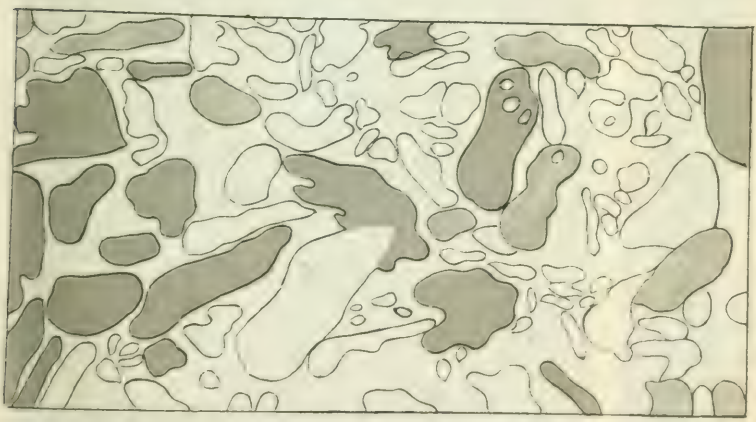
漢産歙硯打本





漢[illegible][illegible]硯





文房肆攷、古硯攷下云、歙石硯、出徽州婺源龍尾山西連武溪、其石堅勁、瑩潤、多發墨、品有五、以金星者、爲貴然以斑顯鮮明如泥金者、爲上最好者其形如龍尾、謂之龍尾金星、若散布如花瓣、落満者、次之、トミユタルコノ花瓣落満トイヘル品ナルヘキ歟、諸君ノ鑑定ヲ乞

容示

竹刻瑶臺祝壽圖壺匣玻璃罩

日新公司沈萬純

巨大の竹根ニ霊山の壽松雲鶴并に仙人数十個を彫刻しこれそのとの精妙をつくしたるもの、玻璃罩ハ破壊せしをいや換へしか紙罩をもてせりそのまゝ添せしハその箱にきこつけし

右　輪池堂

北峰　十月十七日朝巡回

東陽　同月廿三日巡

文寶

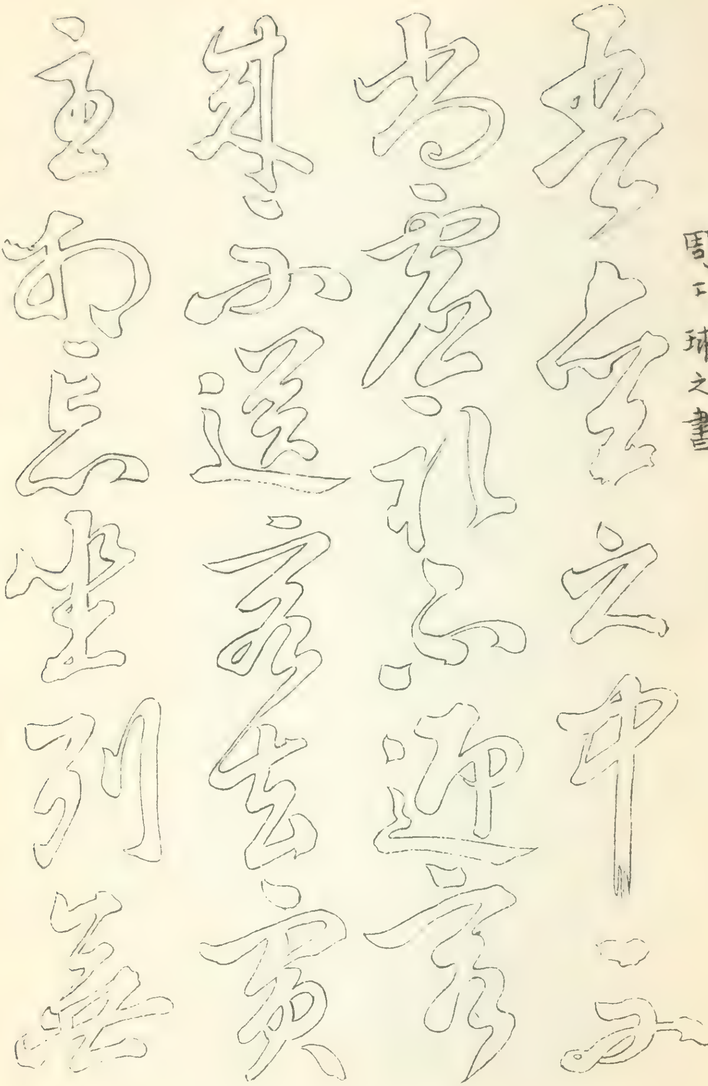
乙酉陽月耽奇客品

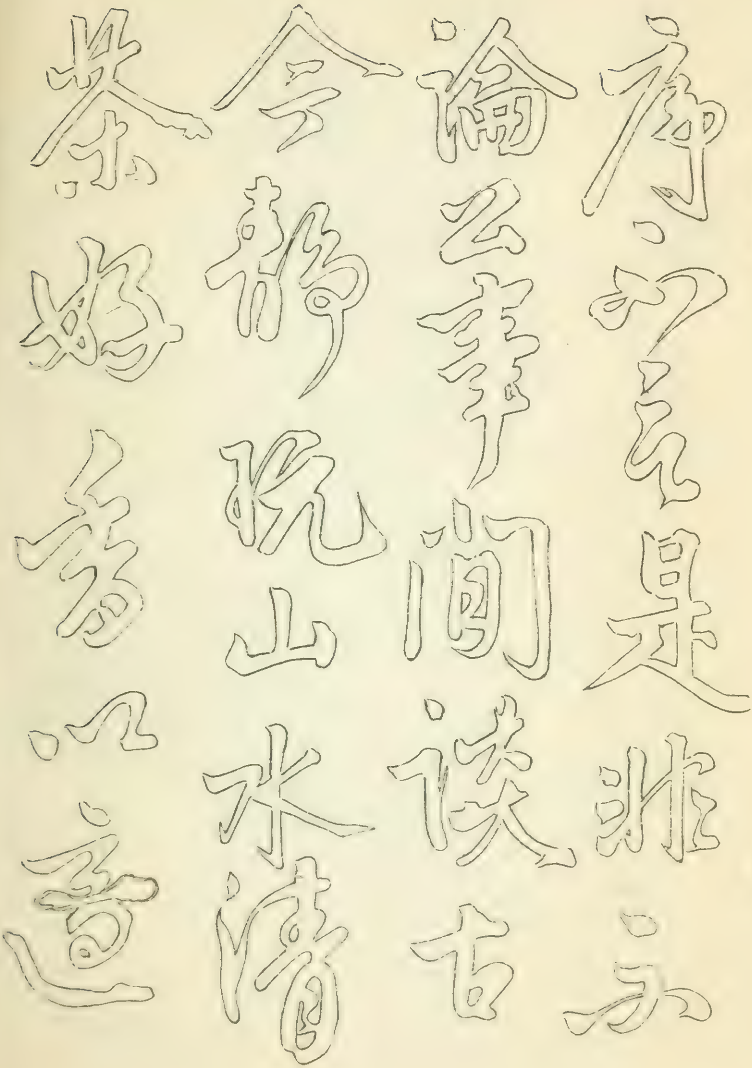
著作堂

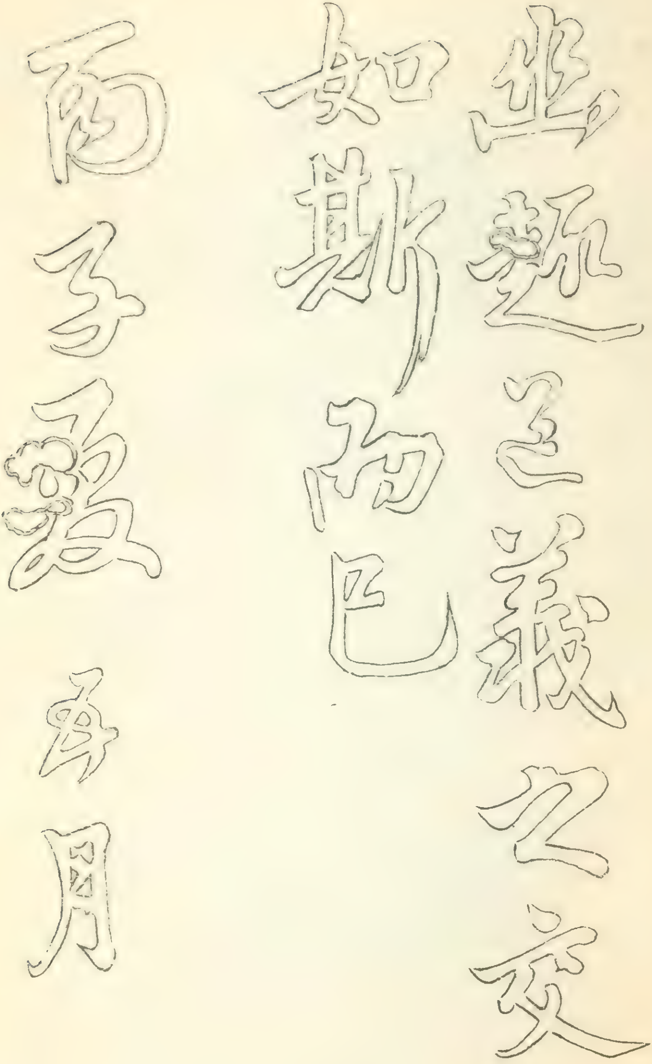
古唐津焼之圖

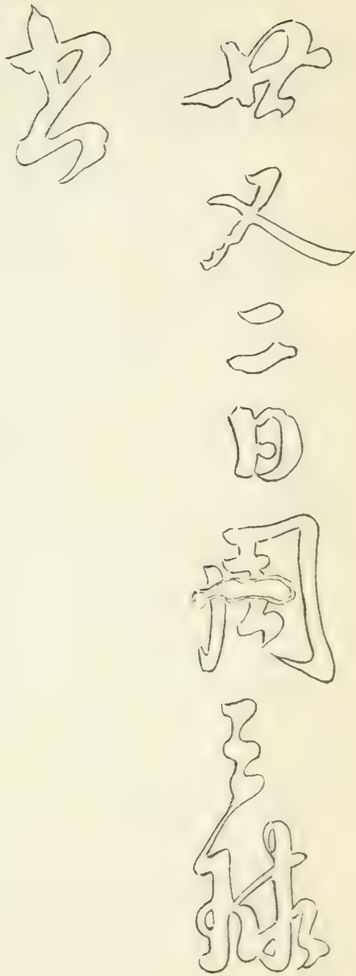


周工、球之書






幽趣之義之交
如斯而已



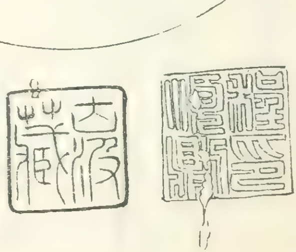
石摺乃写し

球人程順則書古人大江資衡安永甲午臘月所摹是其原本

程順則書盤鉤
安永甲午臘月
寫大江資衡

圓徑壹尺壹寸德字號大方丸氏





印章[illegible]大氏也[illegible]

此墓流云大江資衡京師人通称久川勘解資衡長子大江維翰天明八年歿于江戸客舍墳墓在西久保天徳寺見江戸墓所一覧蓋維翰号藍田通称久川云蓋亦是才子惜乎未追立年而下世藍田遺一卷有

予獲此墓本所藏年久之今不暇別摹録之乃以原墓本遂寄于著作堂主人云

著作堂客品

右三品

平安 青李庵

北峰　十月廿三日廻

東陽　十一月廿四日廻　延引　多罪々々

文寶　十二月廿二日返　而至大延引　多罪々々
戊正月二日返ル

肇冬耽奇

琴嶺舎

貞享元甲子年

三月吉日

ふとて三条下ル大こく町東がは

堺屋庄兵衛板

好問堂蔵本

延宝三年二月
開板
増補江戸道中
記懐中全
一巻
第四十四丁
前段略ス

こゝやが関屋
ちやうちやうと
七里 あらくしき
江戸ゟ九十二里卅六丁 宿悪

あふ付 三十九文 からしり廿九文
三人かご 八百九十文
三十四人代 四百八十四文
合壱貫六百六十四文
五人かご 壱貫二百十文
四十七人代 六百八十七文
合壱貫九百九文
六人かご 壱貫三百七十八文
五十三人代 七百六十九文
合弐貫百五十三文
△壱疋荷ハ 九十壱文
人壱人分ハ 三十九文
のり掛ハ 人四人まへ
但せいものゝのり掛同前之
けつこうハ・本海道のすそ
あつかいぬ上かさ
く・ひさしぬまへハ・やもし
されとも風をけし それハ・
あしかし・徒歩ま〳〵て
よし・又そのうゑは何付にて
もあるをおし…もちつき

比由井の宿から二里づけの宿よりの
のちゝとに
をあさん
後段略ス
第四十四丁ヨリ
右ナリ

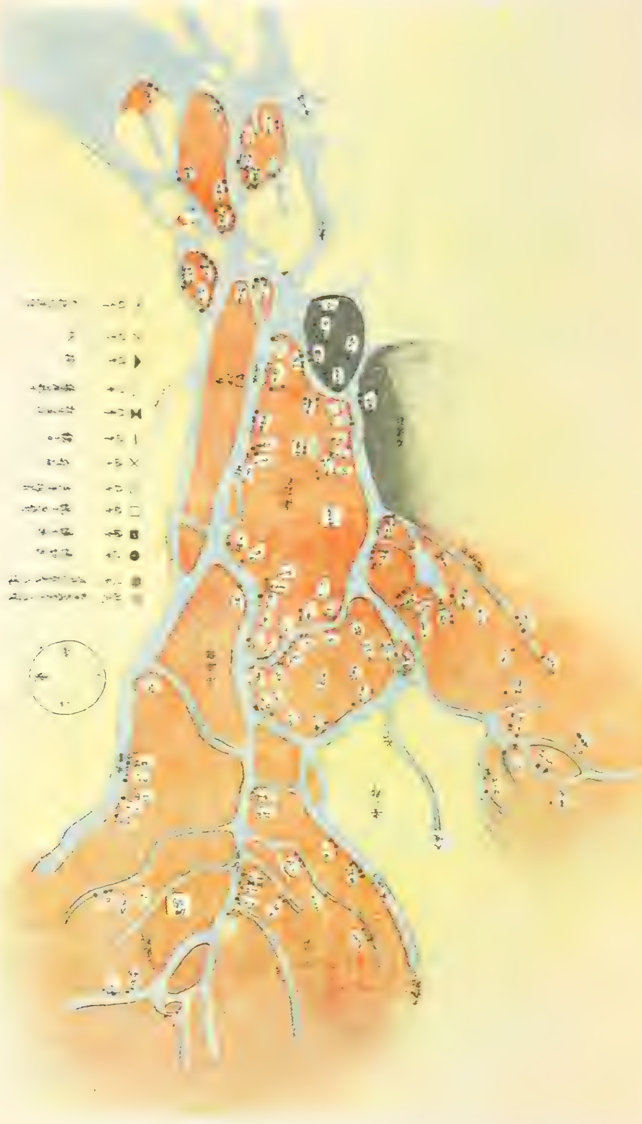
凡大坂ゟ江戸迄五十六次
延宝三年二月新ニ改
新ニ今極ましたちん
是ヨリ十四丁写
第八十一丁ヨリ大尾
但シ右ニ略ス

按するにこの道中記の原板は慶安正保比よりの梓行せしもの
なるか延宝三年の春増補再板せしなるへし此の事と云れは
第一葉に日本橋の眺に御本丸以て天守二の丸も殊に見ゆるあり
是原刻の文に従ひしなるへし延宝にはすてに御天守はなかりし
其證なり

昔は印本に忌憚ること有の寡けるか如し さる遠しもこれら
のことを印本にしるせしもの多く見えけれと殊に近世は
後考の一助にもしるし置ぬ 所謂遼東の豕にやあらむかし
さて書肆梓行の坊賈の名破刻して定かならねとも浪華の
出歸しの板なりしなるへし 東順は大坂か江戸かしらすと云
またしるさし類三四丁あり 菱川か画風に似たれと筆
しれす詳ならねと猶考ふへし

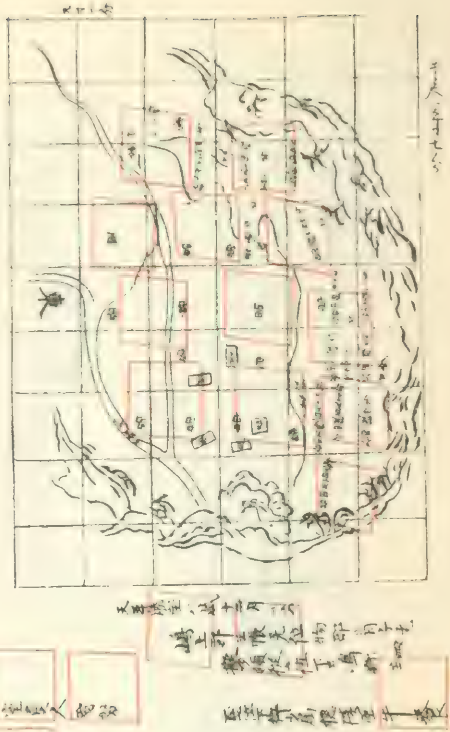


今この前に貼せし淺草山谿曠荒地の二圖を
さらせるものはあらねども儒者文寶子の出され
し圖本はちがひて比校の為にもなる圖き
の本もこの二本を所藏されたといへばまゐらす
こそ



這個の摂津國ハ古圖にて最も遠方の友人の領せる之原本を何人の所蔵すといふまでもなしに摹刻せしゆゑとしるもまれなし破損中より捜し出されたるを貼して諸君の識別に任するのみ

但朱印若干同印なるをもてはそのひとつを摹してその餘を略しつ





佐渡の黒青宜押葉 土俗雷除とよふ山中に
稀にあり雷除に用ゆるといふ



出羽の黒百合押花
原是北國の種をうへし
株しそのうまれハその花
ちひさし黒百合の事
佐々軍記関原外伝等
見えたり



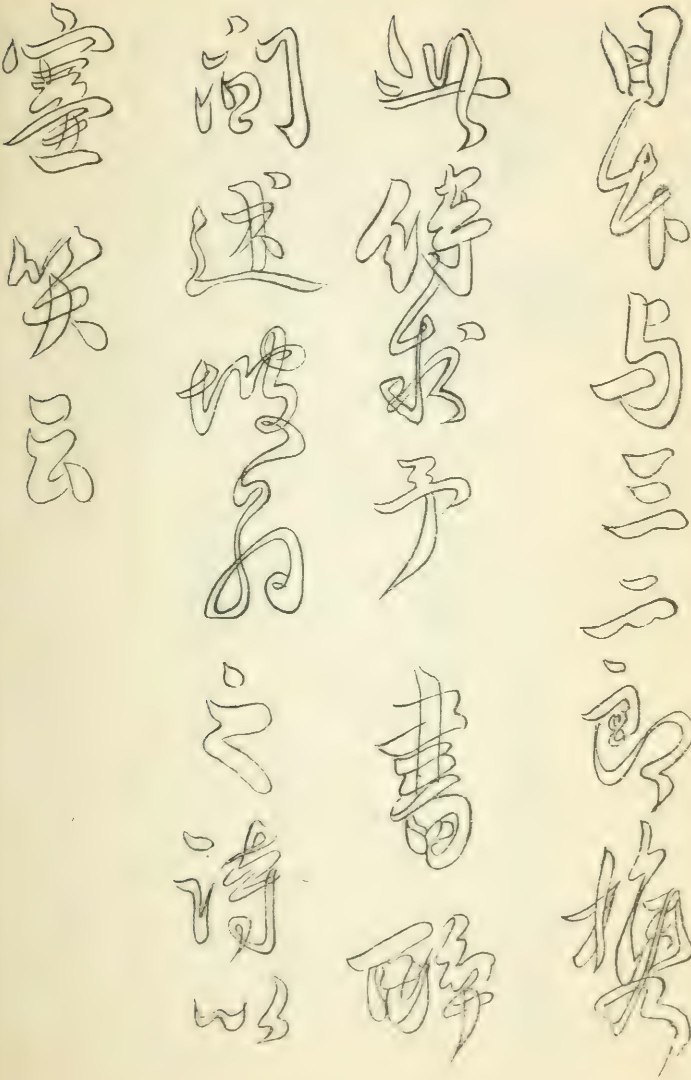
黒百合ゑそにかきるものといへとも一夏の産物なしとある新井氏の毎に出羽の鳥海なかりける猶蚤ありし持かへりて家栽としつる右の載出せしことのよしなり

右三品淺草正二本而一品並家栽

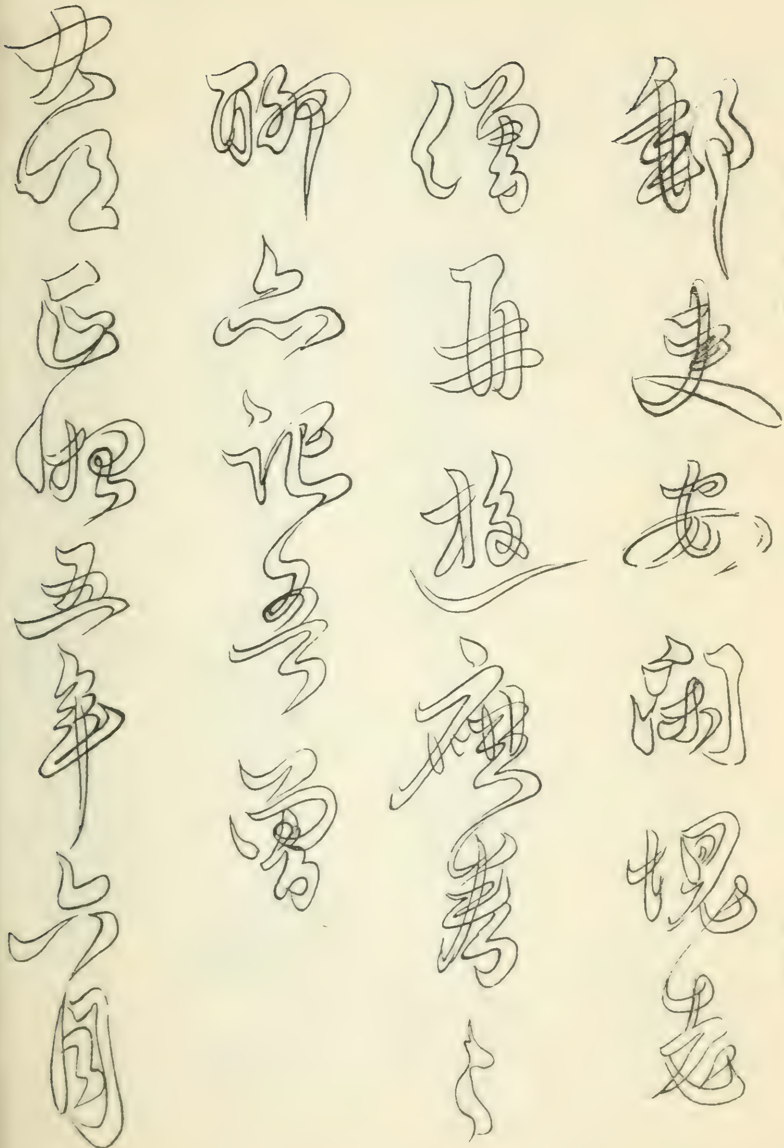
二種

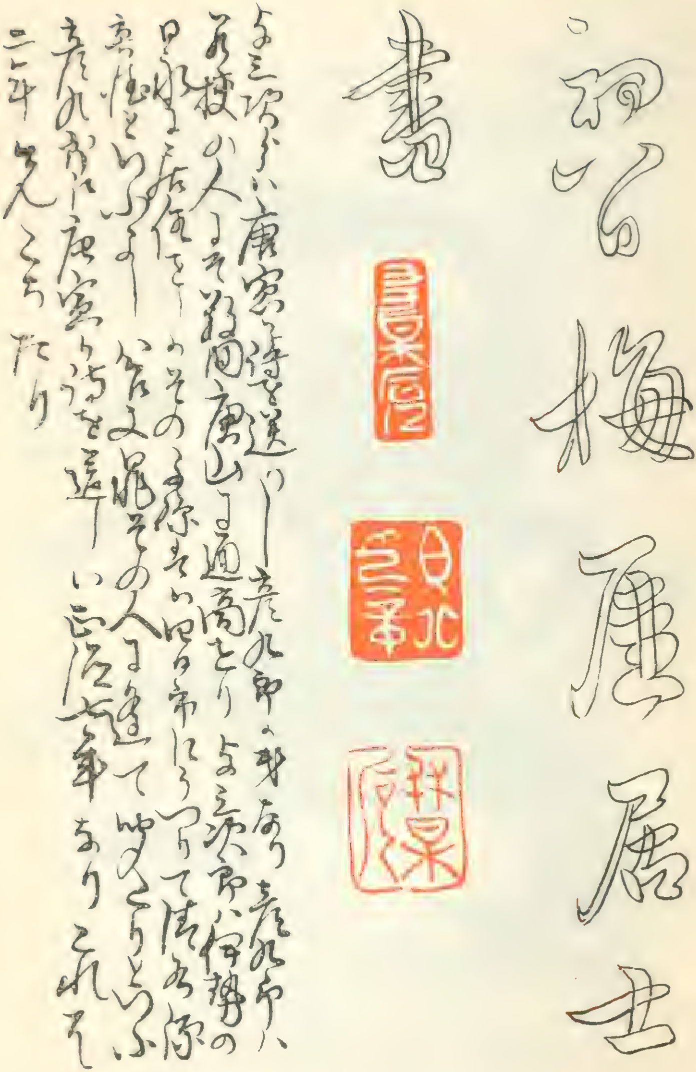
琴嶺舎藏弆

明芳橋崖書



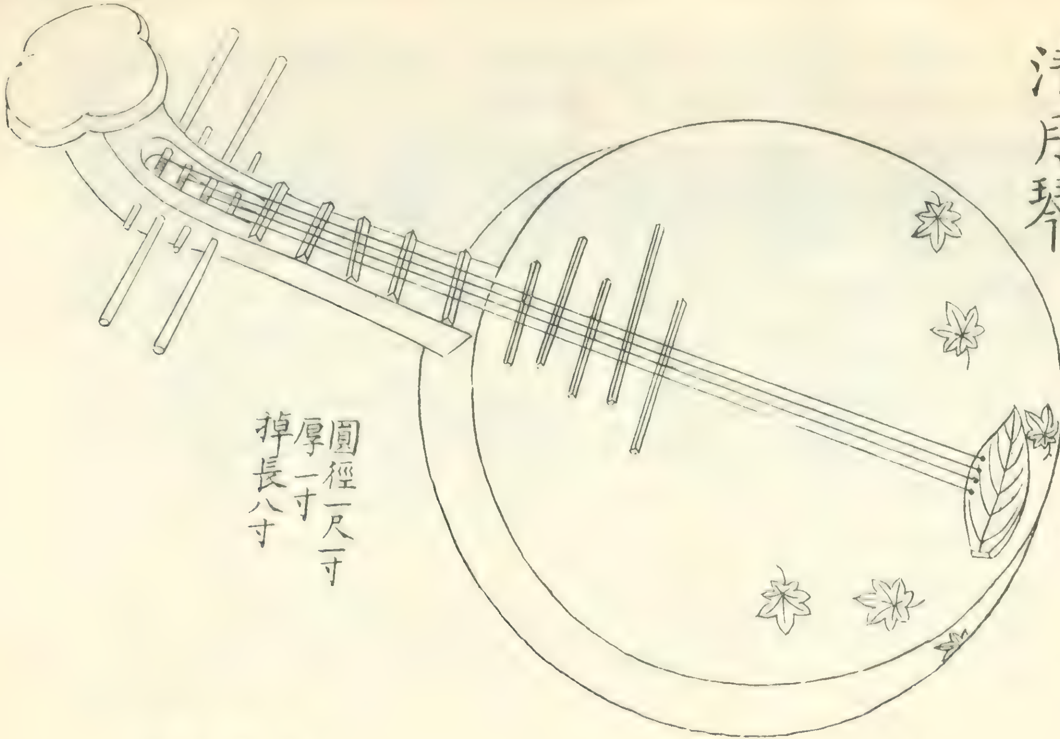
馬上續殘夢不
知朝日升亂山
橫翠幛落月
淡孤燈奔走煩






山口村
十月六日

清月琴



右月琴は近頃長崎に来る清商多くこれを携へてこの国の人にも習はしむるなり、その形状桐材をもつて円く切まろしたるを面とし、背もありて胴とす、棹は桐板を以て槽とす。覆手をもうけて絃を用ゐること四絃なれども二絃づゝそろへて双清調双濁調とす。十柱をもうけ柱は竹にて厚さ一分絃の上にあれを用ゐ清絃十声濁絃十声都て二十声となし甲中乙の三音あり高下清濁を以てこゝに六八の和音あることなれ。故にその音は幽なるものを九連環の類までもこれに協ふ、いかなるものにもよく月琴の名琉球楽器図にみへて、その形状これと全く同じ、これら事物紀原合璧事類などに所謂月琴とは同名二物なり

この二書に所謂月琴は晋阮咸の一名なり。粟原信充曰清朝雑器式に載する蕭郷食用安

明楽会の中にも所謂双清とふものゝ形状ほゞ似たり　清商ら好んで韻をなすゆゑに名付けしにやあらん

丸山本妙寺堀井所獲碑 高二尺四五寸 廣一尺五寸許

一業所感燒死群類

妙法蓮華經

干時明曆三丁酉正月十八九日

方今文政八年十月下旬本妙寺番神堂の傍より井
をほるとて出せしといふ然るに十一月ある日近火
ありし故それより帰りて又埋しとぞ

古寳昌

私申
仲法令立大壇之塔有〻内
公之五輪毎輪書尊勝陀羅
尼無日次可候事候
寛信請文聞食了件法紙
請文者章介儀不可叶作章
然且令書繪様且令作木
可令急進之由可被仰作者
氣色如此仍言上如件
五月廿日　兵部権大輔時信請文

下略

應安二年己酉六月二日書寫了
了
金剛資賢尊春

鎌倉荏柄天神社

彫物



剝蝕して彩色分明ならず

野州奈須山家所用
旅ノ籠



この器ハ米三合三勺飯をいるべし旅客一人の夕食朝食この量にて足るよしにてかたことなづけしものならん下野の山家にハ今も絆をもちひて今ハ旅籠を用ひずなりしかハ旅籠の名さへまれにしるものも稀なりとぞ

解　按に和名鈔行旅具部ニ簏(スリ)籠(ハタコ)と並ぶて引唐韻云籠ハ當侯反漢語抄ニ云波太古俗用旅籠ニ字飼馬籠也これによりて觀るときハ籠ハ元来行旅の馬料をも貯ふる籠の名なりしを後に轉して旅客の糧食を盛る器をも亦波太古といへり夫木集に「たび人ハあるもはこゝをむなしきまにゆくいす ね山のとろ○ころのとろ○ハ山賊をいふ○ころハ刀禰をいふなどいふごとく敬して遠ざくる意なりこゝろハ簏の中に籠の中にも物ハなしと山賊にてあるてそくいふ地へ出ゐまて稼きなくしとうち戯れたるのとかれハ簏(スリ)ハ今の旅用骨柳の類にて籠(ハタコ)ハ今の飯骨柳やうのものにてある也京阪の山家の旅籠ハ木器の挽物なり籠(ハタコ)の本色にハあらねど是も一種の籠といふべしはじめ籠なりしを後に本をかへて竹なる箱笥なるのなの竹に做へるも竹なるのかなし　著作堂追記

駿河沼津西光寺

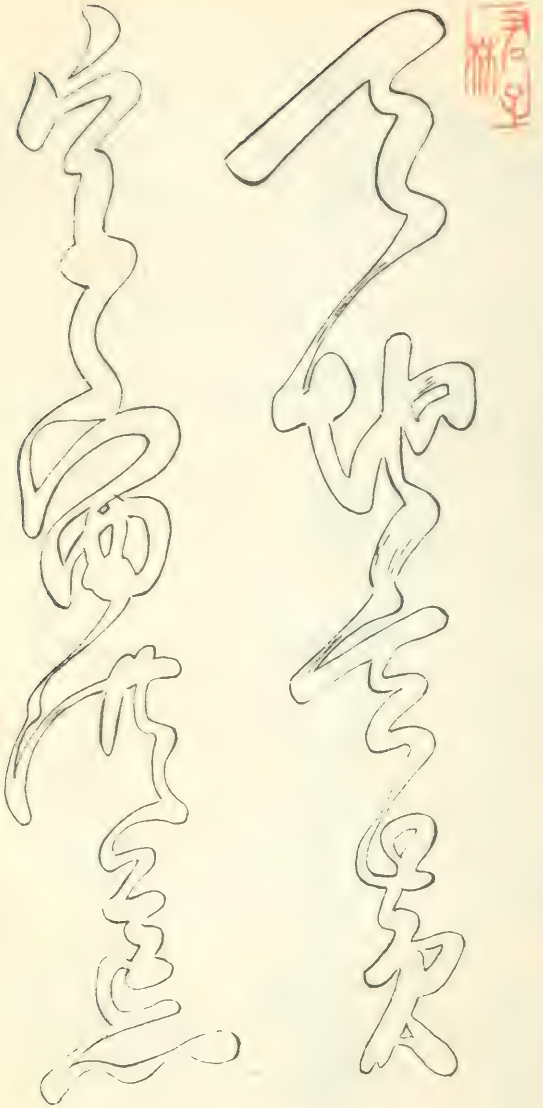
納豆箱

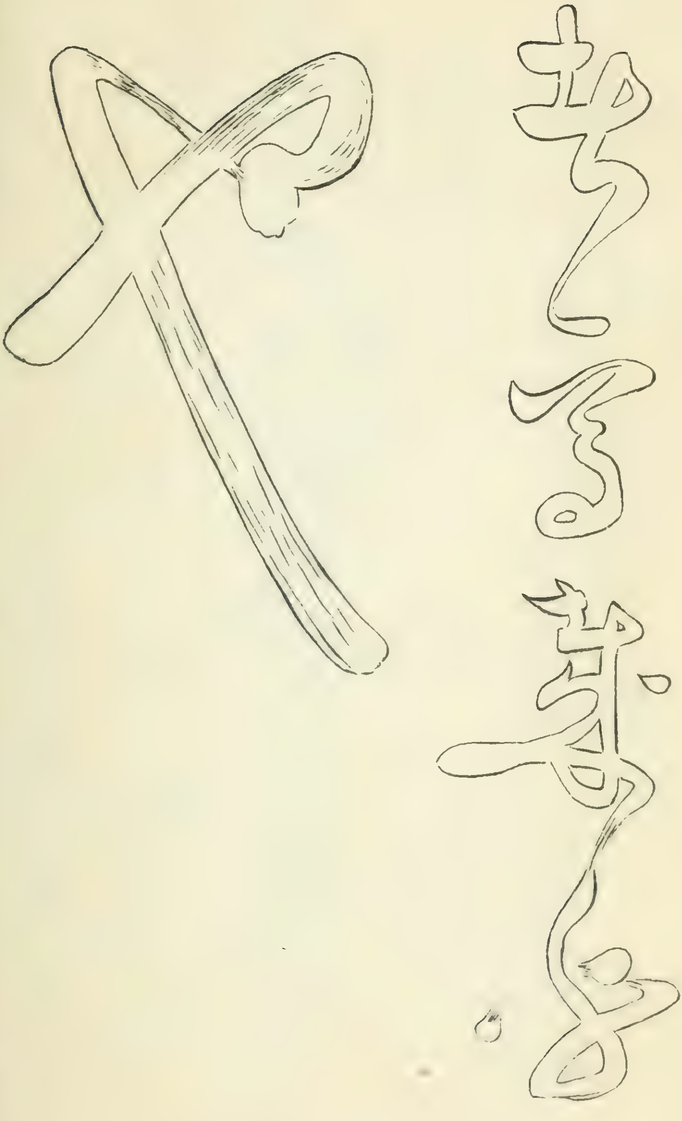


右の納豆箱の中にあるところの文字は納豆といふを色々
入れしより駿豆の間にて専ら種々に配る納豆箱
今もみな三角なり古の遺製なるべし

○

左は墓まうでのをりの徂徠翁自卯木三古図一日
書三氣篆字千字文十本の一なり
又図にいふ関坊に押されし君子林の印は鳳岡
常盧氏先生より譲られしもの之両面に老荘
夕助の字片面にあり





予耳順而起
作一日一字
伏櫪之志尚

不止右文人
募之援筆書
周興嗣次韻

千文十本元
五本行書共五
本草書見有

邪未至間而
後此其芽六
之一本也皆

寶曆三年
癸酉冬至前
五日也

鳳岡[illegible][illegible]集





右の印ハ池永道雲の刻せしものにて百年ニ及ひぬものなりし篆刀の今と甚異なり

二老略傳ニ一日一万字を書せられしと九皐和文ハ妄言の如くにいひてその者紀貝の為早朝より書せしの食の中二便の外烟草の燗飲のことまて其間をやふらし千字文四本を卒業せり一字なりとも引ても一万といふ數ハ子迷子生涯にも載て待たに

右の印ハ池永道雲の刻せしを之いふかに百
年にも足らぬものから篆刀の今と甚異也
二巻略伝に一日一万字なと書まうけると九白本和文ハ安言の如くにい
ひて、その月初夏のころ早朝より書をしめ食する二従の外調よ
婦き一つのことて黄昏に至る間に千字文四本を卒業せり一字
ちからりても一万といふ数にあまりてまに出来けれと載られけるに今と
かはる思恭としして世に二万字の前後朝より暮時までは行なり
こて方二寸修の字千字文十本を書けることなれハ先人且寧と門人
姫路の林信士僕子道才助ともに一万二千字をたしかにせしより今思恭ハ
書る所の千字文十本の一をあけてそのためにのこしぬをといふそのこ

茶花実写生　装潢して巻とせしもの　八巻

同　いまたに装潢せさるもの　八巻

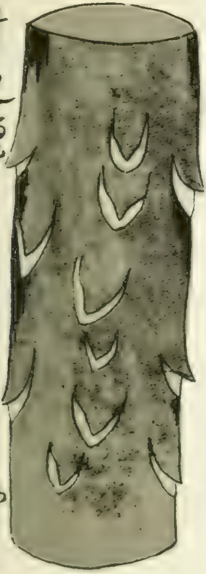
同　いまたに葉のまゝなるもの　四巻

右は先人且寧一花一葉を得るに随て谷写山及その門人武清朗に
敬信すに托して真写せる者凡二千余種集て二十巻とるせり漢
名和名ハ小野蘭山の鑑別を乞ふたるにあれハねれもかなら
しも余るの綴り蘭さバより出て諸賢の清賞玩に呈し共に珍花異
草のあるものはかりその中にあらく

野州鳥あし

野州の田家にて大晦の薪ゝのあわ穂ひゑ穂といふもの残
作りて来るはぐるなり　米蔵のむし除すといふ





右書店以上文銃計九種

海棠庵蔵弄

賀茂の麦藁馬　沼田桐野所贈

此わら馬は競馬の時篠竹に貫きてその辺にこれをひさくといへり　猶江戸の冨士詣の蛇のごとくなるか

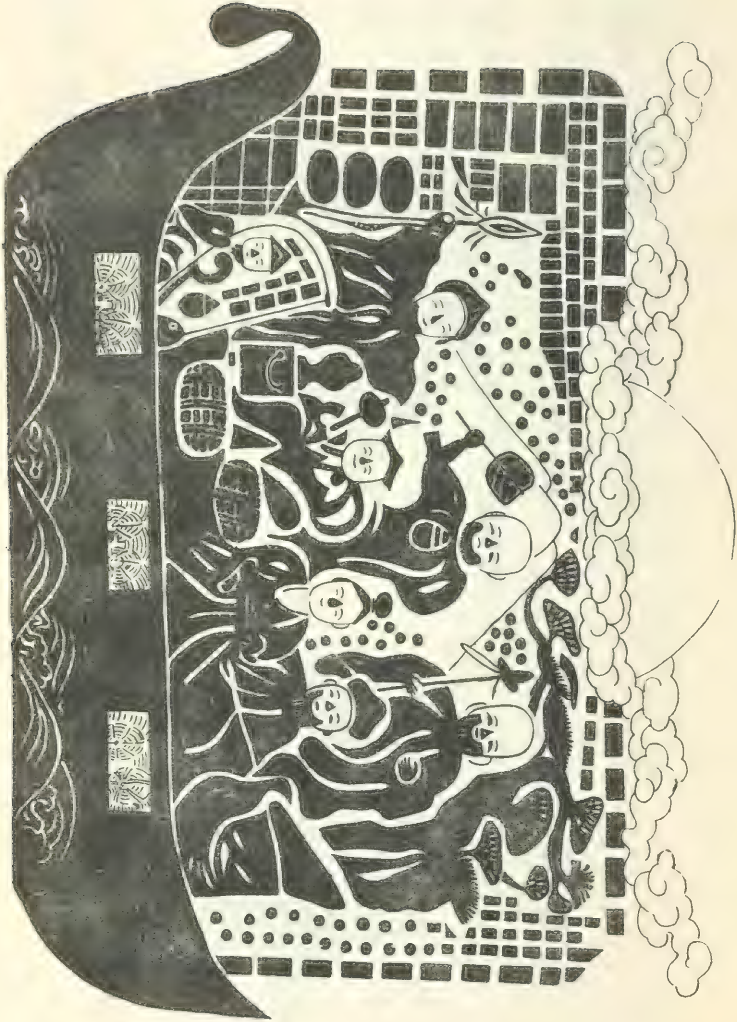


圓鎖



寶船図

或人云甲斐国の木食僧の蔵みし頸にかけて給へるを人はありけるを印行せしものとぞ然れどもいかなる詳なるよし猶志らず



寶鈔廿一枚

何れも印文細密にしてことに摹寫せること殊妙也

但其の數目を録せて左の如し

攝津尼崎　伊勢山田　越前福井

越前勝山　石見津和野　播磨赤穂二枚

播磨明石　播磨姫路　播磨三木

播磨龍野　美濃西川　備前岡山

備中岡田　備中庭瀬　備後福山

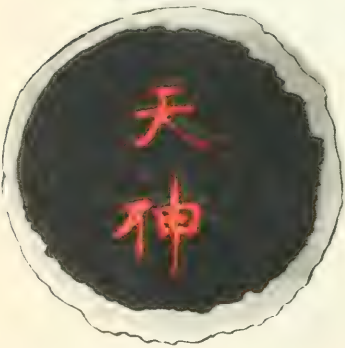
安藝廣嶋　周防徳山　周防岩國

長門萩　豐前中津

鎌倉荏柄天神の獻供杯



底



狩野克信画寶盡横披一幅

画ハ元文三年正月六日に写せしものにて其標寛文五年乙巳の伊勢暦をもて裱褙したれ其暦日巻首に西川須太夫及彩亀宝たくし出中版の解を記しゝり先に松蘿館主人の古暦の摹本数種を出されて漫録中に已に録せり今此暦本もその全きを得すといへとも一斑を窺ふに足れるものなり碧書人嘗云法帖の佳なるものハ真蹟の劣れるものにまされりとそ余もこの暦においても亦しかいふへし本書載せる処古暦摹の中にこれに似たるものあるをもてここにその図を着けり

黒楯鎧一領　実品

続記の報條にあるかしま言をとりまきれしてあるへけれハ亦こゝに貼しつ

當社菅田の社に傳へまつる無楯の御鎧ハ、そのかミ源頼義公奥州
安倍貞任等御誅伐御下向のおりから、三男新羅三郎義
光公へ授與させたまへる御鎧なりしが、その後永久の頃、義光公ミ
當社にあがめ祭り、御鎧をも御神体となしたまひしより、昔より深く
秘めおさめてありしかバ、たとへ當社神職たりとも、これをおが
まざるによりなりし、然るに去る天明年中故ありて此御鎧始て世に
現れさせたまひけれバ、我も人もおがまゝほしとて、其ハ後大江戸にも守護
し奉りき、然るに文政戊年義光公の七百遠忌にあたり
ぬれバ、そをもて結縁のために、且ハ信心の諸方好古の君子へ奉るゝ、お
のおの拝ミあらせバ、先祖源家御代々の御鎧にて、一
たびおがませらるゝ方々ハ、御武運長久子孫繁栄たるべきも
のなり

甲斐国　菅田天神宮神職　土屋長門

右御鎧御鎮座の御方ハ神田ちかき所泉屋平助と申
旅宿にて御申越下されし何方へも持参可致候

右参考馬ノ下六種　乙酉十月十三日
耽奇會出

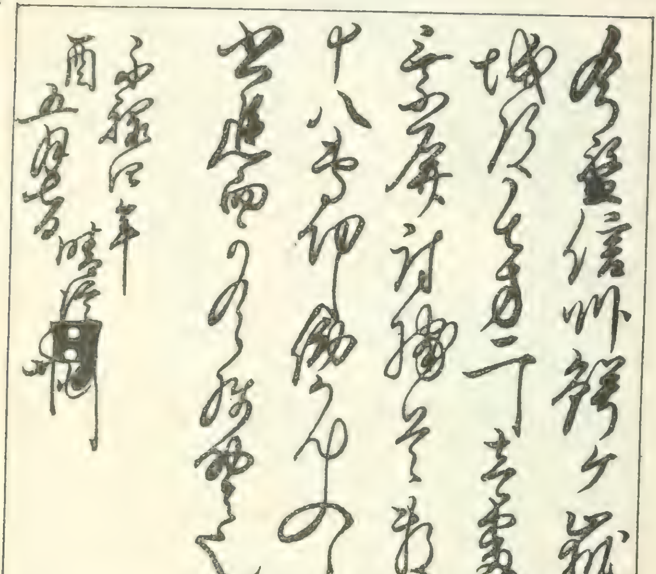
好問堂山崎美成

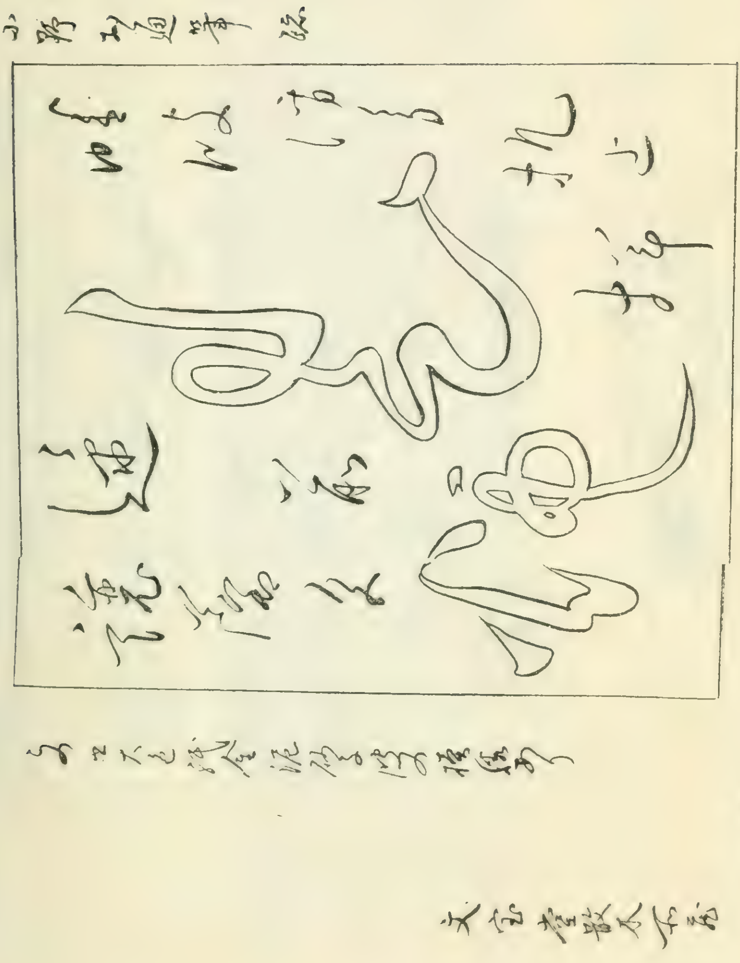
奥の仙臺の附木



これは文化十癸酉のとしにしたしき友のおくりこしたるなり

武田晴信感状 何人のとりし状にや其名のところ破損しぬれば詳ならず鮮ケ嶽城攻の條を考ふべし さるよしあらんか






無人島略圖

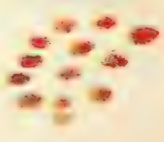
大名けんどんの器物　もやうくさ　まき見入

箇は文宝堂主人の
出されし大名
けんどんの上おひ
箱なちなりしそ
亦これを
出しつ

蓋厚サ七分強



文政乙酉夏
奥州伊達郡仙庵邨于
出生し熊笹の實



無人嶋の繪圖
今年豆州白濱神社の神主花井伊豫といふ人まて作りし
圖を写せしにかの寫有しを寫すへくありのまゝ精く
りしきものハ別本の大圖ありてそれの略なるを写
しいたるのミ

右三種

写山楼文二所蔵

野作無名鳥寫真

若俗書私ニ名つけて蝦夷鶉ともなす可なべし

これハ尾のぬけたるまゝをうつしたるにてのちさりたるなれど強て尾ありと覚さまぎらしくして寫しあへてあやまりを繳書之

これハ道中にても尾をきらしたるなるを宗尾ハ黒くもし八幡のおさなるべし



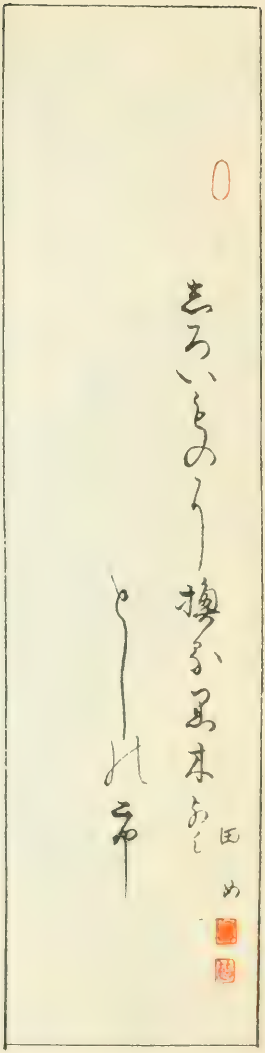
今茲文政八年の秋七八月の比ひの鳥群飛して東蝦夷地へ渡り来りけり蝦夷人ども見ざりける鳥なるをもていとめづらしと云ひて網して数隻を獲つ是を松前侯へおくらせしかバやがて江戸屋敷へ遣されて御のうへ献上せられしとぞ是を薩摩の前宰相公伝へ聞きて家臣たちより献残雌雄をわかちせさせ給ひきといふ（雌雄といへるハ定かならずそハそのかたちの大小をもて推はかりしのみ）薩州またもこの鳥の名を知るものなしこれぞ黄鸝ならんかといへれどもさだかならず解又これぞとしと侍りてゆまゐらせしうるまなんいのそひとつ賜はらしと先考に乞ひやせしに今ハもやひとつも飛しと聞えしかハいとくやしき失ひしに先考いのちなく身まかりたまひぬる日（十一月初九）に思ひつけなくその孫太田久吉をもてこの一隻を賜りにける驚き知るべし御恩のこの鳥を鳥商人がまかせにからぬひしに名屋氏もいかがて認しもちく給へしをあつまたにに九友の話あり解つらくこの鳥の形色を見るに鸝に似て鸝より両三倍も大きし黄鸝ハ即黄鳥にて俗にいふ朝鮮鶯なるもの也毛色これと同じけれど且群飛せぬものなりそもあれこれと蝦夷人鸝ならばましてや諸君の鑒識をこそあふぐこの鳥ハ来年の展覧に備へがらしは嫌ふ朝夕見聞の侭今其藪屋にて見せものにもなるべきさまなん

乙酉十一月十三日冬至前夜

琴嶺 写生

著作堂主人 識

長サ三尺二寸五分　巾五寸五分





俳諧師田女画木像画賛（画者松林斎ト云者　姓氏不詳）

田女ハ江戸側の判者一漁か妻也明和安永の比江戸ニ婦人の判者三人あり
そのいふ田女犬飼（判者良門が妻なり）二代目園女（判者堤亭か妻也）是なりこの画賛ハ明和中の
筆也法世するものなきをおしむも先人の遺愛なるをこゝろに因て継写し置
まゝにて略記のまゝをかいつけぬ

俳諧師冬映画法橋吾山賛日出大図

冬映ハ初ハ白色堂の聯房の弟子也後ニ法流を継て判者となりしハ
其処法流ハ江戸雑子中の地円ハ冬映か弱冠ニして師の罪ニあり（二代目冬映といふ判者）
あハ混ざりかす（これハ初代也）法橋吾山ハ越谷氏号師竹庵武蔵越谷の人也俳諧を
居ニ学ひ得たりし法山を従ふて判者となりしか法山か没後ニ
至て独立し判者となりその業を所持（判者[illegible]）俳諧撰集等ニ
俳諧の著書数刻ありこの画賛ハ天明三年春正月ニ冬映吾山
か七十余の試筆也（吾山ハ天明八年十二月[illegible]ニ没せり[illegible]）しかも又法世するもの
なきを惜みて伯兄の遺愛なるを継けりの[illegible]物まゝにて出ぬ

[illegible]記


吾山



越后州魚沼郡苗場山所ノ産由布（ヌルエフ）



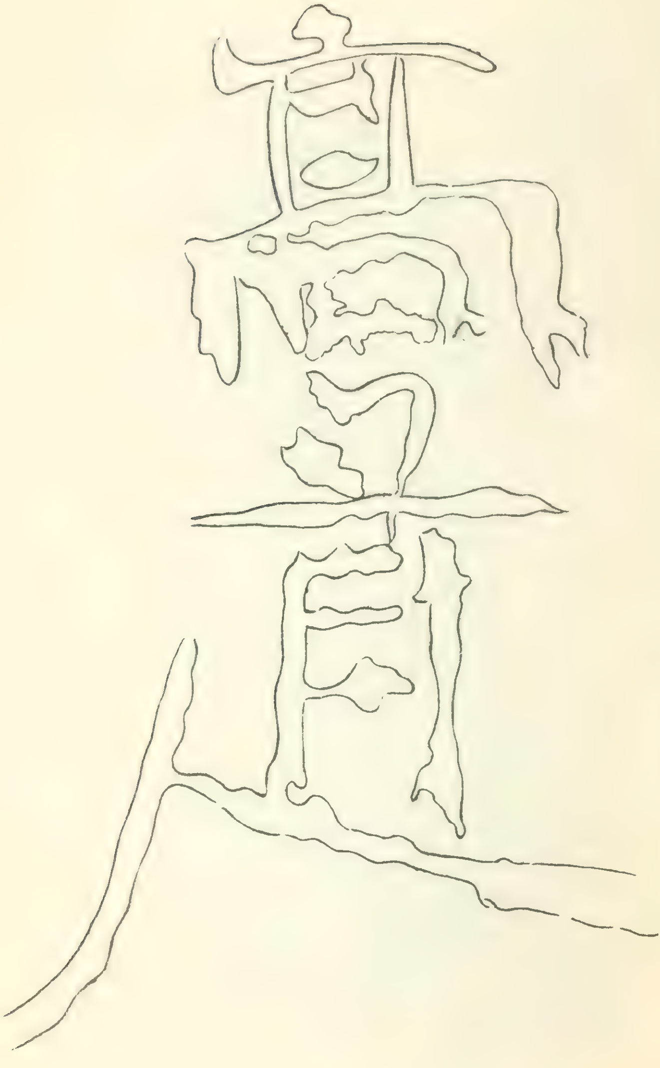
并ニ拙跋畧説　附出
苗場山真景

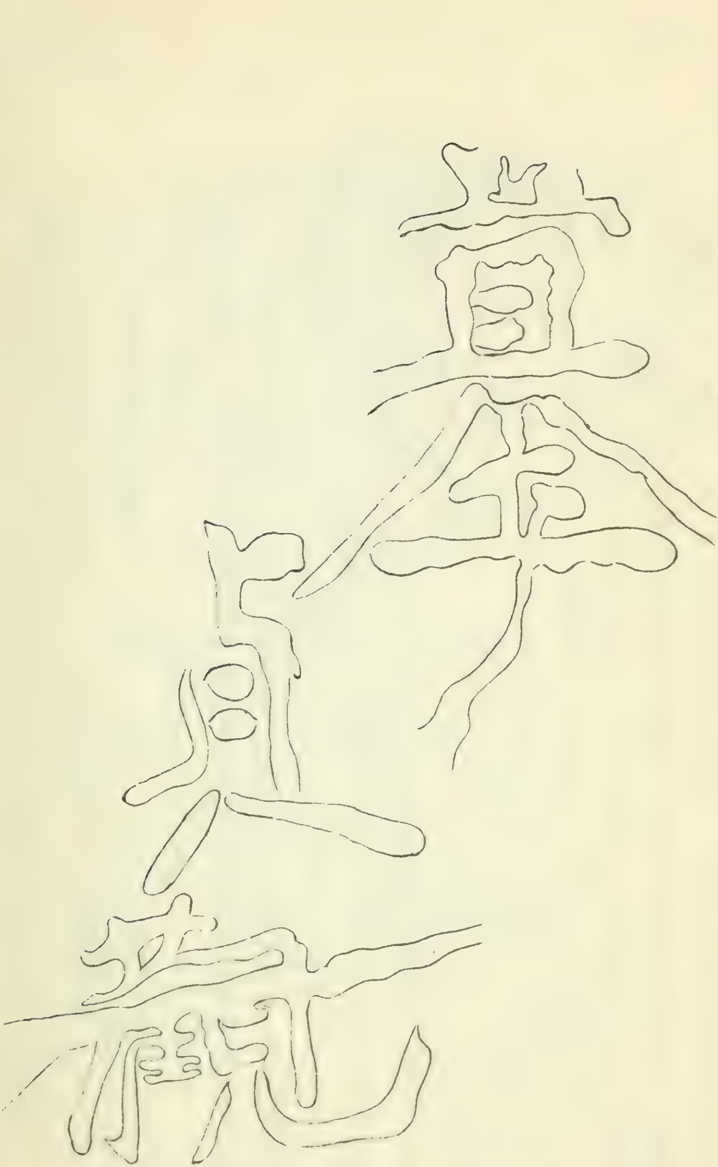
図画ハ撰者の原本なれハ社友ハ此迺のくわ
しからぬも別本よりうつしたれハ宜しく分ち見るへし

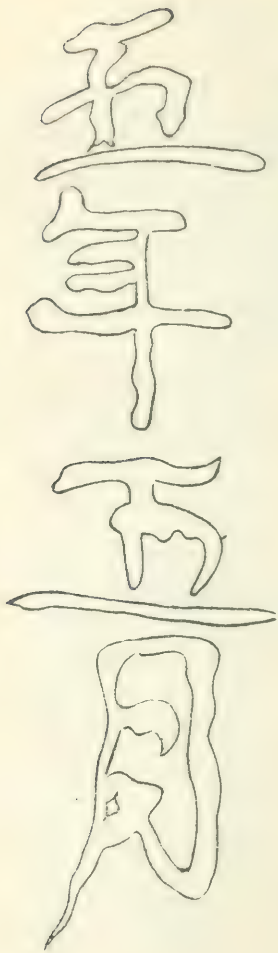
蒹葭堂云由布ハ元来木の皮にて織れる木綿を以て後に漢字を引
あてし穀。木綿。楮。構の字を借用ひしより今の木綿ハ桓武の
御時胡人綿実を齎しけるがその後絶ず世に弘まりしより廣ま
れり續紀に見ゆ 又穀木をカヂと訓し楮をタヘともタクともよめり 楮今衣ヘ 楮角ヘ
楮縄が これなり 吉備鶏山ハ穀をカヂとよめるハ紙ありて後の事なるべしと
以て楮をカウゾと云るも紙ありてよりの名也 楮 楮の皮ハいとあらき
ものなれバこれを晒して織るなれバ由布とハなづけたるなるべし 先哲既
に考證あり 穀ハ和名鈔に玉篇を引て楮ハ穀木也と見へ又同書
に木綿の和名由布之或書に筑紫風土記を載せて長木綿ハ麻
之類 木綿ハ苧之とあり 豊後風土記速見郡柚布郷の條下に云
郡中に楮樹多生 常に取皮以造木綿 因曰柚布郷といへり 古語
拾遺に云 穀木ハ是木綿之 又穀木所生 謂之結織なれども三へくり真
淵の説に神代うけもちの神の眉の上より生蠶よりて眉生といへり
後に穀もて造る由布多かりしハそれに奪れぬと見へたりといへり
さりながら舊事紀曰 神名岩戸にこもられし時に復令津咋見命種殖穀
木綿以為白和幣 並一夜蕃茂之とあり 舊事記ハ偽書なれど
七八百年来のものなりし以ハ神代に木綿とありしならむ必より起あるなるべし

山槃爪　土佐の麻苧に由布の名あるにしれどまるもいふへられと見え　槃爪記ハ伝書気だ証としかことにも考べし

今も蝦夷すぐ柳の皮をもて織なす布をアツシといへりこれらハ上代の由布に近しアツシも手にはなくとも手に入らバ諸君にも見せまゐらすべし右の諸説を集考するにみな木の皮もて本説とせしものとおもはるこの苗場山の由布ハそれの類之これ又一種の由布にして麻緒にて考まふるパンやの類ともいふべし也古語に白栲(シラユフ)花(ハナ)などよめるハ木の皮もて造れる之と信法地名考にいへれど上古の質朴なる織器に造り見ゆるあるべくもなけれ数なよめるもゆふかけの栲(ユフ)ハ猶石をそてこの苗場山の由布のめでたき姿に似てめでたし思ひあはすれバ由布の類なるよし由布と名つけゝる明(アカ)だとは思れぬ姑く疑を闕て一考に備ふ又按するに煙霞綺談に麻ハさらしくて韌なるものなればアサといふ即朝之本語の(ユフ)ハあくるまて由ゆくもあるのなればユフと名つく即夕之といへりておもしろくもありげなれども麻の古語ハフサなり朝も正訓ハアシタなりフサをアサと唱ふるハ後世のことなれハ朝夕の辭ハ鑿説なり信ぜへからず（アサをあさくハフサと唱へしを）上総下総の総のむかし総ハ即麻(フサ)なり或ハ扶桑の義ともいふものあり非之右に貼する苗場山の図ハ越後人鈴木牧之か登陸せし日眼下に図して予におくりしもの之この紙苗場山の記一篇あり由布に題してともにこれを看さる越後下今町なる小泉生が寄せし越後全図を検するに塩沢より件の山へハ数里ましして到るべし——塩沢　上日市　関　下薄沢　芝　三俣　三俣より神楽図の山腹と遠りて苗場山脚に到りそれより登山す拙画なれども真景なればハ附て社友に示すのみ







高道墓碑拓本来歴并批考　　著作堂解識

この拓本ハ文化九年壬申の夏六月大槻磐水老人（仙臺医官称玄澤）の示されしを借りて與總して摹せしめたるなり尚付磐水の考證あり曰牡鹿の鄰村狸崎村有高道之墓表。石高九尺。闊九寸餘。囲六尺。按本作（己巳六年恐六月己巳誤。然為之六月則不与墓表合。因姑以原本已）文徳実録曰。天安二年戊寅六月己酉。従五位下坂上大宿禰高道為陸奥介ト。至貞観五年癸未己巳（本ノママ）六年（本ノママ）。討夷賊而戦死于此ニ。云云。後人立テ石ヲ今猶存ス焉。後於田道四百餘年。而忠烈之果毅。亦相頡頏ス焉。余嘗得タリ其打本ヲ。今並ニ附ス于此ニ云。辛酉年涂九月。仙臺大槻茂質。在テ江都ニ磐水謹テ識ス」これより先藤貞幹ぬ好古小録にこの墓碑の文字を録して賞翫せられしもこれは疑ひあり何となれハ其ハ墳墓ありて碑碣なし貞観以降と假令その墓碑あるもその爵位ある人ハおのつから官位職名を録さんとして諱をのミ勒すること これ疑ひの一ッ也又文徳実録及三代実録をと撿するに高道の卒せる年月を載られず且夷狄を征伐の文なし是疑ひの二ッ也抑前説ハ大槻磐水両老人何れもこれを坂上高道と決定してそを論し信用しくなきや乎をもてこれをみれハまさに又田道か墓碑にひとしき今

人の屢惑れけれども彼ハ亦是一箇の高道にして坂上高道ハ又あるを
別人なるべし当年予この辨編一篇を綴りて稍初稿のまゝ
なりしを再び録し遺忘に備へんと欲す且諸君の批評を待ふ
もの左の如し

高道墓表辨

解按文徳実録(巻十二)云天安二年春正月甲午朔己酉従五位
下坂上大宿禰高道為陸奥守(是日叙爵者同書同年正月庚子)
條下云授正六位上坂上大宿禰高道従五位下因考索于後紀
至貞観五年高道征蝦夷而陣没彼地之文無之又検三代実
録(巻第七)貞観五年五月及閏月條下高道戦死事並不載
之自是而下旧記雑籍中未嘗有所見之独疑無辨擲
薩何曲信用之以為云云哉不得不質之
又按三代実録(巻第十四)貞観九年春三月條下云九日己酉散位
陸奥守従五位上坂上大宿禰当道卒当道者右京人之祖父
田村麻呂云云父広野云云当道少好武事使弓馬最善
射兼有才調承和二年為内舎人当正月行大射之礼五位
已上不足一人于時詔以当道充其数(中畧)貞観元年出

為陸奥守兼常陸権介其年冬加従五位上州秩既終待代四年在国九年而卒時年六十五由此観之貞観元年至九年高道為陸奥守天安二年至貞観五年高道為陸奥介則守与介在任久之亦可疑之且高道勇敢武略既稱之而方今高道戦没之時不援之可乎顧高道善戦不聞夷狄擾華則九年ノ重秩抑何為之若果有軍功則史何不志之因知謂高道与夷狄戦死者蓋無経之説之

右識シツケテ後所熟思反復シテ復文徳実録十八丁右ナル陸奥権介従五位上藤原朝臣大瀧ヲ得タリ考ルニ是ノ人ハ天安二年ノ春三月宮内少輔ヨリ出テ陸奥介ニナサレシニ不之任シテ年五十六ニテ卒シヌ因テ思フニ天安二年春正月ニ坂上大宿祢高道陸奥介トナリ其年ノ三月ニ至テ大瀧陸奥権介ニナレリ高道ノ事史ニ没シテ載セズサレバ州秩ノ間故アリテ大瀧ヲ権介ニナサレ高道ニ代テ彼国ニ遣サルベキ御ヨサシニヤ有ケント推量シ待ル也カヽレバ天安二年ヨリ貞観五年マデノ凡六ヶ年高道陸奥ニ重秩ノ事ハ素ヨリ證文アラザレハオボツカナシ是モ亦田道ガ墓標ト同

ジク後人ノ贋作セシモノカ然ラズハ坂上大宿祢高道ニ、アラデ別人ナルベシ拙考右ノ如シト雖予イマダ公卿補任ヲ藏弄セズ只於ニ彼書ニ姑ク闕ニ考據ヲ耳

文化壬申季夏念七　瀧澤解識

慶長年間阿九二歌儛伎圖

圖画二頁　唱詞壹頁　共三頁

この絵巻物は文化中亡友醒々斎骨董集を著すとて懇望に借せかしあるを写さしめ彼集中に載せむとてこれは世の人の知る所なりけり彼骨董集に載しつるは通ひのしらて新色をと前けり即ち本ゝなれはなるべしこの擬り今本あるをとり出て諸君に示さんとほりそ候し圖を既に流布したるをもて別に莫出さずて彼集に記させしかくこの原本を梅花園の花森翁の賞しものを継して莫出つるをし免たるものなりとしか之

某花老人識

乙酉正月
耽奇録

延寳中戲子肖像摹臨一巻

再考

右の画図を延寳年中のものなりとしハ予がいまだ深く考へざりし一時の失にて再び按けるにこそ承應明暦より萬治寛文までのものなるべし疑なし その證（アカシ）は伴の肖像の巻端に中村かん三郎并にワキ師をもしるしたるを出て次に玉河おもし座を出し こちらの千之丞ハ明暦萬治のころ中村勘三郎とある座元なりしもの也江戸名所記の卯寛文二年禰宜町歌舞伎の図を見るに中村座のかく幕に太夫勘三郎おもし座とあり又伴の肖像中に載したる又九郎たゞ門座なりといへる歌舞伎をば明暦萬治の間京摂より江戸にくだりたるものにそ其中に小舞座なりしかた門座なりしそ両間の座なりしありけり江戸名所記禰宜町の條にさしもなる八郎の歌舞伎なるそ浪人なりしなる大坂座なる

ゑ小舞座の杵(キネ)勘三郎又九郎などが出し由を記よ
しそくくりつゝ記をせるゆゑなくよはしるしゝは明暦より寛文
の初年をさしていふにて大坂座の事にある八重の門座の
(主役)がるゆゑそ出し曲は当時勤めしと書置し人形手
し曲をいへるなりかれは昼が不晴は肖像中ある人形を掲げ
姿記評林(寛文十二年印本)にいへる人形と同人にて(市村竹之丞と書置えありしといへるのなどく)姿記
には顔髪を剃除し候事を件の肖像にみな見ゆる髪ありて
いろ子の姿之これらによりても寛文の末より溯りて十餘年前
くは廿年前までの上なること知るべしこゝら後もて延宝中のもの
と記し出せしは誤りにて明暦より治の間の古画なること必ず
しこの子けをかく思ひつしをわの物にて盛止されども枕奇
の集を延りし当今にてめでたくおもひあらうしといふは今の雑
あるら記しおくのし諸君は莫くはその説を破りていの枕奇
を論じしめらしいからし

著作者再識

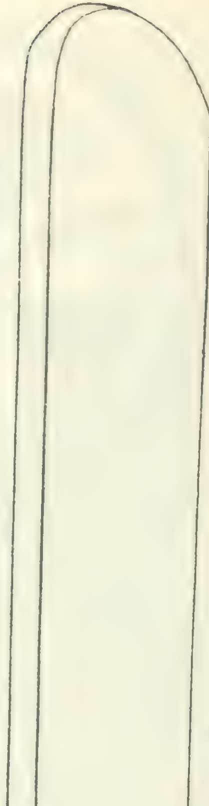
下ノ御霊神社什物

神代ノ鈴



神代よりつたへの鈴はなきにあらねど古物なりといふ総て後に伝へし鈴の事也

聖徳太子牙笏 形状脩短もて圖の如し



長サ壹尺壹寸强

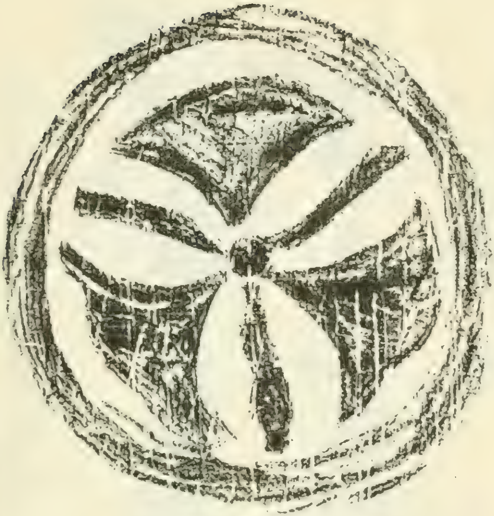
持蓮華



長サ通尺壹尺零五分

右二種今在ところ詳ならすといへとも大和國鵤(イカルカ)寺の物也

三河國松應寺古瓦



龍海院古瓦



原本ハ古瓦ヲ唐紙ニ摺ル

原本ハ古庵蔵之金程の古蔵より本

通円木像



右古鈴の図より以下五種ハ花を敗屏の下張の中より
得たり　以上通円か使ひたる物なるべしといへり又好古癖
鶴助か所持を始くこゝに貼付るなし

松前大福米　寛永十七年二月廿二日天然湧出至於今不陳腐者

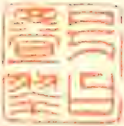
この大福米のことハ郷帳并兎園小説中に記しつれハ今又贅せん限りもなくめてたきものなれハ耽奇の筵まとゐ出て語りもてつたへ世のためしとするになん米ちとよのつゝみてものあかそることあらすされハ此米も亦画にかきそといふ

右十有三種

琴嶺舎蔵本

此耽奇漫録五十巻ハ天保七年丙申の夏あきうとより
著作者老翁より伝ハりて庭柯のあるじの蒼写し
よりし所水無瀬の細田氏ニよりて積功をなやく
成ぬ最寄しの此中書画篆刻墨本の大幅ある甚を
てき是既粘して折ために携られ其軒寛の折曲して
色あしくなりおひ知しやうまれ其折目を失ひ給へり只
人ハ観て其事を許して人丁寧ニをとめてをすなり二三尺
往あるハ此類なきを蔵弄の者の為ならし如りてあなる
為二十ヶ月のいとまをとりてこれらのものとものこれハ巻の類其
此ことわりを述ふるになん

麻谷馨翠軒のあるじ琴嶺松窓のあるじしるす





昭和參年四月十五日印刷
昭和參年四月二十日發行

日本隨筆大成十二回

不許複製

編纂者 日本隨筆大成編輯部
代表者 早川純三郎

發行兼印刷者 吉川半七
東京市京橋區鈴木町十二番地

發行所 東京市京橋區鈴木町十二番地
吉川弘文館
[illegible]
電話京橋[illegible]

發賣所
東京市日本橋區通旅籠町 六合館
名古屋市西區下長者町四丁目 川瀬書店
大阪市東區北久太郎町四丁目 合資會社 柳原書店
東京市京橋區鈴木町 日用書房
東京市牛込區早稲田鶴巻町 國際美術社

—•〔東洋印刷株式會社印刷〕•—

